

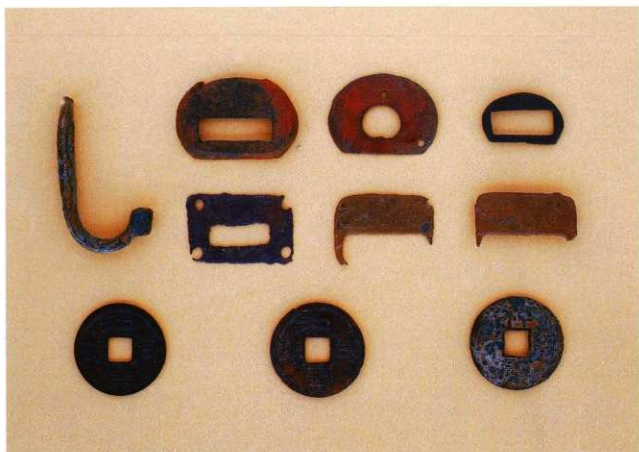
一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂 尻 遺 跡

—奈良時代編—

1985

建設省中部地方建設局
静岡県教育委員会
袋井市教育委員会



鈐帶具 和銅開珎 (表)



鈐帶具 和銅開珎 (裏)

一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂 尻 遺 跡

—奈良時代編—

例

言

1. 本書は昭和55年12月18日から昭和60年3月31日まで袋井市教育委員会が実施した一般国道袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査（坂尻遺跡第1次～第4次調査）の報告書のうちの奈良時代編である。
2. 発掘調査及び整理体制については序文・古墳時代編第3章第4節に記載した。
3. 本書「奈良時代編」作成のため資料整理および図面作成については主に森永明美、高野由実子、山内たず子、鈴木みさえ（坂尻遺跡調査補助員）が行い、遺構トレースについては原田安江（同）が行った。
4. 本書は主に吉岡伸夫が執筆・編集したものであるが、第IV章については原秀三郎先生の玉稿を賜った。
5. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第I章・第II章・第III章第1節～第6節・第8節・第9節・第V章……………吉岡 伸夫
第III章第7節……………森永 明美
第III章第10節……………高野由実子
第IV章……………原 秀三郎
6. 調査及び整理・報告書に関してはここに全ての方々の芳名を記すことはできませんでしたが、多数の方々のご協力をえました。感謝いたします。

凡

例

1. 本書の遺構名の頭に付されているNは奈良時代の遺構であることを表している。
2. 本書の遺構記号については次のとおりである。
SD＝溝状遺構 SB＝掘立柱建物 SA＝柵列 SH＝竪穴住居
SI＝竪穴状遺構 SE＝井戸状遺構 SK＝土壇状遺構 SX＝その他の遺構
3. 土器の法量と器種分類は、土器実測図中の一覧表に記載した。なお、（ ）で示した数値は推定値であることを示している。調整手法等はできるだけ図中記入したが、須恵器のへら削りの範囲は細線にて記載した。

目 次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第1節 立 地	1
第2節 歴 史 的 環 境	1
第3節 奈良時代の遺跡分布	4
第Ⅱ章 遺 構	6
第1節 溝 状 遺 構 (NSD)	8
第2節 掘 立 柱 建 物 (NSB)	80
第3節 柵 列 (NSA)	108
第4節 竪 穴 住 居 (NSH)	110
第5節 井 戸 状 遺 構 (NSE)	124
第6節 竪 穴 状 遺 構 (NSI)	125
第7節 その他の遺構 (NSX)	148
第Ⅲ章 遺 物	149
第1節 上 器	149
第2節 硯・転用硯	165
第3節 土 製 品	166
第4節 瓦 ・ 塼	172
第5節 柱根・杭・部材	172
第6節 木 簡	178
第7節 木 製 品	181
第8節 金 属 製 品	188
第9節 銭 貨	190
第10節 石 製 品	190
第Ⅳ章 土 器 墨 書	200
第1節 土器墨書の性格と分類基準	200
第2節 奈良時代の土器墨書	201
第3節 平安時代以降の土器墨書	215
第4節 板瓦土器墨書の特色と板瓦遺跡の性格	216
第Ⅴ章 総 括	273
第1節 遺構の切り合い関係と出土土器編年	273
第2節 奈良時代遺構群の変遷	286

挿 図 目 次

第 1 図	東・中遠地方の奈良時代遺跡分布図	2
第 2 図	NSD 1・2 実測図	7
第 3 図	NSD 1・2 出土土器実測図	8
第 4 図	NSD 3 実測図・遺物出土状態	9・10
第 5 図	NSD 3 東・西張り出し施設実測図	12
第 6 図	NSD 3 出土土器実測図 (1)	13
第 7 図	NSD 3 出土土器実測図 (2)	14
第 8 図	NSD 3 出土土器実測図 (3)	15
第 9 図	NSD 3 出土土器実測図 (4)	16
第 10 図	NSD 3 出土土器実測図 (5)	17
第 11 図	NSD 3 出土土器実測図 (6)	18
第 12 図	NSD 3 出土土器実測図 (7)	19
第 13 図	NSD 3 出土土器実測図 (8)	20
第 14 図	NSD 3 出土土器実測図 (9)	21
第 15 図	NSD 3 出土土器実測図 (10)	22
第 16 図	NSD 3 出土土器実測図 (11)	23
第 17 図	NSD 3 出土土器実測図 (12)	24
第 18 図	NSD 4 実測図	26
第 19 図	NSD 4 出土土器実測図 (1)	27
第 20 図	NSD 4 出土土器実測図 (2)	28
第 21 図	NSD 4 出土土器実測図 (3)	29
第 22 図	NSD 4 出土土器実測図 (4)	30
第 23 図	NSD 4 出土土器・獣足実測図 (5)	31
第 24 図	NSD 4 出土土器実測図 (6)	32
第 25 図	NSD 4 出土土器実測図 (7)	33
第 26 図	NSD 4 出土土器実測図 (8)	34
第 27 図	NSD 5 実測図・出土土器実測図	35
第 28 図	2G-f・i 3G-a・b・d・e・g・h 2H-c・f 3H-a・b・ d・e 区奈良時代遺構分布図	37・38
第 29 図	NSD 7・8・9 出土土器実測図	39
第 30 図	2E-g 2F-a・d 区奈良時代遺構分布図	40
第 31 図	NSD 11 実測図	41・42
第 32 図	NSD 11 出土土器実測図 (1)	43
第 33 図	NSD 11 出土土器実測図 (2)	44
第 34 図	NSD 11 出土土器実測図 (3)	45
第 35 図	NSD 11 出土土器実測図 (4)	46
第 36 図	NSD 11 出土土器実測図 (5)	47
第 37 図	NSD 11 出土土器実測図 (6)	48

第 38 图	2E-i 3E-g·h 2F-c·f·i 3F-a·b·d·e·g·h 2G-c 3G-a 区奈良時代遺構分布図	49·50
第 39 图	NSD13 土器集中部実測図	51
第 40 图	NSD13 第 2 土器集中部出土土器実測図 (1)	53
第 41 图	NSD13 第 2 土器集中部出土土器実測図 (2)	54
第 42 图	NSD13 第 2 土器集中部・NSD13 出土土器実測図 (3)	55
第 43 图	NSD13 出土土器実測図 (4)	56
第 44 图	NSD13 出土土器実測図 (5)	57
第 45 图	NSD13 出土土器実測図 (6)	58
第 46 图	2D-g·h 区奈良時代遺構分布図・NSD16 遺物出土状態	59
第 47 图	NSD16 出土土器実測図 (1)	60
第 48 图	NSD16 出土土器実測図 (2)	61
第 49 图	NSD16 出土土器実測図 (3)	62
第 50 图	3C-e·g·h 3D-a·b·d·e·g·h 2E-c 3E-a·b 区奈良時代遺構分布図	63·64
第 51 图	NSD17 土器集中部実測図・出土土器実測図 (1)	66
第 52 图	NSD17 土器集中部出土土器実測図 (2)	67
第 53 图	NSD19 出土土器実測図	68
第 54 图	2A-g·h·i 2B 2C-a·b·d·e·g·h 区奈良時代遺構分布図	69·70
第 55 图	NSD21 第 1・2・3 土器集中部実測図	71
第 56 图	NSD21 第 4・5 土器集中部・礫集中部実測図	72
第 57 图	NSD21 第 1・2 土器集中部出土土器実測図 (1)	73
第 58 图	NSD21 第 2・3 土器集中部出土土器実測図 (2)	74
第 59 图	NSD21 第 4・5 土器集中部・NSD21 出土土器実測図 (3)	75
第 60 图	NSD21 出土土器実測図 (4)	76
第 61 图	NSD21 出土土器実測図 (5)	77
第 62 图	NSD21 (6)・22 出土土器実測図	78
第 63 图	NSB1 実測図・柱穴出土土器実測図	79
第 64 图	NSB2 実測図	81
第 65 图	NSB3 実測図	82
第 66 图	NSB4 実測図・柱穴出土土器実測図	83
第 67 图	NSB5 実測図	84
第 68 图	NSB6 実測図・柱穴出土土器実測図	84
第 69 图	NSB7 実測図	85
第 70 图	NSB8 実測図	85
第 71 图	NSB9 実測図	86
第 72 图	NSB10 実測図	87
第 73 图	NSB11 実測図	88
第 74 图	NSB12 実測図	89

第 75 图	NS B13 实测图	90
第 76 图	NS B14 实测图	91
第 77 图	NS B15 实测图	92
第 78 图	NS B16 实测图	93
第 79 图	NS B17 实测图	93
第 80 图	NS B18 实测图	93
第 81 图	NS B19 实测图	95
第 82 图	NS B20 实测图	95
第 83 图	NS B21 · 22 实测图	98
第 84 图	NS B23 实测图	99
第 85 图	NS B24 实测图	101
第 86 图	NS B25 实测图 · 柱穴出土土器实测图	101
第 87 图	NS B26 实测图	102
第 88 图	NS B27 实测图	102
第 89 图	NS B28 实测图	102
第 90 图	NS B29 · 30 实测图	103
第 91 图	NS B31 实测图	104
第 92 图	NS B32 实测图	105
第 93 图	NS B33 实测图	105
第 94 图	NS B34 实测图 · 柱穴出土土器实测图	107
第 95 图	NS B35 实测图	109
第 96 图	NS B36 · 37 实测图	109
第 97 图	NS H1 实测图 · 出土土器实测图	111
第 98 图	NS H2 出土土器实测图 (1)	112
第 99 图	NS H2 出土土器实测图 (2)	113
第 100 图	NS H3 实测图 · 出土土器实测图	114
第 101 图	NS H4 实测图 · 出土土器实测图 (1)	115
第 102 图	NS H4 出土土器实测图 (2)	116
第 103 图	NS H5 实测图 · 出土土器实测图	117
第 104 图	NS H6 实测图 · 出土土器实测图	118
第 105 图	NS H7 实测图 · 出土土器实测图	119
第 106 图	NS H8 实测图 · 遗物出土状态 · 出土土器实测图 (1)	120
第 107 图	NS H8 实测图 · 出土土器实测图 (2)	121
第 108 图	NS H8 出土土器实测图 (3)	122
第 109 图	NS H9 实测图	123
第 110 图	NS H9 出土土器实测图	124
第 111 图	NS E1 实测图 · 出土土器实测图	126
第 112 图	NS E2 实测图 · 遗物出土状态 · 出土土器实测图 (1)	127
第 113 图	NS E2 出土土器实测图 (2)	128
第 114 图	NS I2 实测图 · 遗物出土状态 · 出土土器实测图 (1)	129

第115図	NS I 2出土土器実測図(2)	130
第116図	NS I 2出土土器実測図(3)	131
第117図	NS I 2出土土器実測図(4)	132
第118図	NS I 3実測図・出土土器実測図	133
第119図	NS I 11実測図・遺物出土状態・出土土器実測図(1)	136
第120図	NS I 11出土土器実測図(2)	137
第121図	NS I 13実測図・遺物出土状態・出土土器実測図	138
第122図	NS I 14・15・16実測図 NS I 15出土土器実測図(1)	139
第123図	NS I 15出土土器実測図(2) NS I 16出土土器実測図	140
第124図	NS I 17・18実測図 NS I 17出土土器実測図	142
第125図	NS I 23実測図・遺物出土状態・出土土器実測図	143
第126図	NS I 1・4・5・6・7・8実測図	144
第127図	NS I 9・10・12・19・20・21・22実測図	145
第128図	NS I 5・7・19・21・22出土土器実測図	146
第129図	NS X 1実測図・遺物出土状態・出土土器実測図(1)	147
第130図	NS X 1出土土器実測図(2)	148
第131図	包含層出土土器実測図	164・165
第132図	ヘラ記号のある土器実測図・拓影	166
第133図	碗・転用碗実測図	167
第134図	陶製紡錘車実測図	169
第135図	ミニチュア土器実測図	169
第136図	土製品実測図(馬形・人形・土鍾・甕11)	170
第137図	土製支脚実測図	171
第138図	瓦・埴実測図・拓影	173
第139図	柱根実測図(1)	174
第140図	柱根実測図(2) 礎板実測図	175
第141図	杭実測図(1)	176
第142図	杭実測図(2)	177
第143図	部材実測図	179
第144図	NS D 3西張り出し施設部材実測図	180
第145図	木製品実測図(1)	182
第146図	木製品実測図(2)	184
第147図	木製品実測図(3)	185
第148図	木製品実測図(4)	186
第149図	木製品実測図(5) 木簡実測図	187
第150図	金属製品実測図	189
第151図	和銅開跡拓影	190
第152図	石製品実測図(1)	192
第153図	石製品実測図(2)	194
第154図	石製品実測図(3)	195

第155図	石製品実測図(4)	196
第156図	土器墨書出土遺構位置図	211
第157図	土器墨書実測図(1)	248
第158図	土器墨書実測図(2)	249
第159図	土器墨書実測図(3)	250
第160図	土器墨書実測図(4)	251
第161図	土器墨書実測図(5)	252
第162図	土器墨書実測図(6)	253
第163図	土器墨書実測図(7)	254
第164図	土器墨書実測図(8)	255
第165図	土器墨書実測図(9)	256
第166図	土器墨書実測図(10)	257
第167図	土器墨書実測図(11) ヘラ描き文字折影	258
第168図	坂尻遺跡における須恵器(食器)編年表1	278
第169図	坂尻遺跡における土師器(食器)編年表2	279
第170図	坂尻遺跡における須恵器(貯蔵具)編年表3	280
第171図	坂尻遺跡における土師器(貯蔵具 煮炊具)編年表4	281
第172図	奈良時代遺構変遷図	291
第173図	坂尻遺跡主要遺構全体図	297・298

表 目 次

第1表	中・東遠地方の奈良時代遺跡一覧表	3
第2表	石製品計測表	198
第3表	石材分類表	198
第4表	遺跡別基石計測表	199
第5表	時代別基石計測グラフ	199
第6表	土器墨書分類表	203
第7表	佐野・山名・長下郡郷名一覧	207
第8表	駅家関係墨書出土遺構一覧	212
第9表	墨書土器の器種と構成比	213
第10表	千山関係墨書土器の器種と構成比	213
第11表	平安時代以降の土器墨書の時代区分	216
第12表	坂尻遺跡出土土器墨書一覧表	223~247

写 真 図 版

カラー図版(巻頭) 鈎帯具 和銅開珎(表) 鈎帯具 和銅開珎(裏)

- PL. 1 2・3 F～2・3 J 区発掘調査前全景 2・3 F～2・3 J 区完掘全景
- PL. 2 3 A～3 C 区発掘調査前全景 3 A～3 C 区完掘全景
- PL. 3 2・3 F～2・3 J 区完掘全景 2 A～2 E 区完掘全景
- PL. 4 2 A～2 E 区完掘全景 2・3 G 2・3 H 区全景(Ⅲ層2面)
- PL. 5 2 A・B 区全景(Ⅲ層1面) 2 A・B 区全景(Ⅲ層2面)
- PL. 6 NSD 1・2 南半完掘状況(Ⅲ層3面) NSD 2 東西断面 NSD 1 完掘状況
NSD 2 鈎帯金具(丸軋)出土状況
- PL. 7 NSD 3(Ⅲ層1面) NSD 3 遺物出土状況 NSD 3 南岸杭列検出状況
NSD 3(Ⅲ層3面)
- PL. 8 NSD 3 下層遺物出土状況 NSD 3 杭列検出状況
- PL. 9 NSD 3 西張り出し施設検出状況 NSD 3 貝塚検出状況 NSD 3 遺物出土状況
NSD 3 畜串出土状況 NSD 3 和銅開珎出土状況
NSD 3 鈎帯金具(鉸具)出土状況 NSD 3 土器墨書出土状況
- PL. 10 NSD 3 西張り出し施設検出状況 NSD 3 西張り出し施設組材の状況
- PL. 11 NSD 4 北半(Ⅲ層2面) NSD 4 南半(Ⅲ層2面) NSD 4 東西断面
- PL. 12 NSD 4 南端遺物出土状況 NSD 4 西岸護岸施設検出状況
NSD 4 鈎帯金具(丸軋)出土状況 NSD 4 西岸杭列断面 NSD 4 獣足出土状況
NSD 4 馬形出土状況 NSD 4 第1号木簡出土状況
- PL. 13 NSD 5 東半完掘状況(Ⅲ層2面) NSD 5 枝溝(Ⅲ層3面)
NSD 5 西半完掘状況(Ⅲ層3面)
- PL. 14 NSD 6・7(3 G・H 区)(Ⅲ層2面) NSD 6 彎曲部の状況
NSD 10(2 F 区)(Ⅲ層1面) NSD 8 北半完掘状況(Ⅲ層2面)
NSD 11(2・3 F 区)(Ⅲ層3面)
- PL. 15 NSD 11 東半完掘状況(Ⅲ層3面) NSD 11 東半南岸護岸施設検出状況
NSD 11 東半南岸杭列・貝塚検出状況
- PL. 16 NSD 11 西半遺物出土状況 護岸施設検出状況 NSD 11 西半下層遺物出土状況
- PL. 17 NSD 11 西半西岸護岸施設検出状況 NSD 11 東半貝塚検出状況
NSD 11 第2号木簡出土状況 NSD 11 木簡状木製品出土状況
NSD 11 第3号木簡出土状況 NSD 11 土器墨書出土状況
- PL. 18 NSD 13(2・3 E・F 区)(Ⅲ層1面) NSD 13(Ⅲ層1面)
NSD 13 完掘状況(Ⅲ層3面)
- PL. 19 NSB 13 南端(Ⅲ層1面) NSD 13 南端遺物出土状況(第2土器集中部)
NSD 13 南端完掘状況 NSD 13 南北断面 NSD 13 鈎帯金具(巡方)出土状況
- PL. 20 NSD 14～16(2 D・E 区)(Ⅲ層3面) NSD 14・15(Ⅲ層3面)
NSD 14～16(Ⅲ層1面) NSD 14・15 完掘状況(Ⅲ層1面)
NSD 16 遺物出土状況(Ⅲ層1面) NSD 16 完掘状況(Ⅲ層1面)
- PL. 21 NSD 17(3 D 区)(Ⅲ層1面) NSD 17(3 D 区)(Ⅲ層2面)

- NSD17遺物出土状況 NSD17銚帯金具(巡方)出土状況
- PL. 22 NSD19 (Ⅲ層2面) NSD20 (3C・D区) (Ⅲ層3面) NSD22完掘状況 (Ⅲ層1面)
- PL. 23 NSD21 (2A・B・C区) (Ⅲ層2面) NSD21 (2A・B区) (Ⅲ層1面)
NSD21南北断面
- PL. 24 NSD21 (2B・C区) (Ⅲ層2面) NSD21遺物出土状況 (第5土器集中部)
NSD21礫集中部検出状況 NSD21遺物出土状況 (第2土器集中部)
NSD21遺物出土状況 (第4土器集中部)
- PL. 25 NSB1 (Ⅲ層1面) NSB2 (Ⅲ層1面) NSB2掘方断面
NSB2掘方検出状況 NSB2柱根検出状況
- PL. 26 NSB2・3 (2・3G・H区) (Ⅲ層1面) NSB3 (Ⅲ層1面)
NSB3柱根検出状況 NSB3掘方断面・柱根検出状況
- PL. 27 NSB4 (Ⅲ層2面) NSB4柱穴断面 NSB4柱根検出状況
NSB5 (Ⅲ層3面) NSB6 (Ⅲ層1面)
- PL. 28 NSB6~9 (3F区) (Ⅲ層1面) NSB7 (Ⅲ層1面) NSB8 (Ⅲ層3面)
- PL. 29 NSB10 (Ⅲ層3面) NSB11・12上面の竪立柱建物 (Ⅲ層1面)
NSB11~13 (3E・F区) (Ⅲ層3面) NSB12根固め礫検出状況
- PL. 30 NSB12 (Ⅲ層3面) NSB12掘方検出状況 NSB13 (Ⅲ層3面)
- PL. 31 NSB14~22 (3D区) (Ⅲ層3面) NSB14 (Ⅲ層3面) NSB15~17 (Ⅲ層3面)
NSB16東側柱列 (Ⅲ層2面) NSB16掘方断面
- PL. 32 NSB18北側柱列 (Ⅲ層2面) NSB19北側柱列 (Ⅲ層2面)
NSB19根固め礫検出状況 NSB19掘方検出状況
NSB20~22 (3D区) (Ⅲ層3面)
- PL. 33 NSB20北側柱列 (Ⅲ層3面) NSB20礫板検出状況 NSB21・22 (Ⅲ層3面)
NSB25 (Ⅲ層2面)
- PL. 34 NSB23・24 (3C・D区) (Ⅲ層3面) NSB26礫板検出状況
NSB28 (Ⅲ層3面) NSB29西半 (Ⅲ層1面)
- PL. 35 NSB29東半 (Ⅲ層2面) NSB31 (Ⅲ層2面) NSB32北側柱列 (Ⅲ層3面)
NSB32礫板検出状況
- PL. 36 NSB33 (3B区) (Ⅲ層1面) NSB35 (3A・B区) (Ⅲ層3面)
- PL. 37 NSB36・37 (Ⅲ層3面) NSA2 (3E区) (Ⅲ層2面)
NSH1 (3G区) (Ⅲ層3面)
- PL. 38 NSH3~5 (2E・F区) (Ⅲ層1面) NSH3 (Ⅲ層1面) NSH4 (Ⅲ層1面)
- PL. 39 NSH5 (Ⅲ層1面) NSH6・7 (Ⅲ層1面) NSH7 (Ⅲ層1面)
- PL. 40 NSH8 (Ⅲ層1面) NSH8完掘状況 (Ⅲ層1面) NSH8遺物出土状況
- PL. 41 NSH9 (3B区) (Ⅲ層2面) NSH9西半東西断面 NSH9東半東西断面
NSH9中央東西断面 NSH9遺物出土状況
- PL. 42 NSE1 (3D区) (Ⅲ層3面) NSE1完掘状況 (Ⅲ層2面)
NSE2 (3C区) (Ⅲ層1面)
- PL. 43 NSE2 (Ⅲ層1面) NSE2完掘状況 NSE2南北断面

- NSE 2 中央遺物出土状況 NSE 2 南端遺物出土状況
- PL. 44 NSI 2 (2・3G・H区) (Ⅲ層1面) NSI 2 (Ⅲ層1面)
 NSI 2 獣足出土状況 NSI 2 遺物出土状況
 NSI 3 南西部遺物出土状況 (Ⅲ層1面)
- PL. 45 NSI 4 (2F区) (Ⅲ層1面) NSI 5 机出土状況 (Ⅲ層1面)
 NSI 5 完掘状況 (Ⅲ層1面)
- PL. 46 NSI 8 (Ⅲ層3面) NSI 11 (Ⅲ層1面) NSI 11 西半遺物出土状況
 NSI 11 東半遺物出土状況
- PL. 47 NSI 13 遺物出土状況 (Ⅲ層1面) NSI 13 完掘状況 (Ⅲ層2面)
 NSI 13 (Ⅲ層2面) NSI 17 (Ⅲ層2面) NSI 17 焼土検出状況
 NSI 17 砥石出土状況
- PL. 48 NSI 15・16 (3C区) (Ⅲ層1面) NSI 15 (Ⅲ層1面)
 NSI 21・22 (3B区) (Ⅲ層2面)
- PL. 49 NSI 22 遺物出土状況 NSI 23 遺物出土状況 NSX 1 遺物出土状況 (Ⅲ層1面)
- PL. 50 NSD 3 出土土器
- PL. 51 NSD 3・4 出土土器
- PL. 52 NSD 4 出土土器
- PL. 53 NSD 11 出土土器
- PL. 54 NSD 11・13 出土土器
- PL. 55 NSD 13 出土土器
- PL. 56 NSD 13・16 出土土器
- PL. 57 NSD 16・17・21 出土土器
- PL. 58 NSD 21 NSB 34 出土土器
- PL. 59 NSH 2～4・9 NSE 2 NSI 2 出土土器
- PL. 60 NSI 2・3・11・13・15 出土土器
- PL. 61 NSI 15・23 NSX 1 包含層出土土器
- PL. 62 包含層出土土器 ヘラ描き文字 ヘラ記号
- PL. 63 円面硯・転用硯 ミニチュア土器
- PL. 64 ミニチュア土器 漆付着土器 土製品
- PL. 65 土製品・轆羽口 土製支脚
- PL. 66 瓦・埴 窯滓・鉄滓 (NSD 3・4等)
- PL. 67 柱根
- PL. 68 礎板 杭
- PL. 69 杭 NSD 3 西張り出し施設部材
- PL. 70 杭・建築部材 木製品
- PL. 71 木製品
- PL. 72 薪材 (NSD 3・4・11等) 金属製品 石製品
- PL. 73 石製品

第IV章 墨書写真図版

PL. 1	NSD1・2・3	259
PL. 2	NSD3	260
PL. 3	NSD3	261
PL. 4	NSD3	262
PL. 5	NSD3・4	263
PL. 6	NSD4	264
PL. 7	NSD4・9	265
PL. 8	NSD9・11	266
PL. 9	NSD11・13	267
PL. 10	NSD13・21	268
PL. 11	NSD21 NSB1・5・6 NSH1・2・3 NS111 NSE2	269
PL. 12	NSE2 包含層	270
PL. 13	包含層 HSX1 HSD2	271
PL. 14	HS11 HSD5・6・12・20 包含層 HSX1 NSD4・11	272

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 立地

遺跡立地については、序文・古墳時代編に詳述されている。また坂尻遺跡をめぐる地形・地学的背景については、自然科学編の加藤論文に詳しいので参照願いたい。ここでは奈良時代にかかる遺跡立地の要件を整理するととめる。

掛川市八高山に源を発した原野谷川は、垂木川・逆川と合流して河道を西に転じる。坂尻遺跡は河道転換点の右岸に形成された自然堤防上（標高15.50～17.50m）に立地している。この自然堤防は旧東海道が通る久津部・新屋の微高地へと続き、北西方は後背低地となる。北側には、各和原台地（標高50m前後）の末端丘陵が迫っている。

この自然堤防を横断し古墳時代中期まで溝（川）としての機能を保っていた小河川（古名栗川）が、坂尻遺跡の成立に大きなかわりを持ったとする見解がある（加藤論文参照）。遺跡の東・南方には原野谷川・逆川等の蛇行痕が観察でき（序文・古墳時代編巻頭図版）、古墳時代の遺構群は、確かに古名栗川の自然地形に左右されていたようであるが、8世紀初頭に掘削されたと思われる溝状遺構（NSD21）は古名栗川を切断し、現自然堤防の北縁に沿って東西に流れている。旧流路上には数棟の掘立柱建物（NSD34～37）が建てられており、古名栗川は古墳時代の末葉まですでに埋没していたと考えられよう。旧東海道に沿って東西に長く自然堤防が発達し、奈良時代における遺跡付近の自然景観は現在とよく似た状況を呈していたと思われる（序文・古墳時代編第6図）。現自然堤防の堆積物の下、古名栗川の流域にはグライ層が広く分布している。加藤論文ではこのグライ層の深度が地下水の年間飽和しているところにほぼ等しいため、自然堤防上は比較的水はけの良いいわゆる「高燥の地」であったのだらうと推定されている。

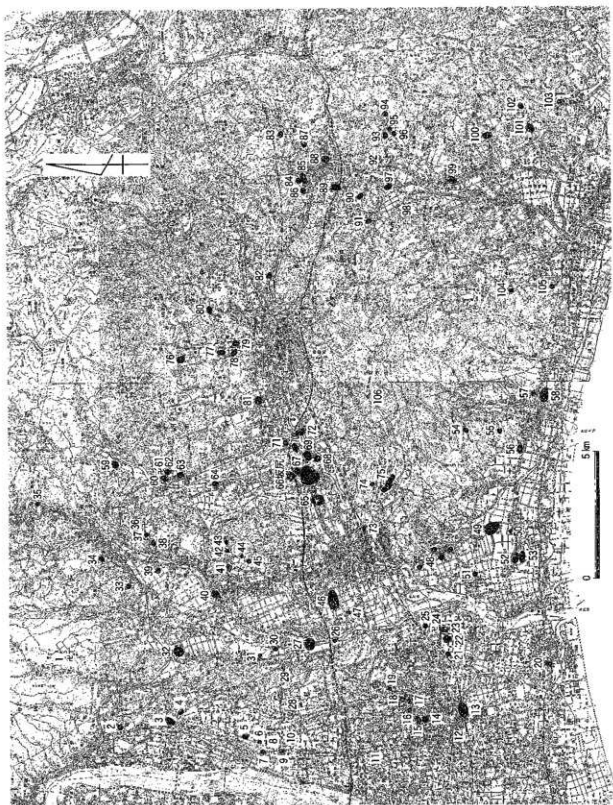
視野を中遠地方全体の地形にまで広げてみると、遺跡北側の各和原台地は掛川市幡鐘・寺島をへて赤石の山稜へと続いて行く。南側には標高264mの小笠山を中心として、海岸線近くまで丘陵地が広がっている。南北に連なる地形的な高まりのなかで坂尻遺跡が河川に沿い、東西の沖積地を結ぶ唯一の沈降部に位置していたことは奈良時代の遺跡の性格を論ずるうえで重要な地理的要件となろう。

奈良時代にかかる遺跡立地の地理的要件は、次の4項目に整理できる。

1. 遺跡は原野谷川右岸の自然堤防上に立地している。自然堤防上は比較的水はけがよく、良好な生活環境であった。
2. 遺跡のすぐ南側で原野谷川が屈曲・蛇行し流れ（勾配）は緩やかとなる。また垂木川逆川と合流する。水運の面で河川を利用しやすい地点に位置していた。
3. 近くに河川・湧水があり、井戸以外にも生活用水を確保することができた。
4. 遺跡は南北に続く山稜（高地）のなかで、唯一の沈降部に位置している。東西陸上交通要衝となるべき地理的条件をそなえていた。

第2節 歴史的環境

大宝令の施行直後、遠江国10郡のうち袋井市域には長田・佐益の2郡が設置された。和銅2（709）年、長田郡は長上・長下に分割され、さらに降って養老6（722）年、佐益郡の8郷を割いて山名郡が置かれた。郡の分割が進み、奈良時代中期には、長下・佐益（後佐野と表記）・山名の3郡になったと考えられる（註1）。



第1図 東・中瀬地方の奈良時代遺跡分布図
(数字は第1表と一致する。)

第1表 中・東遠地方の奈良時代遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	備考	No.	遺跡名	時代	備考
1	岩室廃寺(豊岡村)	奈良後～中世	塔礎石・瓦	54	五郎右衛門(大坂町)	奈良	
2	押越古墳群(同)	古墳後～奈良前		55	水ヶ谷奥(同)	奈良後	円面鏡・陶人形
3	大平内古墳群(同)	古墳前～奈良前		56	横砂(同)	弥生～近世	
4	山田原古墳群(袋井市)	古墳後～奈良前		57	川原田(同)	奈良～中世	
5	寺谷古墳群(袋井市)	古墳後～奈良前		58	天王森(同)	弥生～中世	
6	長者屋敷(同)	奈良	土層・堀・竪立柱建物	59	南郷(掛川市)	奈良	
7	寺谷瓦窯(同)	奈良?～平安	瓦	60	長福寺西(同)	奈良～平安	
8	寺谷廃寺(同)	古墳後～奈良	瓦	61	長福寺南(同)	奈良(?)～平安	
9	馬坂(同)	古墳～平安	蔵骨器(?)	62	古城(同)	奈良～近世	
10	岩田廃寺(同)	奈良(?)～平安	礎石	63	登下(同)	奈良	
11	加茂東原(豊田町)	山石遺～中世	蔵骨器	64	林(同)	奈良	瓦
12	大宅院廃寺(磐田市)	古墳後～奈良	瓦	65	岡本・鳥居裏(袋井市)	弥生～平安	
13	御藏・二之宮(同)	弥生～中世	土層・墨書土器・竪立柱建物	66	坂尻(同)	弥生～中世	木簡・墨書土器・和銅圓形
14	遠江国分寺(同)	奈良～平安	礎石・瓦・墨書土器	67	石ノ形(同)	古墳～中世	竪立柱建物
15	西府台(同)	奈良～平安	瓦・基礎	68	垂木川(掛川市)	奈良～中世	
16	良性寺(同)	縄文～中世		69	飯川(同)	弥生～中世	陶中・緑釉陶器
17	新通り8(同)	奈良～平安	陶馬	70	ニツ池(同)	奈良～平安	
18	良付城域(同)	奈良～近世	瓦塔・円面鏡・竪立柱建物	71	岡津横穴群(掛川市)	古墳後～奈良前	
19	(仮)三本松(同)	奈良(?)		72	飯家(同)	弥生～平安	
20	島(沼田町)	古墳後～奈良		73	地蔵ヶ谷横穴群(袋井市)	古墳後～奈良前	
21	野瀬(磐田市)	弥生～中世	墨書土器・竪立柱建物	74	芝原山古墳群(同)	古墳後～奈良前	
22	長江崎(磐田市)	古墳～中世		75	長者平古墳群(同)	古墳後～奈良前	
23	鎌影(同)	弥生～中世	瓦・墨書土器・人形	76	石畑Ⅱ(掛川市)	古墳～中世	
24	全久院廃寺(磐田市)	古墳後～奈良	瓦・雨落溝	77	小市(同)	弥生～中世	
25	(仮)新良(磐田市)	奈良～中世		78	次郎丸(同)	古墳～奈良	
26	(仮)西村(同)	古墳～中世		79	加島戸屋(掛川市)	奈良	
27	七反田(同)	古墳前～中世		80	谷ノ坪(同)	奈良～平安	
28	(仮)大久保(同)	奈良前	蔵骨器	81	網張塚(同)	奈良(?)～平安	
29	新豊院山(同)	縄文～平安	蔵骨器	82	畑中(同)	弥生～中世	
30	笠巻(同)	弥生～中世		83	堂ノ前(堀川町)	奈良～中世	
31	中村(同)	弥生～中世		84	藤ヶ谷横穴群(同)	古墳後～奈良前	
32	登間Ⅱ(袋井市)	奈良～中世		85	八斗田(同)	古墳～平安	墨書土器
33	文殊堂古墳群(森町)	古墳後～奈良		86	大瀬ヶ谷横穴群(同)	古墳後～奈良前	銅頭大刀
34	山門寺古墳群(同)	古墳後～奈良		87	八王寺(同)	奈良～中世	
35	大島ⅡⅡ(同)	奈良～平安	古墳群?	88	中島(同)	縄文・古墳～中世	
36	平戸廃寺(森町)	奈良～平安	瓦	89	白岩(同)	弥生～中世	小銅
37	東平戸(同)	弥生・奈良～平安		90	西袋(同)	弥生・奈良～平安	
38	観音堂横穴群(同)	古墳後～奈良前		91	御門(同)	弥生～奈良	
39	実見(同)	古墳後～平安		92	小川端廃寺(同)	奈良～中世	瓦
40	船頭家(袋井市)	奈良～平安	墨書土器・円面鏡	93	大平(堀川町)	古墳後～奈良	
41	宇刈横穴群(同)	古墳後～奈良		94	芝原(同)	古墳後～奈良	
42	(仮)三本村Ⅰ(同)	弥生～中世		95	山崎(同)	縄文～奈良	
43	(仮)三本村Ⅱ(同)	奈良		96	杉の谷(同)	古墳後～奈良	
44	(仮)宇刈一色(同)	奈良		97	長池(同)	縄文・奈良～中世	
45	(仮)宇刈岩先(同)	弥生～奈良		98	段平屋廃寺(同)	奈良(?)～平安	
46	土橋(同)	弥生～近世	墨書土器・竪立柱建物	99	城山下(小笠町)	古墳後～奈良	
47	玉越(磐田市)	弥生～中世		100	釜太夫(同)	古墳後～奈良	
48	龍井跡跡群(浅羽町)	弥生～中世		101	高橋(同)	弥生～平安	
49	青木(同)	古墳前～中世	陶馬・竪立柱建物	102	西ノ谷横穴群(浜岡町)	古墳後～奈良前	
50	宮西(同)	弥生～中世	蔵骨器	103	新野川A(同)	弥生～平安	
51	釜下(同)	古墳～中世		104	泉川原(大東町)	古墳後～奈良	銅輪
52	宮ノ腰(同)	古墳後～中世		105	三井山Ⅲ(同)	古墳後～奈良	
53	権現山(同)	弥生～中世		106	長者屋敷廃寺(同)	奈良～平安	銅鏡・礎石

※ 第1図および本一覧表の作成にあたり、加藤賢二、加藤保夫、中島郁夫、山崎克己、前田庄一、足立順司、松本一男、水島和弘の各氏から多くのご教示をいただいた。遺跡名は静岡県遺跡地図・遺跡地名表(静岡県教委1979)各市町村教育委員会発行の遺跡地図等にならい記入したが、既刊の遺跡地図等に未記載の散布地については、その地の大字・小字をもって遺跡名とし、頭に(仮)を付けた。

『和名抄』高山寺本により以上3郡に属していた郷名を記すと、佐野郡一山口、小松、邑代（以比之呂）、幡羅、日根一の5郷（東急本では驛家郷を加え6郷）、山名郡一山名、袋田（不須末多）、宇知、信芸、狹戸、久努一の6郷、長下郡一大田、長野（奈加乃）、貫名（沼岐余）、伊筑、幡多（判多）、大場、老馬（於以万）、通隈（止保利久万）一の8郷である。遠江においては郡の変遷が著しいため郡境の復元は難しいのであるが、原秀三郎氏は今に残る地名・坂尻遺跡出土の土器墨書等を検討され佐益郡を現在の掛川市域と袋井市国本あたりに、山名郡を袋井市鷲巣・久能から太田川中流域、森町上飯田に至る地域に、長下郡を天竜川河口付近の大楊・老間から掛塚・福田を経て、袋井市南半の上貫名・下貫名・法多、浅羽町あたりまでと推定された（原1983）。山名郡分割以前の佐益郡域は掛川市域と原野谷川以北の袋井市、敷地川流域と森町の一部を含んでいたことになる。坂尻遺跡が国郡制発足当初の佐益郡のほぼ中央に位置し、その名も国本と呼ばれる地に営まれていたことは興味深い。

佐益郡と山名郡はかつての久努国造の支配領域にあたる。『先代旧事本紀』巻十「国造本紀」には遠江の国造として遠淡海国造・久努国造・素賀国造の名が見え、巻五「天孫本紀」によれば志紀系、遠江（遠淡海）国造、久努直（久努国造）、佐夜直は印岐美連を祖とし、すべて物部系（同系）の氏族であったという。素賀国造の本拠地は久努国造の支配領域と重なり、坂尻遺跡から東へ約2km離れた掛川市領家・高御所の一帯とされる。素賀国造の始祖、美志印名の名が印岐美連をもとに生み出されたと考えられる（遠藤1979）ことから、素賀国造は6世紀後半以降の物部対蘇我の争いのなか物部系の久努直（久努国造）に対抗して、蘇我氏により擁立された小氏族であったとする解釈がなされている。一時期、久努国造に代ってこの地域を支配していたのであろうか。久努国造は他の国造において一般的なように、令制施行後、国郡名となることはなかった。久努の名は郷名としてのみ残り、郡名には佐益＝佐野（佐夜）が採用されている（註2）。久努直一族は没落し国郡制発足のころには、同族の佐夜直一族が大きな力を持つようになっていたと思われる。

こうした歴史的背景のもと、奈良時代の佐益郡域には久努・素賀国造の系譜をひく有力豪族や、同族とはいえ早くから別性を称していた佐夜直に連なる氏族が共存していたと考えられる。また天平10（738）年の「駿河国正税帳」には佐益郡散事丈部塩麻呂の名が見え、安部氏と同族の丈部氏もこの地域に確固たる基盤を築いていたと推定できる。坂尻遺跡をとりまく社会的・政治的状況は、古墳時代以来の支配階層内部の矛盾を継承している。養老6年に行われた山名郡の分割は佐益郡が広く、16郷以上を擁する大郡であったということばかりでなく、こうした支配階層内部の不安定さを反映したもののものではあるまいか（註3）。

第3節 奈良時代の遺跡分布

中遠地方に分布する奈良時代の遺跡数は現在100余箇所を数える（第1表、以下文中の遺跡番号は第1表の通し番号と同じである）。従来、遺跡分布に対する興味は古墳時代以前に片寄る傾向にあった。奈良時代以降の人口増加を考慮すれば、さらに多くの未発見（すでに知られている遺構・遺物の再検討も含め）の遺跡があると思われる。表面採集によるものが多いが位置を第1図に記してみた。

9箇所（6・13・14・18・21・46・49・66・67）の遺跡で掘立柱建物・溝等の遺構が確認されている。竪穴住居群を主体とするいわゆる集落跡は未だ明らかでない。木簡を出土した遺跡（13・66・89）のうち磐田市御殿・二ノ宮遺跡（13）は遠江国衙の一部とも考えられる（中嶋1981）。菊川町白岩遺跡（89）は、弥生時代中・後期の集落として著名であるが奈良時代の遺物散布量も多くその範囲は広く木簡は中世に属するものらしい。墨書土器、円面硯が採集された袋井市稲荷領家遺跡（40）

は山名郡家に比定される(原 1983)。また磐田市長者屋敷遺跡(6)は方形に土塁をめぐらし、南外側には2重の堀と土橋を築いていた。掘立柱建物が並び官衙的色彩の濃い遺跡である。

寺院跡は遠江国分寺(14)を含め11箇所(1・8・10・12・14・24・36・61・92・98・106)ある。多くが平安時代以降に盛期を迎えるが、豊岡村岩室廃寺(1)の採集品のなかに奈良時代後半の須恵器が見られ、森町平戸廃寺(36)の軒丸瓦の瓦当の文様(単弁八葉蓮華文)は平城宮第Ⅱ期のものと大変よく似ている。「静岡県史」第2巻には袋井市長者屋敷廃寺(106)から出土したとされる鱗鳳八葉鏡の写実が掲載されている。中遠地方においても奈良時代後半から郡(官)寺とは別に、1郡内に1・2箇所(私)寺が建立されるようになったのであろう。

蔵骨器の出土は少ない(9・11・28・29・50)。群集せず単独で見つかることが多く主に須恵器甕を用いている。浅羽町宮西遺跡(50)から出土した蔵骨器は土師器甕に火を受けたヒト(?)の四肢骨・指骨のみを納めていた。また後期古墳群・横穴群(2~5・33・34・38・41・71・73~75・84・86・102)のいくつかは、明らかに奈良時代前葉まで使用されている。奈良時代の墓制がどのように変化していったか把握できていないが、中遠地方にあつてはかなり高い頻度で、横穴式石室・横穴への追葬が奈良時代初頭まで引き続き行われていたと考えられる。

須恵器窯は小笠山の南麓に3箇所(54・55・104)確認されている。大東町星川窯(104)はむしろ古墳時代(6世紀)に中心がある。中遠地方で奈良時代の須恵器生産が始まるのは中葉以降(大須賀町五郎右衛門窯-54-)と考えられてきた(註4)。大須賀町水ヶ谷奥窯(55)は後葉から営まれ、須恵器(獣足付土器を含む)の他に硯、土製品(陶馬・人形・鍾)等も焼かれている(市原1980)。水ヶ谷奥窯に継続して多くの窯が営まれるようになり、大須賀古窯群の生産は平安時代にかけて本格化していった。

遺跡の営まれた時期を見ると弥生・古墳時代前期から連続する遺跡(13・31・66等)と古墳時代後葉・奈良時代になって成立し、平安時代・中世へとつながっていく遺跡(18・52・68等)とがある。古墳時代後葉・奈良時代に集落拡大(拡散)の1つの企画があつたと考えられよう。自然地形(条件)の変化によるものかもしれないが主たる要因はやはり律令制の施行にあつたと思われる。磐田原台地の南縁(磐田市中泉・御殿・鎌田付近)、坂尻遺跡周辺の自然堤防上・丘陵上、浅羽町梅山の砂丘上、菊川上流の菊川町堀之内付近に濃密な遺跡分布が見られる。特に坂尻遺跡周辺には弥生・古墳時代以来の集落が密集し、古くから伝統的な要地(中心地)であつたことを示しているよう。

【補 註】

註1)『日本地名辞書』『静岡県史』第3巻をはじめ、奈良~平安時代中期の長上・長下両部を天竜川下流域および河口の西岸地域に比定する考えも少なくない。ここでは原秀三郎氏の説に従った。袋井市域の古代史は、(原1983)に詳しく叙述されており以下の記述もこの論考によった。あわせて参照願いたい。

註2)坂尻遺跡の西方2km(久津部)の旧東海道沿いに「久勢神社」の祠を掲げる七ツ森神社がある。郡辺をクツベと読んで、式内郡辺神社を七ツ森神社にあてる説が有力である。久勢国造を祀る郡辺神社が久津部にあつたとすれば、久勢国造の本拠地も久津部・国本付近とするのが妥当と思われる。

註3)分割された山名郡(8郷)が母体である佐益郡より大きかつたとはまず考えられない。

註4)坂尻遺跡出土土器の胎土分析結果(自然科学編 清水論文)では、奈良時代前葉に位置づけられる無台杯形(清水論文 第3図-65)の生産地が大須賀(滑ヶ谷)窯と推定されている。九郎右衛門窯よりさらに遡る窯が存在する可能性もある。

第Ⅱ章 遺 構

奈良時代に属する遺構には、溝状遺構（NSD）22条、掘立柱建物（NSB）37棟、棚（NSA）2条、竪穴住居（NSH）9棟、井戸状遺構（NSE）2基、竪穴状遺構（NSI）23箇所がある。他に奈良時代前葉の土器を主体とする土器集中部（NSX）が1箇所検出された。

各遺構の記述を進める前に、遺物包含層（特にⅢ層）内の遺構検出状況について若干説明しておきたい。すでに古墳時代編第Ⅳ章第2節に詳述されているが、板灰遺跡の基本層位を再度整理すれば次のとおりである。

I a 層＝暗灰色粘土（現在の耕作土）。厚20～30cm。

I b 層＝管鉄（酸化鉄の沈着した植物根の痕）混り（暗）灰色粘土。厚15～20cm。

黒色粘土層＝若干有機質を帯びる。中世に比定される遺構の主体的覆土。発掘区中央（2 F 区）から西半（2・3 A 区）にかけてのみ分布する。厚5 cm前後と薄い。

Ⅱ層＝炭化物（粒）・細礫混り灰色砂質粘土。3 D・E 区付近ではわずかに管鉄を含む。平安時代を中心とする遺物包含層・遺構覆土。厚20～30cm。

Ⅲ a 層＝マンガン粒を多量に含む褐灰色砂質粘土。奈良・古墳時代の遺物包含層・遺構覆土。厚20～50cm。

Ⅲ b 層＝マンガン粒を少量含む褐灰色砂質粘土。奈良・古墳時代の遺物包含層。2・3 G 区以東では砂質が強まり、マンガン粒の量も低下して、Ⅲ a・b 層の区分は不明瞭となる。厚15～30cm。

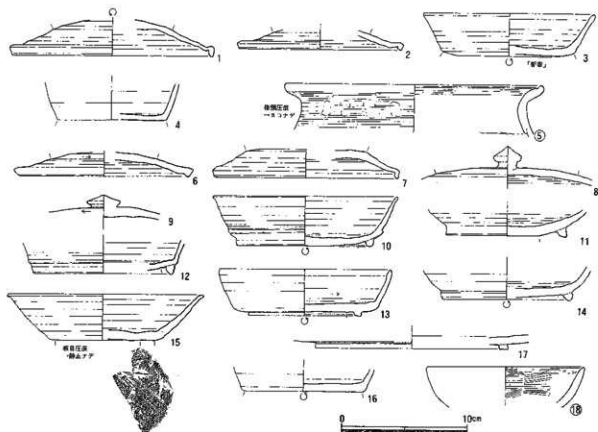
Ⅳ層＝緑灰色粘土。炭化粒をわずかに含み粘性が強い。古墳時代前期（？）～中期の遺物包含層。3 D・E 区付近に顕著である。厚5～10cm。

V 層＝灰白色粘土・砂・礫の互層（2 B・3 C 区以東）あるいは礫層（古名栗川流路＝自然科学編加藤論文参照）（遺跡基盤層）。

I a・b・Ⅱ層中にも奈良・古墳時代の遺物が混在する。Ⅳ層は古墳時代中期以前の遺物包含層と考えているが、V 層の堆積順位は明確でない。Ⅳ・V 層は近時して形成された可能性もある。

奈良時代の遺物は主にⅢ a・b 層から出土する。またⅢ層は古墳時代後期（6～7 世紀）の遺物包含層でもある。比較的大きな土器破片は奈良・古墳時代ともⅢ a 層内に集中する傾向にあり、土器細片は両時代が混在しⅢ a 層上位からⅢ b 層にかけて均一に含まれている。Ⅲ a・b 層をあわせ、古墳時代後期～奈良時代末葉（9 世紀前半代を含むか？）にいたる遺物包含層とするのが妥当なのかもしれない。Ⅲ層は発掘区東側で薄く（30～35cm）、西に向い徐々に厚さを増す。3 B 区では層厚80～90 cmを測った。

試掘調査（永井他1981）時からマンガン粒の量が急激に減少するⅢ b 層上面を含め、Ⅲ層中には複数の生活面が存在すると推定されたため、Ⅲ層を厚10～15cm単位で掘り下げ順次遺構検出作業を行ったのであるが、検出面を異にする遺構とその伴出遺物の編年時期に規則的な対応関係は見い出せなかった。2・3 G 区以東（Ⅲ層薄い）の奈良時代遺構はⅡ層を除去した段階（Ⅲ a 層上面）でほぼ検出される。一方Ⅲ層の発達した発掘区西側（2・3 A・B・C・D 区等）では、掘り下げが進むに従って遺構数は増加していく。発掘技術の未熟さにもよろうが、近時する遺構群が検出面を異にして見つかったり、一つの掘立柱建物の柱列でさえ大きく上下にわかれ検出されることも少なくなかった。奈良時代の遺構群は絶えて古墳時代に先行して（Ⅲ層上位から）検出されるが、奈良時代を主体とす



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
1	(16.1)			杯蓋 A3	6	(14.2)			杯蓋 A2	11				舟底 A1	16				舟底 A2
2	(13.1)			杯蓋 A3	7	(14.8)			杯蓋 A3	12				舟底 A1	17				舟底 A3
3	(13.6)		(3.4)	舟底 A3	8				杯蓋 A3	13	13.7		2.8	舟底 A3	18	(14.8)			舟底 A1
4				舟底 A3	9				舟底 A3	14				舟底 A3					
5	(25.6)			碗 D1	10	14.7		3.9	舟底 A3	15	(15.3)		(2.8)	舟底 A2					

第3図 NSD1・2出土土器実測図

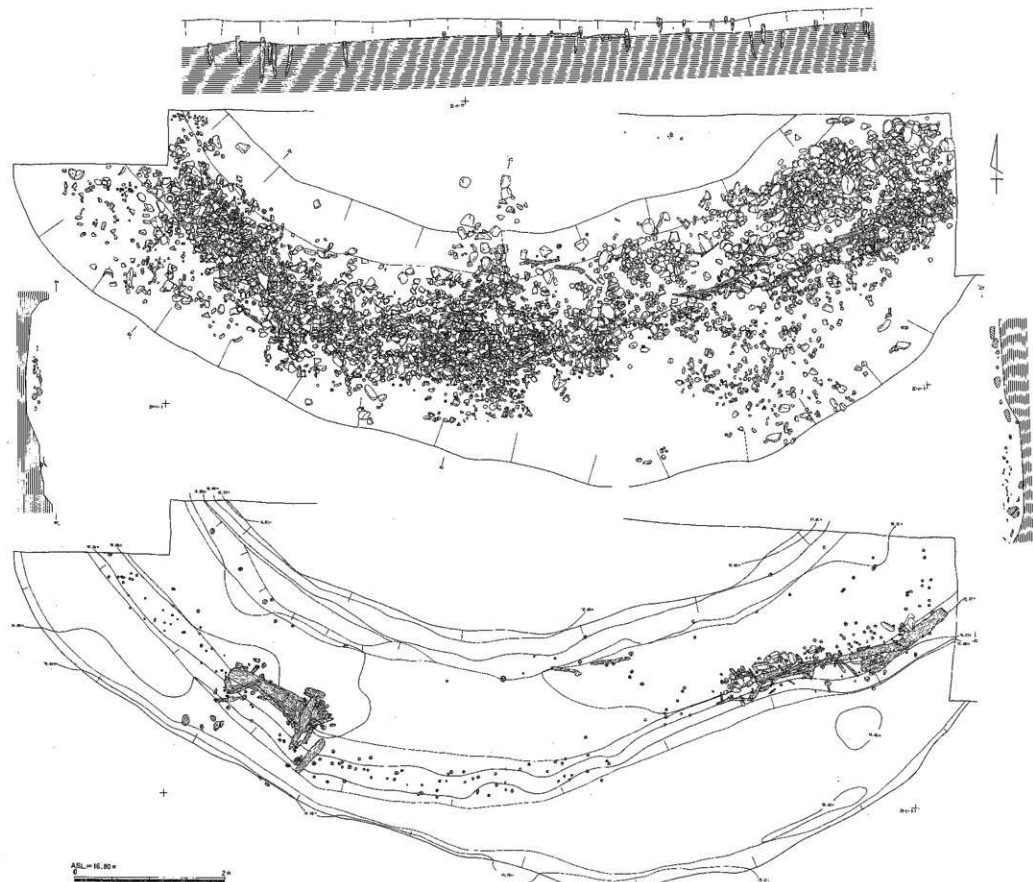
る検出面において古墳時代後期の遺構輪郭がまったく見えていない訳ではない。むしろ奈良・古墳時代の遺構群は検出面を同じくしている状況が一般的であり、奈良時代の遺構群の全様を知りえたのは古墳時代の遺構群をほぼ検出し終えたⅢb層上面ないしⅣ・Ⅴ層に至ってからであった。

以下記述する各遺構を奈良時代に位置づけた根拠は、その覆土から出土した遺物と古墳時代・平安時代以降の遺構との重複関係にある。よって伴出遺物が少なく、他遺構との重複関係も明確でなかった遺構（特に掘立柱建物）を奈良時代とした根拠は希薄と言わざるを得ない。また遺構検出面を1・2・3面に区分し記してみたが、この3区分は各遺構の位置する地点（およそ大グリット単位）でのⅢ層内における検出面の相対的高さ（1面上位・2面中位・3面下位＝Ⅲb層上面以下）を表わしているにすぎない。遺構検出面の対応関係を把握していない以上、3つの検出面が遺構形成時期の一応の目安にはなるとしても、発掘区全域にわたる各遺構の近似性や前後関係を厳密に表示するものではないことをまずこわっておきたい。

第1節 溝状遺構（NSD）

NSD1

発掘区東端（3I-i・3J-b・C区）のⅢ層下位（3面）から検出された。NSD2に切断さ



第4図 NSD3実測図・遺物出土状態

れる。確認長は約9.0mと短く、底面の海拔高も15.50m前後で一定している。現地地形から判断して流路は北東から南西へ向っていたと思われる。幅3.10~4.05m、深さ0.85~0.95mを測る。

南岸は底面近くでわずかに影らみ平坦面をつくるが、壁の傾斜は総じて直線的であり底面との境に明瞭な屈曲部を持つ。断面は整ったU状を呈する。覆土の堆積状態は当溝が長期間存続しほぼ埋没した後、再び南寄り幅の狭い流路が掘削されたことを示している。底面にこぶし大礫が落ち込んでいた。

土器片（須恵器杯蓋A3、無台杯身D2・D3—黒書土器—、土師器甕D1）のみ少量出土している。

NSD2

2I-f・i区~3J-C区にかけて直線的にのびる。Ⅲ層2面に至りほぼすべての輪郭を確認した。長さ約29.5m、幅2.35~4.10m、深さ0.45~1.15mを測り、両端は発掘区外におよんでいる。南北両端の比高差は約0.35mあり（海拔高15.60~15.95m）、北に向い流れていたと推定される。

平安時代以降の溝3条と直交しNSD1を切断する。後世の溝と流路を同じくする北半の形状は明らかでないが、南半では底面（平坦）の幅が均一で断面U字状を呈する。西側壁と底面との境5本の杭（径2.5~3.5cm）が密集して打ち込まれていた。

出土量は多くないが須恵器杯蓋A2・A3、有台杯身A1・A3・C1・C3、無台杯身A2・D2、有台皿A3、土師器無台杯身C1がほぼ等しい割合で出土している（黒書土器3点含む）。流路を若干移動させるものの、当溝は奈良時代前葉から後葉、さらに平安時代以降にいたるまで生きた溝として長期間存続していたと考えられる。伴出遺物に鈎帯具（丸軋—第150図—2、巻頭カラー図版）が1点ある。

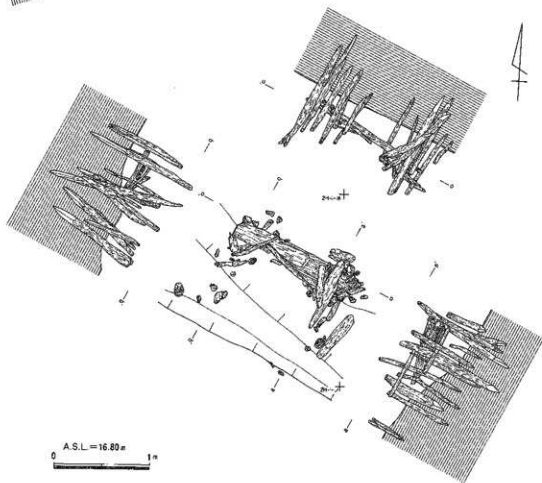
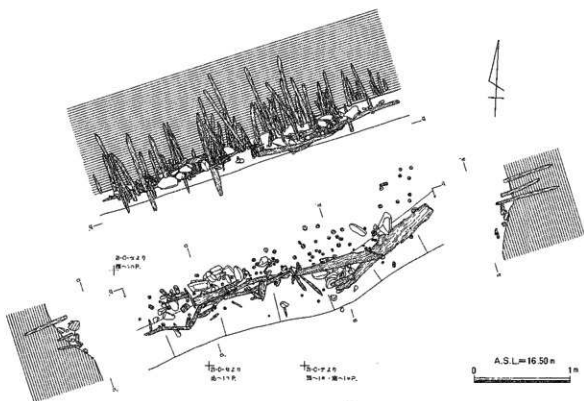
NSD3

2H-i・2I-C区のⅢ層上面（1面）で確認できた。北東から北西へ大きく蛇行している。長さ約12.5m、幅2.70~3.70m、深さ0.25~0.30m、底面の海拔高16.15m前後を測る。

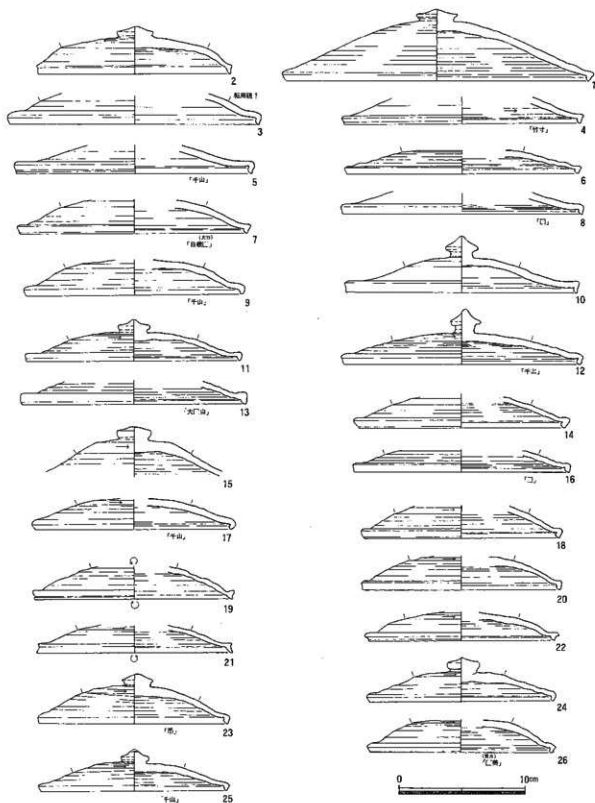
壁は緩やかに傾斜し北寄りにさらに一段深い流路を有していた。この一段深い流路の壁・底縁には多数の杭が打ち込まれ、乱雑ながら両岸に沿う2条の杭列をなしていた。多量のこぶし大礫と土器片が混在して一段深い流路を埋めつくし、また南岸上位の緩斜面には礫の集積が認められた。

使用された杭には太・細（径5.0~7.0cm・2.5~4.0cm）の別、自然の丸木材と角材（転用材か？）があり先端を3通りの方法より尖らせていた。（長い削り面を多方向から加えた作りのていねいな太杭、短い削り面を3ないし4方向から加えた太杭、1方向の削りにより先端を尖らせた細杭）太杭の多くは深くまで（底面下0.5~0.7m）垂直に打ち込まれ、先端はⅢ層下の砂層にまで達していた。杭の間隔に規則性は認められず、量的には粗雑な削りの細杭が圧倒的に多い。杭列の外側には人為的なものか、自然に絡みついたものか、樹皮を残す丸木材（横木）が残る多くの礫はこの横木を押し潰すように集積していた。断定できないが木杭と横木で礫止めを築き、その上位の斜面にこぶし大礫を張りしめて護岸施設を施けていたと考えられる。乱雑に打ち込まれた細杭は補修工事に伴うものかもしれない。流水の浸食が著しい南岸（攻撃斜面）に多量の杭が検出されたことは、補修工事がかなり頻繁に行われていたことを示しているよう。

約5.0m離れ東西に2箇所張り出し施設が築かれていた。両施設とも一段深い流路の南斜面に位置している。東側の張り出し施設では長さ約2.70mにわたり板材（長さ100~110cm、幅15~20cm、厚さ2.5~4.0cm）と木杭列が残り、部分的に板材が太杭の上に乗っていたが詳細な構造は不明である。西側の張り出し施設は階段状（2段）をなしていた（南北幅1.00m、東西幅1.40m）。先端をていねい

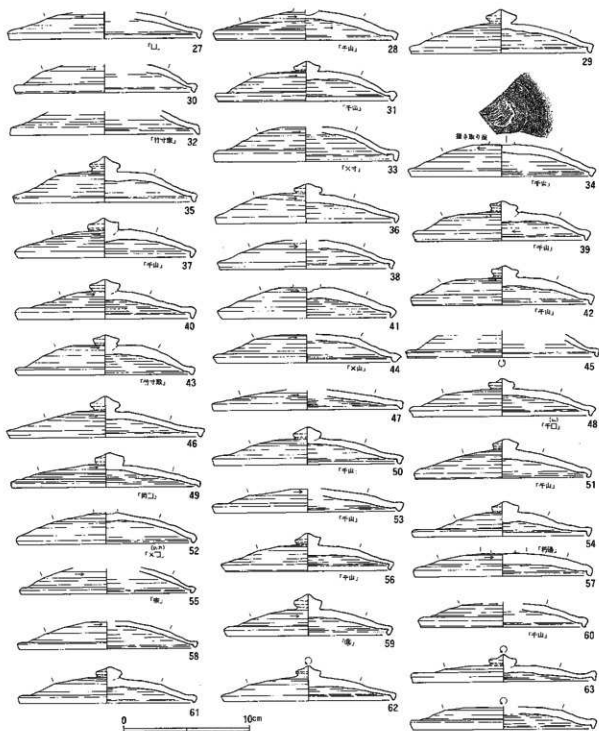


第5図 NSD3東・西張り出し施設実測図



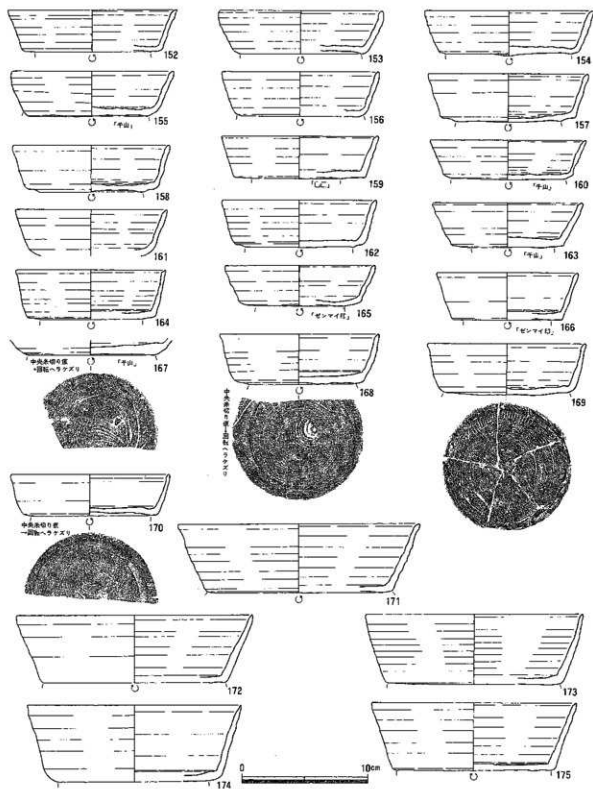
番号	口径	最大径	底径	器 型	番号	口径	最大径	底径	器 型	番号	口径	最大径	底径	器 型	番号	口径	最大径	底径	器 型
1	(26.7)		(5.6)	杯蓋	8	(19.2)			杯蓋 A2	15				杯蓋 A1	22	(26.4)			杯蓋 A2
2	19.5		3.7	杯蓋 A1	9	(17.4)			杯蓋 A2	16	(17.2)			杯蓋 A1	23	16.2		3.3	杯蓋 A2
3	(20.1)			杯蓋 A2	10	18.6		4.4	杯蓋 A3	17	(18.1)			杯蓋 A3	24	16.0		3.5	杯蓋 A2
4	(19.1)			杯蓋 A3	11	17.2		3.3	杯蓋 A3	18	(18.0)			杯蓋 A3	25	15.1		3.2	杯蓋 A2
5	(18.1)			杯蓋 A3	12	19.2		4.3	杯蓋 A3	19	(16.0)			杯蓋 A2	26	15.0			杯蓋 A2
6	(18.6)			杯蓋 A3	13	(18.6)			杯蓋 A3	20	(15.8)								
7	(18.5)			杯蓋 A3	14	(17.1)			杯蓋 A3	21	(15.5)								

第 6 図 NSD 3 出土土器実測図 (1)



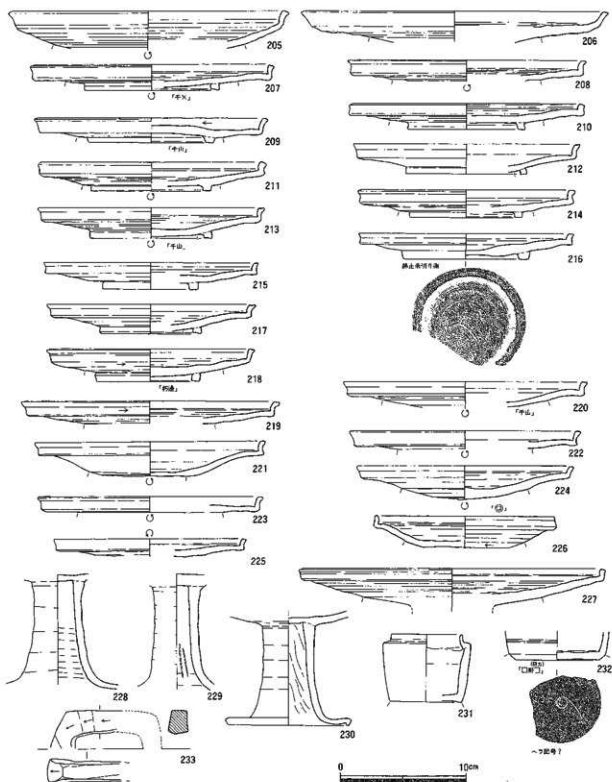
图号	口径	最大径	壁厚	器型	图号	口径	最大径	壁厚	器型	图号	口径	最大径	壁厚	器型	图号	口径	最大径	壁厚	器型	图号	口径	最大径	壁厚	器型	
27	(19.4)			杯盖 A3	37	14.3	3.1		杯盖 A3	47	(16.1)			杯盖 A1	57	(14.2)			杯盖 A3						杯盖 A3
28	(14.7)			杯盖 A2	38	(14.4)			杯盖 A3	48	14.5	2.3		杯盖 A3	58	(16.3)			杯盖 A3						杯盖 A3
29	14.7	3.5		杯盖 A3	39	14.1	3.1		杯盖 A3	49	15.5	2.7		杯盖 A3	59	13.4		3.2	杯盖 A3						杯盖 A3
30	(14.5)			杯盖 A3	40	14.3	3.1		杯盖 A3	50	15.2	2.3		杯盖 A3	60	(13.5)			杯盖 A3						杯盖 A3
31	14.4	3.1		杯盖 A3	41	(14.2)			杯盖 A3	51	16.1	3.1		杯盖 A3	61	14.1	2.4		杯盖 A3						杯盖 A3
32	(15.0)			杯盖 A2	42	14.4	2.1		杯盖 A3	52	(14.3)			杯盖 A3	62	13.4	2.7		杯盖 A3						杯盖 A3
33	(14.7)			杯盖 A3	43	14.2	2.1		杯盖 A3	53	(15.2)			杯盖 A3	63	14.4	2.1		杯盖 A3						杯盖 A3
34	(14.9)			杯盖 A3	44	(15.4)			杯盖 A3	54	14.4	2.7		杯盖 A3	64	(14.8)			杯盖 A3						杯盖 A3
35	14.6	3.6		杯盖 A3	45	(15.4)			杯盖 A3	55	(14.3)			杯盖 A3											杯盖 A3
36	14.6	2.1		杯盖 A3	46	(15.7)	3.2		杯盖 A3	56	12.7	2.9		杯盖 A3											杯盖 A3

第7图 NSD3出土土器类测图(2)



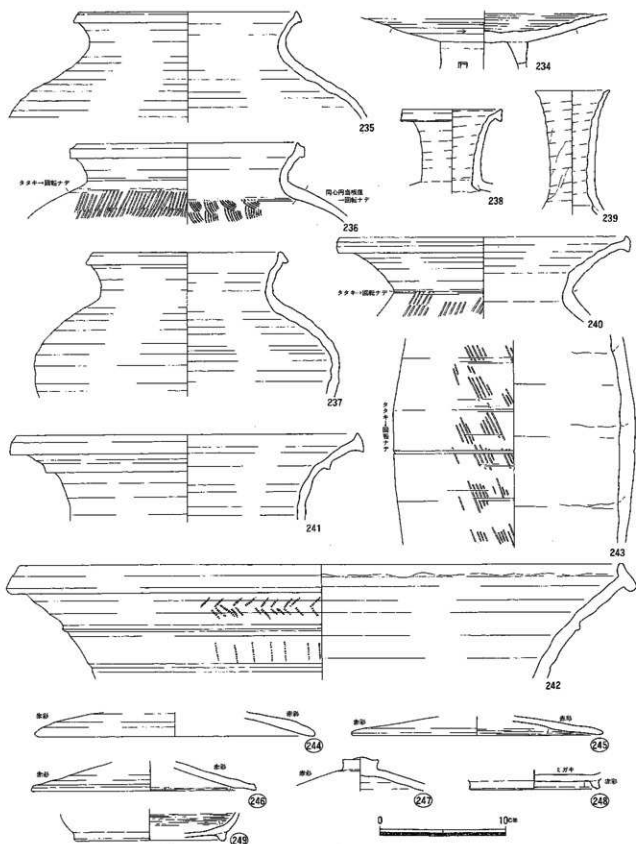
番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
152	(13.4)		(3.3)	腰台形底D4	158	12.5		3.7	腰台形底D4	164	(11.8)		(3.9)	腰台形底D4	170	12.4		3.3	腰台形底D3	176	12.4		3.3	腰台形底D3
153	(13.1)		(2.4)	腰台形底D2	159	(12.4)		(3.3)	腰台形底D2	165	(11.3)		(3.2)	腰台形底D4	171	(13.2)			腰台形底D2	177				腰台形底D2
154	13.4		3.5	腰台形底D4	160	12.4		5.1	腰台形底D3	166	(11.3)		(3.7)	腰台形底D2	172	(13.7)		(3.3)	腰台形底D2	178				腰台形底D2
155	12.9		3.6	腰台形底D3	161	12.0			腰台形底D3	167				腰台形底D3	173	(11.3)		(3.3)	腰台形底D2	179				腰台形底D2
156	(12.4)		(3.3)	腰台形底D3	162	12.2		3.7	腰台形底D4	168	12.6		4.9	腰台形底D4	174	(16.4)		(5.0)	腰台形底D3	180				腰台形底D3
157	12.7		3.8	腰台形底D4	163	11.9		2.5	腰台形底D4	169	12.8		4.1	腰台形底D2	175	(16.3)		(5.4)	腰台形底D3	181				腰台形底D3

第11図 NSD 3出土土器実測図 (6)



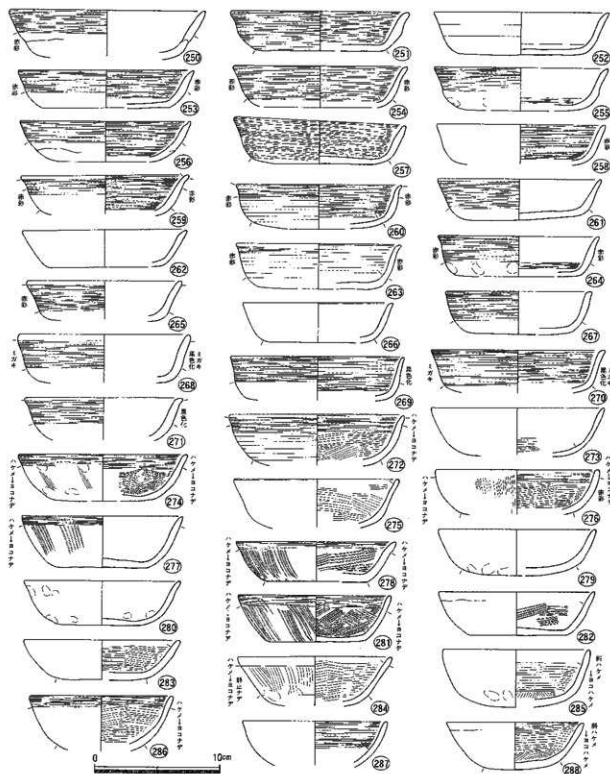
番号	口径	最大径	高さ	厚	重量	番号	口径	最大径	高さ	厚	重量	番号	口径	最大径	高さ	厚	重量
205	(22.3)				7.4	213	18.0		2.7		229						7.4
206	(24.3)				(2.2)	214	(17.2)		(2.2)		230						(2.2)
207	(19.3)	(2.0)			(2.1)	215	(17.0)		(2.1)		231						(2.1)
208	(18.9)				2.5	216	17.0		2.5		232						2.5
209	18.6	2.0			(2.3)	217	(16.5)		(2.3)								(2.3)
210	(18.7)	(2.0)			2.6	218	16.5		2.6								2.6
211	(18.1)	(2.3)				219	(20.5)										
212	(17.0)	(2.4)				220	(19.3)										

第13図 NSD 3出土土器実測図(8)

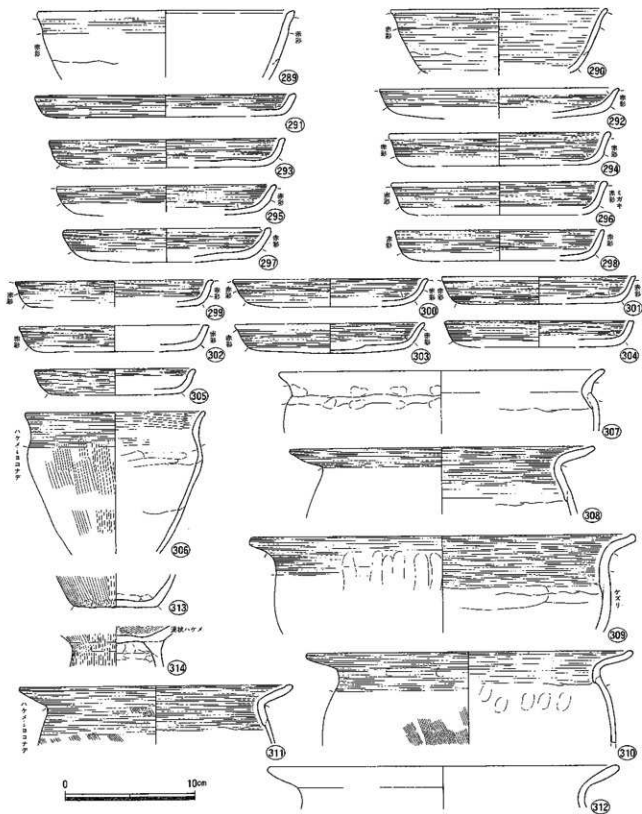


番号	口径	最大径	高さ	底径	底面	番号	口径	最大径	高さ	底径	底面	番号	口径	最大径	高さ	底径	底面	番号	口径	最大径	高さ	底径	底面
234						238	(18.8)					242	(50.8)					246	(17.8)				
235	(18.1)				底C1	239	(5.9)				底面A1	243	(19.1)					247					底面A1
236	(18.7)				底A2	240	(22.3)				底面B1	245	(22.2)					248					底面A1
237	(16.1)	(24.2)			底C1	241	(28.1)				底面B2	249	(19.9)					249					底面A1

第14図 NSD 3出土土器実測図 (9)

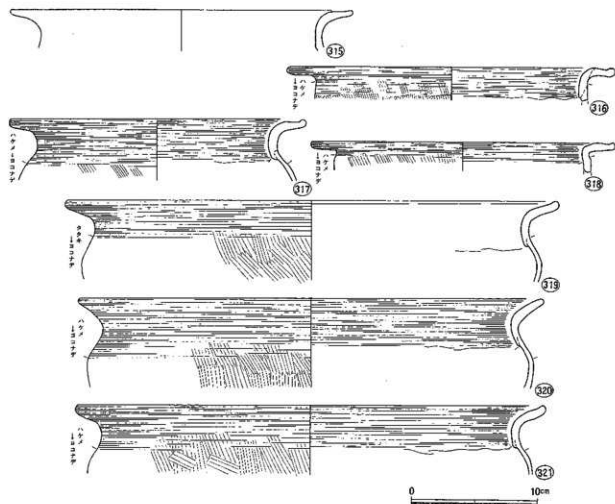
[illegible]

第15図 NSD3出土土器実測図(10)



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
289	(19.0)			聯合軒唐23	290	(16.5)	(2.5)		聯合唐22	291	(14.5)	(2.3)		聯合唐23	292	(25.0)			唐D3	293	(20.0)			唐C
294	(16.0)			聯合軒唐24	295	(15.0)	(2.5)		聯合唐23	296	(14.5)	(2.0)		聯合唐21	297	(20.0)			唐C	298	(20.0)			唐C
299	(19.0)	(1.7)		聯合唐21	300	(16.0)	(2.0)		聯合唐21	301	(12.0)	(2.0)		聯合唐21	302	(27.0)			唐D3	303	(27.0)			唐D3
304	(18.0)			聯合唐23	305	(15.0)			聯合唐22	306	(13.0)			唐A	307					308				
309	(18.0)	(2.1)		聯合唐21	310	(14.0)	(2.1)		聯合唐23	311	(24.0)			唐B1	312					313				唐
314	(17.0)	(2.5)		聯合唐22	315	(14.0)	(2.1)		聯合唐21	316	(23.0)			唐C	317					318				唐
319	(16.0)			聯合唐23	320	(14.5)	(2.0)		聯合唐21	321	(29.5)			唐A	322					323				

第16図 NSD3出土土器実測図 (11)



番号	口径	最大径	長さ	厚さ	番号	口径	最大径	長さ	厚さ	番号	口径	最大径	長さ	厚さ	番号	口径	最大径	長さ	厚さ
215	27.1				216	23.5		23.5	4.0	217	24.0				218	39.0			
219	25.9				220	36.9				221	37.2				222	37.2			

第17図 NSD3出土土器実測図 (12)

に尖らせた太杭（自然丸木材・角材）を各段足場の4隅に打ち込み、この太杭に並列ないし交差する杭を数本添えている。交差部分を利用して東西両端に横木を架け、横木の上に足場板（長さ85～110 cm、幅20～25 cm、厚さ4～6 cm）を渡す。さらに足場板の上に横木を乗せ上下から足場板を挟みつけていた。北東端の杭近くから板皮（幅0.7～1.0 cm）が・括出土しており、おそらくこうした樹皮・蔓・縄等により杭・横木・足場板を縛り固定していたものと考えている。一枚の足場板だけで両端の横木にとどかない時は、中間に同様の横木を施け2枚の足場板を繋ぎ架け渡していた。足場板には矢板・壁板等が転用され、その使用材・構造は仮設的である。東西張り出し施設の横木・足場板（海拔高16.30～16.40 m）から底面までの高低差はわずか20～30 cmしかない。

東張り出し施設の西北方に小規模な貝塚（60×60×10 cm）が形成されていた。溝最下には粘土と砂が細互層をなして堆積していたが、土器群より上位の覆土の層位的な変化は明確でなかった。使用時、管理のいきとどいた溝であったと思われる。

出土遺物には土器、転用碗、ミニチュア土器、陶人形、土鍾等の土製品、甕口、瓦、斎串、柄材等の木製品、鈎帯具（鈎具）、和同開珎等がある。一段深い流路内に集積していた土器量は膨大で（ポ

リコンテナー44×60×15cm-4箱分)189点の墨書土器を含んでいた。須恵器杯蓋A3、無台杯身D3・D4、有台皿D1・D2、土師器無台杯身C3、無台皿B1、甕D4を主体とし、須恵器杯蓋A2、有台杯身A3・B・E、無台杯身A1・D2、無台皿B1、高盤B、土師器無台杯身C1・E、無台皿B3等も比較的高い比率で伴出している(他に須恵器杯蓋A1・B、有台杯身C1・C2・C3・D、無台杯身A2・A3・B1・B2・B3・C・D1、小型杯身B2、皿蓋、有台皿A3・B2、無台皿A2・C、壺蓋A2、壺C1、小型壺B、長頸壺A1、平瓶、甕A2・B2・B3、土師器杯蓋A1、有台杯身A1・B、無台杯身B1・B2、皿蓋、無台皿B2、甕A・C・D3、銅A・B1・B2、台がある。)。当溝は奈良時代を通じ(前葉～後葉)生きた溝として機能していたと考えられているが、覆土の状況が示す埋没期間は著しく短かったと推定できる。

NSD4

皿層を約10cm掘り下げたところで(2面)、すべての輪郭を確認した。2H-c区～3H-e区にかけてわずかに蛇行しつつのびている。溝幅は南に向い徐々に狭まり(5.25～2.65m)、確認長約24.5m、深さ0.7～0.4mを測る。北半底面の海拔高(15.90m前後)は南半(16.00m前後)に比べ若干低い。平安時代以降の溝2条に切断されNSD6と交差していた。

溝底をさらに一段深い流路が蛇行し、この流路はところどころ幅を広げてすり鉢状の凹みをなしていた。一段深い流路の西壁には20～50cm間隔で整然と木杭(径2.5～4.0cm、5.0～7.0cm)が打ち込まれ(長さ85cm)、木杭より上位の西側斜面に多量のこぶし大礫と丸木材(自然木)が集積していた。杭の先端は2通りの削り技法(短い削り面を3ないし4方向から加える、1方向から削りにより尖らせる)により仕上げられている。NSD3と同様の護岸施設(杭と横木で礫止めを造り、斜面にこぶし大礫を張りしめる)を西岸のみに設けていたと考えているが、残存する杭列は一行のみで顕著な補修工事の痕跡は見られない。東側斜面に1箇所、礫と土器片の集中部(0.5×1.2m)が検出された。西岸は一部大きく張り出していた。

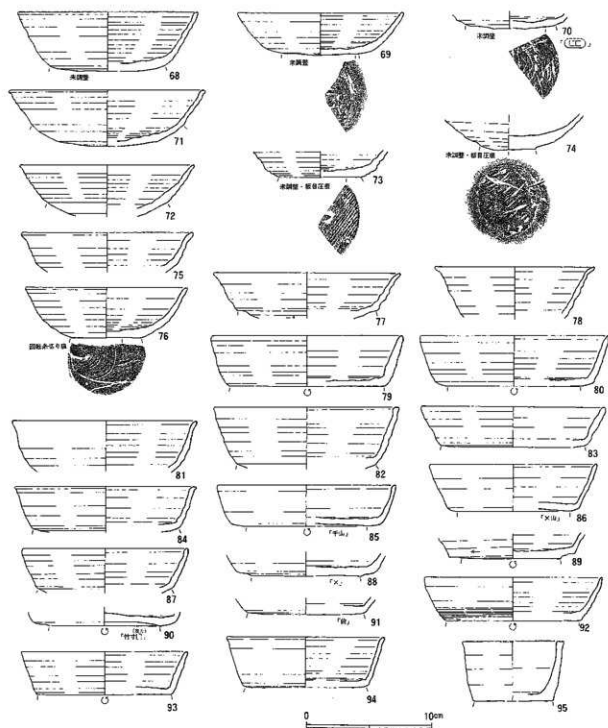
覆土は大きく3層に区分でき(上層=茶灰色砂質粘土、中層=暗灰色粘土、下層=暗灰色砂質粘土—一段深い流路内)、遺物は主に中・下層から出土する。護岸施設(礫、横木、杭等)は中層に覆われていた。

出土遺物には土器、転用硯、ミニチュア土器・土馬等の土製品、土製支脚、梯子状の建築(?)部材、馬形・曲物底板・鍾・鉢・横槌・櫛等の木製品、木筒、鈔帶具(丸鞘)、石製紡錘車等がある。土器は須恵器杯蓋A3の出土量が圧倒的に多く、有台杯身A3・B・E、無台杯身A1・D3、無台皿B1・D1・D2、鉢B、土師器無台杯身B1・C3、無台皿B2、甕D3・Eを主体とする(他に須恵器杯蓋A1・A2、有台杯身A1・A2・C1・C2・C3、無台杯身A3・B1・B3・C・D1・D2・D4、小型杯身B1、有台皿A1・A2、無台皿B2・C、高盤B、鉢C、壺蓋A2、壺B、長頸壺A1、獣足壺、甕、甕A1・A2・B2、土師器杯蓋A2、有台杯身A1・A2・B、無台杯身B2・B3・C1・D、皿蓋、有台皿B2、無台皿B1・B3、高盤C、甕B・D1、鍋B1・B2を出土している)。杯蓋・杯身を主に101点の墨書土器を含んでいた。奈良時代前葉から後葉にかけて機能していたと考えられる。

NSD5

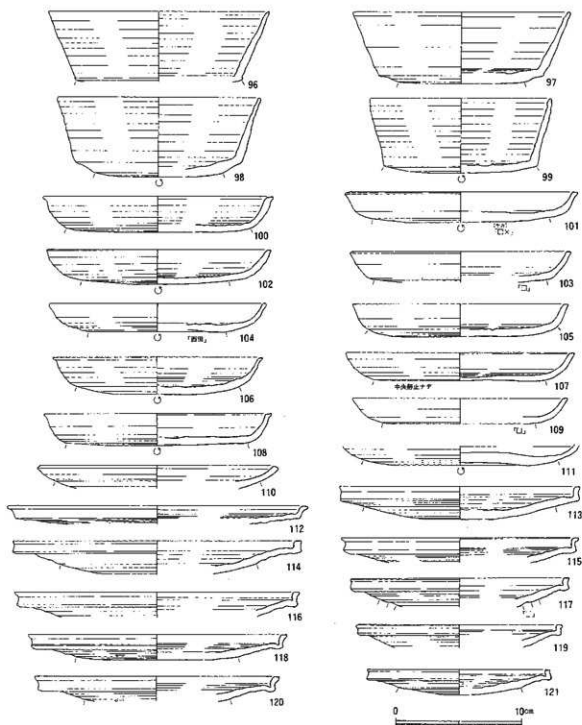
2G-a・d・g区の皿層2面から検出された。北東東から南西西へ向い直線的にのびている。確認長約21.5m、推定幅2.50m、深さ0.55～0.65mを測り、南東方より合流する枝溝(幅不明、深さ0.6～0.7m)が1条ある。

両壁ともわずかに内彎しつつ傾斜し、平坦な底面(海拔高15.75～15.85m)に至る(断面U字状)。



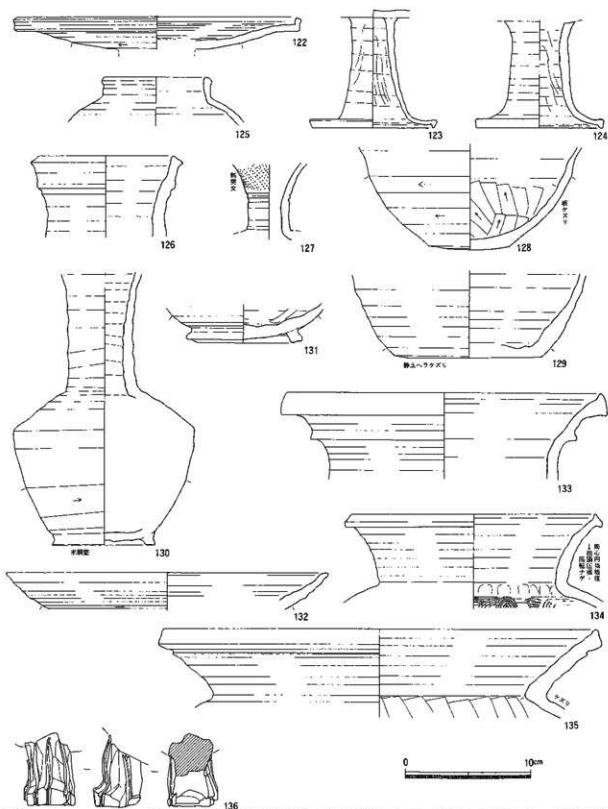
番号	口径	最大径	高さ	底径	器種	番号	口径	最大径	高さ	底径	器種	番号	口径	最大径	高さ	底径	器種	番号	口径	最大径	高さ	底径	器種
68	(14.3)	(4.7)			甗台鉢身 A1	75	(13.7)				甗台鉢身 B3	82	(14.8)				甗台鉢身 D3	89					甗台鉢身 D4
69	13.2	3.3			甗台鉢身 A1	76	12.5	4.0			甗台鉢身 A3	83	(14.7)				甗台鉢身 D3	90					甗台鉢身 D4
70					甗台鉢身 A1	77	(14.5)				甗台鉢身 B1	84	(14.4)				甗台鉢身 D3	91					甗台鉢身 D3
71	(15.4)	(4.5)			甗台鉢身 A1	78	(12.7)				甗台鉢身 B1	85	(14.2)	(3.2)			甗台鉢身 D4	92	(4.1)	(3.4)			甗台鉢身 D2
72	(13.9)				甗台鉢身 A1	79	(15.3)	(4.8)			甗台鉢身 D3	86	(13.3)	(3.7)			甗台鉢身 D3	93	(13.2)	(3.4)			甗台鉢身 D2
73					甗台鉢身 A3	80	(15.4)	(4.8)			甗台鉢身 D3	87	(13.2)				甗台鉢身 D3	94	(12.6)	(4.1)			甗台鉢身 D2
74					甗台鉢身 A1	81	(4.7)				甗台鉢身 C	88					甗台鉢身 D4	95	(8.1)	(4.8)			小型鉢身 B

第21図 NSD 4 出土土器実測図 (3)



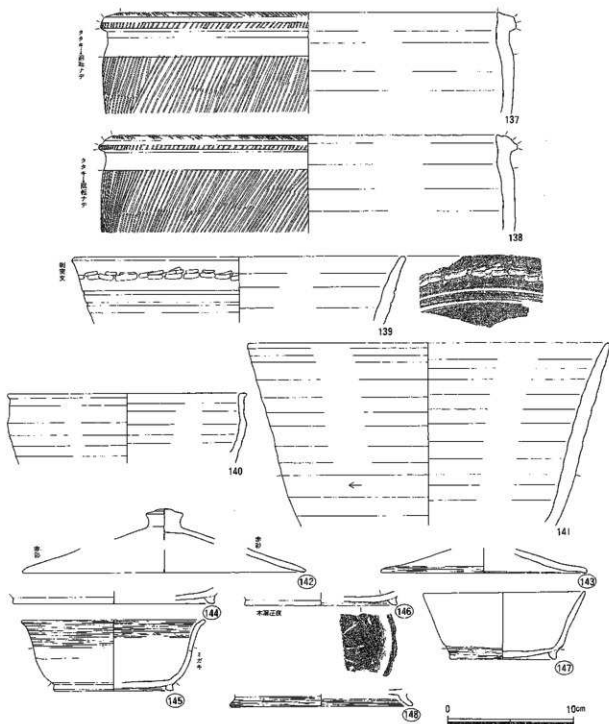
番号	口径	最大径	高さ	底径	器高	口径	最大径	高さ	底径	器高	番号	口径	最大径	高さ	底径	器高
96	(17.5)			肩台径 D1	121	(17.5)			肩台径 D1	113	(19.3)			肩台径 D2	117	(19.3)
97	(17.2)	(5.7)		肩台径 D1	104	(17.2)	(2.2)		肩台径 D2	111				肩台径 D2	116	(20.5)
98	(16.1)	(6.3)		肩台径 D1	96	(17.7)	(2.6)		肩台径 D1	112	(23.8)			肩台径 C	119	(16.3)
99	(14.4)	(5.8)		肩台径 D1	96	(16.6)	(2.8)		肩台径 D2	119	(12.3)			肩台径 H1	120	(19.4)
100	(16.3)	(2.3)		肩台径 D1	107	(18.1)	(2.7)		肩台径 D1	114	(22.8)			肩台径 H2	121	(14.8)
101	(18.4)	(2.4)		肩台径 D2	108	(18.4)	(2.5)		肩台径 D1	125	(18.8)			肩台径 H1		
102	17.8	2.7		肩台径 D2	108	(17.8)	(2.6)		肩台径 D1	116	(22.6)			肩台径 H1		

第22図 NSD4出土土器実測図(4)



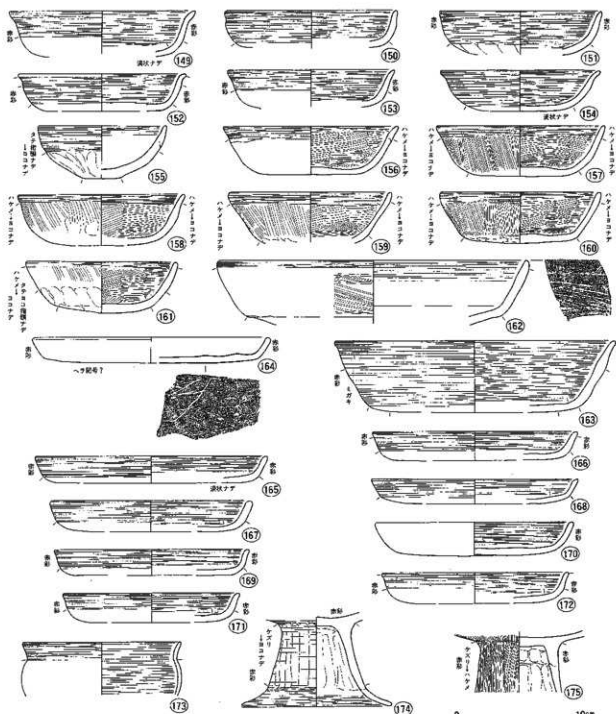
番号	品名	出土層	出土位置	出土時期	出土数量	出土状況	出土場所	出土時期	出土数量	出土状況	出土場所	出土時期	出土数量	出土状況	出土場所
122	(27.5)														
123															
124															
125															
126															
127															
128															
129															
130															
131															
132															
133															
134															
135															
136															

第23図 NSD4出土土器・獣足実測図(5)



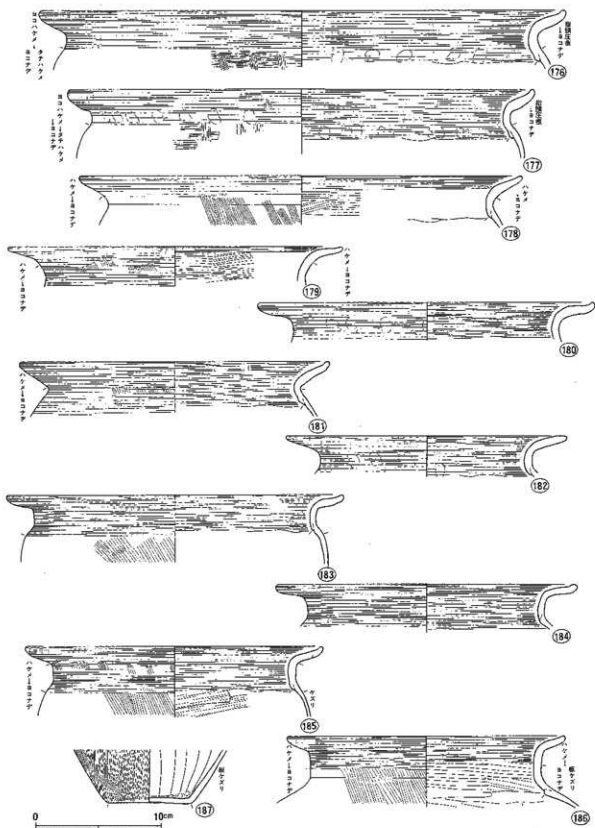
番号	寸法	最大径	器種	番号	寸法	最大径	器種	寸法	最大径	器種	番号	寸法	最大径	器種
137	(33.1)		片F	141	(28.8)		片C	(15)	(4.8)	(5.8)	常世杯身A	(16)		常世盃口2
138	(33.3)		片F	(15)	(22.5)	5.0	片C	(16)			常世杯身A1			
139	(35.6)		片C	(15)	(16.3)		片C	(16)	(12.5)	(14.4)	常世杯身A2			
140	(19.2)		片F	(15)			常世杯身A1							

第24図 NSD 4出土土器実測図 (6)



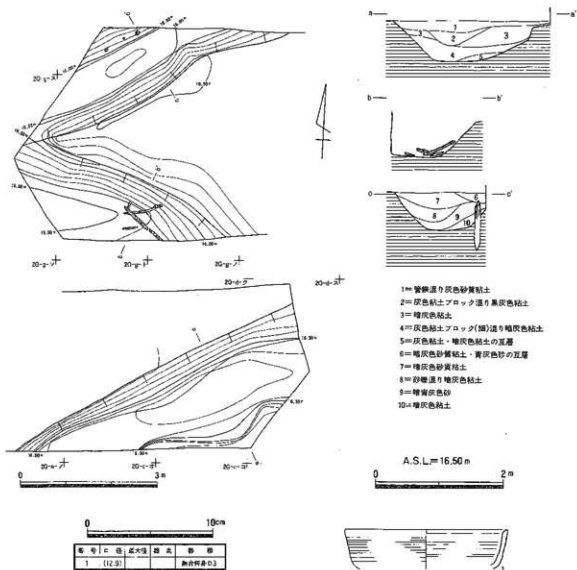
番号	口径	最大径	高さ	図	番号	口径	最大径	高さ	図	番号	口径	最大径	高さ	図	番号	口径	最大径	高さ	図
149	(14.6)			無台杯身C3	150	13.8	3.8		無台杯身B1	151	(22.2)	(5.4)		無台杯身C3	152	15.6	2.6		無台杯身B1
150	(13.6)			無台杯身C3	151	13.3	4.0		無台杯身B1	152	(18.8)	(2.6)		無台杯身B3	153	(14.0)	(2.3)		無台杯身B2
151	(12.8)			無台杯身C1	152	(13.2)	(4.0)		無台杯身B1	153	(18.3)	(2.1)		無台杯身B1	154	(14.7)	(2.4)		無台杯身B2
152	(12.2)	(2.8)		無台杯身C3	153	(12.3)			無台杯身B1	154	(18.1)	(2.3)		無台杯身B2	155	(12.5)	(12.6)		無台杯身B
153	(12.2)			無台杯身C3	154	12.7	4.0		無台杯身B2	155	(16.8)	(2.4)		無台杯身B1	156				無台杯身C
154	12.6	3.2		無台杯身C2	155	11.9	4.0		無台杯身B7	156	(16.2)	(2.0)		無台杯身B3	157				無台杯身C
155	12.1	4.2		無台杯身B3	156	(24.6)				157	(15.4)	(2.0)		無台杯身B2	158				

第25図 NSD4出土土器実測図 (7)



番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状																																																												
(176)	(41.9)			縁部2	(176)	(25.2)			縁部2	(180)	(22.3)			縁部3	(180)	(22.7)			縁部E	(177)	(37.1)			縁部2	(177)	(25.8)			縁部3	(181)	(24.7)			縁部3	(181)	(22.7)			縁部E	(182)	(30.2)			縁部2	(182)	(25.8)			縁部3	(183)	(24.3)			縁部E	(183)	(22.7)			縁部E																									
(179)	(37.1)			縁部2	(180)	(25.8)			縁部3	(181)	(25.8)			縁部E	(182)	(22.7)			縁部E	(176)	(41.9)			縁部2	(176)	(25.2)			縁部2	(180)	(22.3)			縁部3	(180)	(22.7)			縁部E	(177)	(37.1)			縁部2	(177)	(25.8)			縁部3	(181)	(24.7)			縁部3	(181)	(22.7)			縁部E	(182)	(30.2)			縁部2	(182)	(25.8)			縁部3	(183)	(24.3)			縁部E	(183)	(22.7)			縁部E					
(178)	(40.7)			縁部2	(179)	(37.1)			縁部2	(180)	(25.8)			縁部3	(181)	(24.7)			縁部3	(182)	(22.7)			縁部E	(176)	(41.9)			縁部2	(176)	(25.2)			縁部2	(180)	(22.3)			縁部3	(180)	(22.7)			縁部E	(177)	(37.1)			縁部2	(177)	(25.8)			縁部3	(181)	(24.7)			縁部3	(181)	(22.7)			縁部E	(182)	(30.2)			縁部2	(182)	(25.8)			縁部3	(183)	(24.3)			縁部E	(183)	(22.7)			縁部E

第26図 NSD 4出土土器実測図 (8)



第27図 NSD 5 実測図・出土土器実測図

覆土は4～5層に区分され、南西半(下流側)ではほぼ中央に、北東半(上流側)では南岸寄りに、新しい時期の流路を思わせるレンズ状の粘土層(灰色粘土ブロック混り黒灰色粘土・砂礫混り暗灰色粘土)が確認できた。北側壁の底面近くに丸木杭(径3.0～8.0cm)が3本打ち込まれ、枝溝の底面には自然木が集積していた。また底面に密着して建築部材が発見されたが、最下層から出土する土器は古墳時代後期を主体とするため奈良時代の遺物に含めていない。奈良時代の土器の多くは細片で器形を知りえたのはわずか1点(須恵器無台杯身D3)である。古墳時代後期～奈良時代後葉にかけて存続した溝と考えているが、奈良時代の流路・形状はかなり小規模であったと思われる。

NSD 6

2H-f区～2G-i区にかけて西進し流路を南に転じて、3G-h区に至る。確認長約38.0m、幅0.3～0.85m、深さ0.10～0.25mを測りⅢ層上面(1面)で確認できた。

平安時代以降の溝2条に切断されNSD 4と交差していた。NSB 2の梁間を抜けNSB 3の西側

を取り巻くように進む。NSI2に覆われていた。NSB3の南側にのびる溝を含め枝溝が2条（長さ4.2m、3.1m）あり、NSB4の西方でNSD7と重複（？）していた。

平坦な底面（海拔高16.20～16.40m）をなし断面は整ったU状を呈する。溝内には炭化物混り暗灰色粘土が堆積し、ところどころ底面近くに白色粘土塊が認められた。

出土土器は少なくかつ細片であるため図示できなかったが、須恵器無台杯身D4等、奈良時代後葉に属する土器が主体を占める。NSB2・3・4の等掘立柱建物群と関連するいわゆる排水溝であろう。

NSD7

3G-h・3H-b区のⅢ層2面に至りその所在を確認した。わずかに蛇行しながら東西方向にのびる。全長約14.20m、幅0.40～0.95m、深さ0.10～0.15mを測り、西端は約90度南方へ屈曲し、NSD6と重複（？）していた。溝を跨いでNSB4が建てられ、南方へのびる枝溝（幅0.25～0.40m、深さ約0.10m）が1条ある。

溝幅は均一でない。総じて底面に丸味を持ち断面はU字状を呈していた。覆土は2層に区分できる（上層＝管鉄混り灰褐色砂質粘土、下層＝暗灰色粘土）。NSD6と同様に掘立柱建物群と関連する排水溝と考えている。

出土土器（須恵器杯蓋A2、有台杯身B、無台杯身D2）の大半は、奈良時代前葉～中葉に属するものである。

NSD8

北半はⅢ層上面（1面）においてほぼその所在を知ることができたが、すべての輪郭を確認したのはⅢ層を約15cm掘り下げた後（2面）である。2G-f区～3G-b区にかけてほぼ直線的に伸びる。底面の海拔高は16.10m前後で一定していたが流れの方向は明確でない。確認長約22.20m、幅0.90～1.60m、深さ0.25～0.50mを測る。北半の溝幅が一見南半に比べて広いのは、遺構確認面の深さによる差と考えている。NSD9を切断しNSH1と重複していた。

両壁とも直線的・急峻な傾斜を示し、平坦な底面をなす（断面U字状）。底面の幅が広がった所にこぶし大礫が集中していた。覆土は基本的に4層のレンズ状堆積に区分できる。

出土遺物のうち3箇所の小孔を穿った有孔板・曲物側板等の木製品は最下層（暗灰色粘土）から出土した。器形を復元しえた土器片（須恵器杯蓋A2、有台杯身E＝墨書土器一、無台杯身D3、土師器甕B、鍋B2等）の多くは主に上位の覆土（斑鉄混り暗灰色粘土・炭化物混り灰色粘土）中に含まれていた。奈良時代後葉の土器を主体とするがその形成時期は明確でない。小溝ながら平安時代以降まで継続使用されていた可能性もある。

NSD9

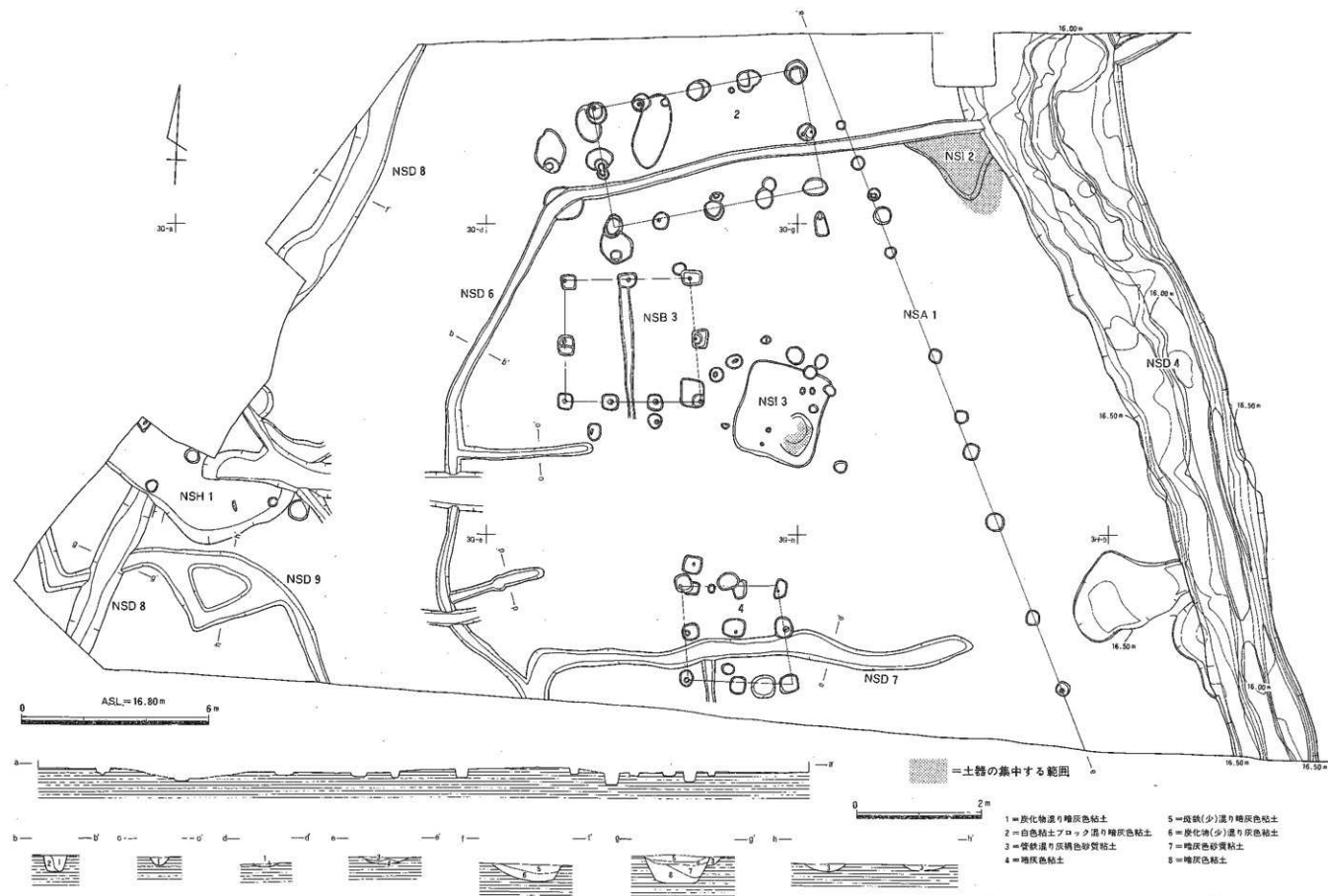
3G-b・e区のⅢ層2面に至り検出できた。確認長約12.30m、幅0.40～0.70m、深さ0.10～0.15mを測る。底面の海拔高は東半がわずかに高い（16.30～16.40m）。

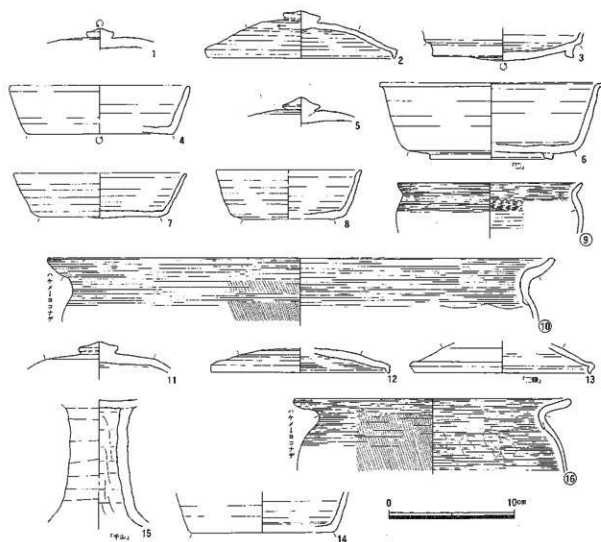
NSH1に南接し、屈曲・蛇行を繰り返す。蛇行部を結ぶ副流路があり副流路もほぼ直角に屈曲していた。NSD8に切断される。断面は底面に丸味を持つ浅いU字状を呈し、溝内にはNSD7の上層と類似した管鉄混り灰褐色砂質粘土が堆積していた。

出土土器（須恵器杯蓋A2・A3、無台杯身D2、高甕B、土師器甕D2）の多くは奈良時代前葉～中葉に位置づけられる（墨書土器3点含む）。

NSD10

2F-a区のⅢ層上面（1面）で確認できた。NSH4・5の間をほぼ南北方向に伸びる。確認長





番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
1				杯蓋 A2	5				杯蓋 A2	9				杯蓋 A2	13				杯蓋 A2
2	15.3		4.7	杯蓋 A2	6	(17.8)		(6.0)	杯蓋 A2	10	(14.7) + (14.9)			杯蓋 A2	14				杯蓋 A2
3				甕形鉢 A2	7	14.8		3.5	甕形鉢 A2	11	(8.3)			杯蓋 A2	15				杯蓋 A2
4	(14.4)		(4.8)	甕形鉢 A2	8	(17.5)		(4.8)	甕形鉢 A2	12	(14.2)			杯蓋 A2	16	(22.1)			杯蓋 A2

第29図 NSD 7・8・9出土土器実測図

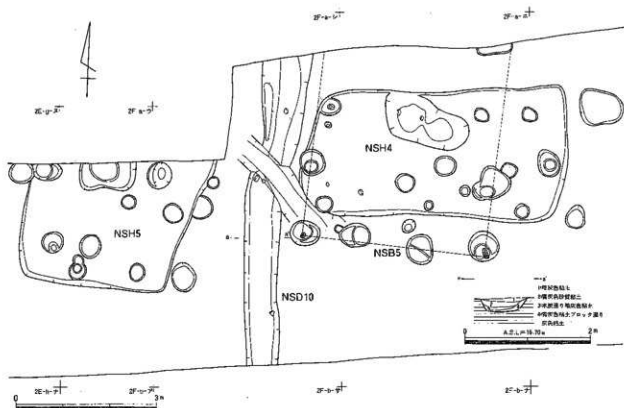
約6.60m、幅0.65～1.05m、深さ0.20～0.25mを測る。平安時代以降の溝1条に切断されていた。

北に向い徐々に幅を増し西側壁に一部平坦面が認められた。断面は基本的にU字状をなすが底面(海拔高16.20m前後)には凹みがある。こぶし大礫が数個落ち込んでいた。覆土は大きく4層に区分でき、満全体がNSH 4・5の主体的な覆土である黒色有機質土に覆われていた。

出土遺物には3箇所の小孔を穿ち、辺を抉り削った有孔板と土器細片がある。須恵器食器類(杯・皿等)の破片がめだつた型式を知りえた資料はない。ある期間存続しNSH 4・5とほぼ同時期(奈良時代後葉)に埋没したと考えている。

NSD11

溝幅4.80～7.65m以上、深さ0.70～1.05mを測り、本発掘調査において確認された最大規模の溝である。現国道1号線下(長さ約30m)を調査していないが、2G-C・3G-a区～2E-d区にか



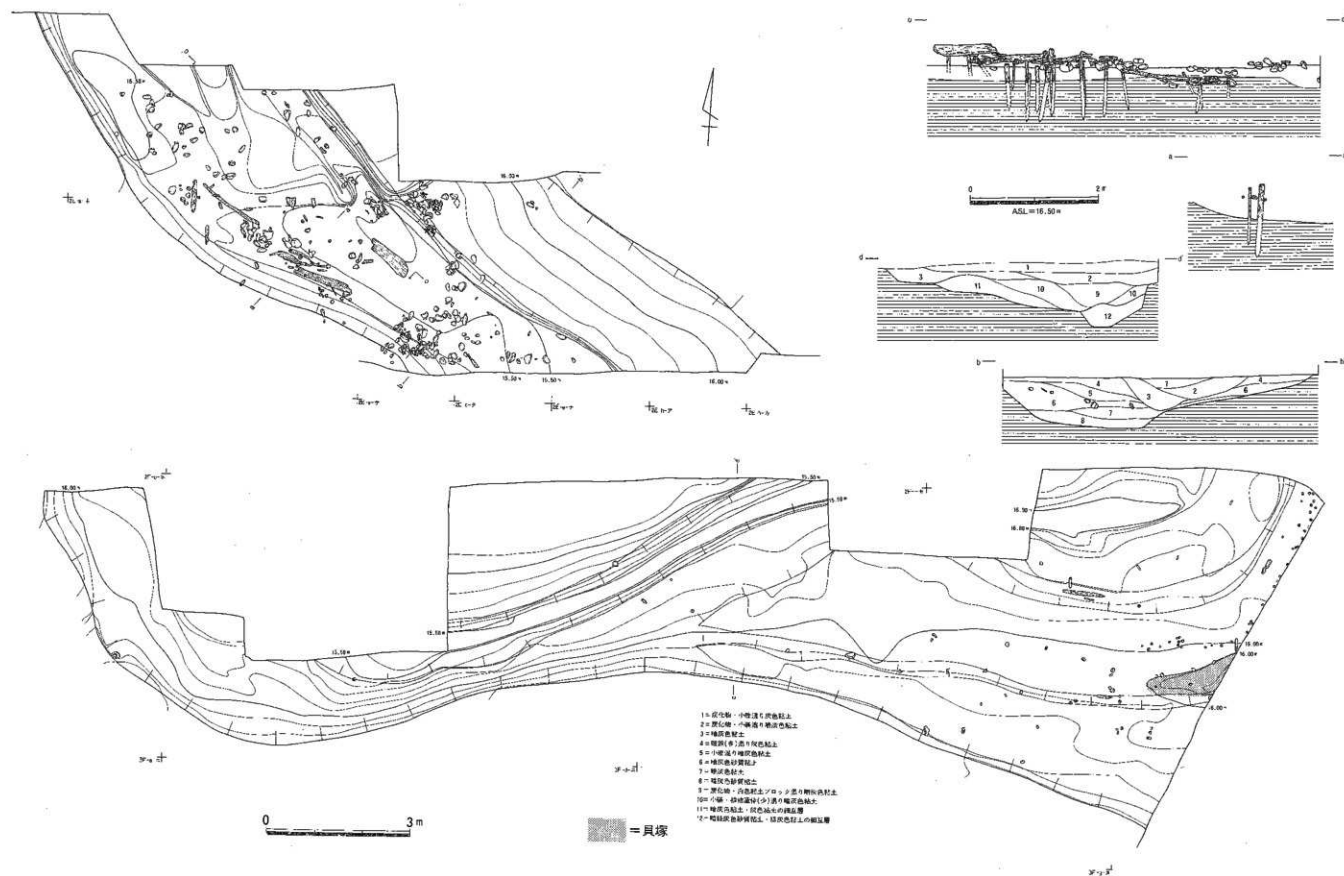
第30図 2E-g 2F-a・d区奈良時代遺構分布図

けて確認長は約60.50mにおよぶ。2E区付近ではⅢ層を約10cm掘り下げたところ（2面）でその所在を知ることができたが、2・3F区付近の輪郭を捉えたのは、遺跡基盤層（灰白色粘土）近くまで掘り下げ（3面）、南側に隣接する掘立柱建物群（NSB6～10）をほぼ検出しおえた後である。2・3F区では東西方向に走る複数の平安時代以降の小溝と重複していた。

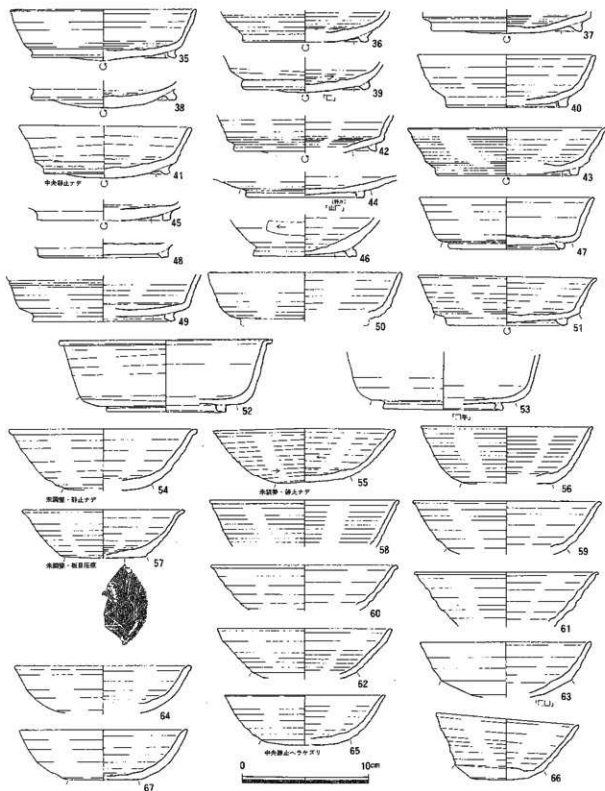
底面の海拔高（15.40～15.50m）は南東方でわずかに高く、北西に向って流れていたと考えられる。2E区付近（北半）では直線上2・3F区付近（南半）ではゆるく蛇行し、東端の発掘区限界近くでは北に転じ始めている。この彎曲部分の溝幅は広い。底面にさらに一段深い流路を有し砂質粘土が堆積していた。最下層に含まれる土器は古墳時代後期に属するものである。奈良時代の溝の壁にも若干の段差が見られたが、一段深い流路の幅は広く浅く不明瞭で断面はU字状を呈していたと思われる。奈良時代の覆土は4～5層のレンズ状堆積に区分され相対的に粘性が強い。

南半の南岸、底面近くに杭列（確認長約5.50m）が築かれていた。使用された丸木杭（角杭一転用材一は少ない）は総じて太く（径5.0～7.5cm）、先端を3ないし4方面から削りを加え尖らせている。杭列に絡みつく流木・横木等はなく、NSD3・4のようなこぶし大礫の集積は顕著でなかった。杭列に南側に種子・木葉等を含む小規模な貝塚（150×80×20cm）が形成されていた。貝塚の南側から発見された礫群は平安時代以降に属するものと思われる。北半の西岸にも杭列（丸木杭・角杭）があり、自然木・板材・礫が集積していたが（護岸施設か？）木杭は一段深い流路の壁上端に沿って打ち込まれており古墳時代に属する可能性も高い。

奈良時代下層の覆土（暗灰色粘土）には多量の流木・木葉等植物遺体が含まれていた。出土遺物に

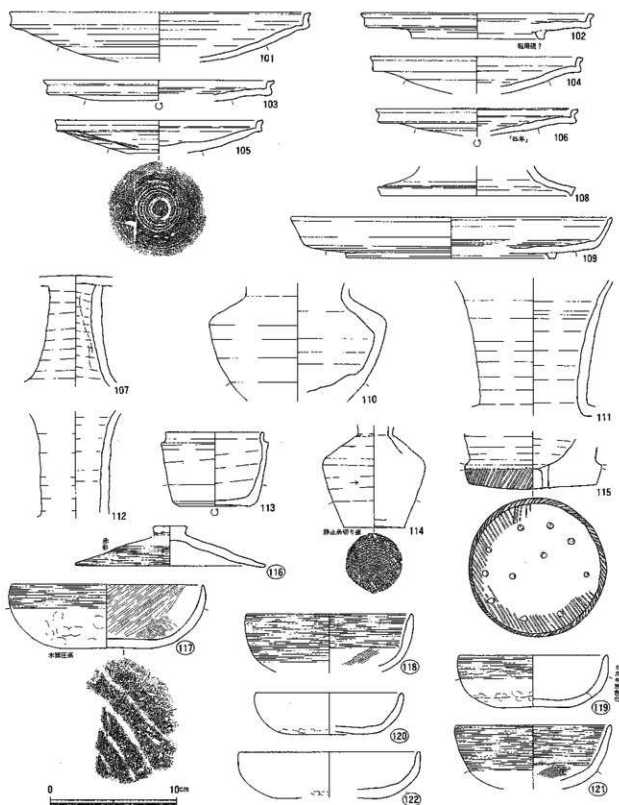


第31図 NSD11実測図



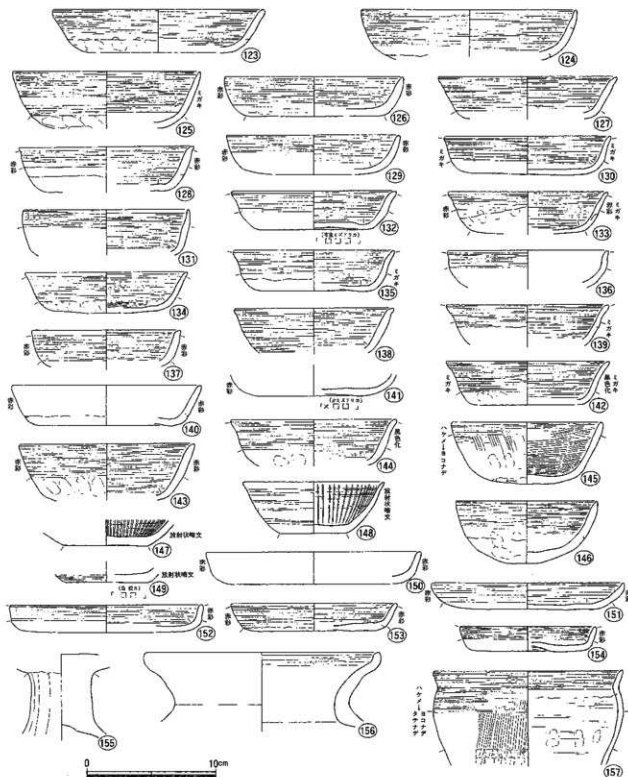
番号	口径	底径	高さ	器種	番号	口径	底径	高さ	器種	番号	口径	底径	高さ	器種	番号	口径	底径	高さ	器種
35	(14.0)	(4.3)		甕	44				甕	52	(17.0)	(5.7)		甕	61	(14.0)			甕
36				甕	45				甕	53				甕	62	(13.7)	(3.9)		甕
37				甕	46				甕	54	(15.0)	(4.8)		甕	63	(13.0)			甕
38				甕	47	13.9	4.1		甕	55	14.3	4.3		甕	64	(14.0)	(3.7)		甕
39				甕	48				甕	56	(13.6)	(4.5)		甕	65	(12.7)	(4.0)		甕
40				甕	49				甕	57		(3.9)		甕	66	11.4	4.4		甕
41				甕	50	(15.3)			甕	58				甕	67				甕
42				甕	51	14.2			甕	59				甕					甕
43				甕	52				甕	60				甕					甕
44				甕	61				甕					甕					甕
45				甕					甕					甕					甕
46				甕					甕					甕					甕
47				甕					甕					甕					甕
48				甕					甕					甕					甕
49				甕					甕					甕					甕
50				甕					甕					甕					甕
51				甕					甕					甕					甕
52				甕					甕					甕					甕
53				甕					甕					甕					甕
54				甕					甕					甕					甕
55				甕					甕					甕					甕
56				甕					甕					甕					甕
57				甕					甕					甕					甕
58				甕					甕					甕					甕
59				甕					甕					甕					甕
60				甕					甕					甕					甕
61				甕					甕					甕					甕
62				甕					甕					甕					甕
63				甕					甕					甕					甕
64				甕					甕					甕					甕
65				甕					甕					甕					甕
66				甕					甕					甕					甕
67				甕					甕					甕					甕

第33図 NSD11出土土器実測図(2)



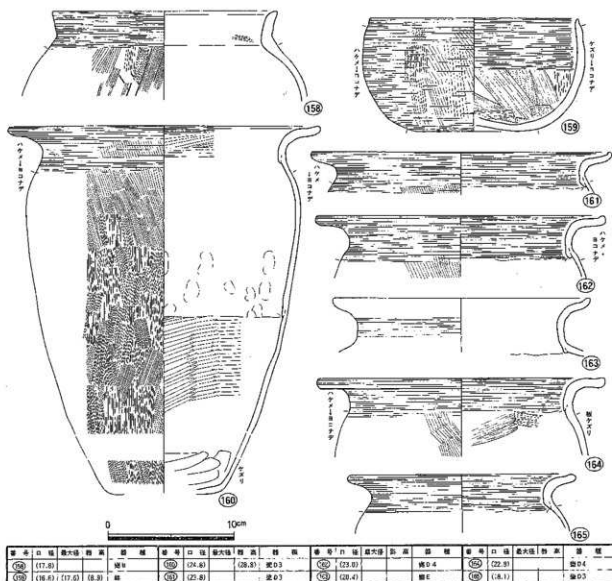
番号	口径	最大径	器高	器型	番号	口径	最大径	器高	器型	番号	口径	最大径	器高	器型	番号	口径	最大径	器高	器型
101	(23.6)			南谷田B1	107				高脚B	113	7.7	8.4	5.8	小形高脚B	117	(11.8)		(4.1)	南谷田A
102	(18.3)	(1.8)		右谷田B1	108				高脚B	114		(18.1)		高脚	118	(11.7)		(3.3)	南谷田A
103	(18.1)			南谷田B1	109	(25.2)		(3.2)	右谷田A3	115				高脚	119	(12.3)		(3.8)	南谷田B2
104	(16.7)			南谷田B1	110		(13.2)		高脚B2	116	15.0		3.1	高脚A1	120				
105	(16.4)			高脚B	111				高脚B	117	15.1	15.5	5.0		121	(14.2)		(3.7)	南谷田A
106	(15.5)			南谷田B1	112				高脚A1	118	(13.2)			南谷田A	122				

第35図 NSD11出土土器実測図(4)



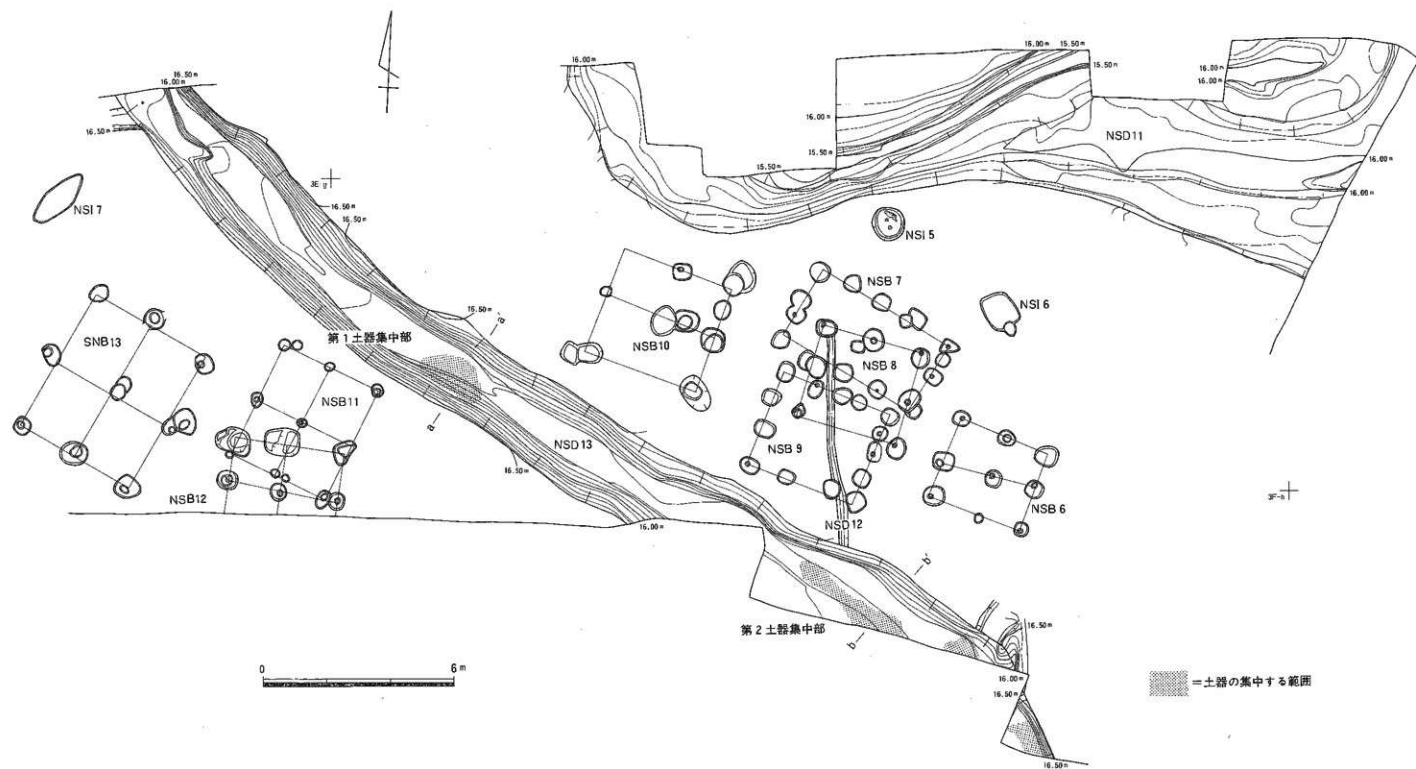
番号	口径	口高	口厚	口内径	口内高	口内厚	番号	口径	口高	口厚	口内径	口内高	口内厚	番号	口径	口高	口厚	口内径	口内高	口内厚	番号	口径	口高	口厚	口内径	口内高	口内厚	番号	口径	口高	口厚	口内径	口内高	口内厚
(123)	16.5	3.3					(126)	17.7						(129)	14.5	4.3					(132)	13.8	3.5					(135)	13.8	3.3				
(124)	16.5	3.3					(127)	17.7						(130)	14.5	4.3					(133)	13.8	3.5					(136)	13.8	3.3				
(125)	16.5	3.3					(128)	17.7						(131)	14.5	4.3					(134)	13.8	3.5					(137)	13.8	3.3				
(126)	16.5	3.3					(129)	14.5	4.3					(132)	13.8	3.5					(135)	13.8	3.5					(138)	13.8	3.3				
(127)	16.5	3.3					(130)	14.5	4.3					(133)	13.8	3.5					(136)	13.8	3.5					(139)	13.8	3.3				
(128)	16.5	3.3					(131)	14.5	4.3					(134)	13.8	3.5					(137)	13.8	3.5					(140)	13.8	3.3				
(129)	16.5	3.3					(132)	13.8	3.5					(135)	13.8	3.5					(138)	13.8	3.5					(141)	13.8	3.3				
(130)	16.5	3.3					(133)	13.8	3.5					(136)	13.8	3.5					(139)	13.8	3.5					(142)	13.8	3.3				
(131)	16.5	3.3					(134)	13.8	3.5					(137)	13.8	3.5					(140)	13.8	3.5					(143)	13.8	3.3				
(132)	16.5	3.3					(135)	13.8	3.5					(138)	13.8	3.5					(141)	13.8	3.5					(144)	13.8	3.3				
(133)	16.5	3.3					(136)	13.8	3.5					(139)	13.8	3.5					(142)	13.8	3.5					(145)	13.8	3.3				
(134)	16.5	3.3					(137)	13.8	3.5					(140)	13.8	3.5					(143)	13.8	3.5					(146)	13.8	3.3				
(135)	16.5	3.3					(138)	13.8	3.5					(141)	13.8	3.5					(144)	13.8	3.5					(147)	13.8	3.3				
(136)	16.5	3.3					(139)	13.8	3.5					(142)	13.8	3.5					(145)	13.8	3.5					(148)	13.8	3.3				
(137)	16.5	3.3					(140)	13.8	3.5					(143)	13.8	3.5					(146)	13.8	3.5					(149)	13.8	3.3				
(138)	16.5	3.3					(141)	13.8	3.5					(144)	13.8	3.5					(147)	13.8	3.5					(150)	13.8	3.3				
(139)	16.5	3.3					(142)	13.8	3.5					(145)	13.8	3.5					(148)	13.8	3.5					(151)	13.8	3.3				
(140)	16.5	3.3					(143)	13.8	3.5					(146)	13.8	3.5					(149)	13.8	3.5					(152)	13.8	3.3				
(141)	16.5	3.3					(144)	13.8	3.5					(147)	13.8	3.5					(150)	13.8	3.5					(153)	13.8	3.3				
(142)	16.5	3.3					(145)	13.8	3.5					(148)	13.8	3.5					(151)	13.8	3.5					(154)	13.8	3.3				
(143)	16.5	3.3					(146)	13.8	3.5					(149)	13.8	3.5					(152)	13.8	3.5					(155)	13.8	3.3				
(144)	16.5	3.3					(147)	13.8	3.5					(150)	13.8	3.5					(153)	13.8	3.5					(156)	13.8	3.3				
(145)	16.5	3.3					(148)	13.8	3.5					(151)	13.8	3.5					(154)	13.8	3.5					(157)	13.8	3.3				
(146)	16.5	3.3					(149)	13.8	3.5					(152)	13.8	3.5					(155)	13.8	3.5					(158)	13.8	3.3				
(147)	16.5	3.3					(150)	13.8	3.5					(153)	13.8	3.5					(156)	13.8	3.5					(159)	13.8	3.3				
(148)	16.5	3.3					(151)	13.8	3.5					(154)	13.8	3.5					(157)	13.8	3.5					(160)	13.8	3.3				
(149)	16.5	3.3					(152)	13.8	3.5					(155)	13.8	3.5					(158)	13.8	3.5					(161)	13.8	3.3				
(150)	16.5	3.3					(153)	13.8	3.5					(156)	13.8	3.5					(159)	13.8	3.5					(162)	13.8	3.3				
(151)	16.5	3.3					(154)	13.8	3.5					(157)	13.8	3.5					(160)	13.8	3.5					(163)	13.8	3.3				
(152)	16.5	3.3					(155)	13.8	3.5					(158)	13.8	3.5					(161)	13.8	3.5					(164)	13.8	3.3				
(153)	16.5	3.3					(156)	13.8	3.5					(159)	13.8	3.5					(162)	13.8	3.5					(165)	13.8	3.3				
(154)	16.5	3.3					(157)	13.8	3.5					(160)	13.8	3.5					(163)	13.8	3.5					(166)	13.8	3.3				
(155)	16.5	3.3					(158)	13.8	3.5					(161)	13.8	3.5					(164)	13.8	3.5					(167)	13.8	3.3				
(156)	16.5	3.3					(159)	13.8	3.5					(162)	13.8	3.5					(165)	13.8	3.5					(168)	13.8	3.3				
(157)	16.5	3.3					(160)	13.8	3.5					(163)	13.8	3.5					(166)	13.8	3.5					(169)	13.8	3.3				

第36図 NSD11出土土器実測図(5)

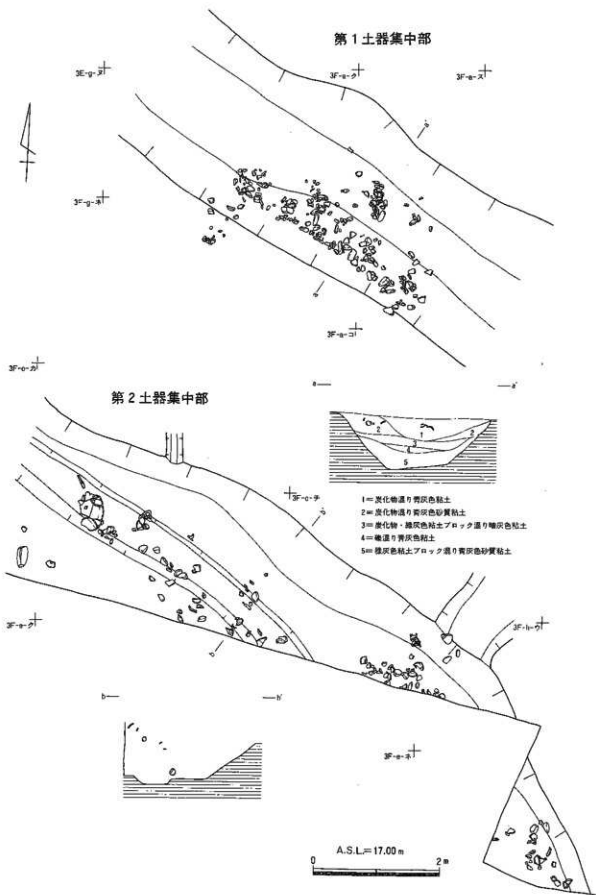


第37図 NSDII出土土器実測図(6)

は土器(内墨書土器57点)、木簡、転用瓶、ミニチュア土器、土馬、鉄製鎌、砥石の他、両端に削り面取りを加えた丸太材(建築部材?)や多量の木製品(舟形・馬形・曲物底板・櫛・笥・鏝・柄材・鋤・槽・下駄等)がある。層位的な型式変化を捉えきれなかったが、土器は須恵器杯蓋A3、無台杯身D3、無台皿D2、土師器無台杯身C3を主体とし、須恵器杯蓋A2、有台杯身A1、無台杯身A1・D2・D4、無台皿B1、高盤B、土師器無台杯身A・C1・C2、無台皿B1、甕D3等も比較的高い比率で作出している(他に須恵器杯蓋A1、有台杯身A3・B・C1・C2・C3・E、無台杯身A2・A3・B1・B2・D1、有台皿A3・B1、無台皿C・D1、陶白、小型壺A1・B2、水瓶、土師器杯蓋A1、無台杯身B2・E・H、無台皿B3、高盤D、鉢、甕A・B・D1・D4・Eがある)。古墳時代後期以来の流路を踏襲し、8世紀初頭から奈良時代を通じて生きた溝として機能していたと考えられる。



第38図 2E-i 3E-g・h 2F-c・f・i 3F-a・b・d・e・g・h 2G-c 3G-a区奈良時代遺構分布図



第39図 N S D13土器集中部実測図

NSD12

3 F-d・e区のⅢ層中位(2面)に至り確認できた。ほぼ南北方向に直線的にのびNSD13と合流する。全長6.50m、幅0.20~0.35m、深さ0.05~0.15mを測る。北端はNSB8の柱穴に切断され止切れていた。またNSB7・9の柱穴が溝の一部を壊していた。断面は整ったU字状を呈する(底面海拔高16.30m)。

出土土器はきわめて少量・細片であった。

NSD13

Ⅲ層上面(1面)で確認できた。2つの掘立柱建物群(NSB6~10・11~13)の間を通り、3 F-h区~2 E-i区にかけてほぼ直線的に伸びる。南東端は南方へ曲がり始めている。確認長約34.50m、幅2.00~2.85m、深さ0.65~1.05mを測る。底面の海拔高(15.60~15.70m)は南東半でわずかに高く溝幅も広い。平安時代以降の溝2条に切断されていた。

底面は総じて平坦であるが南東端に一段深い流路を有し、また北西端の西壁は一部張り出して浅部(平坦面)となっていた。両壁とも傾斜は均一・直線的で、整ったU字状の断面を示す。

NSB6・9とNSB11近くの溝内に2箇所、土器片と礫の集積が認められた。(第1土器集中部=3.60×1.30×0.15m、第2土器集中部=9.50×0.75×0.40m)。礫は大小差(径4~20cm)があり、楕円形様のものがめだつ。完形に復元しうる砂片は少なく破損した土器等の廃棄跡(いわゆる土器留め)であろう。第1土器集中部は西(南)壁寄りに第2土器集中部はさらに3つの密集箇所に分かれて、溝中央から東(北)壁寄りに形成されていた。覆土は大きく5層に区分できるが、これら土器・礫等の集積が上位2層(炭化物混り青灰色粘土・砂質粘土)内に含まれていたことから奈良時代の溝はかなり浅かったとも考えられる。

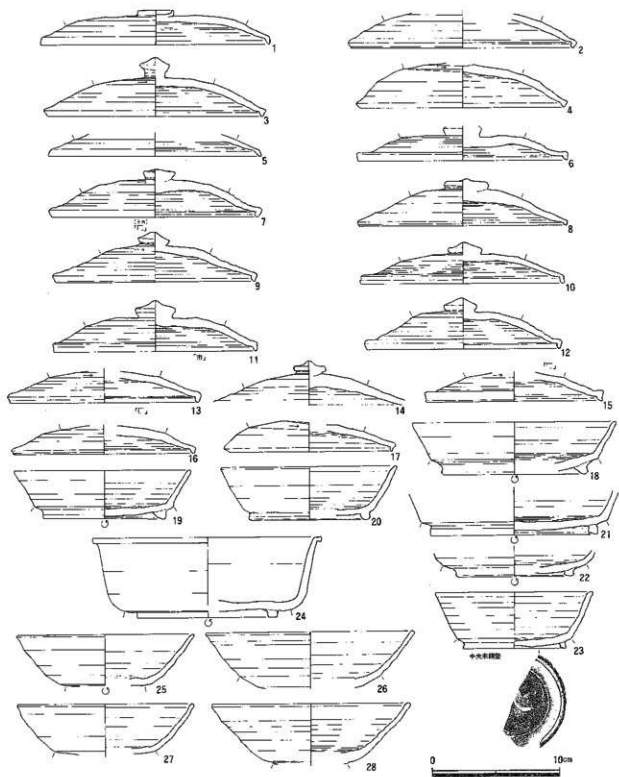
北西端の浅部から鈎帯具(巡方)が出土し、第1土器集中部にはミニチュア土器、土製支脚、磁石が、第2土器集中部にはミニチュア土器、土馬が混在していた。墨書土器13点を含む。第2土器集中部の器種組成を見ると須恵器杯蓋A2・A3が主体をなし、次いで無台杯身A1・D3、土師器甕D3の出土比率が高い(他に須恵器杯蓋A1、有台杯身A3・B・D・E、無台杯身A2・D1・D2・D4、無台皿B1・B2・D2、高盤A・B、壺蓋A2、壺C2・D2、長頸壺A1・B1、水瓶、甕B2、土師器無台杯身C2・C3・D・G、皿蓋、無台皿B2・B3、高盤Bがある)。第1土器集中部もほぼ同様の組成を示すが、須恵器無台杯身A1、土師器甕D3は少ない。代って須恵器有台杯身A1・A3、長頸壺B2が比較的多く出土している。土器集中部に見られず覆土中から出土した器種には、須恵器無台杯身B2・C、有台皿A3、無台皿D1、鉢B、壺D1、瓶、土師器杯蓋A1、有台杯身A1、無台杯身A・E、鍋B2がある。

溝底面に密着して古墳時代中期の土器が多量に発見され、6世紀中葉から7世紀代の遺物はきわめて希薄であった。幅・深さとも数mの溝が約1世紀半の間、何ら人為的な働きかけを受けずに残存し続けたとは考えがたいが、NSD13は古墳時代以来の流路を基本的に踏襲し、奈良時代前葉になると再び生きた溝として機能し始めている。

NSD14

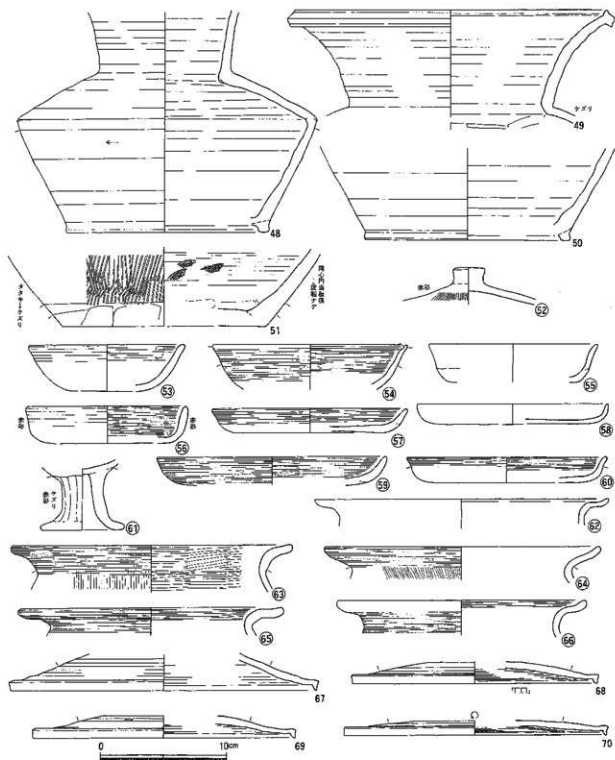
2 D-g・h区のⅢ層上面(1面)で確認できた。確認長約5.70m、幅0.90~1.15m、深さ0.25~0.30mを測る。流路は北北東~南南西へ真つすぐのび、調査区外南方でNSD15と交差していると思われるが流れの方向は明らかでない。

底面(海拔高15.50m前後)の幅は著しく狭く丸味を持つ。壁が直線的に傾斜しているため、断面は一見扁平なV字状を呈する。約1m離れて東壁の上位と底面との境に丸木杭(径6~8cm)が打ち



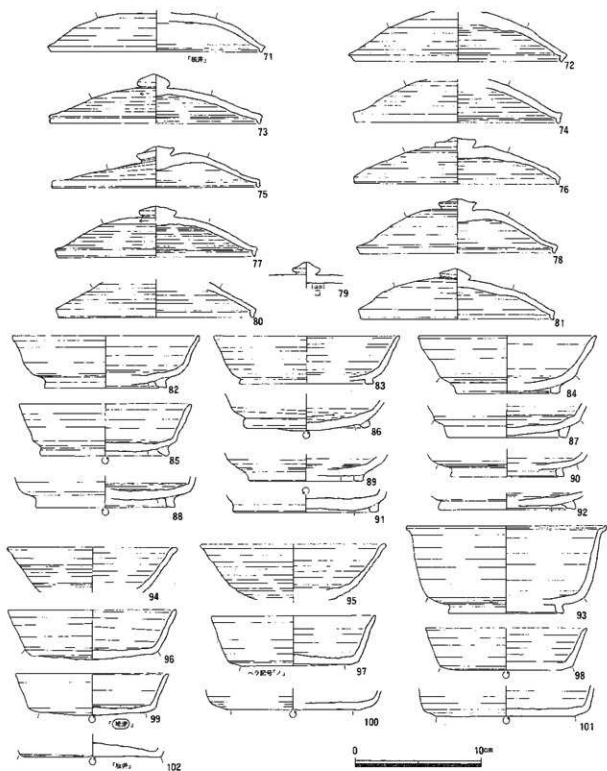
番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	備考
1	17.8		2.1	横置A2	8	15.4	3.6	横置A2	15	(13.5)					横置A3	22	(12.3)		(4.3)	有台杯身A3
2	(17.8)			横置A3	9	15.9	3.9	横置A3	16	(14.3)					横置A1	23	(12.3)		(5.2)	有台杯身E
3	17.3	4.6		横置A3	10	16.0	3.2	横置A7	17	(13.4)					有台杯身B	24	(17.9)		(4.0)	有台杯身A2
4	(16.4)			横置A2	11	15.9	3.9	横置A2	18	(15.9)		(4.1)			有台杯身B	25	(13.4)		(4.4)	有台杯身A1
5	(16.6)			横置A1	12	16.4	4.0	横置A3	19	13.8	3.7	(4.1)			有台杯身A3	26	(16.3)		(3.9)	有台杯身A1
6	(16.5)			横置A2	13	(15.8)		横置A3	20	(13.8)					有台杯身D	27	(13.4)		(4.7)	有台杯身A1
7	16.6	3.7		横置A3	14			横置A3	21											

第40図 NS D13第2土器集中部出土土器実測図 (1)



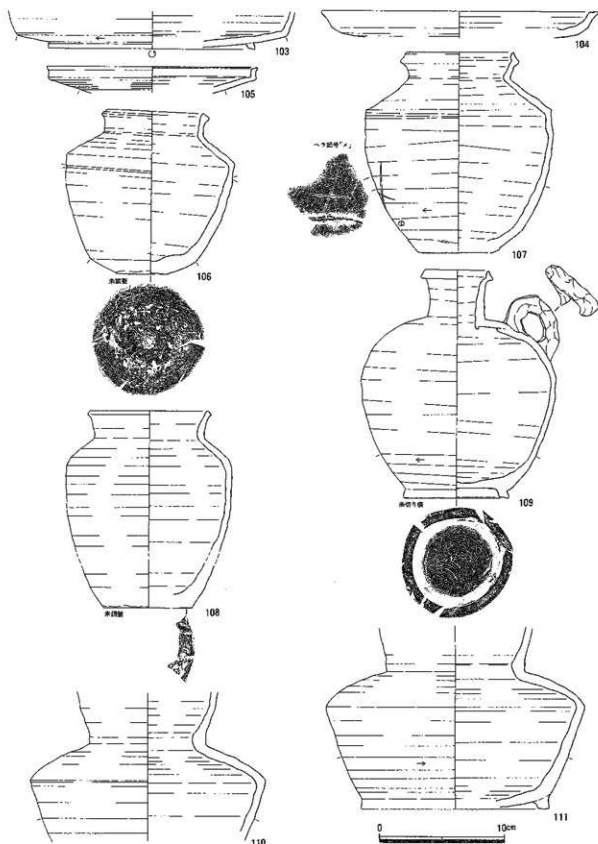
番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
48		(23.6)		高脚器B1	54	(19.3)			高脚器B1	60	(15.7)		(2.8)	高脚器B2	66	(16.7)			高脚器B
49	(25.8)			高脚器B2	55	(13.3)			高脚器B3	61	(24.3)			高脚器B	67	(24.3)			高脚器B
50				高脚器B1	56	(12.8)	(2.9)		高脚器B2	62	(22.1)			高脚器B	68	(20.7)			高脚器B
51				高脚器B2	57	(15.4)	(1.9)		高脚器B2	63	(22.1)			高脚器B	69	(21.7)			高脚器B
52				高脚器B1	58	(15.0)	(1.6)		高脚器B1	64	(21.7)			高脚器B	70	(20.5)			高脚器B
53	(12.3)	(3.6)		高脚器B1	59	(18.1)	(2.3)		高脚器B1	65	(20.5)			高脚器B					

第42図 NSD13第2土器集中部・NSD13出土土器実測図(3)



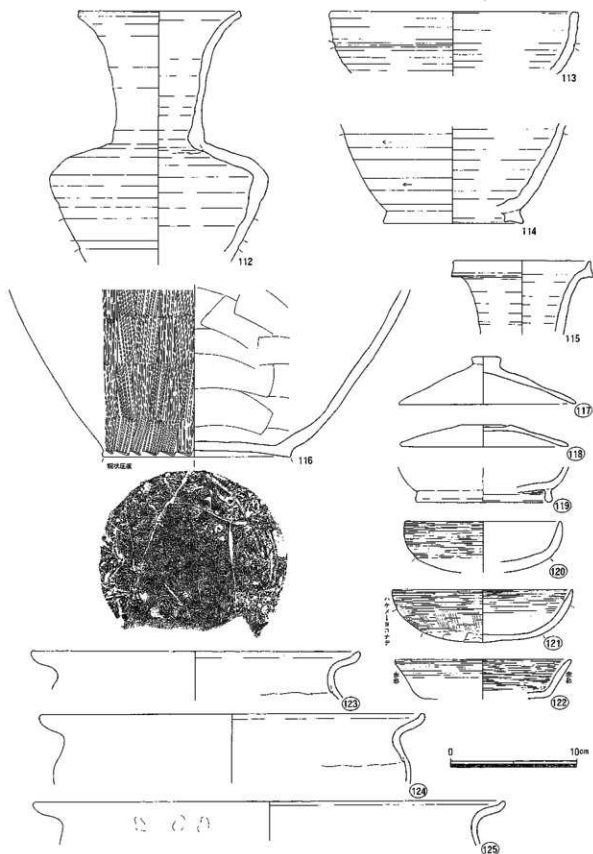
番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
71	(17.3)			特製A3	79				特製A3	87				聯合特製B	95	(14.8)		(4.4)	聯合特製A1
72	(17.3)			特製A3	80	(15.9)			特製A3	88					95	13.4		3.9	聯合特製D1
73	17.0		3.9	特製A1	81	15.6		4.0	特製A2	89				聯合特製A3	87	13.1		3.9	聯合特製D3
74	(16.5)			特製A2	82	(14.9)		(4.1)	聯合特製A3	90				聯合特製A1	96	(12.5)		(3.3)	聯合特製D3
75	16.6		3.3	特製A3	83	(14.8)		(3.8)	聯合特製A3	91					89	12.2		3.3	聯合特製D1
76	16.4		3.7	特製A2	84	(14.7)		(4.5)	聯合特製A1	92					100				聯合特製C
77	16.1		4.3	特製A3	85	13.7		4.2	聯合特製B	93	(15.9)		(5.9)	聯合特製E	101				聯合特製D3
78	15.9		4.3	特製A3	86				聯合特製A1	94	(13.5)			聯合特製B2	102				聯合特製D2

第43図 NSD13出土土器実測図(4)



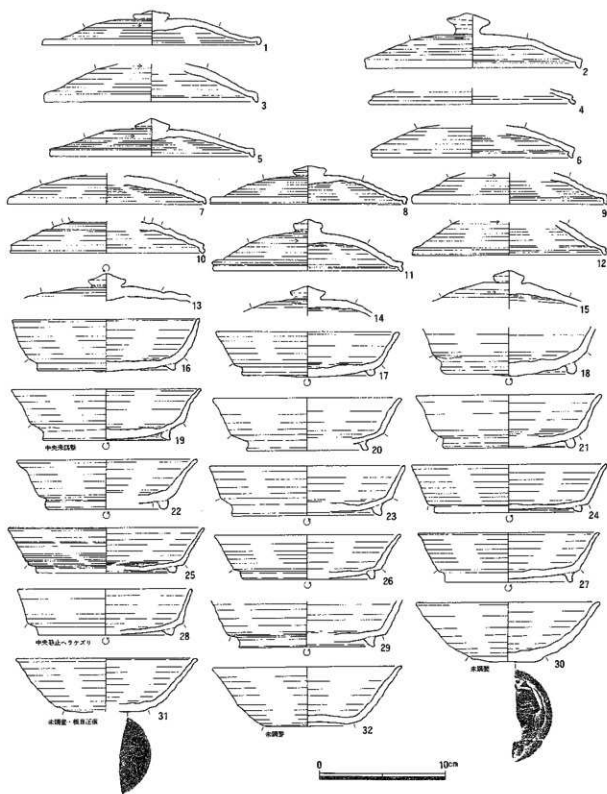
番号	口径	最大径	器高	器径	器厚	番号	口径	最大径	器高	器径	器厚	番号	口径	最大径	器高	器径	器厚	番号	口径	最大径	器高	器径	器厚
103			写存図A3	106	8.6	13.4	φ13.2	器D1	110			110			(18.7)			106	(9.8)	(13.2)	(15.5)	器D2	
104	(22.0)		写存図D1	107			φ12.6	器D2	111			111			(20.6)			108	5.8	15.6	φ18.0	無	
105	(16.8)		写存図B1	109			(15.8)	器D2													φ17.9		

第44図 NS D13出土土器実測図 (5)



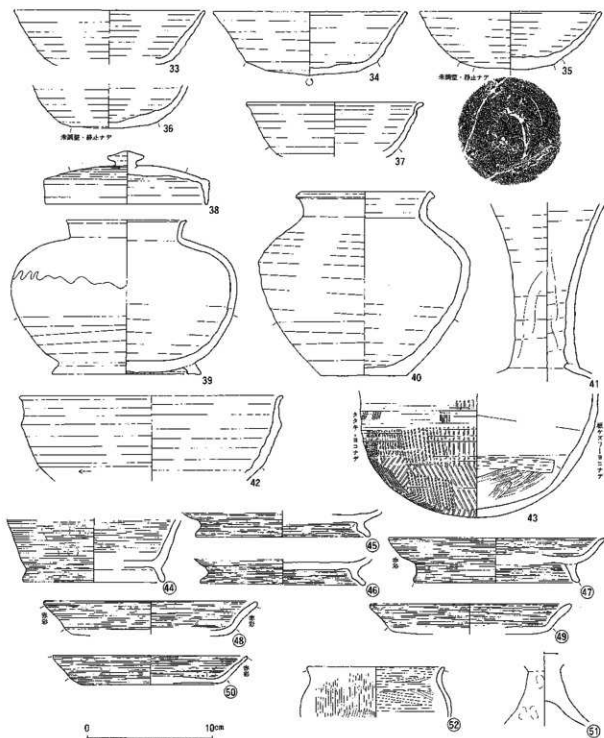
番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	
112	(13.0)	(17.4)		高頸甕B2	116				甕B2	117	(12.4)	(12.4)	4.0	高頸甕A	118	(12.4)	(12.4)	4.2	高頸甕A	
113	(19.8)			甕B	(117)	14.1		3.8	高頸甕A1	(119)	14.4				高頸甕A	(120)	(14.0)	(13.1)		高頸甕C
114				高頸甕B2	(118)	13.4			高頸甕A1	(121)	(14.0)	(13.1)			高頸甕C					
115	(11.2)				(119)				高頸甕A1	(122)	(14.0)	(13.1)			高頸甕C					

第45図 NSD13出土土器実測図(6)



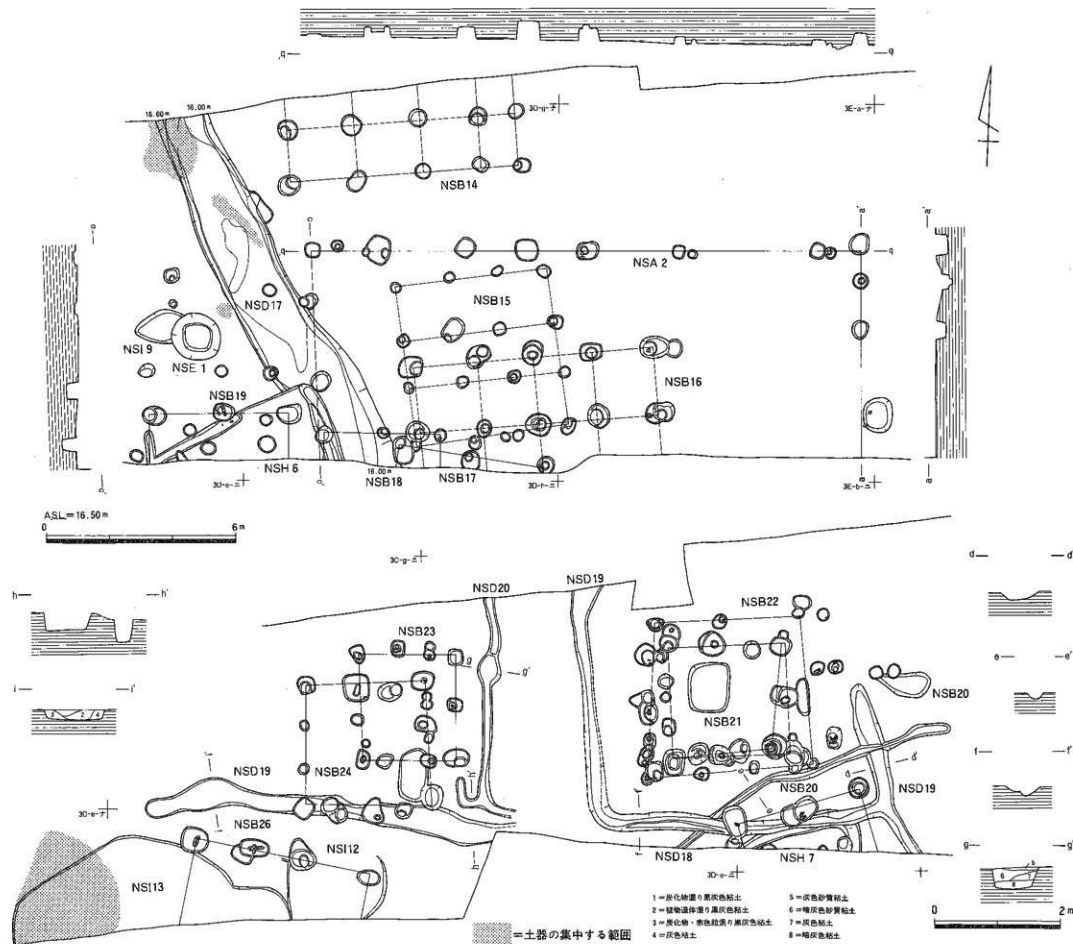
番号	口径	最大径	高さ	部 種	番号	口径	最大径	高さ	部 種	番号	口径	最大径	高さ	部 種	番号	口径	最大径	高さ	部 種	
1	17.4		3.7	杯型A3	9	(15.5)			杯型A3	17	14.6	3.6		甕台杯身A3	25	(15.5)			(3.6)	甕台杯身C1
2	17.2		4.3	杯型A3	10	(15.4)			杯型A2	18				甕台杯身A3	26	(14.8)			(3.5)	甕台杯身C1
3	(17.0)			杯型A2	11	15.1		4.0	杯型A2	19	15.1		4.0	甕台杯身A3	27	14.4			3.9	甕台杯身A3
4	(16.4)			杯型A2	12	(15.5)			杯型A2	20	(15.6)		(4.2)	甕台杯身B	28	(13.8)			(3.6)	甕台杯身B
5	16.3		3.0	杯型A2	13				杯型A2	21	(14.7)		(4.2)	甕台杯身A3	29					甕台杯身C1
6	(16.1)			杯型A3	14				杯型A2	22	(14.3)		(3.9)	甕台杯身A3	30	14.6			4.8	甕台杯身A1
7	(15.8)			杯型A2	15				杯型A2	23	(15.5)		(3.9)	甕台杯身B	31	(14.4)			(4.2)	甕台杯身A1
8	15.6		3.0	杯型A2	16	14.9		4.1	甕台杯身A2	24	15.5		3.8	甕台杯身C1	32	15.1			4.7	甕台杯身B1

第47図 NSD16出土土器実測図(1)



番号	口径	最大径	高さ	底径	体高	口径	最大径	高さ	底径	体高	口径	最大径	高さ	底径	体高	口径	最大径	高さ	底径	体高
33	15.2					38	12.8	13.2	4.2	器高A1	43				器高C1	48	17.0			器高A
34	15.4		5.1			39	9.5	17.8	12.1	器高A	45				器高A2	49	16.3			器高A
35	14.4		4.6			40	11.1	16.8	14.5	器高C1	46				器高B2	50	15.5		(2.3)	器高A
36						41				器高A1	47				器高B2	51				
37	114.1					42	(20.9)			器高	48				器高A1	52	15.0	12.1		器高

第48図 NS D16出土土器実測図 (2)



第50図 3C-e·g·h 3D-a·b·d·e·g·h 2E-c 3E-a·b区奈良時代遺構分布図

込まれていた。覆土（暗灰色粘土・灰褐色粘土）は炭化物の多少（上層多）により上下2層に区分できる。下層中にはこぶし大礫がめだつ。

出土土器はきわめて少量・細片であったが、杯身、皿類は当溝が奈良時代に属することを示している。

NSD15

NSD14・16に挟まれ2D-g・h区のⅢ層上面（1面）で確認できた。NSI8を切断している。確認長約5.50m、幅1.05～1.15m、深さ0.25～0.35mを測る。底面の海拔高（15.50m前後）は一定しており流れの方向は推定できない。北北西～南南東へのびる小溝である。北端はわずかに東方へ曲がり始めている。底面に丸味を持ち、NSD14と類似した断面形（扁平なV字状）をなす。3層に区分される覆土中に、炭化物・礫は顕著でなかった。形成時期は明らかでない。

NSD16

2D-g・h区のⅢ層上面（1面）で、溝内に集積する多量の土器片を検出した。NSD15に西接し、ほぼ平行して北北西～南南東へ伸びている。確認長約6.00m、幅2.25～3.25m、深さ0.30～0.35mを測る。

西壁の一部が内方へ張り出し蛇行しているようにも見える。幅の広い底面（海拔高14.45m前後）の東壁寄りに一段深い流路を有していた。後述するNSD17（底面海拔高15.80～15.95m）と覆土・断面形・出土土器型式（器種組成）等が類似し、両溝が接続（同一）している可能性は大きい。北北西へ向い流れていたと思われる。

多量の土器片が東壁に沿って帯状に（長さ5m）集積していた。土器群は4層に区分される覆土の最上層（炭化物混り暗灰色粘土）に含まれ（底面から約20～25cm浮いている）、確認できた溝兩岸の堀り込み面より上位に位置していた。径5～15cmの大小自然礫が混在し土製支脚を含んでいた。隣接する破片を接合すると完形となる器種も比較的多い。

器形を復元しえた土器は63点を数え、須恵器（食器類主）が約70%を占める。須恵器杯蓋A2、有台杯身A3、無台杯身A1、土師器甕D3を主体とし、須恵器杯蓋A3、有台杯身B・C1、土師器無台皿Aを伴出している（他に須恵器有台杯身A2、無台杯身B1・B2、鉢B、壺蓋A1、壺A・C1、長頸壺A1、土師器有台杯身A2、有台皿A1・B2、甕B・C、鍋A・B1、台がある）。

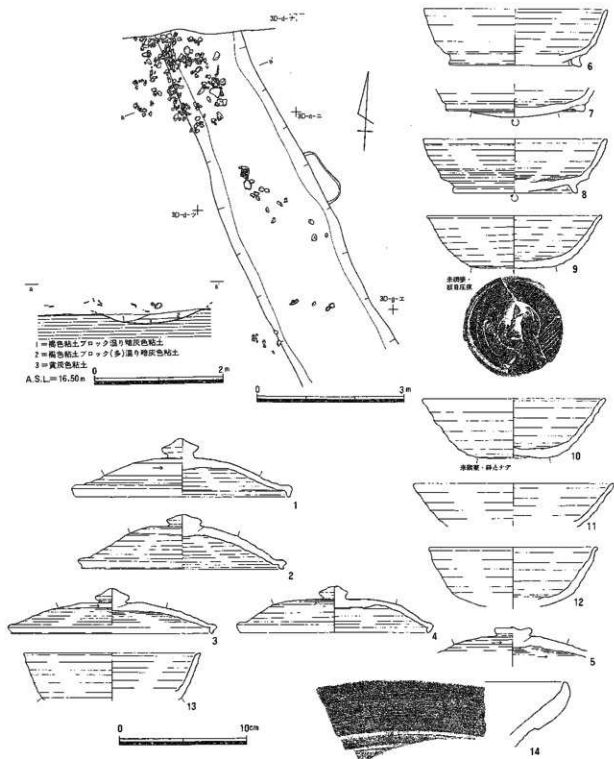
奈良時代前葉～中葉にかけて存続し、後葉にはすでに埋没していたと考えられる。

NSD17

3D-d・g・h区のⅢ層上面（1画）で確認できた。確認長約12.50m、幅1.65～2.35m、深さ0.15～0.30mを測り、南南東から北北西へ向い（底面海拔高15.80～15.95m）、わずかに蛇行しつつ伸びている。NSB18、NSA2、NSH6に切断されていた。

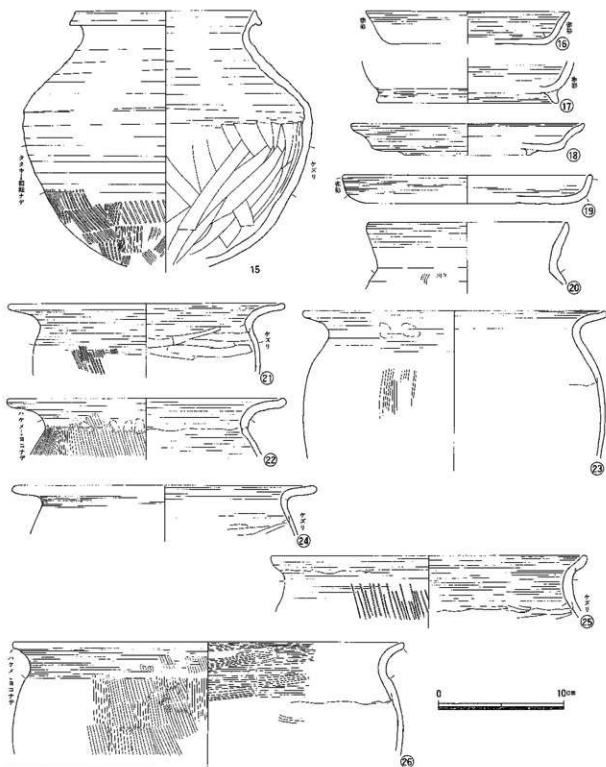
北方へ進むにしたがって徐々に幅を減じ、断面形は基本的に浅いU字状をなす。底面には凹凸がめだち一段深い流路を有するところもある。土器片と礫（径6～22cm）の集中部（1.95×5.20×0.15m）東側の壁は一部外側へ張り出していた。土器集中部は西壁を覆うようにして分布し、溝底面から20～30cm浮いていた。完形に復元できた器種はなし土器を細片化した後、溝内に投棄した跡と考えている。

土器集中部には多様な器種がほぼ均一に含まれていたが（須恵器杯蓋A2・A3、有台杯身A1・B、無台杯身A1・B1・D3、壺C1、土師器有台身A1、有台皿A2、無台皿A・B1、壺A、甕C・D3、鍋B1）、杯類は比較的編年時期の遡る器種が主体をなす。転用甕・鈴帯具（巡方）を含んでいた。覆土（3層に区分可能）最下層（黄灰色粘土）から鉄鏝が出土している。主に奈良時代



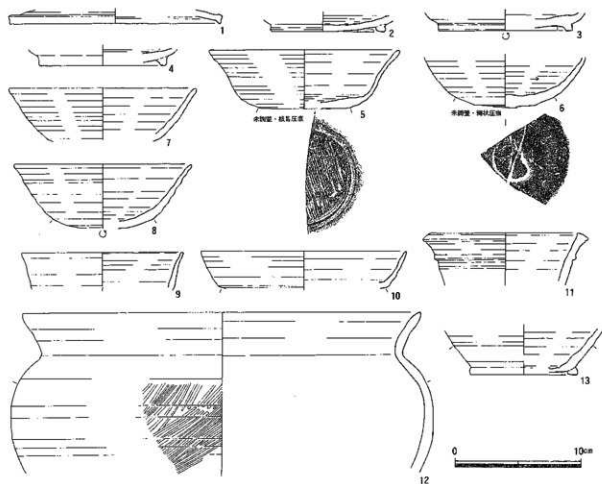
番号	口径	高さ	形状	番号	口径	高さ	形状	番号	口径	高さ	形状	番号	口径	高さ	形状	番号	口径	高さ	形状
1	17.3	4.5	断面A2	5			断面A2	9	14.2	4.1	断面A1	13	(13.9)		断面A2				
2	16.3	4.3	断面A3	6	(14.4)	(4.4)	断面A1	10	14.4	4.5	断面A1	14			断面A1				
3	16.3	3.5	断面A2	7				11	(15.7)										
4	15.4	3.5	断面A2	8	(14.4)	(4.2)	断面A1	12	(13.2)		断面A1								

第51図 NSD17土器集中部実測図・出土土器実測図(1)



番号	口径	最大径	形状	器種	番号	口径	最大径	形状	器種	番号	口径	最大径	形状	器種	番号	口径	最大径	形状	器種
15	(75.7)	(23.1)	(30.5)	底C1	16	(18.3)	(2.5)	有蓋底A2	21	(22.6)			底D3	26	(14.2)			底C	
16	(76.2)	(2.5)		有蓋底A	17	(15.5)	(2.3)	有蓋底B1	22	(22.2)			底D3	25	(25.1)			底D1	
17				有蓋底A1	20	(16.2)		底A	23	(74.1)			底D3	26	(13.2)			底D1	

第52図 NSD17土器集中部出土土器実測図(2)



番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
1	(6.9)			鉢底 A1	5	(15.2)		(4.6)	水取皿・鉢片 B1	9	(12.8)			水取皿・鉢片 D1	13				水取皿 A1
2					6				水取皿・鉢片 A1	10	(5.3)			水取皿 A2					
3				水取皿・鉢片 C2	7	(14.9)			水取皿・鉢片 A1	11	(13.1)			水取皿 B1					
4				8	(14.1)		(5.1)		水取皿・鉢片 B1	12	(31.6)	(33.6)		水取皿 C					

第53図 NS D19出土土器実測図

前葉～中葉に機能していた溝と思われる。下層覆土はNS D17と類似し両溝が接続している可能性が高い。

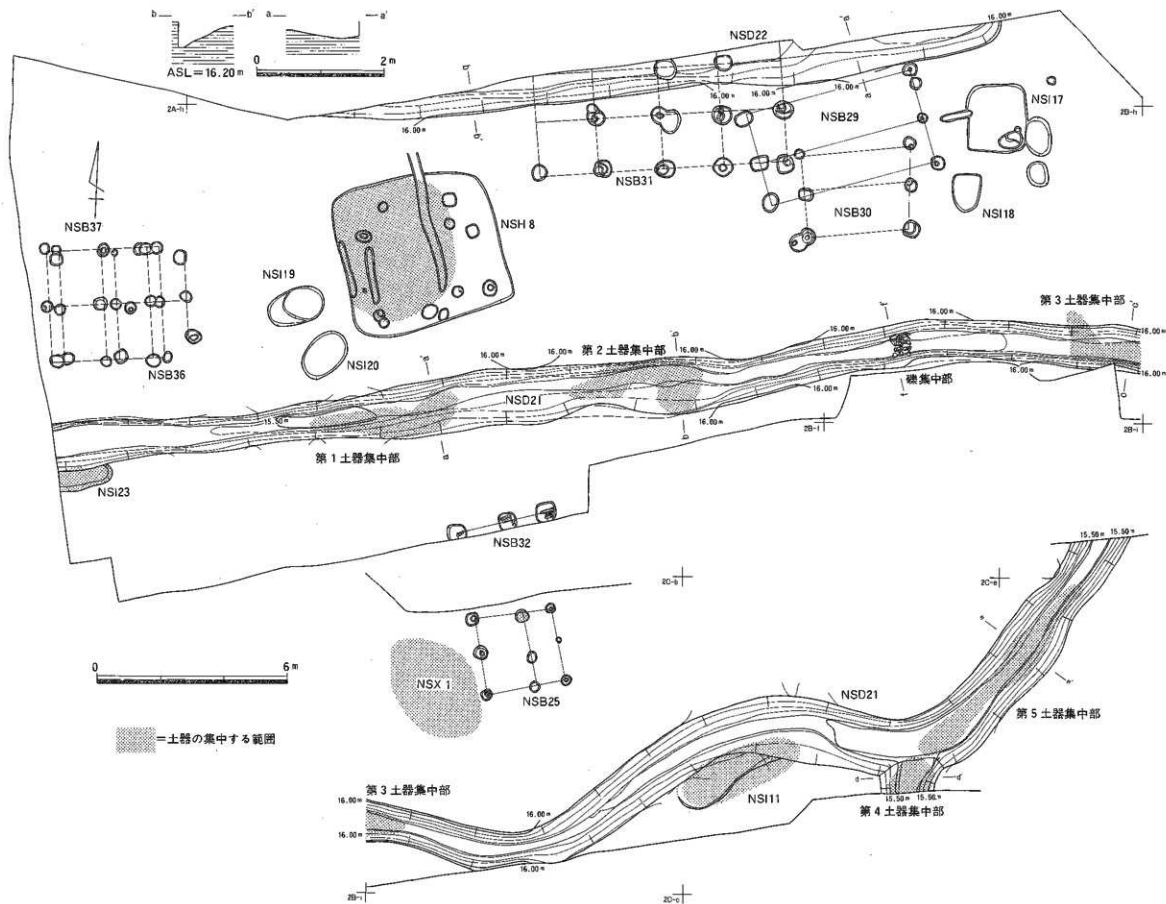
NS D18

皿層を約15cm掘り下げたところで（2面）すべての輪郭を確認した。3 D-b区～3 D-d区にかけてわずかに曲がりながら伸びる小溝で、東端は浅くなり途切れている。確認長約9.50m、幅0.20～0.40m、深さ0.10～0.15mを測り断面U字状を呈する。底面の海拔高（15.80～15.85m）は東半が高い。NS B22の柱穴を切断しNS D19、NS B20と重複していたが、その前後関係は明確でなかった。

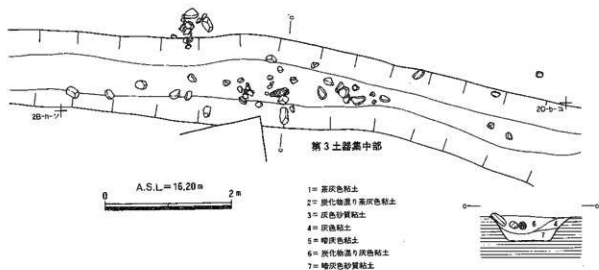
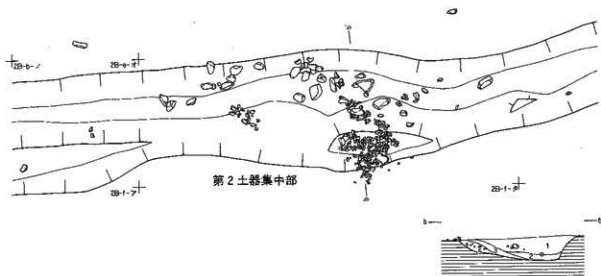
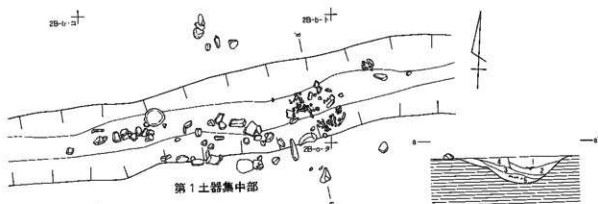
土師器細片が数点出土している。奈良時代の溝と判断した。

NS D19

NS D18と同一面（2面）で確認できた。西側を一部調査していないが、NS B21・22を方形に取り囲む小溝である（3 D-a・b・d・e区）。南東隅で二俣に分かれ、北端は途切れていた。確認長約20.50m、幅0.40～0.80m、深さ0.10～0.20mを測り、底面の海拔高は15.80m前後で一定してい



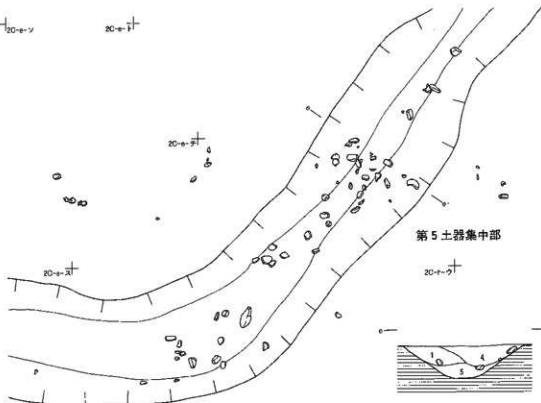
第54図 2A-g・h・i 2B 2C-a・b・d・e・g・h区奈良時代遺構分布図



第55図 NSD21第1・2・3土器集中部実測図



20-4-1 20-4-2



第5土器集中部

20-5-1



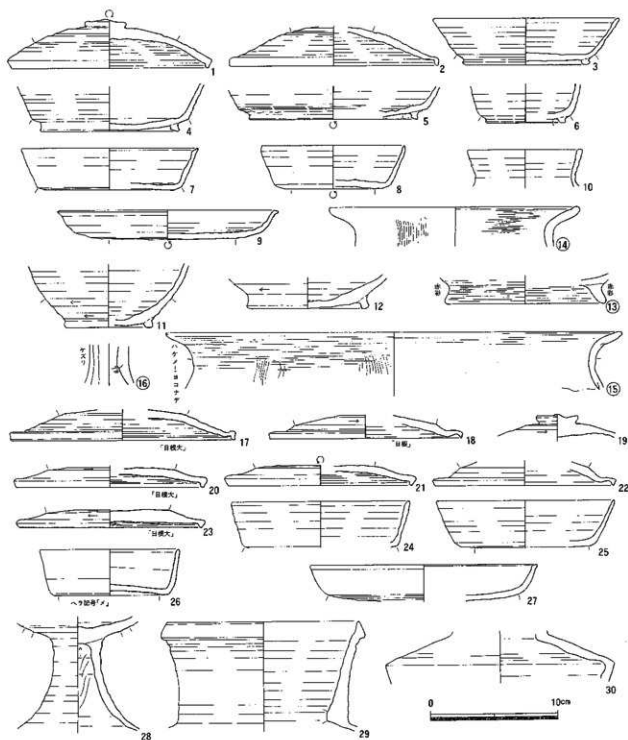
礫集中部



- 1=黄灰色砂質粘土
- 2=黄褐色砂
- 3=黄褐色砂質粘土
- 4=黄灰色粘土
- 5=灰色粘土
- 6=管状より灰白色粘土
- 7=灰白色粘土
- 8=泥鉄・管状より灰色粘土
- 9=灰色砂質粘土

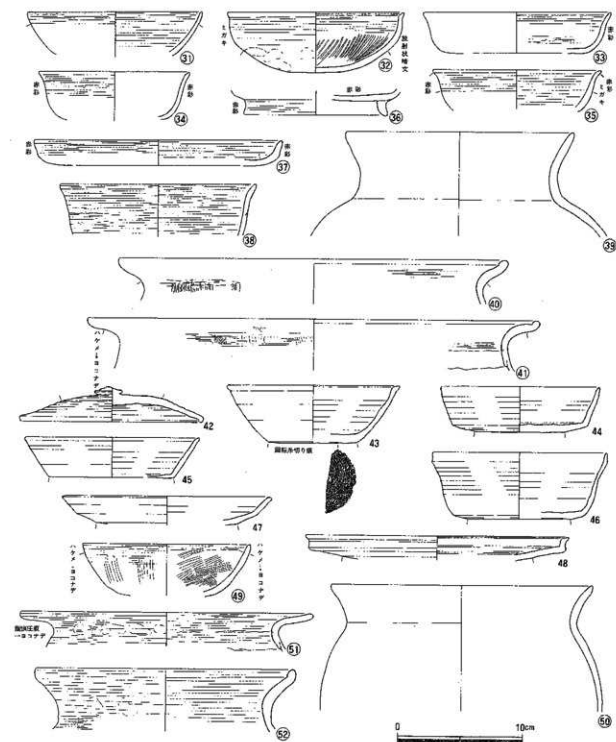
0 A.S.L.=16.20 m 2m

第56図 NSD21第4・5土器集中部・礫集中部実測図



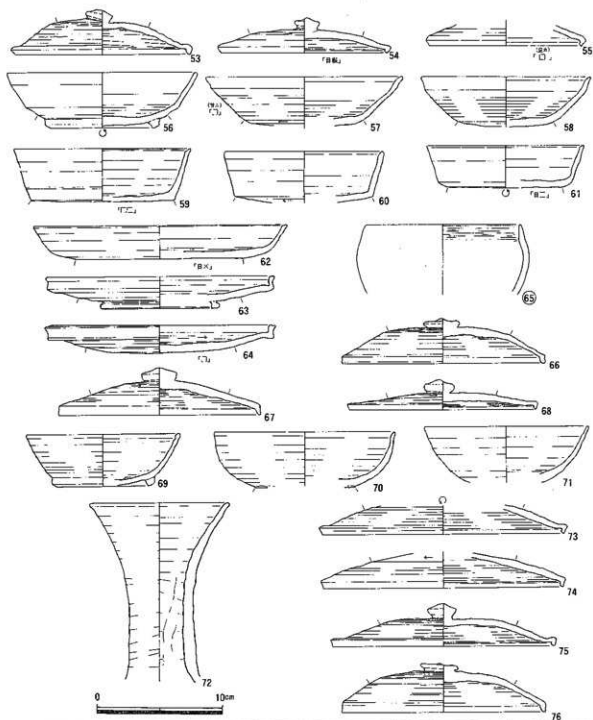
番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	
1	15.9		3.8	杯蓋A2	9	17.2	7.3		舞臺皿D1	17	(17.6)			杯蓋A3	25	(13.8)			(13.6)	舞臺杯蓋D4					
2	(16.3)			杯蓋A3	10	(8.0)				18	(16.2)			杯蓋A2	26	(19.9)			(13.6)	舞臺杯蓋D4					
3	14.5		3.7	舞臺杯蓋D1	11				舞臺皿A	19				杯蓋A2	27	(17.7)			(2.8)	舞臺杯蓋D2					
4				舞臺杯蓋D3	12					20	(15.1)			杯蓋A3	28					舞臺A					
5				舞臺杯蓋A1	13				舞臺皿A1	21	(14.3)			杯蓋A3	29	(15.9)				舞臺B					
6				小舞臺杯蓋A1	14	(19.5)			舞臺D1	22	(14.3)			杯蓋A2	30		(17.8)			舞臺皿B1					
7	(13.7)		(5.2)	舞臺杯蓋D3	15	(25.5)			舞臺B1	23	(14.7)														
8	(11.3)		(3.4)	舞臺杯蓋D4	16				舞臺B	24	(14.3)			舞臺杯蓋D2											

第57図 NSD21第1・2土器集中部出土土器実測図(1)



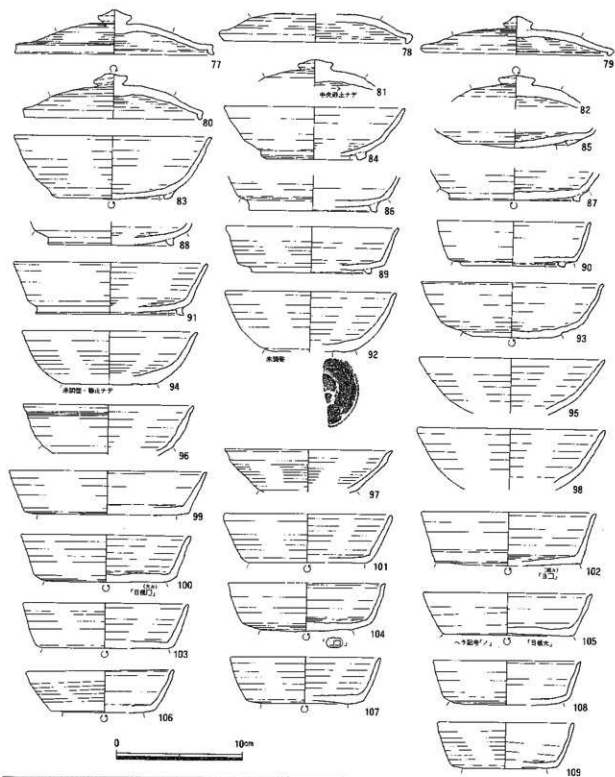
番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
31	(13.9)			煎豆鉢通口	39	(19.7)	(2.0)		煎豆鉢B2	43	(13.7)	(4.3)		煎豆鉢通口A2	49	(13.4)			煎豆鉢通口B1
32	14.1	4.7		煎豆鉢通口A	40	(15.6)			煎豆鉢通口B	44	12.6	3.6		煎豆鉢通口D4	50	(20.6)	(22.4)		煎豆鉢通口C
33	(14.9)	(3.1)		煎豆鉢通口C3	41	(18.2)			煎豆鉢A	45	(13.9)	(3.2)		煎豆鉢通口D2	51	(23.3)			煎豆鉢通口D
34	(12.0)	(3.8)		煎豆鉢通口C3	42	(31.0)			煎豆鉢B2	46	(13.3)	(14.0)	(5.2)	煎豆鉢通口D4	52	(20.8)			煎豆鉢通口D
35	(13.4)			煎豆鉢通口C3	43	(36.0)			煎豆鉢B2	47	(16.7)			煎豆鉢通口D2					
36				煎豆鉢通口A1	44	14.6	2.8		煎豆鉢A2	48	(20.5)			煎豆鉢通口B1					

第58図 N S D21第2・3土器集中部出土土器実測図(2)



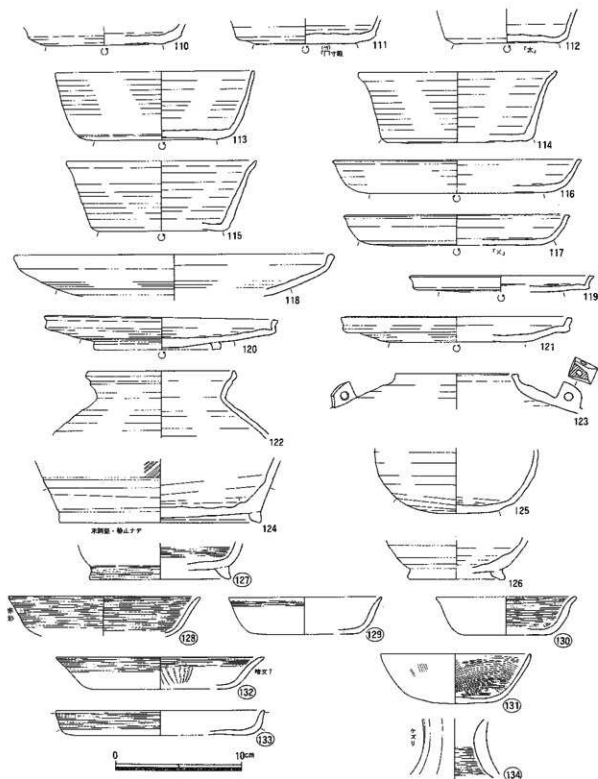
番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
53	14.3		3.6	鉢蓋 A3	59	(14.0)	(4.1)		甗台鉢身 D2	65	(12.3)	(13.7)			71	(13.0)			甗台鉢身 A1
54	13.7		2.8	鉢蓋 A3	60	(12.7)			甗台鉢身 D1	66	16.1		3.6	鉢蓋 A2	72	(11.1)			甗台鉢身 A1
55	(12.6)			鉢蓋 A3	61	(12.4)	(2.3)		甗台鉢身 D3	67	16.0		3.7	鉢蓋 A2	73	(18.7)			鉢蓋 A3
56	16.1		4.4	甗台鉢身 A1	62	(20.1)	(2.6)		甗台鉢身 D1	68	15.1		2.4	鉢蓋 A3	74	(18.4)			鉢蓋 A3
57	(15.6)	(3.8)		甗台鉢身 A2	63	(18.1)	(2.5)		甗台鉢身 D1	69	(12.2)	(4.1)		甗台鉢身 A1	75	17.9		3.4	鉢蓋 A3
58	(13.4)	(3.3)		甗台鉢身 A1	64	18.3	2.2		甗台鉢身 D1	70	(14.4)	(4.4)		甗台鉢身 C	76	16.1		3.9	鉢蓋 A2

第59図 NSD21第4・5土器集中部・NSD21出土土器実測図(3)



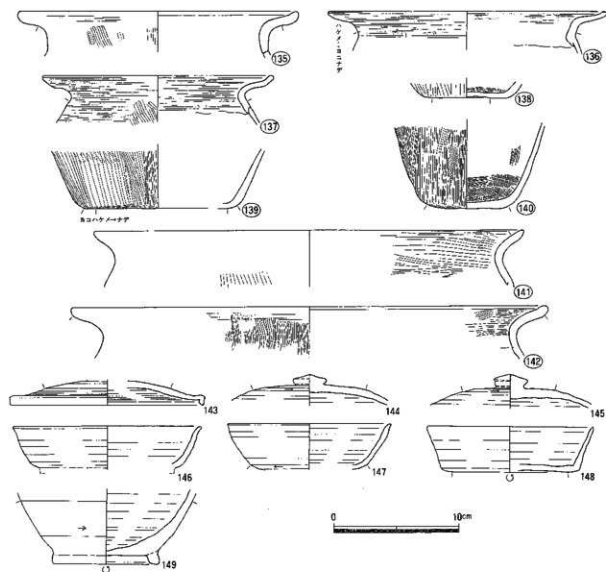
番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
77	15.8		3.5	杯蓋 A3	86				有蓋杯身 A3	95		(14.6)		有蓋杯身 A1	104		12.5		有蓋杯身 C					
78	(15.4)			杯蓋 A3	87				有蓋杯身 A3	96		(13.5)		有蓋杯身 A1	105		13.4		有蓋杯身 D2					
79	15.3		3.0	杯蓋 A3	88				有蓋杯身 A3	97		(13.4)		有蓋杯身 A1	106		11.7		有蓋杯身 D4					
80	14.2		3.5	杯蓋 A2	89	(13.8)		(3.6)	有蓋杯身 C3	98		(14.9)		有蓋杯身 A1					有蓋杯身 D4					
81				杯蓋 A2	90	(12.2)		(3.5)	有蓋杯身 C3	99	(15.7)		(3.4)	有蓋杯身 D3	107		(12.0)		(3.7)	有蓋杯身 D4				
82				杯蓋 A2	91	(15.4)		(4.1)	有蓋杯身 A3	100	13.5		3.8	有蓋杯身 D3	108		(11.8)		(3.5)	有蓋杯身 D3				
83	15.6		5.0	有蓋杯身 A1	92	(13.6)		(4.7)	有蓋杯身 A1	101	(13.4)		(2.8)	有蓋杯身 D3	109		(10.2)		(3.6)	有蓋杯身 D4				
84	14.4		4.1	有蓋杯身 A1	93	14.5		4.3	有蓋杯身 A1	102	(13.5)		(4.3)	有蓋杯身 D2										
85					94	(13.9)		(4.2)	有蓋杯身 A1	103	(13.1)		(3.6)	有蓋杯身 D3										

第60図 NSD21出土土器実測図(4)



番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
110				飯倉杯身D3	117	(17.3)	(2.4)		飯倉底D1	123	(9.8)			当河底	129	(11.2)	(3.0)		飯倉杯身C3
111				飯倉杯身D4	118	(25.4)			飯倉底C	124				飯倉底B1	130	11.9	3.9		飯倉杯身B1
112				飯倉杯身D3	119	(14.7)			飯倉底B1	125				底心1	131	(16.5)	(2.5)		飯倉底A
113	15.8		5.4	飯倉杯身D3	120	16.3	(42.7)		飯倉底B1	126				底心2	132	(16.5)	(2.0)		飯倉底B1
114	(15.7)		(5.5)	飯倉杯身D3	121		(42.4)			127				飯倉杯身A1	133				飯倉底B
115	(15.1)		(5.5)	飯倉杯身D3	122	(18.3)			飯倉底B1	128	(15.2)			飯倉杯身D	134				
116	(19.7)		(2.6)	飯倉底D1	123	(12.0)			飯倉底C2	129	(12.1)	(3.8)		飯倉杯身C3					

第61図 N S D21出土土器実測図(5)



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
135	(22.2)			甕D3	139					143	(15.4)			杯蓋A3	147	(13.0)		(3.6)	甕台杯身D3
136	(22.0)			甕D3	140					144				杯蓋A3	148	(13.2)		(3.6)	甕台杯身D3
137	(18.3)			甕C	141	(34.0)			甕B1	145				杯蓋A3	149				甕台杯身A
138					142	(37.8)			甕B7	146	(14.9)			甕台杯身A2					

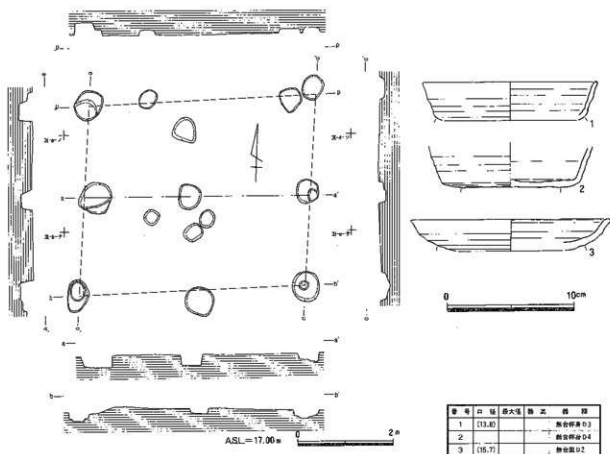
第62図 NSD21 (6)・22出土土器実測図

る。NSB20・NSH7に切断されNSD18と交差していた。

南壁に平坦面を持ち段をなすところが見られたが、底面は総じて平坦で整ったU字状断面を呈する。小溝ながら覆土は複数のレンズ状堆積に区分され、埋没に比較的期間を要したことを示している。底面に深着して数個のこぶし大礫が認められた。

南側の溝の延長線上を西方へほぼ直線的にのびる溝がある (NSB24の柱穴に切断されていた)。現地を確認していないが、覆土・断面形は類似し連続する溝と考えられる。

出土土器は須恵器のみであり、その器種組成は杯蓋A1、有台杯身C2、無台杯身A1・B1・D1、無台皿A2、長頸壺A1、甕B1・Cからなる。奈良時代前葉の溝であろう。



第63図 NSB1実測図・柱穴出土土器実測図

NSD20

3D-a区のIV層(緑灰色粘土)より約10cm高いところ(3面)で確認できた。NSB23の東側柱に並行し、約0.6m離れて南北方向に伸びている。南端はNSD19と交差する直前で東西に分かれ、西方は鉤状を呈して途切れていた。確認長約6.70m、幅0.25~0.75m、深さ0.20~0.30mを測る。

平面楕円形様に溝幅を増し深くなる箇所が認められたが、重複する柱穴を誤認したのかもしれない。平坦な底面(海拔高15.80m前後)をなし断面U字状を呈する。覆土はNSD19に比べ炭化物(粒)を含まないが、3~4層に区分できその堆積状態はよく似ていた(暗灰色粘土)。南端の状況(鉤状の屈曲)はNSD19を意識したものとも思われ、両溝は併存していた可能性が高い。

NSD21

2A-h・i~2C-g区にかけて東西方向にのびている。Ⅲ層上面(1面)においてほぼすべての輪郭を確認した。確認長約61.50m、幅1.00~2.00m、深さ0.25~0.55mを測る。西半は直線状をなすが、東半では蛇行し溝幅をわずかに増す。2C-e区で合流(ないしは分岐)する同規模の枝溝1条を有する。奈良時代の遺構との重複関係は認められなかった(NSJ11・23は当溝に伴う土器廃棄跡と考えられる)。底面の海拔高(15.50~15.65m)は西半ほど高く、現地形と逆の傾斜を示している。南壁の中位に膨らみを持ち不明瞭な段差のある箇所(2B-e区)や、底面が凹み浅いU字状断面を呈する箇所(2B-b・c区、2C-c・h区)も認められたが、総じて壁の傾斜は均一で平

坦な底面をなしていた（断面U字状）。覆土は3～5層に区分され、溝全域にわたって最上位に茶灰色（西半）ないしは黄灰色（東半—蛇行部分）（砂質）粘土がすり鉢状に堆積していた。この最上層は2B-h区付近で明らかに下位の覆土を切断（掘り込み）しており、最上層の底面近くには礫・土器片等が平面的に分布していた。溝の埋没がかなり進んだ段階で少なくとも1度以上改修が行われ、その後ある期間、幅を減じた（0.74～1.60m）流路が生きた溝として存続していたと考えられる。

2B-h区の底面に密着して大小自然礫（径18～30cm、7～13cm）が帯状（幅0.6m前後）に敷き詰められていた。溝を横断し集積状態は平面的である。大礫の隙間を小礫で埋め高さを整えていた。

NS111・23を除き5箇所（第1～5）土器集中部が検出された。すべて大小の自然礫を多く含む土器は細片化している。土器等の廃棄跡と考えられ、第1・2土器集中部は南岸寄りに第3～5土器集中部は溝のほぼ中央に形成されていた。第3・5土器集中部が改修後の廃棄跡と推定できるのに対し、第4土器集中部は底面に接しより形成時期は遡るものと思われる。第1・2土器集中部ではさらに小さな土器集合ごとに若干時期が異なる可能性もある。

第2土器集中部は主に須恵器杯蓋A2・A3、土師器無台杯身C3からなる（他に須恵器無台杯身D2・D4、無台皿D2、高盤A、長頸壺B1、甕B1、土師器有台杯身B、無台杯身A・D、有台皿A1、無台皿B2、壺A、鍋B2がある）。第4土器集中部では須恵器杯蓋A3等食器類がめだつた（他に須恵器有台杯身A1、無台杯身A1・A2・D1・D2・D3、有台皿B1、無台皿B1・D1、土師器鉢がある）。第1・3・5土器集中部は複数の器種を少量ずつ含んでいた（第1土器集中部＝須恵器杯蓋A2・A3、有台杯身C1・C3、無台杯身D3・D4、小型杯身A1、有台皿A1、無台皿D1、土師器有台皿A1、高盤B、甕D1、鍋B1、第3土器集中部＝須恵器杯蓋A2、無台杯身A2・D2・D4、無台皿B1・D2、土師器無台杯身B1、壺A、甕C・D1、第5土器集中部＝須恵器杯蓋A2・A3、有台杯身A1、無台杯身A1・C、長頸壺A1）。土器集中部に伴わなかった土器には須恵器有台杯身A3、無台皿C、壺C1・D2、皿耳壺、土師器有台杯身A1、無台皿A・B1、甕D3がある。23点の墨書土器、ミニチュア土器、土馬、土鯨等の土製品磁石を出土している。

若干時期差を有するものの、土器集中部（NS111を含む）は1度以上の改修を挟んですべて奈良時代中葉までに形成されたと考えられる。墨書土器には編年時期の降る土器（須恵器無台杯身D3等）も比較的多く見られ、管理は不十分ながらNSD21は後葉まで存続していた可能性が高い。

NSD22

2B-a・b・d・g区の皿層上面（1面）で確認できた。北岸を調査していないため溝幅は不明であるが（確認幅約1.40m）、確認長約21.50m、深さ0.20～0.40mを測る。底面の海拔高（15.65～15.80m）は東半が高い。NSB31と重複し東西方向に直線的にのびる。東端は北方へ曲がり始めている。南岸の傾斜は緩く均一であった。

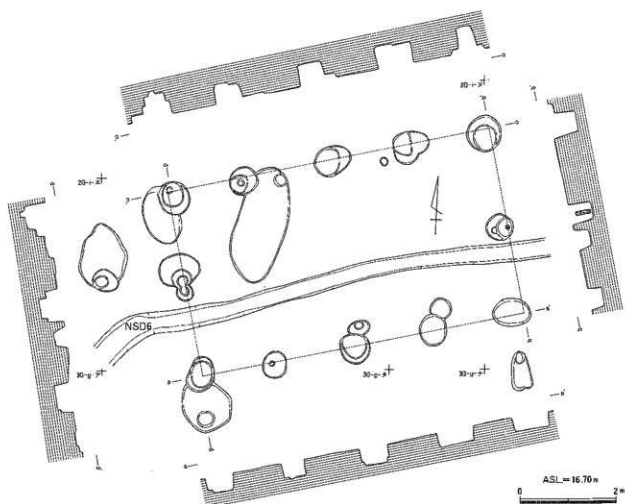
出土土器には須恵器杯蓋A3、有台杯身A2、無台杯身D3があるが、少量・細片であり形成時期は明確でない。

第2節 掘立柱建物（NSB）

NSB1

3I-d・e区の皿層上面（1面）で確認できた。NSD2の西方から約15m離れ、間口2柱間（4.75m）×奥行2柱間（3.95m）、棟方位N-2°00'-Wをなす総柱の建物である。

北面中央の間柱を欠き平面形はわずかに東方へ歪んでいた。堀方は平面円形ないし楕円形を呈し



第64図 NSB 2実測図

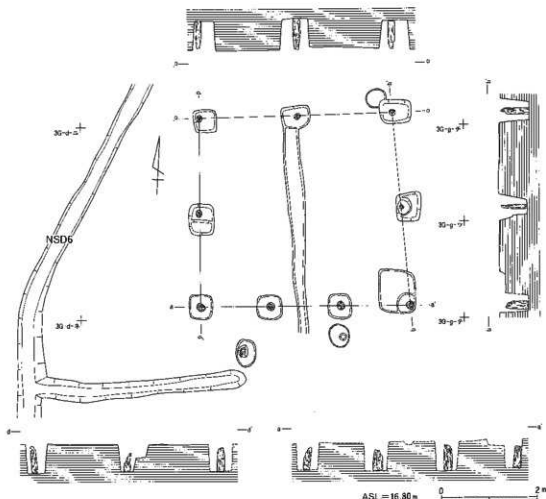
(長径50~70cm、短径45~55cm、深さ10~30cm)、西・南面の柱穴規模が大きい。掘方底面にはさらに一段深い掘り込みや柱の重みによると思われる円形(径13~20cm)の凹みも認められた。北側柱の柱筋上に2箇所、東柱周辺に3箇所、小規模な柱穴状の落ち込みがある。柱根・礎板等は残存していなかった。

堀方内より須恵器片が3点(無台杯身D2・D4、無台皿D2-内1点墨書土器-)出土している。

NSB 2

2G-1・2H-c区で検出された。北側柱は皿層上面(1面)で確認できたが、全形を知りえたのは皿層を約15cm掘り下げた後(2面)である。間口4柱間(6.85m)×奥行2柱間(3.90m)、棟方位N-14°00'-Wを測る。NSD4の西方約5mに位置し、NSA1・NSB3に隣接している。NSD6が桁行と併行し床面内を縦断していた。

堀方は平面円形ないし楕円形をなし(長径55~85cm、短径50~70cm、深さ30~55cm)、平坦な底面に一段深い掘り込みや柱痕状の凹み(径8~10cm)を残すものが多い。北面の間柱と重複して平面楕円形様(2.40×1.05×0.10m)を呈する浅い落ち込みが認められた。南北面の内側に小規模な柱穴(16~46cm)が4箇所(南面では側柱と重複していた)、西面中央柱の西方に柱穴状の落ち込みが1



第65図 NSB 3 実測図

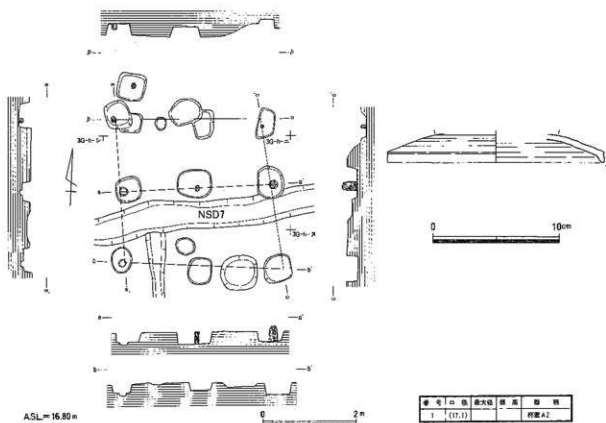
箇所ある。また東西側柱の延長線上、南方へ約0.90mに2箇所小柱穴(径18~36cm)が確認でき、あるいは庇付の建物だったのかもしれない。東面中央柱には柱根が残っていた。礎板・根固め礫等は検出されなかった。柱根(丸柱一径8~10cm)は斧状の工具による切断痕(周辺部から斜めに加えられる)を残し、二次調整を加えていない。掘方内を主に灰白色粘土(V層)で埋め、固定していた。東西面中央柱それぞれに柱痕は2箇所認められ、建て替えあるいは部分的な補修が行われたと考えられる。

なお、2柱間×2柱間の建物では桁行・梁行の区分が難しいため、以下すべての掘立柱建物について、東西方向(南北面)を間口、南北方向(東西面)を奥行として記述する。また棟方位とは奥行の方向である。よってNSB 2のように南北面4間、東西面2間の建物では、棟方位は桁方位と一致せず、梁行方向を示していることになる。

NSB 3

3 G-g 区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSI 3に西接し、NSB 2・4と共にNSD 4、NSA 1西側の掘立柱建物群を構成している。間口2柱間(南面4.40m北面4.05m)×奥行2柱間(3.95m)、棟方位N-3°00'-Wを測る。

南面は3柱間を数え入口が付されていたと推定できる。堀方は平面隅丸方形ないし長方形様をなし



第66図 NSB 4実測図・柱穴出土土器実測図

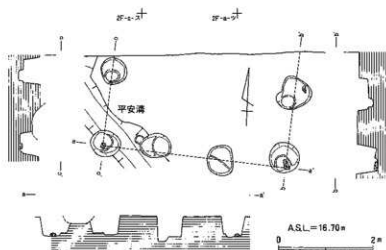
(長辺50~90cm、短辺50~75cm、深さ55~65cm)、南東端の脇柱を除き他はほぼ等しい規模を有していた。一段深い掘り込みが3箇所見られ、北面中央柱の掘方から南方へ浅い小溝(幅19~38cm、深さ約10cm)がのびていた。小溝の南端は建物外におよび徐々に浅くなり途切れていた。すべての掘方から柱痕が検出された。柱痕は丸柱で(径10~15cm)、底面に斧状の工具による切断痕を残している。礎板・根固め礫等は認められなかった。掘方の底面には木葉と炭化した樹枝が集積し、覆土は灰白色粘土(V層)と褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)の細互層である。覆土はよく締まり木葉の付いたままの樹枝を底面に敷き重ね、柱を設置した後、その周囲を緻密な灰白色粘土と掘方排土により順次でいねいに突き固めていったものと考えている。南面の外側と北東脇柱に重複して、楕円形平面をなす柱穴(長径42~57cm、短径42~52cm、深さ15~20cm)が3箇所認められた。内1箇所の柱穴内には柱根を思わせる風化した木片が残存していた。

NSD 6(奈良時代後葉)の流路は明らかにNSB 3を意識しており、両遺構は併存していた可能性が高い。

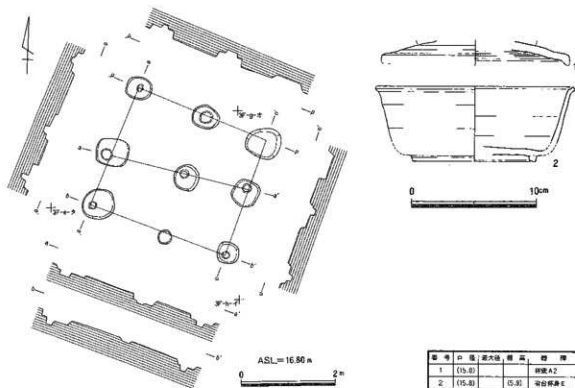
NSB 4

3 G-h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところで(2面)、すべての柱穴を確認した。NSB 3の南方約5mに位置し、NSD 7が建物内を横切っている(東面中央柱と重複していたが、その前後関係は明確でなかった)。間112柱間(3.20m)×奥行2柱間(3.15m)からなる総柱の建物で、平面形はほぼ正方形をなすわずかに西方へ歪んでいた。棟方位N-5°00'-Wを測る。

掘方平面形には楕円形と隅丸方形様(長径55~75cm、短径35~60cm、深さ20~25cm)を呈するものがあり、前者は総じて小規模である。平坦な底面に柱の重量によると思われる円形の凹み(径12~14



第67図 NSB 5 実測図



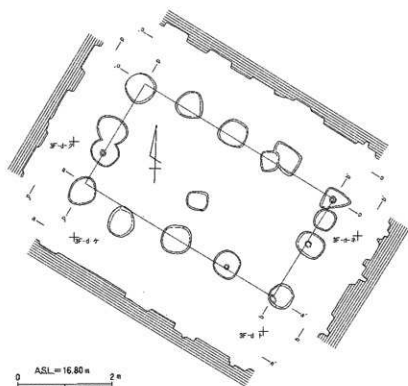
第68図 NSB 6 実測図・柱穴出土土器実測図

cm)や柱根(丸柱一径6~18cm-)が計6箇所認められた。東面中央の柱根は他に比べて太く、斧状工具による切断痕を残していた。礎板等はなく掘方内には灰白色粘土(V腐?)塊を含んだ暗灰色粘土が堆積していた。建物内外および南北側柱の柱筋に大小4箇所の柱穴がある。重複する柱穴が見られ建て替えが行われたと考えられる。

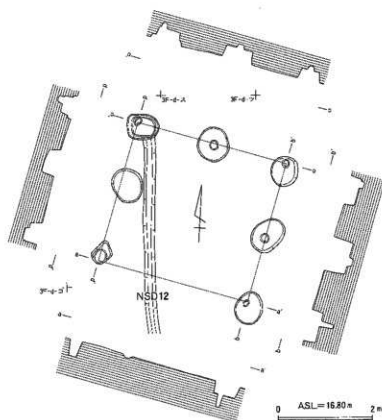
東柱の掘方内から須恵器杯蓋A2が1点出土している。

NSB 5

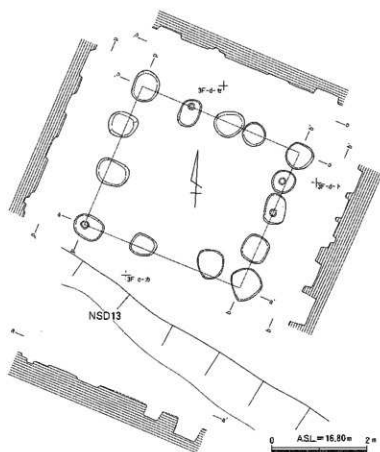
2F-a区のⅢ層2面およびNSH4の床面において確認できた。NSH4に先行する建物である。NSD10・NSI4に隣接し、平安時代以降の溝により柱穴2箇所が壊されていた。北半が調査区



第69図 NSB 7 実測図



第70図 NSB 8 実測図



第71図 NSB 9実測図

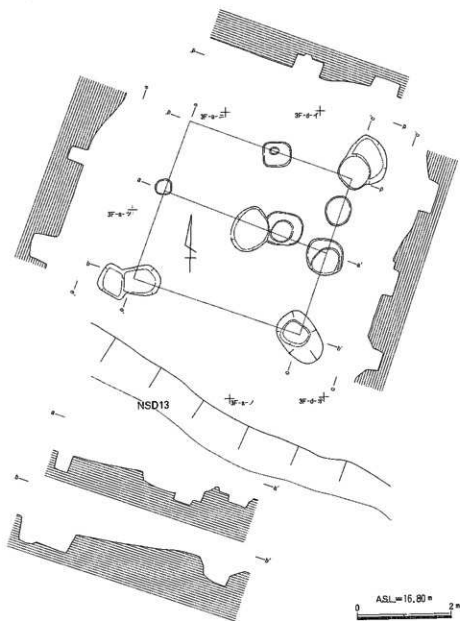
外におよぶため奥行は明らかでないが、間口は3柱間(3.85m)を数える棟方位 $N-4^{\circ}00'-E$ をなす。側柱のみからなり掘方は平面凹形ないし槽円形(長径55~70cm、短径50~65cm、深さ30~55cm)を呈していた。すべての掘方底面にさらに一段深い掘り込みを有し、最下面および中段の平坦面に礎板を思わせる木片が3箇所残存していた。木片は著しく風化していたが丸太面を残す。柱等をミカン割りし再利用したものと考えられる。南面の間柱に重複する小柱穴(径18cm)が1箇所ある。掘方内から墨書土器が1点出土している。

NSB 6

3F-d・e・g・h区に跨がり、Ⅲ層上面(1面)で確認できた。NSD11・13に挟まれて重複・分布する5棟の独立柱建物群(NSB 6~10)のなかで東端に位置している。間口2柱間(3.00m)×奥行2柱間(2.65m)、棟方位 $N-11^{\circ}00'-E$ をなす総柱の建物である。

掘方の平面形は隅丸方形様に近く、(長径30~75cm、短径30~65cm、深さ5~25cm)南面中央の柱穴は浅く小さい。平坦な底面に7箇所、柱の重みによると思われる円形(径16~36cm)の凹みが認められた。東西中央と東柱の凹みとを結ぶ柱筋は南北側柱と並行していない。覆土は基本的に褐色砂質粘土(Ⅲ層)と灰白色粘土(V層)からなり、一部細互層を形成していた。また北西隅の掘方断面には、明瞭な柱の抜取痕が観察できた。柱痕・礎板等は一切検出されなかった。

北面中央及び南東隅の掘方内から須恵器杯蓋A 2、有台杯身E、無台皿D 2(墨書土器)の比較的



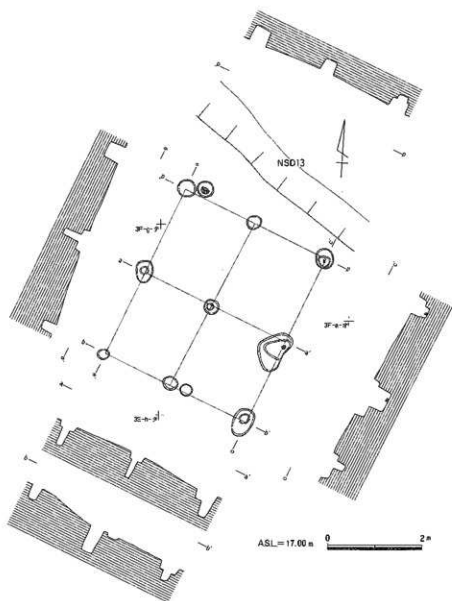
第72図 NSB10実測図

大きな破片が出土している。

NSB7

3 F-d区のⅢ層上面（1面）においてすべての柱穴を確認した。NSB6の北西側に隣接する。NSB8の柱穴と北東隅の柱穴および北面間柱が重複していたが、その前後関係は明確でない。間口4柱間（4.65m）×奥行2柱間（2.40m）、棟方位 $N-29^{\circ}30'-E$ を測る。

掘方の平面形は隅丸方形様を含むが、多くは楕円形（長径50～70cm、短径50～65cm、深さ5～25cm）を呈している。覆土は灰白色粘土（Ⅴ層）を主体とし、わずかに褐灰色粘土塊（Ⅲ層）が混入していた。平坦な底面に柱痕を思わせる円形の浅い凹み（径12～24cm）が5箇所認められたが、覆土断面における柱の抜き取り痕（土層の攪乱）は明確でなかった。南北側柱中央の柱穴を結ぶ柱筋に平面隅丸方形（1辺48～56cm）をなす柱穴が1箇所ある。これと対になる位置にも西面の中央柱と重複す



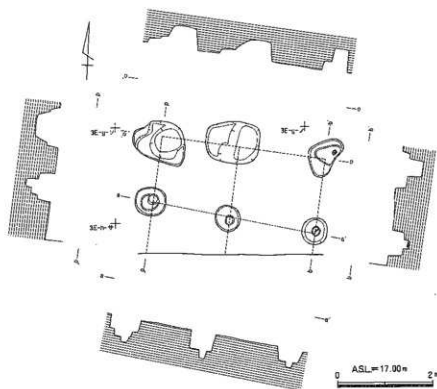
第73図 NSB11実測図

る掘方が見られ、あるいは間仕切りを有していたものかもしれない。他にも重複する柱穴があり建て替えが行われた可能性もある。礎板・根石等は一切検出されなかった。

NSB8

3F-d区のⅢ層上面(1面)で建物の存在を知りえたが、南面の側柱を確認したのはV層直上(3面)に至ってからである。NSB6・10に挟まれ、NSB7・9と重複していた。南面中央の柱穴は試掘杭(昭和55年度調査)により破壊され、東柱周辺もすでに攪乱されていた。側柱のみからなる建物と考えている。

間口2柱間(3.25m)×奥行2柱間(3.00m)、棟方位N-13°00'-Eを測り、掘方は平面円形ないし楕円形(長径45~80cm、短径35~65cm、深さ25~55cm)を呈していた。西面の脇柱にさらに一段深い掘り込みがある。柱痕を思わせる円形の凹み(径12~20cm)は5箇所認められた。内1箇所(南



第74図 NSB12実測図

東隅)は底面からの深さ26cmを掘り、単なる柱の重みによる陥没としては深すぎる。覆土は褐灰色粘土(Ⅲ層)と灰白色粘土(V層)からなり、一部細互層を形成していた。西北隅の掘方から南方へ、小溝がほぼ直線的にのびNSD13に達していた。

礎石・根固め礫等は一切検出されず建て替え等を推定させる柱の重複は見られなかった。

NSB9

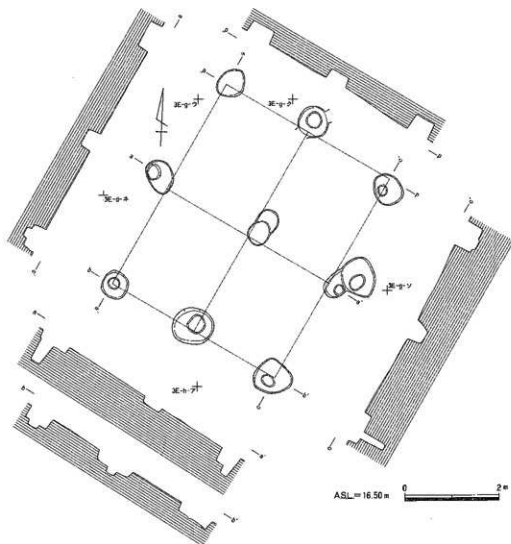
3F-d・e区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSB7に南接、NSB8と重複している。NSD13からわずかに1mしか離れていない。NSB7同様、床面部に試掘坑が掘られていたため断言できないが、間口3柱間(3.60m)×奥行3柱間(3.15m)、梁行方位N-19°30'-Eをなし、北・東面の側柱を密に配した建物と思われる。

掘方の平面形は円形ないし楕円形(長径50~70cm、短径45~65cm、深さ5~30cm)を呈し、南東隅の掘方を除き総じて浅い。柱間尺にはばらつきがある。掘方底面に柱痕状の丸い凹み(14~16cm)が4箇所認められたが、礎板・根固め礫は残っていなかった。灰白色粘土(V層)を主体的な覆土とする。密に配置された側柱は建て替え等によるものかもしれない。

NSB8と直接重複する柱穴はなかったが、南方へのびる小溝が南面の間柱を切断していた。この小溝がNSB8に伴う遺構であるとするれば、NSB9はNSB8に先行する建物となる。

NSB10

3F-a・d区に跨がり5棟の掘立柱建物群(NSB6~10)のなかでもっとも西寄りに位置している。北・東面の側柱はⅢ層上面(1面)で検出できたが、西・南面の柱穴はⅢ層をほぼ除去する(3面)までその輪郭を掴むことができなかった。北西隅および南面の中央柱を欠くが、間口2柱間(3.65m)×奥行2柱間(3.45m)、梁行方位N-17°00'-Eをなす総柱の建物と考えられる。



第75図 NSB13実測図

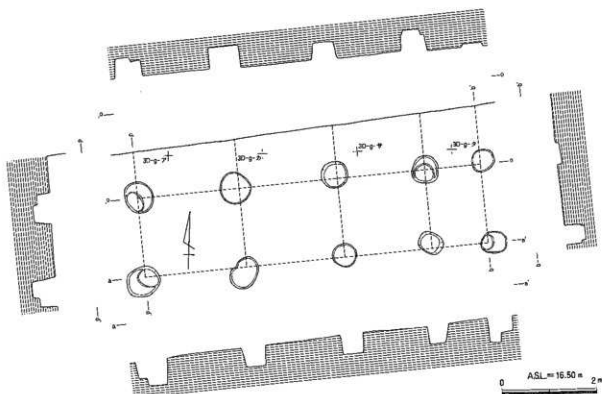
掘方には大小差が見られ基本的に平面楕円形（長径35～115cm、短径35～80cm、深さ25～55cm）を呈する。総じて隅柱は深い。底面に一段深い掘り込みが4箇所、柱痕状の丸い凹み（径15～20cm）が1箇所認められ、柱の抜き取りによるものか掘方上位の壁が緩やかな傾斜をなすものを含んでいた。東柱の底面は丸みを帯びていた。東面側柱の柱筋に柱穴状の浅い落ち込みが1箇所ある。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・灰白色粘土（5層）を覆土とする。

掘方の重複は顕著で建て直しが行われた可能性が高い。

NSB11

3E-g・3F-a区のⅢ層をほぼ除去した後（3面）、初めて建物の所在に気づいた。NSB12・13と共にNSD13西側の掘立柱建物群を構成している。NSD13と北東隅柱との距離はわずかに0.6mである。間口2柱間（3.30m）×奥行2柱間（3.85m）、棟方位N-23°00'-Eを測り総柱からなる。

平面形は北東-南西方向にわずかに長い。総じて掘方は小さく、平面円形ないし楕円形（長径25～



第76図 NSB14実測図

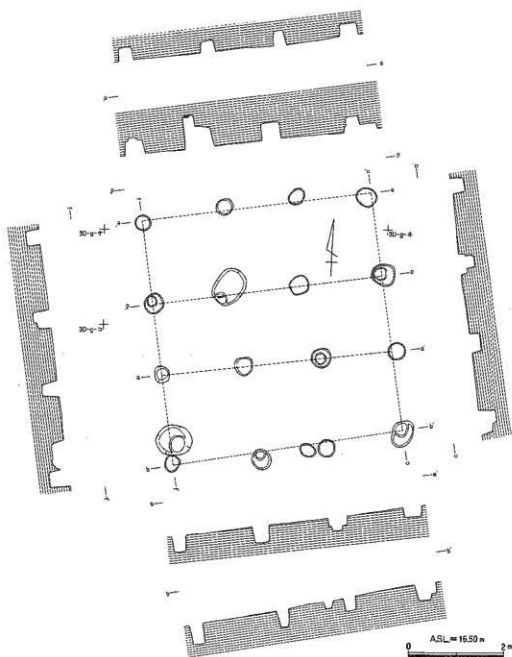
60cm、短径20~40cm、深さ25~55cm)を呈している。底面にさらに一段深い掘込みや柱痕状の丸い凹み(径14~23cm)が5箇所あり、特に西面の中央柱および東柱の凹みは深かった。また南面中央の掘方も深く、底面(丸みを帯びるものがある)の高さは一定していない。東面の中央柱はNSB12の柱穴と同一位置にあり、その検出面・形態・規模からみてNSB12に壊されてしまったと解するのが妥当ように思われる。風化して原形をとどめていないが、柱根・礎板を思わせる木片が2箇所残っていた。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)を主体的覆土とし、底面近くに黒灰色粘土塊が集中していた。浅いが南面の中央柱と北西隅柱に隣接する同規模の柱穴が2箇所認められ、建て直しが行われた可能性もある。

NSB12

3E-g・h区、3F-a・b区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSB11と重複し、NSB13から南西方向へ約5m離れている。南半は未調査であるが間口2柱間(3.45m)を測り、棟方位N-5°00'-Eを呈する総柱の建物と思われる。

掘方の平面形には円形・不定形・隅丸方形があり、隅丸方形様をなす北面の隅柱の規模(長径90~115cm、短径60~90cm、深さ40~50cm)は他の掘方(長径55~65cm、短径50~60cm、深さ40~55cm)に比べ大きい。前者は平坦な底面にさらに1段深い掘り込み(3段に掘られたものもある)を有し、後者にはやや深い柱痕状の丸い凹み(径18~22cm)が認められた。覆土は両者とも褐灰色土(Ⅲ層?)を主体とする。底面に木片礎板(?)が2箇所残っていた。東面隅柱の木片は皮面の残る樹枝(径2~3cm)である。

NSB11で述べたように北東隅の掘方が検出面の高いNSB12に伴うものであるとすれば、NSB12はNSB11に比べ後出する建物となる。

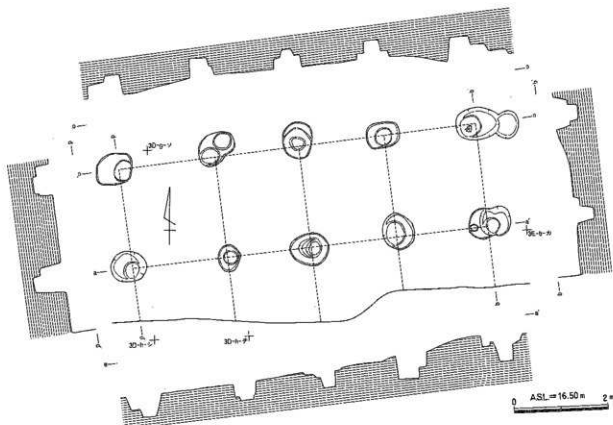


第77図 NSB15実測図

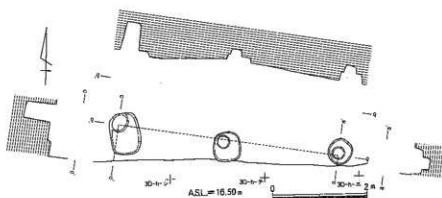
NSB13

3 E-g 区のIV層上面近くに至り (3面)、NSB11と共に検出された。NSB13西側の掘立柱建物群 (NSB11~13-3棟-) のなかで西端に位置している。間口2柱間 (3.95m) ×奥行2柱間 (4.80m)、棟方位 $N-27^{\circ}00'-E$ を測り総柱からなる。

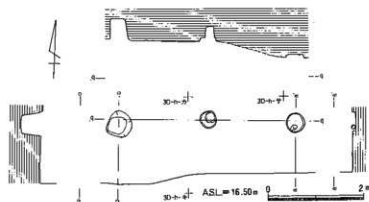
NSB11とほぼ平行し相類似 (相似) した平面形 (北東-南西方へ長い) を呈している。掘方は平面円形ないし楕円形 (長径55~90cm、短径45~75cm、深さ15~75cm) をなし、平坦な底面に7箇所、柱痕を思わせる丸い凹み (径19~39cm) が認められた。東西面の中央柱および南東隅柱に残る凹みは著しく深い。また東柱は浅く小規模である。覆土は主に褐灰色砂質粘土 (Ⅲ層) からなり、凹み内に



第78図 NSB16実測図



第79図 NSB17実測図



第80図 NSB18実測図

は黒灰色粘土塊が顕著であった。東西面の中央は側柱筋から外側に外れている。重複する柱穴が見られ、建て直しが行われたと考えられる。

NSB14

2D-i区と3D-g区に跨がりⅢ層をほぼ除去した後(3面)確認された。NSD17の東側に位置し、NSA2を挟んでNSB15・16に隣接している。北半が調査地外に及ぶため奥行は明らかでないが、間口4柱間(7.25m)、棟方位N-7°30'-Wを測り、本調査において検出された最大規模の総柱建物である。

掘方の平面形は円形ないし楕円形(長径50~75cm、短径45~65cm、深さ10~55cm)をなし、底面に4箇所、さらに一段深い掘り込みを有していた。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)と黒灰色粘土を主体的な覆土とする。西面の側柱(2箇所)では細互層を形成する上記の覆土断面に明確な土壌の攪乱が見られ、柱は南西方向へ引き抜かれたことを示していた。東端の柱間尺は狭く、東面の間柱は著しく浅い。東面の柱列を庇と考えるべきかもしれない。重複する柱穴はない。柱痕・礎板等は一切検出されなかった。

NSB15

3D-g・h区で、NSB14と同様、Ⅲ層をほぼ除去した後(3面)に検出された。NSA2に囲まれ、複雑に重複する4棟の掘立柱建物群(NSD15~18)に属する。NSD17の東岸に接している。間口3柱間(4.90m)×奥行3柱間(5.10m)を測り、平面形は正方形に近い。総柱の建物であるが、東柱は東西方向に直線的に並ぶものの南北方向には通らない。棟方位N-12°00'-Wを呈する。

掘方は総じて小さく平面円形ないし楕円形(長径35~80cm、短径30~60cm、深さ20~70cm)をなす。平坦な底面に柱痕状の丸い凹み(径20~30cm)が5箇所認められ、掘方が大きい北から2列目の東柱では深い凹みの底面に礎板(板材)が残っていた。他の掘方から柱根・礎板等はまったく検出されず、覆土は褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)を主体としていた。覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭でなかった。

他に側柱の柱筋にのる柱穴が2箇所ある。

NSB16

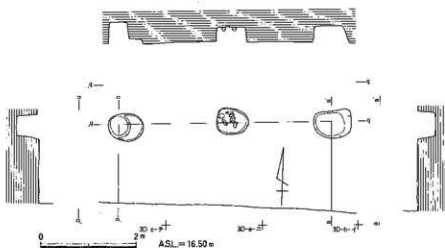
3D-g・h区と3E-a・b区に跨がり、Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSA2に囲まれた建物群(NSB15~18-4棟-)のなかで、もっとも上位において検出された総柱建物である。NSB15・17・18とそれぞれ重複していたが、柱穴の切りあいは見られない。NSD17の東岸に接している。南半を調査していないが、間口4柱間(7.60m)、棟方位N-7°30'-Wを測り、並行するNSB14と共に本調査中、最大規模を有する。

掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形(長径55~90cm、短径50~70cm、深さ40~65cm)をなし(隅丸方形様のものもある)。Ⅳ・Ⅴ層(遺跡基盤層)を深くまで掘り込んでいた。すべての掘方が平坦な底面に一段深い掘り込みを持つ。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)・緑灰色粘土(Ⅳ層)・黒灰色粘土等を覆土とし、一部細互層を形成していた。北東の隅柱には底面に密着して柱根を思わせる木片が残り、他の掘方断面における柱の抜き取り痕は総じて明瞭であった。東面の側柱は東方へ、西面では西方へ、その他は主に北方向へ引き抜かれたものと推定できる。礎板・根石等は一切検出されなかった。

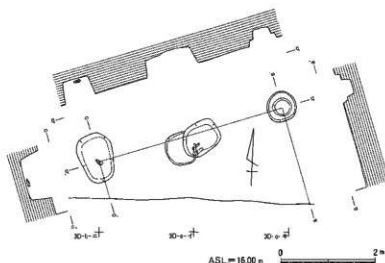
東面の側柱と重複する柱穴や、掘り方底面に複数の掘り込みが見られることから、建て替えが行われたと考えられる。

NSB17

北面の側柱のみ検出され大半は調査区外にある。脇柱は3D-h区の3層を約15cm掘り下げたところ



第81図 NSB19実測図



第82図 NSB20実測図

ろ（2面）で確認できたが、側柱すべてを知りえたのはIV層直上近く（3面）に至ってからである。NSB16・18と重複し、西の脇の柱はNSD17を切断していた。間口2柱間（4.70m）、梁行方位N-6°30'-Eを測る。

掘方の平面形は東脇柱が円形に近く、他は隅丸方形様（長径55～85cm、短径50～65cm、深さ22～65cm）を呈する。すべての底面に柱痕状の丸い凹み（径26～40cm）が認められ、最下面はわずかに丸みを帯びていた。凹みの深さに高低差が見られる。主に褐灰色粘土（Ⅲ層?）を覆土としていた。

NSB18

NSB17と同様に3D-h区において北面の側柱のみ確認した。NSD17、NSB15～17、NSH6と重複している。東の脇柱はⅢ層上面（1面）で検出できたが、他の掘方の輪郭を捉えたのはそれぞれNSD17、NSH6を完掘し終えた後である。間口2柱間（3.70m）を測り、棟方位はN-2°00'-Wをなす。

掘方の規模は比較的小さく、平面円形ないし楕円形（長径35～50cm、短径35～50cm、深さ10～45cm）を呈していた。東脇柱は著しく浅く底面には壁に接してこぶし大礫（根固め礫?）が1個残存していた。中央柱の底面には柱痕状の丸い凹み（径20～22cm）が見られる。西寄りの掘方ほど深くなっている。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的覆土とするが、東脇柱では茶褐色砂質粘土が目立った。

NSD17との前後関係は明確でないが、NSB17とNSH6に先行して建てられていたと思われる。

NSB19

3D-d・e・g・h区の境界付近でⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）確認できた。NSA2の外側にありNSB20に東接している。NSH6に切断され東脇柱はNSD17と重複していたが、その前後関係は明確でなかった。南半が調査区外に及ぶため全形を知りえていない。間口2柱間（4.40m）、棟方位N-3°00'-Wを測る。

掘方の平面形は円形ないし楕円形（長径65～80cm、短径55～60cm、深さ30～45cm）を呈する。西脇柱には一段深い掘り込みが見られ、覆土断面における柱の抜き取り痕（土壌の攪乱）は明瞭であった。また中央の柱からは底面（西寄り）に密着して、環状（径24～26cm）に配置されたこぶし大礫（根固め礫-6個-）が検出された。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）・黒灰色粘土を覆土とする。

NSH6に比べ明らかに先行する掘立柱建物である。

NSB20

3D-d・e区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSB19・21・22に隣接し、中央柱はNSH7に切断されていた。北面の側柱のみ検出され大半は調査区外にある。間口2柱間（4.00m）、棟方位N-19°00'-Wを呈する。

2段に掘られた東脇柱の掘方は平面円形、他は隅丸方形様（長径65～105cm、短径65～75cm、深さ30～45cm）をなし、丸太材をミカン割りした板材（礎板）が2箇所残っていた。褐灰色土（Ⅲ層?）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的覆土とし、東脇柱の断面には明瞭な柱の抜き取り痕（北方向へ引き抜く）が観察できた。

中央柱と重複する柱穴があり、あるいは建て直しが行われたものかもしれない。

NSB21

3D-a・d区のⅣ層上面近く（3面）で確認された。NSD17から西方へ約10m離れ、NSD19・20に囲まれた4棟の掘立柱建物群（NSB21～24）に属している。東面は2柱間、他は間口3柱間（3.70m）×奥行3柱間（3.50m）を数え、棟方位N-5°00'-Wを測る。密に配された側柱からなる建物である。

掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形を呈する。規模に大小差がみられ（長径60～85cm・45～60cm、短径55～80cm・40～55cm、深さ40～90cm・20～60cm）、隅柱大きく深い。柱間尺は均一でない。多くの底面に複数の段差や柱痕状の丸い凹み（径16～27cm）が認められた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体する。覆土断面に細互層は見られず、掘方の内部全体が攪乱をうけたような状態（柱の抜き取り痕?）を呈していた。最下面近くに炭化粒や黒灰色粘土塊を集中させるものがある。柱根・礎板等は一切検出されなかった。

北西寄りにほぼ垂直に落ちる壁と平坦な底面を持つ平面隅丸長方形様（1.60×1.30×0.28m）の落ち込みが検出された。レンズ状に堆積した覆土は柱穴のそれと類似している。出土遺物はなく同一検出面には古墳時代中・後期の遺構も分布しているので、この落ち込みが確実に本建物に伴うとは断言

できない。

柱穴は複雑に重複しあい、数次にわたり建て替えが行われたと思われる。0.4～0.6m外側をNS B 22とした柱列がめぐる。NS B 21・22を1棟と考え、四面庇付の建物や側柱と入側柱を2重に配列した建物を想定すべきかもしれない。

NS B22

NS B 21を方形に取り囲む柱列を一応NS B 22として区別した。3 D-a・d区のIV層上面(3面)で確認されたが、検出面はNS B 21に比べわずかに深い。南面は3柱間(5.25m)、西面は4柱間(4.90m)、東・北面は2柱間(4.70m・4.60m)を数え柱間尺にばらつきが見られる。棟方位N-6°00'-W前後を測る。

西側柱を除き掘方は総じて小規模であり、平面円形ないし楕円形(長径70～80cm・35～55cm、短径65～70cm・30～40cm、深さ40cm・25～40cm)を呈していた。底面に柱痕状の丸い凹み(径15～24cm)を持つものが多く、北面の中央・脇柱、西面の間柱2箇所には礎板が残っていた。礎板は丸太材を縦にミカン割りした板材(丸みのある樹皮面を残す)、2つ割りにした板材(丸味のある樹皮面を残す)で2つ割りしただけのものも見られる。NS B 21と同様に褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)・緑灰色粘土(Ⅳ層)を主体的な覆土としていた。

東側柱の外側0.70～1.00mに平行して並ぶ柱穴が3箇所ある。

NS B23

3 C-g区と3 D-a区のⅢ層をほぼ除去した後(3面)確認された。東・南側をNS D 19・20に区画され、NS B 21・22・24と共に4棟の掘立柱建物群を構成している。NS B 24と重複しNS B 21・22からは約10cm離れている。間口3柱間(3.05m)×奥行3柱間(東面2柱間3.40m)、棟方位N-2°30'-Wを測り側柱のみからなる。南面中央の柱間尺は広く出入口が施けられていたものかもしれない。

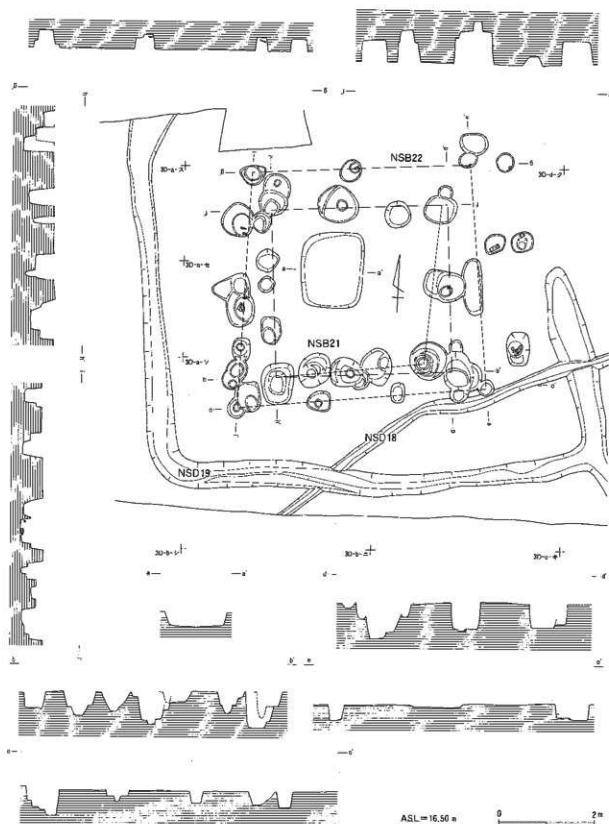
掘方の平面形は隅丸方形縁を呈し、大規模な柱穴を2箇所含んでいる(長径80～90cm・40～60cm、短径55～85cm・35～45cm、深さ10～60cm・15～50cm)。底面に残る柱痕状の丸い凹み(7箇所)は深く、東面中央には礎板(?)が残っていた。著しく腐食していたが礎板は丸太材を縦に割った角材である。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)・緑灰色粘土(Ⅳ層)を主体的な覆土とし、西面間柱における柱の抜き取り痕は明瞭であった。北方へ引き抜かれたものと推定される。掘方底面に密着して、数個、こぶし大礫が検出された。

NS B 24と直接重複する柱穴はなく、その前後関係は明らかでない。西面側柱の柱筋と北面間柱に重なる、浅く小規模(径25～34cm)な柱穴が2箇所ある。

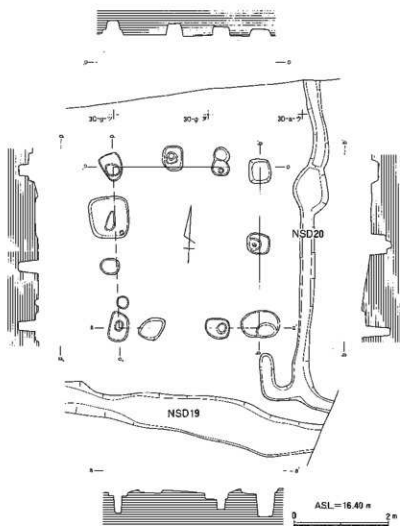
NS B24

3 C-g区のIV層上面近くに至り(3面)確認できたが、NS B 23に比べ遺構検出面はわずかに高い。NS D 20の西側に位置する。南側柱はすべてNS D 19により壊されていた。南面4柱間(4.00m)西面3柱間(3.90m)を数え、側柱を密に配した建物である。平面形は正方形に近い。北・東面では間柱を欠く。棟方位N-3°30'-Wを測る。

隅柱の掘方は平面隅丸方形縁を呈し、間柱(平面円形ないし楕円形—長径35～40cm、短径30～35cm、深さ20～40cm—)に比べ大きい(長径 35～80cm、短径50～75cm、深さ25～45cm)。底面に柱痕状の丸い凹みを持つもの(4箇所)があり、北東隅柱には礎板を思わせる木片が残存していた。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)・緑灰色粘土(Ⅳ層)を主体的な覆土とする。南東の隅柱と重複して平面楕円形縁(1.70×0.95×0.15m)をなす浅い落ち込みが認められた。



第83圖 NS B21・22実測図



第84図 NSB23実測図

密に配された柱穴はあるいは建て替えの結果によるものかもしれない。

NSB25

2C-b区のⅢ層を約15cm掘り下げたところで(2面)すべての柱穴を確認した。流路を転じ始めたNSD21の北方約5mに位置し、西側には土器溜め(NSX1)がある。間口2柱間(2.50m)×奥行2柱間(2.35m)、棟方位N-12°00'-Wを測る。

小規模な総柱の建物と考えているが、東柱は中央になく東西の柱筋は通らない。また、東柱を通る南北の柱筋は東方に片寄っている。東西の中央柱はきわめて小さく間口が1柱間(1.60m)の建物と考え、東側柱を庇等の支柱と捉えるべきかもしれない。掘方の平面形は基本的に楕円形(長径20~45cm、短径15~40cm、深さ10~30cm)を呈し総じて小規模である。多くの側柱に(5箇所)、柱痕状の丸い凹み(径10~20cm)が認められた。覆土は砂質の強い褐灰色粘土(Ⅲ層)を主体とし、小礫をわずかに含んでいる。柱根・礎板等は一切検出されなかった。北面中央柱の掘方底面には須恵器、土師器細片が層をなして堆積していた。

柱穴に伴った須恵器杯蓋の受部形態は杯蓋A3に比定されるものであったが、NSX1は須恵器杯

蓋AⅠ・A2、有台杯身AⅠ・CⅠ等、主に編年時期の遡る器種により構成されている。NSXⅠがNSB25に伴う土器溜めであるとすれば、当建物の存続時期は奈良時代前葉を大きく降らないことになる。

建て替えの痕跡は認められなかった。

NSB26

3C-h区のIV層上面(3面)において北面の側柱のみ検出できた。NSD19の南側に位置し、建物の大半は発掘区外にある。柱穴はNSI12・13に覆われていた。間口3柱間(5.60m)を数え棟方位N-9°00'-W前後を測る。

掘方の平面形には楕円形(東より2箇所)と隅丸方形様(西寄り2箇所)があり、後者は深く平坦な底面に礎板を残していた。礎板は比較的厚手の板材で樹皮面を残すものを含んでいる。丸柱を縦割りにした転用材であろう。西脇から2番目の間柱では3点の礎板が十字状に組み重ねられていた。3番目の間柱は2段に掘られ柱痕状の深い凹み(径30~40cm)を有していた。褐色砂質粘土(Ⅲ層)・緑灰色粘土(Ⅳ層)を覆土とし、覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭である。

重複する柱穴が見られ建て替えが行われた可能性もある。柱穴を覆うNSI13の出土土器には、奈良時代後葉の資料は少なかった。

NSB27

3C-e区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)、発掘区の境界に沿う3箇所の柱穴(北側柱)を確認した。全形は明らかでない。NSE2・NSI13に挟まれNSB26から西方へ約9m離れている。間口2柱間(2.55m)、棟方位N-8°30'-W前後を測る。平面円形ないし楕円形(長径45~55cm、短径45~55cm、深さ10~15cm)をなす掘方は総じて小さく浅い。平坦な底面に柱痕状の凹み・柱根・礎板等は一切認められなかった。覆土は褐色砂質粘土(Ⅲ層)を主体とする。

NSB28

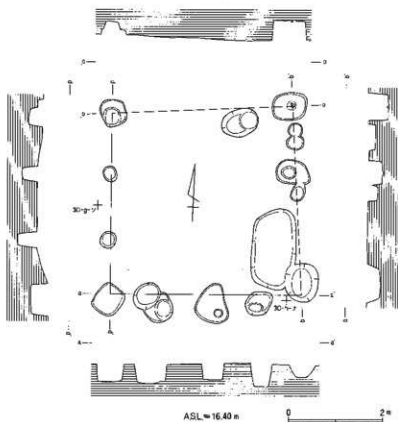
3C-a・b区のⅢ層2面において西側柱は確認できたが、他の柱穴の所在を知りえたのはV層(礎層)上面(3面)に至ってからである。東柱にあたる柱穴とNSI14が重複し(新旧関係は明確でない)、南側にNSI15・16が隣接している。北側柱が発掘区外に位置するため奥行は明らかでないが、間口2柱間(3.70m)、棟方位N-10°00'-Wを測る総柱の建物である。

掘方の平面形には隅丸方形様のものもあるが、円形ないし楕円形(長径45~55cm、短径40~50cm、深さ10~30cm)を基本とし、側柱を除き他は総じて浅い。底面に2箇所、柱痕状の丸い凹み(径12~18cm)が認められた。覆土は褐色砂質粘土(Ⅲ層)からなり、凹み内には黒灰色粘土塊が堆積していた。西側柱の柱間尺は均一でない。重複しあう柱穴は見られなかった。

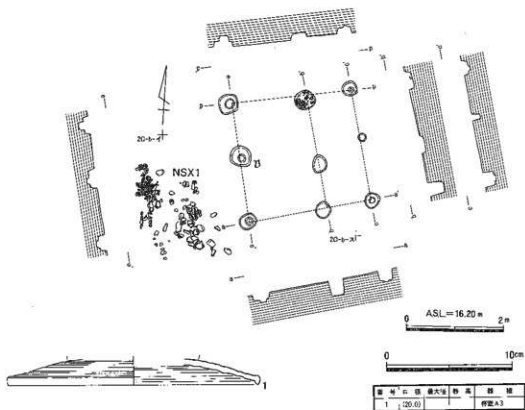
NSB29

2B-e・g・h区に跨がり、Ⅲ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSD22の南岸に接している。NSB30・31と重複し、東側にはNSI17・18がある。NSD21・22に挟まれた5棟の掘立柱建物群(NSB29~31・36・37)に属している。間口1柱間(5.80m)×奥行2柱間(3.00m)、棟方位N-18°30'-Wを測る。

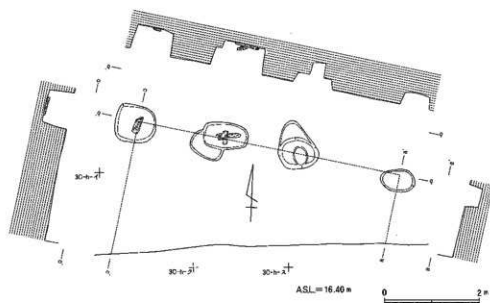
精査したものの南・北面に間柱は認められなかった。桁行の長い特異な柱穴配置を持つ建物である。掘方の平面形は基本的に円形ないし楕円形(長径30~60cm、短径30~50cm、深さ15~40cm)を呈し、東西側柱の柱穴規模に大小差が見られた。東側柱は総じて小さく底面には柱痕状の丸い凹み(径10~16cm)を有していた。間柱に比べ脇柱の掘方・柱痕状の凹みは深い。一方、西面の側柱は浅く平坦な底面をなしていた。砂質の強い褐色粘土(Ⅲ層)を主体的な覆土とし、東側柱では凹み内に黒灰色



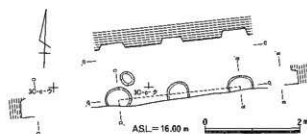
第85図 NS B24実測図



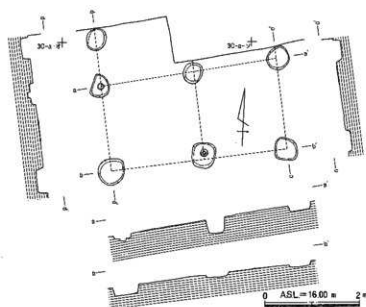
第86図 NS B25実測図・柱穴出土土器実測図



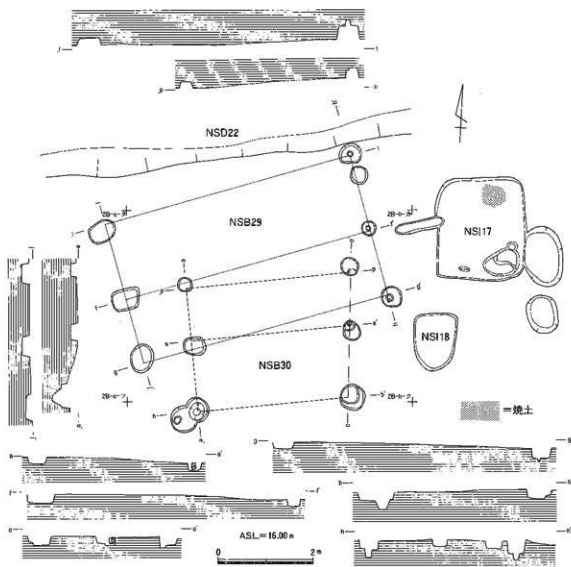
第87図 NS B26実測図



第88図 NS B27実測図



第89図 NS B28実測図



第90図 NS B29・30実測図

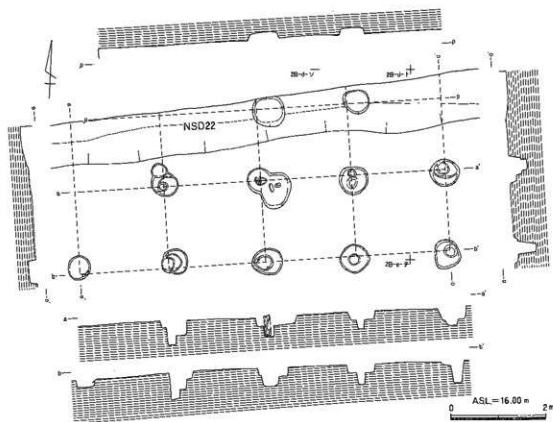
粘土塊と小礫が集中していた。柱根・礎板等は検出されなかった。

NS B30・31と直接重複する柱穴はない。検出面はNS B30に比べわずかに高い。

NS B30

2 B-e・h区のⅢ層をほぼ除去した後(3面)、すべての柱穴を確認した。NS B29・NS I 17・18と重複・隣接し、NS D21・22のほぼ中間に位置している。間口1柱間(北面3.45m、南面3.15m)×奥行2柱間(2.60m)を数え、NS B29と類似した柱穴配置を持つ。棟行方位 $N-8^{\circ}30'-W$ 前後を測る。

東西の側柱は平行せず北面に比べ南面が狭い。掘方は平面楕円形(長径30~55cm、短径30~50cm、深さ15~35cm)を呈し、北面の側柱はわずかに小さかった。南東の隅柱は2段に掘られ他の掘方底面に3箇所柱痕状の丸い凹み(径14~37cm)が認められた。東西隅柱の凹みは壁にゆるやかな傾斜を持ち、深くまで掘り込まれていた。NS B29S同様、砂質の強い褐色粘土(Ⅲ層)を主体的な覆土とする。東面の中央柱には、腐食した柱根が残っていた。重複する柱穴が1箇所ある。



第91図 NSB31実測図

共通する柱穴配置と検出面の高低差を評価すれば、NSB30からNSB29へ建て直しが行われた可能性も指摘できる。

NSB31

2B-d・e区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSB29と重複しNSD22により一部の柱穴が壊されている。北半が発掘区外におよぶため全形は明らかでない。間口4柱間(7.80m)を数え、NSD21の北側に分布する掘立柱建物群(NSB25・29~31・36・37-6棟-)のなかで最大規模を有する総柱の建物である。棟行方位 $N-6^{\circ}30'-W$ を測る。

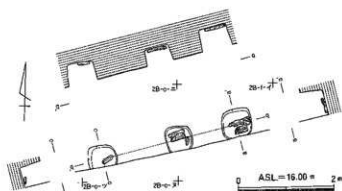
掘方は平面円形ないし楕円形(長径50~65cm、短径50~60cm、深さ15~55cm)をなし、底面に8箇所柱痕状の丸い凹み(径17~39cm)を有していた。南西の隅柱は著しく浅い。西面の間柱を欠いていた。砂質の強い褐色粘土(Ⅲ層)を覆土とし凹み内には黒灰色粘土塊が集中していた。覆土中に土器細片、こぶし大礫を若干含む。東柱にあたる掘方の凹み内から柱根が出土し、それと重複する柱穴底面には根固め礫を思わせる楕円形の礫が2箇所残存していた。柱根は底端部近くで細くくびれている。掘方断面(覆土)に見られる柱の抜き取り痕は明瞭で、南側柱の抜き取り方向は西方ないし東方と推定できる。

重複しあう柱穴や同じ掘方内に複数の凹みが認められ、建て直しが行われたと考えている。

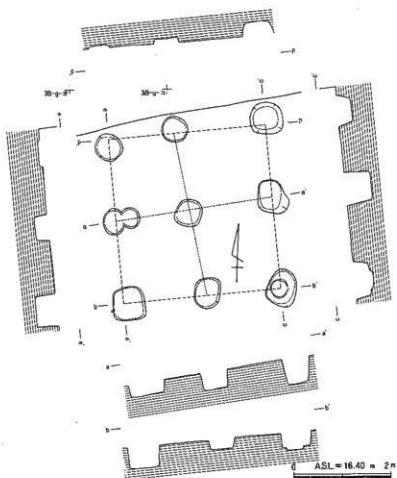
NSB32

Ⅲ層をほぼ除去した後(3面)、2B-c・f区の発掘区限界近くで北面の間柱のみ確認できた。NSD21から南方へ約4m離れている。間口2柱間(2.85m)、棟行方位 $N-16^{\circ}00'-W$ 前後を測る。

掘方は平面隅丸方形様(長径55~65cm、短径55~60cm、深さ35~45cm)をなし、平面規模は比較的



第92図 NS B32実測図



第93図 NS B33実測図

均一であった。脇柱はわずかに深い。

すべての掘方から礎板が検出された。礎板の多くは丸柱を縦割りにした板(角)材(長20.0~48.0 cm、7.0~17.0 cm、厚2.0~6.5 cm)で、面取りされた柱の表面を残しているものがある。また壁材を長方形に切断し、転用したと思われる幅広の(25.0×36.0×5.5 cm)礎板を1点含んでいた。東脇柱

および中央柱では平坦な底面に、これら板(角)材を3~4点、長辺を接するように敷き並べていた(一部2段に積み重ねる)。覆土は砂質の強い褐灰色粘土(Ⅲ層)・黒灰色粘土からなり、覆土断面における柱の抜き取り痕は明瞭である。

NSB33

3B-g・h区のⅢ層上面(1面)ですべての柱穴を確認した。NSB28・34のほぼ中間に位置し、南西方約6mにはNSH9がある。間口2柱間(3.20m)×奥行2柱間(3.40m)、棟方位N-7°30'-Wを測る。総柱からなり、平面形は正方形に近い。東柱を通る柱筋は逆時計回りの方向へ若干ねじれていた。

掘方は平面形ないし楕円形(長径55~70cm、短径45~65cm、深さ10~55cm)を基本とする。底面の高さにはばらつきが見られた。平坦な底面が一般的であるが、南東の隅柱には丸く浅い落ち込み(径36~39cm)が認められた。褐灰色砂質粘土(Ⅲ層)を主体的な覆土としわずかに小礫を含む。柱根・礎板等は一切検出されなかった。

建て直しの痕跡は顕著でない。

NSB34

3B-e区のV層(礫層)上面近く(3面)に至り初めてその所在に気づいた。NSH9、NSB35に挟まれNSB33からは西方へ約12m離れている。3箇所の柱穴が平安時代後期に掘られた井戸状遺構(HSE3)に破壊されていた。KSB1と重複している。間口2柱間(2.45m)×奥行2柱間(3.09m)を数え、南北方向に長い総柱の建物と考えている。東側から隣接・分布する複数の柱穴が検出でき、間口はさらに広がる可能性もある。棟方位N-2°00'-Wを呈する。

掘方は平面円形ないし楕円形(長径55~70cm、短径45~60cm、深さ10~55cm)をなし、平坦な底面の高さは一定していない。特に西面の隅柱は著しく浅かった。砂質の強い褐灰色粘土(Ⅲ層)を覆土とし、深くまで掘り込まれた掘方の覆土断面には明瞭な柱の抜き取り痕が観察できる。西面の南脇柱と中央柱の底面に根固め礫を思わせるこぶし大礫が残っていた。

西面の中央柱にあたる掘方から、須恵器高盤B(完形)が1点出土している。

NSB35

3B-b区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSB34の西方約6mに位置している。

間口2柱間(3.35m)×奥行2柱間(2.90m)、棟方位N-5°30'-Wを測り、間口がわずかに広い総柱の建物である。

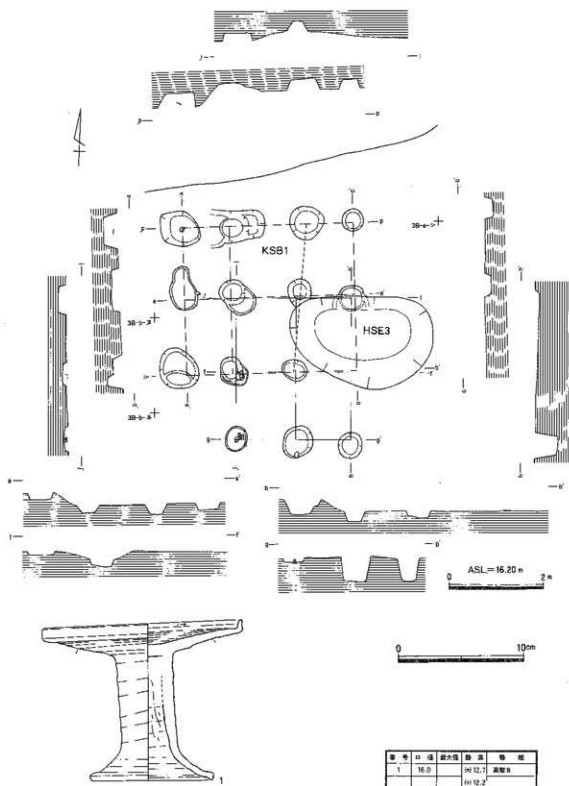
掘方は平面円形ないし楕円形(長径60~85cm、短径50~70cm、深さ10~20cm)をなし総じて浅い。底面はすべて平坦に掘られていた。西面の中央柱はやや大きく外方に張り出している。柱根・礎板等は一切検出されなかった。覆土となる褐灰色粘土(Ⅲ層)と黒灰色粘土は整った細互層を形成しており、柱の抜き取り痕(土壌の攪乱)は明瞭でない。

建て直し等の痕跡は認められなかった。南東の隅柱から砥石が1点出土している。

NSB36

2A-h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で数箇所の柱穴を検出したが、全形を知りえたのはV層(礫層)上面近く(3面)に至ってからである。NSH8、NS119・20の西方約10mに位置し、NSB37と重複している。NSD21の北岸までは約2mしかない。間口2柱間(3.15m)×奥行2柱間(3.50m)、棟方位N-5°00'-Wを測り総柱からなる。

掘方は総じて小規模で平面円形ないし楕円形(長径30~45cm、短径25~40cm、深さ5~20cm)をな



第94図 NS B34夷測図・柱穴出土土器夷測図

す。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体とし、柱穴により数個のこぶし大礫を含んでいた。底面に凹凸はなくすべて平坦に掘られている。検出面を異にするが（1面）、東側柱に並行する柱穴列（3箇所）が確認できる（NS B37に伴う可能性もある）。

3箇所の柱穴がNS B37と直接重複していたが、覆土はきわめて類似しており新旧関係を捉えることはできなかった。重複しあう柱穴の検出面の高低差を評価すれば、NS B37が後出的な建物となる。両建物の規模、柱穴配置は類似し、NS B36を若干西方へずらしNS B37へ建て直しが行われたと解することもできよう。

NS B37

2 A-h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で西面中央柱・南面脇柱を除き、その所在を確認した。NS B36と重複している。間口2柱間（3.15m）×奥行2柱間（3.50m）、棟方位N-5°00'-Wを測る。建物の規模・柱穴配置はNS B36となら変わるところがない。

掘方は平面円形ないし楕円形（長径35～45cm、短径30～40cm、深さ15～30cm）をなし、NS B36に比べわずかに大きく深くなる。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする覆土も大変よく似ていた。平坦な底面に2箇所柱痕状の丸い凹み（径14～22cm）が認められ、南西隅柱および西面の中央柱には小礫・こぶし大礫（根固め礫）が集中していた。東側柱に平行する3箇所の柱穴（列）がある。

検出面の高低差を根拠にし、NS B36に比べ後出的な建物と判断している。

第3節 欄 列（NSA）

NSA1

2 H-c区～3 H-b区にかけて直線的に並ぶ（N-23°30'-W）総数11箇所の柱穴がある。多くがⅢ層上面（1面）で確認できた。確認長24.65mを測りさらに南北方へのびていると思われる。NS D4にほぼ平行し、NS B2・3・4の東側を区画している。

すべて平面円形ないし楕円形（長径30～60cm、短径30～60cm、深さ10～35cm）の掘方を持つ。その規模は一定していない。平坦な底面に2箇所、柱痕状の丸い凹み（径6～14cm）が認められた。南半の柱間尺は比較的均一であるが北半ではばらつきが目立ち、底面の高さにも顕著な高低差が見られた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とする。

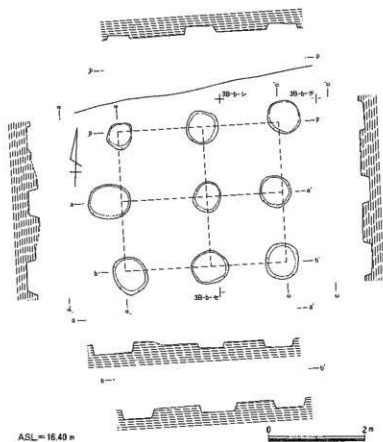
断定できないが一応掘立柱塼を想定している。

NSA2

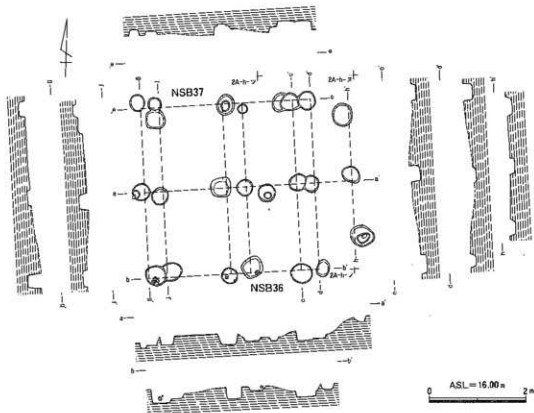
3 D-g・h・3 E-a・b区に跨がり、4棟（NS B15～18）の掘立柱建物群をコ状に取り囲む柱穴列である。Ⅲ層をほぼ除去した後（3面）検出された。東西面はさらに南へのび発掘区外におよんでいる。北面の柱穴列はNS B14とほぼ平行し、NS B15・16との間を通り抜けている。西面3箇所の柱穴はNS D17、NS H6と重複していた。その新旧関係は明確でない。西側に近接してNS B19、NS E2、NS I9が分布している。

掘方を持ち平面形には隅方形像と円・楕円形（長径40～80cm、短径45～90cm、深さ10～60cm）をなすものがある。規模、深さは一定していない。特に北面西半の掘方（4箇所）は深く、底面にこぶし大礫（根固め礫？）を数個残していた。平坦な底面を基本とするが、小規模な掘方には柱痕状の丸い凹み（径16～32cm）が認められる。褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）・緑灰色粘土（Ⅳ層）を主体的な覆土とし、小礫・黒灰色粘土塊を混入していた。

柱穴列の位置・形状から見て、NS B14・16・19等の建物群に伴う掘立柱塼と考えるのが妥当であろう。北面東半の柱間尺が広い箇所は、あるいは門かもしれない。重複する柱穴が4箇所見られる。



第95図 NSB35実測図



第96図 NSB36・37実測図

第4節 竪穴住居 (NSH)

NSH1

3G-a・d区のⅢ層をほぼ除去した後(3面)検出された。西半は調査区外にあり、NSD8および複数の平安時代以降の溝(HSD12・19等)に切断されているため全形は明らかでない。直線状をなす壁は南半で屈曲し、平面隅丸長方形様をなすと思われる。確認部分の長径5.10m、短径4.50m、深さ0.25~0.30mを測り、棟方位はN-50°30'-W前後を呈する。

平坦な底面の西寄りがわずかに高く規則的に並ばないが、床面に4箇所柱穴が認められた。柱穴の平面形は基本的に円形ないし楕円形(長径30~50cm、短径30~45cm、深さ15~25cm)をなし、平面隅丸方形様の南西端の柱穴には礎板を思わせる木片が残っていた。当竪穴住居とは無関係なのかもしれない。灰褐色粘土・暗茶褐色粘土・青灰色粘土がレンズ状に堆積し、その上面を有機質が強く炭化粒を多量に含んだ暗灰色粘土と炭化物の薄層が被っていた。柱穴内には灰褐色粘土が落ち込んでいた。焼土・壁溝は検出されなかった。

炭化物層より下位から出土した土器片には須恵器杯蓋A3、無台杯身A2・A3・D3、小型杯身B2、有台皿A3、無台皿B1・D2、壺E、土師器甕D3・D4がある。墨書土器を3点含み、内1点(須恵器無台杯身D3)はNSD9の出土破片と接合した。器種組成は近時期にまとまらないが、奈良時代後葉まで降る須恵器杯類は比較的少ない。

NSH2

2F-g区の調査区外に位置している。発掘終了後、調査区周辺に張りめぐらされた土止め用の板をはずしたところ、初めて土層断面(Ⅲ層下位)に突き刺さった土器群の所在に気づいた。遺構のほぼすべてがバイパス予定地外にありそこにはすでに厚さ2m程の客土がなされていたため、平面調査が実施できずいわゆるタヌキ掘りを行った。土器群は60×85cmの範囲内から重複・密集した状態で出土し、その一括性(同時性)は高いと思われる。周辺の土層断面にはⅣ層内へ落ち込むⅢ層が観察でき立ちあがり壁状を呈することから、竪穴住居に伴う土器群と判断した。住居の構造等は一切不明である。

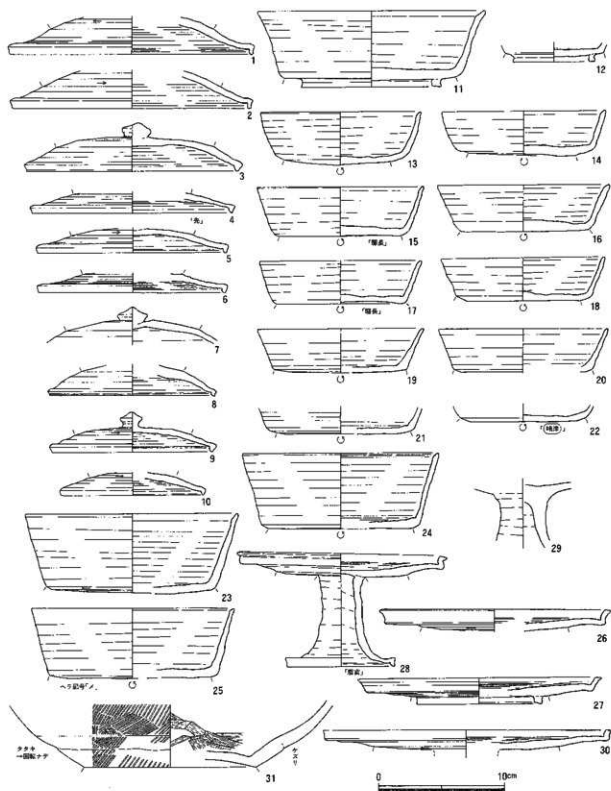
器種組成は須恵器杯蓋A3、無台杯身D3、土師器無台杯身C2、甕D3を主体とし(他に須恵器杯蓋A2、有台杯身E、無台杯身C・D1・D2・D4、小型杯身A2、有台皿C、無台皿B1、高盤A・B、陶臼、甕B2土師器無台杯身C3・D・E・F、無台皿B1・B2、甕A・D4、鍋A・B2がある)、5点の墨書土器、ミニチュア土器、砥石を含んでいた。形成時期は奈良時代後葉と考えられる。

NSH3

2F-d・g区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSH2から西方へ約10m離れ、NSH2・4のほぼ中間に位置している。大半が調査区外にあり未調査のため断定できないが、平面形は隅丸方形様をなすと思われる。東西幅2.65m、棟方位N-13°00'-W前後を測る。壁の立ちあがり明瞭な小竪穴住居である。

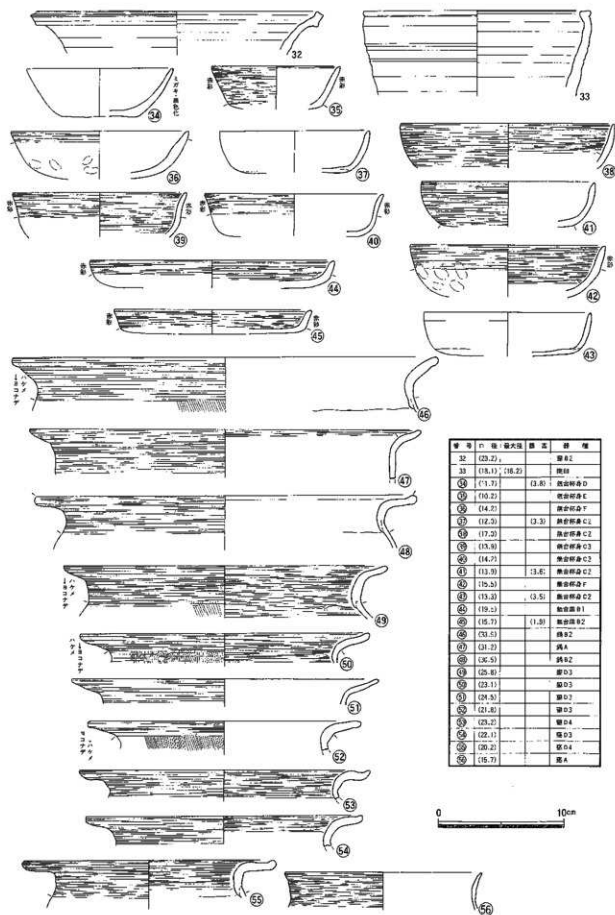
南壁の中央がわずかにくぼむ。住居内から4箇所、住居外から2箇所、また壁と重なる柱穴が1箇所検出された。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差(長径50~60cm・35cm、短径40~55cm・30~35cm、深さ10~20cm)を有している。総じて浅く住居外の柱穴には平坦な底面に柱痕状の丸い凹み(径18~24cm)が認められた。砂質の強い褐灰色粘土(Ⅲ層)を覆土とし、柱穴の底面近くには炭化粒が集中していた。焼土等は認められなかった。

出土土器は須恵器杯蓋A3を主体とし、次いで須恵器杯蓋A2が多い(他に須恵器有台杯身A3・



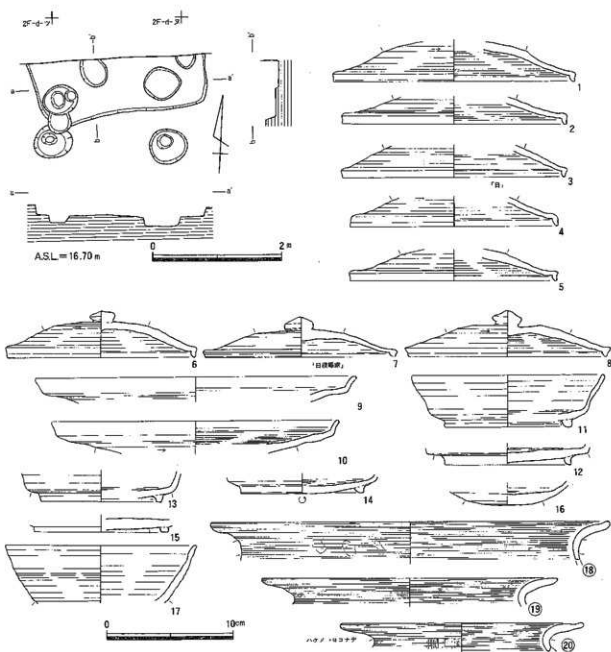
番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	番号	口径	最大径	高さ	底径	
1 (19.5)				杯蓋 A.2	9 (13.2)		3.2		杯蓋 A.3	17 (12.8)		3.4		甗片残身 D.2	25 (16.0)		(5.5)		甗片残身 D.3	26 (18.2)					
2 (19.2)				杯蓋 A.2	10 (11.6)				杯蓋 A.3	18 (12.5)		3.4		甗片残身 D.3	26 (18.3)				甗片残身 D.1	27 (19.3)					
3 (17.3)		3.8		杯蓋 A.2	11 (16.1)		6.0		甗片残身 C	19 (13.1)		(3.5)		甗片残身 D.1	27 (19.3)				甗片残身 C						
4 (16.2)				杯蓋 A.3	12				小甗片残身 A.2	20 (13.4)				甗片残身 D.3	28 (16.7)				甗片残身 D.3						
5 (15.3)				杯蓋 A.3	13 (12.7)		4.2		甗片残身 C	21				甗片残身 D.3	29				甗片残身 D.3						
6 (15.1)				杯蓋 A.3	14 (13.0)		3.5		甗片残身 D.4	22				甗片残身 D.3	30 (22.7)				甗片残身 D.3						
7				杯蓋 A.3	15 (13.1)		3.9		甗片残身 D.3	23 (16.8)		(6.7)		甗片残身 D.3	31				甗片残身 D.3						
8 (13.3)				杯蓋 A.3	16 (13.6)		3.7		甗片残身 D.3	24 (15.2)		(6.0)		甗片残身 D.3					甗片残身 D.3						

第98図 NSH2出土土器実測図(1)



番号	出土位置	出土層	出土時期
32	(23.22)		層B2
33	(18.11), (18.2)		層B1
34	(1.31)	(3.8)	段台跡身D
35	(10.2)		段台跡身E
36	(14.2)		段台跡身F
37	(12.3)	(3.3)	段台跡身C1
38	(17.2)		段台跡身C2
39	(13.9)		段台跡身C3
40	(14.7)		段台跡身C2
41	(13.3)	(3.8)	段台跡身C2
42	(15.5)		段台跡身F
43	(13.3)	(3.5)	段台跡身C2
44	(19.2)		段台跡身I
45	(15.7)	(1.3)	段台跡身I
46	(23.2)		層B2
47	(3.3)		層A
48	(3.3)		層B2
49	(25.8)		層D3
50	(23.1)		層D3
51	(28.3)		層D2
52	(21.8)		層D3
53	(23.2)		層D4
54	(22.1)		層D3
55	(20.2)		層D4
56	(15.7)		層A

第99図 NSH2出土土器実測図(2)



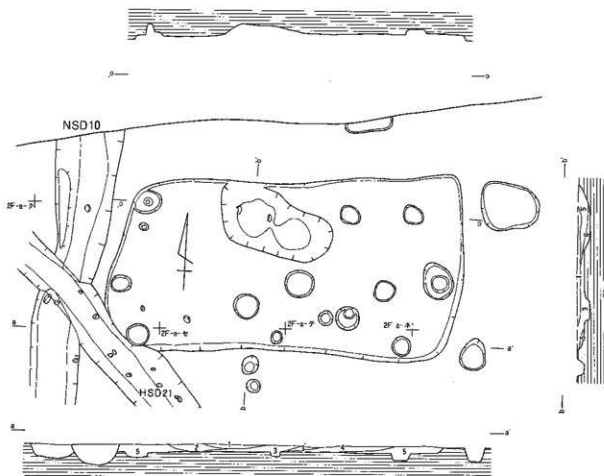
番号	口径	最大径	内径	胎厚	番号	口径	最大径	内径	胎厚	番号	口径	最大径	内径	胎厚	番号	口径	最大径	内径	胎厚
1	(19.2)			杯蓋 A3	6	15.1		3.7	杯蓋 A3	11	(15.2)				15				
2	(17.0)			杯蓋 A3	7	15.3		3.2	杯蓋 A2	12					17	(15.1)			
3	(17.9)			杯蓋 A3	8	15.3		3.7	杯蓋 A2	13					18	(15.6)			
4	(15.4)			杯蓋 A2	9	(15.5)			無台皿 C	14					19	(23.4)			
5	(15.5)			杯蓋 A3	10	(22.3)			無台皿 C	15					20	(19.2)			

第100図 NSH3実測図・出土土器実測図

C3・E、無台杯身A1、無台皿C、土師器甕D2・D3がある。墨書土器2点を含んでいた。)。奈良時代中葉以前に遡る可能性が大きい。

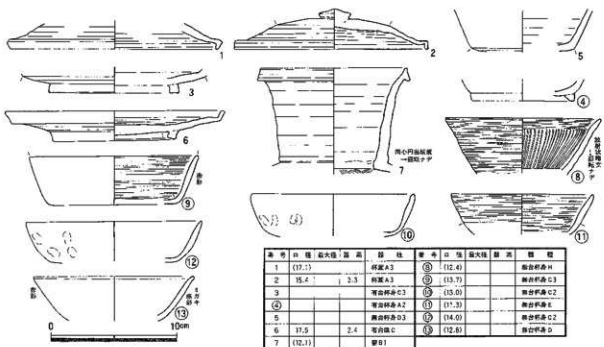
NSH4

2F-a・d区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSB5の柱穴を切断し、平安時代以降の溝



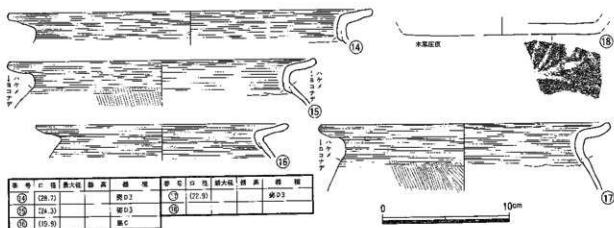
0 ASL=16.70 m 2m

- 1=炭化物混り灰色粘土 4=炭化物(少)混り黄灰色粘土
2=炭化物(多)混り黄灰色粘土 5=炭化物(少)混り黒色有機質粘土
3=炭化物混り黄灰色粘土 6=黄灰色粘土



番号	口径	高さ	特徴	番号	口径	高さ	特徴
1 (17.1)			灰土 A3	⑧ (12.4)			灰土 A3
2 15.4	2.3		灰土 A3	⑨ (13.7)			灰土 A3
3			黄灰色粘土 C3	⑩ (15.0)			黄灰色粘土 C2
⑪			黄灰色粘土 A2	⑪ (17.3)			黄灰色粘土 E
5			黄灰色粘土 C3	⑫ (14.0)			黄灰色粘土 C2
6 17.5	2.4		黄灰色粘土 C	⑬ (12.8)			黄灰色粘土 D
7 (12.1)			黄 B1				

第101図 NSH4 実測図・出土土器実測図 (1)



第102図 NSH 4 出土土器実測図 (2)

(HSD21)により西南隅が壊されている。NSH 3から西方へ約10m離れNSD10を挟んでNSH 5と隣接していた。東西壁に丸みを持つが平面形は隅丸長方形に近い。東西長5.10～5.60m、南北幅2.60～2.90m、深さ0.10m、棟方位 $N-88^{\circ}00'-E$ を測る。

壁は比較的緩やかに傾斜し平坦な床面に移行していた。住居内に14箇所、東・南壁の外側に4箇所、計18箇所の柱穴が認められた。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差(長径30～60cm・15～30cm、短径30～50cm・10～25cm、深さ10～20cm)がある。これらの柱穴は一見不規則に分布しているが、東西壁に沿って各3箇所柱穴が並び南壁のほぼ中央に小柱穴が見られる。東側中央柱の底面にはさらに一段深い掘り込みが認められた。他に柱痕状の丸い凹み(径12～18cm)を有する柱穴が2箇所ある。東西壁の中央柱は外方へ張り出し直接棟木を受ける棟持柱と推定できる。長方形穴主柱形式をなし切妻屋根の構造であろう。北寄りほぼ中央の床面が平面楕円形様(長径1.90m、短径0.95m、深さ0.15m)をなして落ち込んでいた。焼土等は一切検出されなかった。

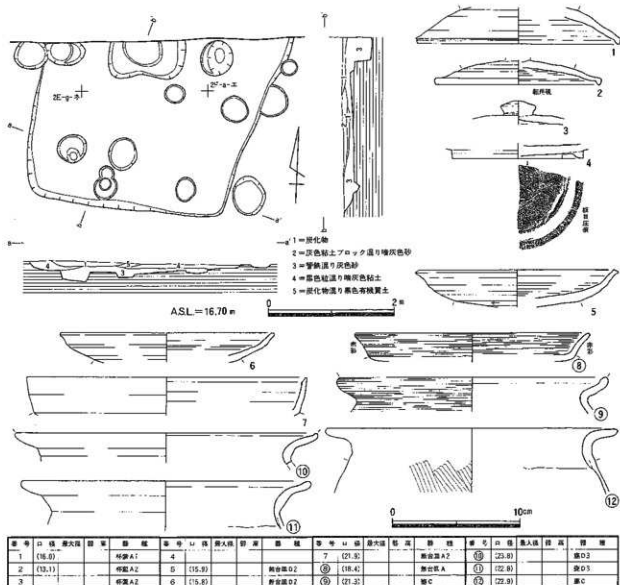
覆土はレンズ状に堆積した青灰色粘土・灰色粘土・黒色有機質粘土からなり、上層ほど多量の炭化物(粒)を混入している。若干こぶし大礫を含んでいた。

出土遺物には土器、転用碗(杯蓋)、ミニチュア土器、荖石状石製品がある。土器は土器器種D3の破片が目立つ他、主体となる器種は明確でない(須恵器杯蓋A3、有台杯身C3、無台杯身D3、有台皿C、甕B1、土器器有台杯身A2、無台杯身C2・C3・D・E・H、甕Cがある)。覆土の状況はNSH5と類似している。

NSH5

2E-g・2F-a区の皿層上面(1面)で確認できた。NSD10を挟んでNSH4の西側にあり、2E区～2G区にかけてほぼ直線状に並ぶ4棟の竪穴住居群(NSH2～5)のなかでもっとも西寄りに位置している。NSD11までの距離は約6mである。北端を調査していないが、東西幅3.20～3.50m、深さ0.05～0.15m、棟方位 $N-12^{\circ}30'-E$ 前後を測り、平面形は隅丸方形様を呈すると思われる。

北側に向うほど幅は広く、西側床面がわずかに低くなっていた。明瞭な屈曲部を持たず壁は緩やかに立ちあがっていた。住居内に9箇所、住居外東西側に4箇所、計13箇所の柱穴が検出された。平面円形ないし楕円形をなす柱穴は、大小差(長径40～65cm・25～40cm、短径35～40cm・20～30cm、深さ5～20cm)を有している。壁からわずかに離れ住居内を方形様にめぐる4箇所の柱穴が抽出できる。



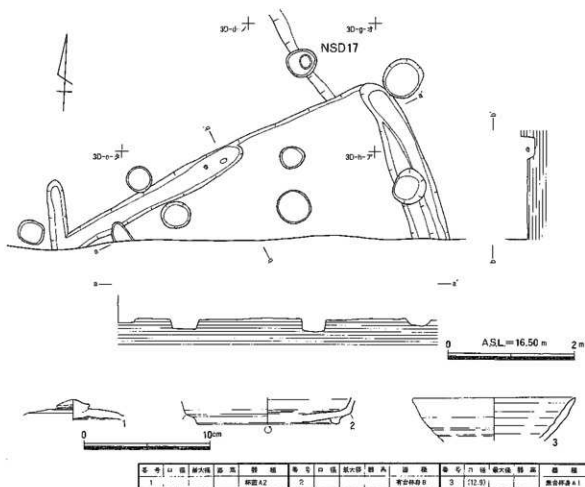
第103図 NSH 5実測図・出土土器実測図

方形4主柱形式と考えているが、未調査部分を含め東西側（長辺）に本来3箇所の柱穴が並んでいたとすれば、南壁のほぼ中央に外方へ張り出す柱穴が見られる点、NSH 4ときわめて類似した上屋の構造を推定することも可能であろう。南壁の中央柱には柱痕状の丸い凹み（径19cm）が認められた。北寄り中央の床面には2段に掘られた落ち込み（東西幅1.20m、深さ0.25m）がある。レンズ状に堆積した灰色砂・暗灰色粘土・黒色有機質土を覆土とし、上層ほど多量の炭化物（粒）を混入していた。最上位を炭化物のみの薄層が被い、柱穴内にも多量の炭化物が集中していた。焼土等は一切検出されなかった。

出土遺物は土器のみであるが転用碗（杯蓋）2点を含んでいる。比較的編年時期の遡る器種が多く（須恵器杯蓋A1・A2、無台皿A2・D2、土師器無台皿A、甕C・D3）、形成時期は奈良時代前葉～中葉にあると考えている。

NSH 6

3D-e・g・h区のⅢ層上面（1面）で確認できた。NSDI7を切断しNSA2と重複していた。



第104図 NSH 6 実測図・出土土器実測図

西接するNSH 7と共に2棟の竪穴住居群を構成しているが大半は調査区外にある。確認された北・東壁（確認東西幅5.80m）は直線状をなし、平面形は隅丸方形様を呈すると思われる。棟方位N-29°30'-W前後を測る。

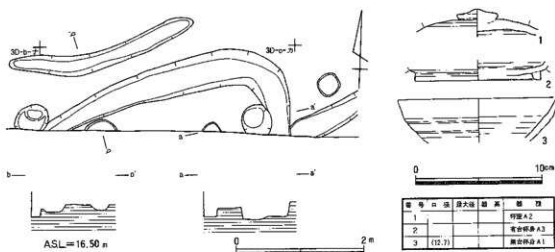
住居内外に平面円形ないし楕円形（長径40~65cm、短径35~60cm、深さ10~20cm）の柱穴が8箇所認められ北壁東半で途切れるものの、明瞭な壁溝（幅30~60cm、深さ10~15cm）を有していた。椽溝から枝分かれし北方へ突出する小溝がある。東壁の壁溝は2段に掘られていた。壁の傾斜は比較的急峻であった。覆土は褐色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とし、壁溝内には数個のこぶし大礫が落ち込んでいた。焼土等は検出されなかった。

出土土器には細片が多く器形を知りえたのはわずか3点（須恵器杯蓋A2、有台杯身B、無台杯身A1）である。

NSH 7

3D-b-e区のⅢ層上面（1面）で北・東壁の一部を確認した。大半は調査区外にある。NSH 6の西側に位置し、NSD19とNSB20を切断していた。北壁に若干丸みを持ち東壁間ではほぼ直角に折れる。確認長東西幅3.80m、深さ0.10m、棟方位N-17°30'-W前後を測る。

壁溝がめぐり壁の傾斜は急峻であった。柱穴は住居内に3箇所、住居外に2箇所、計5箇所認められ、平面円形ないし楕円形（長径35~55cm、短径35~45cm、深さ10~20cm）をなす。柱穴内に1箇所



第105図 NSH7実測図・出土土器実測図

柱痕状の丸い凹み（径25～32cm）が認められた。覆土は褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を主体とし、小礫と炭化粒をわずかに含んでいる。焼土等は検出されなかった。北壁と並行する小溝（長さ2.95m、幅0.25～0.30m、深さ0.10m）が1条ある。

出土土器はきわめて少量であるが、壁溝内に須恵器杯蓋A2、有台杯身A3、無台杯身A1の破片が落ち込んでいた。

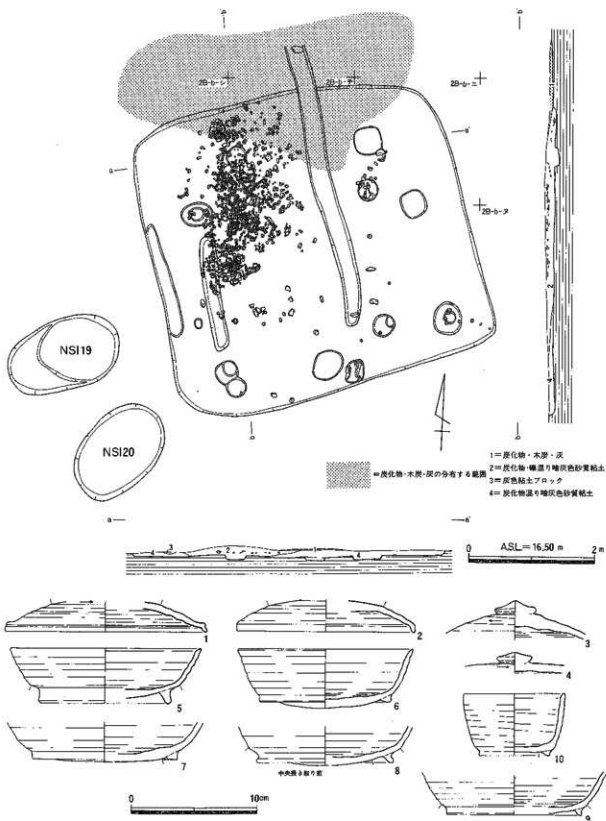
NSH8

2B-b区Ⅲ層上面（1面）において土器群の所在に気づいたが、堅穴住居の輪郭を捉えたのはⅢ層を約10cm掘り下げた後（2面）である。NSB29～31およびNSB36・37からなる二つの掘立柱建物群のほぼ中間に位置し、南側を流れるNSD21からは北方へ約2m離れている。NSI20・21に隣接する。北壁に丸みを持ち平面形は東西幅がわずかに長い隅丸長方形を呈する。東西幅4.60～5.10m、南北幅4.10～4.85m、深さ約0.05m、棟方位N-73°00'-Eを測る。

柱穴は4隅および南壁中央に配され、住居内に計12箇所検出された。平面円形ないし楕円形をなし大小差（長径40～55cm・30～40cm、短径35～45cm・30～35cm、深さ5～30cm）を有している。長方形4支柱形式の堅穴住居であろう。柱穴底面に5箇所、柱痕状の丸い凹み（径13～20cm）が認められ、南西隅には重複しあう柱穴がある。凹みを持つ小柱穴も方形の分布を示し、あるいは建て直しが行われたのかもしれない。3条の小溝（長さ1.85～4.50m以上、幅0.15～0.30m、深さ0.05～0.10m）が平坦な底面を南北方向に走っている。1条は北方堅穴外にまで伸びていた。西壁に接した小溝は壁溝の一部とも考えられる。焼土は認められなかった。覆土は炭化物の混じる暗灰色粘土からなり、砂質の強弱により上下2層に区分される。柱穴内とレンズ状に堆積した上層（砂質強）には多量の小礫が含まれていた。

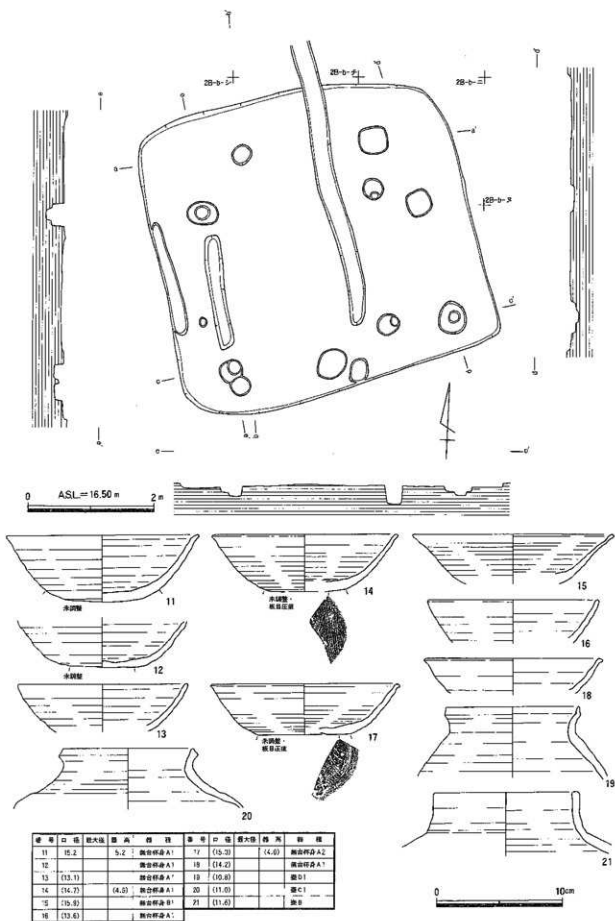
堅穴北西寄りの上層（炭化物・礫混じり暗灰色砂質粘土）内に多量の土器片が集中していた（3.00m×1.90m×0.05m）。土器片はさらにいくつかの小さなまとまりを形成し、著しい細片で接合し完形に復元しうる破片は見られない。床面から約5cm浮いており堅穴住居がある程度埋没した後、細片化され廃棄された土器群と考えている。土器群と堅穴を炭化物・木炭の混入した薄い灰層が広く（4.80m×2.30m）被っていた。

下層からの出土遺物は少ない。土器群に混じってミニチュア土器（皮袋型）が1点出土している。

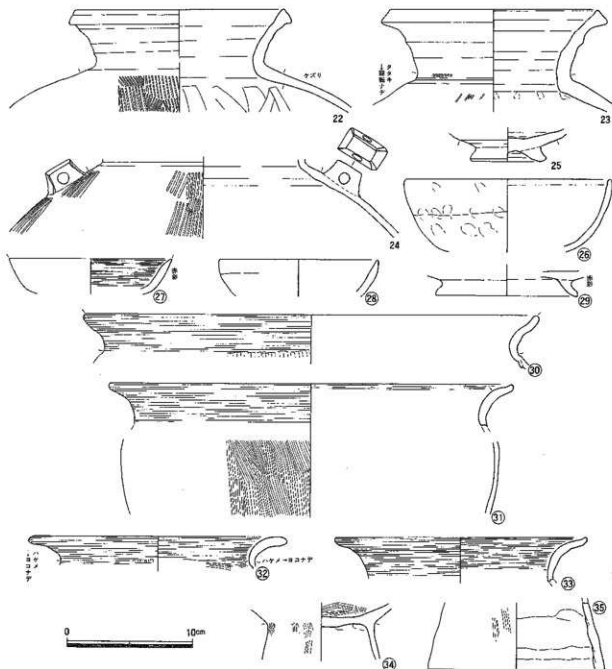


番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
1	16.0			平底A2	4				平底A2	7				寛底約肩A1	10	8.1		4.5	小型約肩A1
2	14.2			平底A2	5	15.1		(4.3)	有台約肩A1	8				寛底約肩A1					
3				平底A2	6	13.5		4.7	有台約肩A1	9				寛底約肩A1					

第106図 NSH 8実測図・遺物出土状態・出土土器実測図 (1)



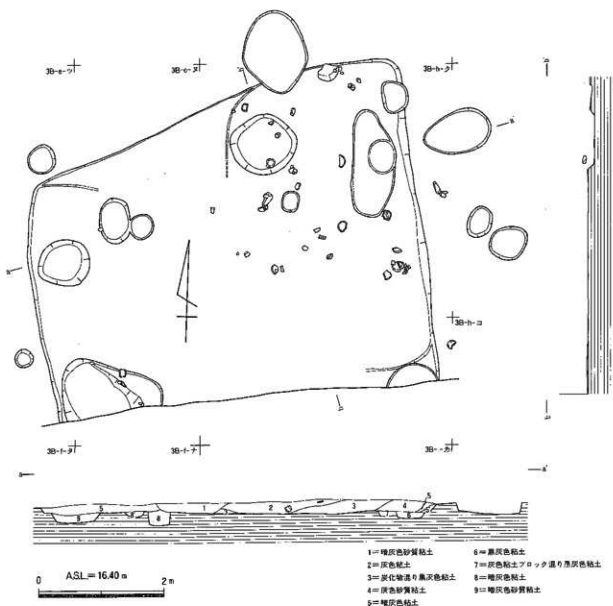
第107図 NSH8実測図・出土土器実測図(2)



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
22	(17.5)			甕A2	25	(16.1)			無台杯身A	28	(26.0)			甕B2	32				甕
23	(17.0)			甕B2	26	(12.4)			有台杯身C1	29	(32.0)			甕B2	33				甕
24				皿耳壺	27	(17.6)			有台杯身A	30	(20.4)			甕D3	34				甕
25					28				有台杯身B1	31	(22.8)			甕D3	35				甕

第108図 NSH8出土土器実測図(3)

土器群の器種組成は器形を知りえた破片で見ると、主に須恵器杯蓋A2、有台杯身A1、無台杯身A1からなる(他に須恵器無台杯身A2・B1、小型杯身A1、甕B・C1・D1、皿耳壺、甕A2・B2、土師器無台杯身A・C1・F、有台皿B1、甕D3、鍋B2、台がある)。奈良時代中葉にはすでに埋没していた可能性が高い。

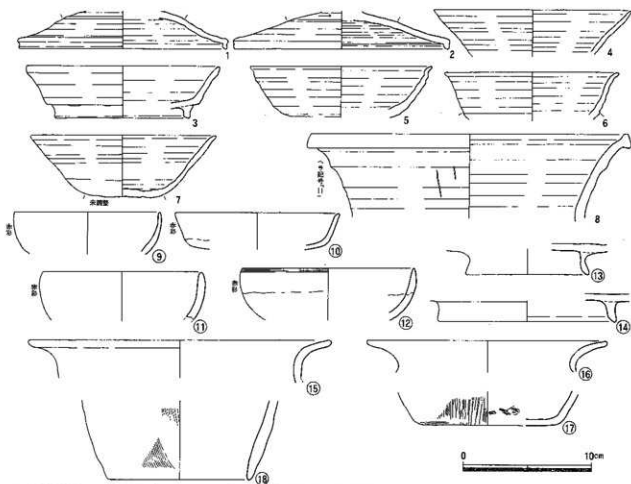


第109図 NSH9実測図

NSH9

3B-e・h区のⅢ層を約20cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSB33・34に隣接する。南端は調査区外におよび未調査である。西壁の幅が狭まり平面形は台形様をなすと思われる。東西幅5.95～6.05m、棟方位N-9°00'-Wを測る。

壁は急峻に立ち上がり、住居内に6箇所、住居外に4箇所、計10箇所の柱穴が認められた。柱穴は平面円形ないし楕円形をなし、大小差（長径45～80cm・30～40cm、短径40～75cm・25～40cm、深さ10～25cm）を有している。配置に規則性は見られない。北壁および東壁に接した床面の一部が高まり低い段差を呈していた。発掘区限界近くの床面と北東隅の堅穴内外に平面不定形・楕円形の落ち込み（4箇所-長径1.05～1.65m、短径0.70～1.00m、深さ0.15～0.40m-）が検出された。落ち込みには浅いものと2段に掘られたものがあり、覆土（暗灰色砂質粘土）中に多量の大小礫を含んでいた。



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
1	(16.3)			杯蓋A2	6	(13.5)			有台杯身B2	11	(12.5)			有台杯身A	15	(18.7)			甕D2
2	(15.4)			杯蓋A2	7	14.4		4.8	有台杯身B2	12	(13.7)			有台杯身A	16				
3	(15.0)	(4.1)		有台杯身B	8	(25.2)			甕B2	13				有台皿B1	17				
4	(15.3)			有台杯身B1	9	(11.5)			有台杯身A	14				有台皿A1					
5	(14.1)			有台杯身A1	10	(12.6)			有台杯身C3	15	(22.6)			甕A					

第110図 NSH9出土土器実測図

覆土は暗灰色粘土・灰色粘土・黒灰色（砂質）粘土からなる。北東寄りに散在していた土器片・大小礫は上位の炭化物（粒）混じり灰色・黒灰色粘土中に含まれ、床面から5～10cm浮いていた。

出土土器には土師器無台杯身Aの他、須恵器杯蓋A2、有台杯身B、無台杯身A1・B1・B2、甕B2、土師器無台杯身C3、有台皿A1・B1、甕D2、鍋A、甕がある。形成時期は奈良時代前期～中葉に位置づけられると思われる。

第5節 井戸状遺構（NSE）

NSE1

3D-d区の皿層を約15cm掘り下げたところ（2面）検出された。NSD17の西岸に位置しNSB14～22の掘立柱建物群に囲まれている。NSI9に切断される。

上端の平面形はほぼ円形（1.55m×1.50m）をなす。壁の傾斜は上半で約45度、下半では垂直に落ち平面隅丸方形様となる。IV層上面からの深さ約0.85mを測り、平坦な底面はIV層下の砂礫層にまで

達していた。覆土は主に下層が粘性の強い暗灰色粘土、上層は管鉄・炭化物の混じる暗灰色粘土からなり、レンズ状に堆積した各層が互層を形成していた。上層には炭化物（材）がわずかにふくまれていたが、井戸枠等は残っていないかった。底面に密着して数個のこぶし大礫が認められた。

NSE1から0.35～1.80m離れて方形にめぐる5箇所の柱穴が検出できた。柱穴は暗灰色砂質粘土（Ⅲ層）を覆土とし、平面円形ないし楕円形（長径38～54cm、短径36～44cm、深さ30～60cm）をなす。底面に2箇所柱痕状の丸い凹み（径18～21cm）が認められた。若干幅の広い南面は2柱間（4.00m）他は1柱間（東面2.70m、北面3.10m、西面3.10m）を数え台形様の配置を示す。NSE1はこの台形様平面の西南側に大きく片寄っているが、井戸はあるいは被屋を伴っていたのかもしれない。

出土土器（須恵器無台杯身A1・D2）は少量である。奈良時代後葉にはすでに使用されていなかったものと推定している。

NSE2

3C-e区のⅢ層上面（1面）で確認できた。NSB28の南東側に隣接し、平安時代以降の竪穴状遺構により北側の一部が壊されている。

平面形は南北方向に長い（主軸方位 $N-8^{\circ}00'-W$ ）楕円形をなす。長径2.10m、短径1.40m、深さ1.00mを測り、壁の傾斜は急峻であった。古名栗川の流路（自然科学編加藤論文参照）にあたる礫層を掘り込んでいたが、湧水量はさして多くない。覆土はレンズ状に堆積した暗青灰色粘土・暗灰色粘土・黒灰色粘土からなり、底面近くに炭化物（粒）を少量含んでいた。底面から40～50cm浮いた高さ（灰色粘土・炭化物混じり暗灰色粘土）に土器片・木材と大小礫の集積が認められた。木材の多くは縦割りにされただけの角（棒）材（長さ20～32cm）で、突起を持つ板材（壁・扉材？）が1点ある。井戸枠の残存ではなく、おそらく土器片・大小礫と共に井戸内へ投げ込まれたものであろう。また8点のミニチュア土器（杯身6点、壺1点、甕1点）を伴出している。

集積した土器の器種組成は須恵器杯蓋A3を主体とし、須恵器杯蓋A2、有台杯身B・C1、無台杯身A1・D1・D2・D3、土師器有台杯身A1、無台杯身A・B1・C1・C2、鍋B2、甕かなる。墨書土器を4点含む。奈良時代中葉に廃棄された井戸と考えられる。

第6節 竪穴状遺構（NS1）

NS11

3I-c区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSB1の南隣りに位置し、平安時代以降の溝により切断されている。

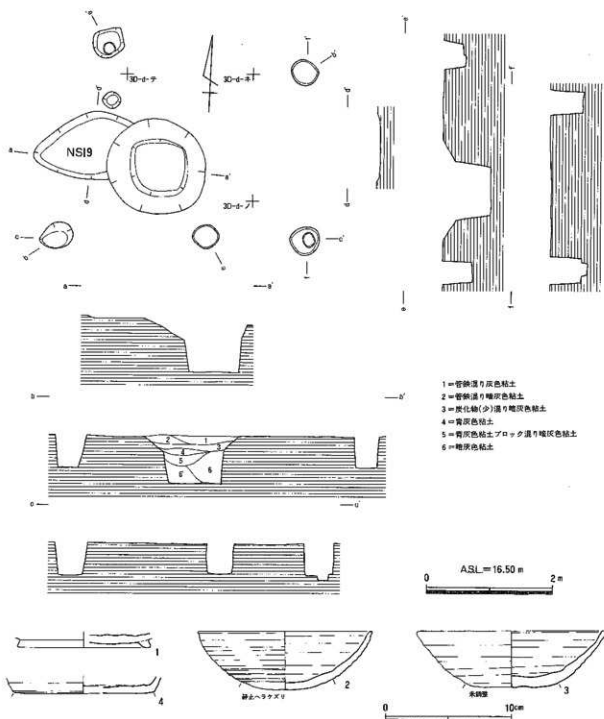
平面楕円形（長径2.05m、短径1.20m、深さ0.15～0.20m）、主軸方位 $N-31^{\circ}00'-E$ をなす。平坦な底面の中央がわずかに高まる。砂質の強い褐色灰色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。

出土土器は奈良時代に属するものであったが、細片・少量であり器形を復元しえた破片はない。

NS12

2H-c区のⅢ層上面（1面）で浅い凹みと密集する多量の土器片を検出した。NSD4の西岸に位置し、NSD6を被っている。

凹みは平面不定形（長径3.30m、短径2.00m、深さ0.05～0.15m）をなし、東端はNSD4の西斜面へと移行していく。底面に若干凹凸を持つが、中央部はへこみ断面すり鉢状を呈していた。砂質の強い褐色灰色粘土（Ⅲ層）・灰色粘土を覆土とする。土器片は凹みの南半、底面より5～15cm浮いた高さに集中し、凹みの外側にまで達していた。大半が須恵器の細片で完形に復元しえた破片はない。南北両端に離れて出土した破片や高低差のある破片どうしが接合し、密集する土器片は事前に細かく砕

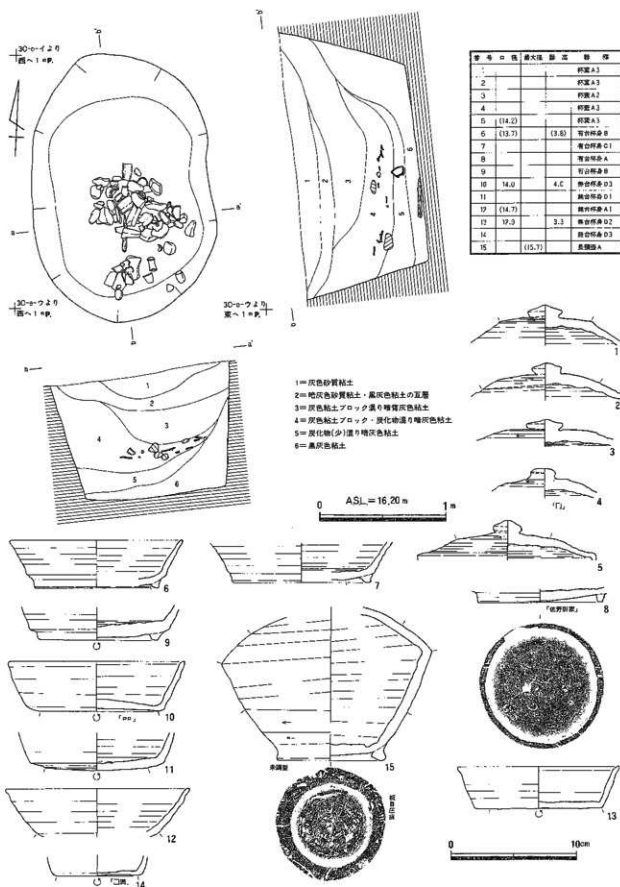


番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
1					2	13.8	4.6		須恵器壺 A1	3	15.8	4.5		須恵器壺 A1	4				須恵器壺 D2

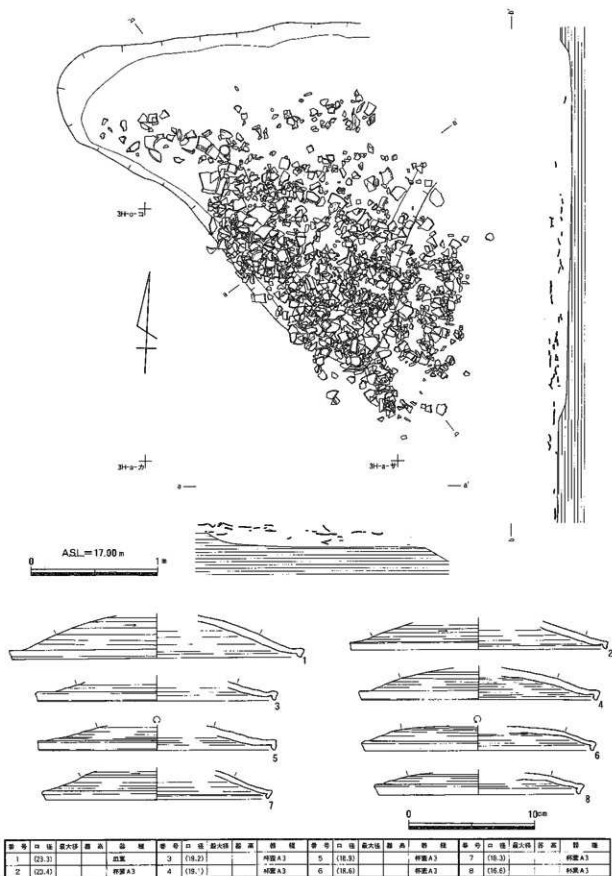
第111図 NSE I 実測図・出土土器実測図

かれ一時期に廃棄させたものと思われる。

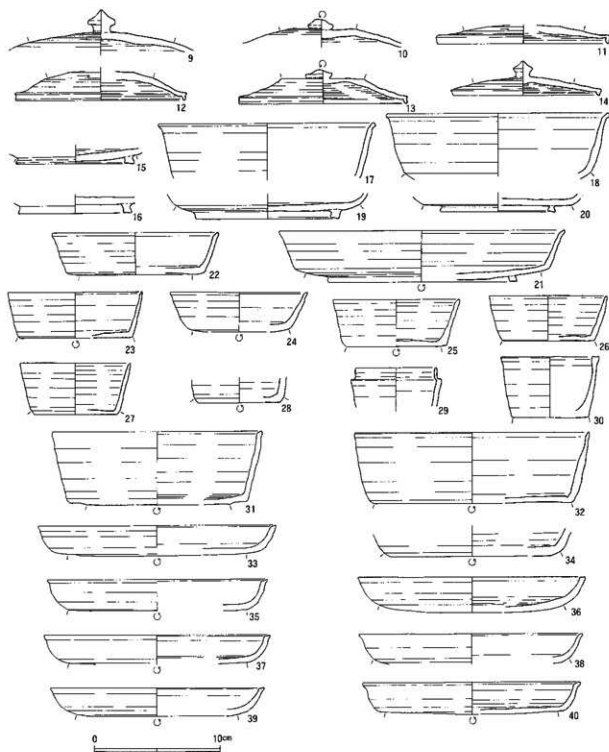
須恵器壺の獣足を3点含み(同一個体?)、大中型の須恵器壺B2の破片が目立つ。器種組成は須恵器杯蓋A3を主体とし、須恵器有台杯身E、無台皿B1・B2・D1も比較的多い(他に須恵器無台杯身D1・D2・D3・D4、小型杯身B1・B2、皿蓋、有台皿A3、無台皿D2、高盤A・B、



第112図 NSE 2実測図・遺物出土状態・出土土器実測図(1)

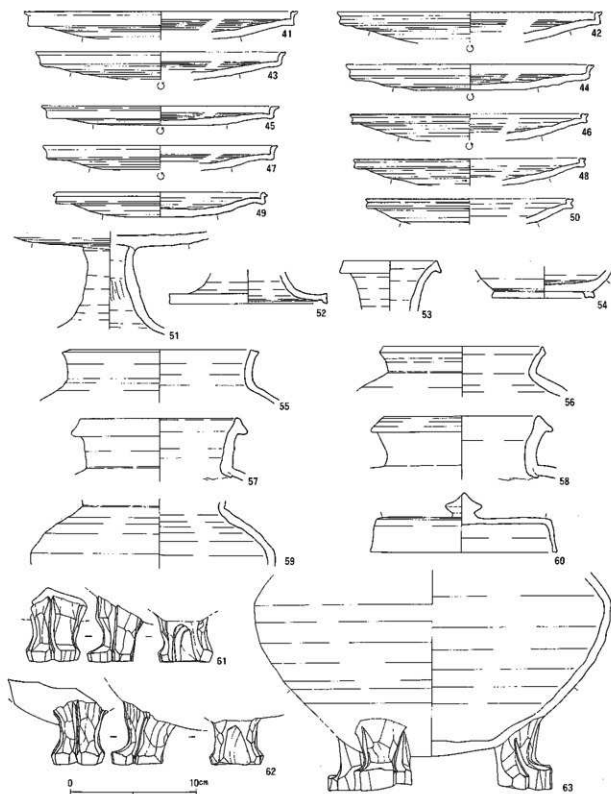


第114図 NS I 2実測図・遺物出土状態・出土土器実測図 (1)



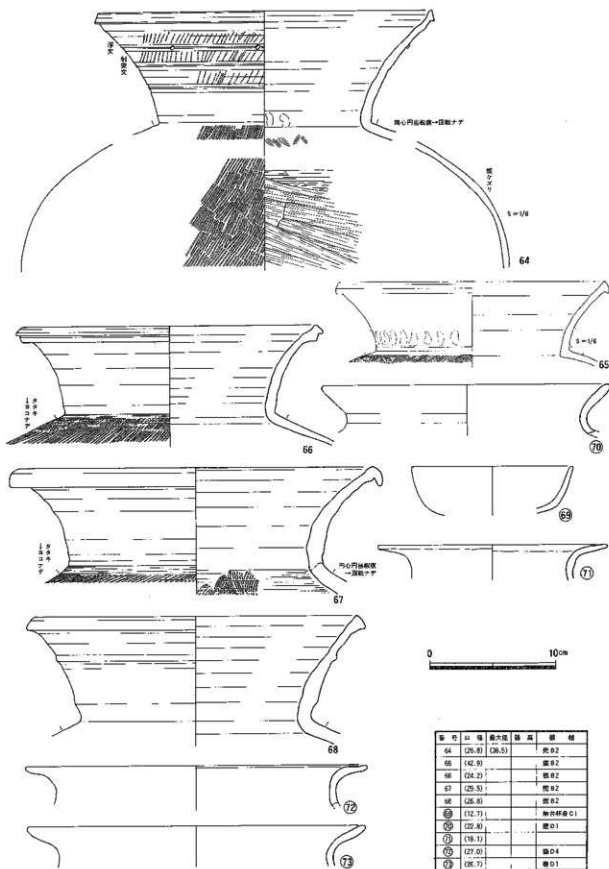
序号	口 径	最大径	高	器 型	序号	口 径	最大径	器 型	序号	口 径	最大径	器 型	序号	口 径	最大径	器 型
9				杯型 A3	17	17.2		带把杯盘 C	25	10.8	2.7	带把杯盘 D4	33	(14.9)	(7.4)	带把杯盘 D1
10				杯型 A3	18	17.7		带把杯盘 C	26	(9.4)	(3.6)	带把杯盘 D2	34			带把杯盘 D3
11	(13.4)			杯型 A3	19			带把杯盘 C	27	(8.8)	(4.1)	带把杯盘 D2	35	(17.8)		带把杯盘 D1
12	(13.6)			杯型 A3	20			带把杯盘 C	28			小带把杯 D2	36	(18.6)	(2.4)	带把杯盘 D2
13	13.4	2.7		杯型 A3	21	22.6	4.1	带把杯盘 A3	29	(6.5)	(7.2)	小带把杯 D1	37	(17.8)		带把杯盘 D1
14	11.9	2.7		杯型 A3	22	13.2	3.3	带把杯盘 D4	30	(7.8)	(4.8)	小带把杯 D1	38	(17.7)		带把杯盘 D2
15					23	(10.7)	(3.5)	带把杯盘 D2	31	(6.7)	(5.8)	带把杯盘 D4	39	(16.9)		带把杯盘 D1
16				带把杯盘 C	24	(10.9)	(3.1)	带把杯盘 D1	32	(18.4)	(5.3)	带把杯盘 D2	40	(17.3)	(2.6)	带把杯盘 D1

第115图 NS I 2出土器类测图(2)

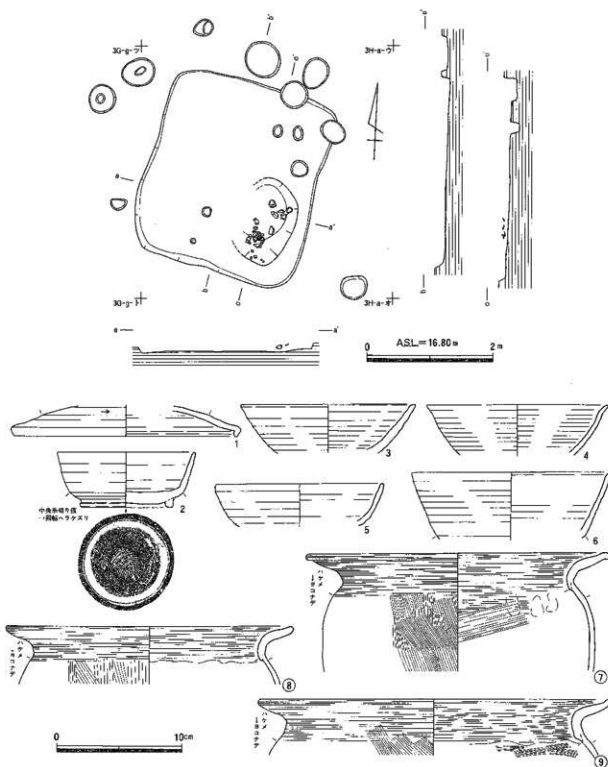


器号	口径	最大径	器高	器型	器号	口径	最大径	器高	器型	器号	口径	最大径	器高	器型	器号	口径	最大径	器高	器型
41	(21.6)			素面盆B1	47	(19.5)			素面盆B1	53	(9.3)			平底碗A	59	(19.4)			圈足
42	(20.9)			素面盆B1	48	(18.3)			素面盆B2	54				平底碗A	60	14.3	4.7		圈足A3
43	(19.8)			素面盆B1	49	16.9	2.0		素面盆B2	55	(15.6)			圈C	61				圈足
44	(15.6)			素面盆B1	50	(16.4)			素面盆B2	56	(13.1)			圈C	62				圈足
45	(15.6)	1.5		素面盆B1	51				素面盆A	57	(14.3)			圈A1	63		(26.3)		圈足
46	(15.6)			素面盆B2	52				素面盆B	58	(14.4)			圈A1					

第116图 NS I 2 出土土器实测图 (3)



第117図 NSI 2出土土器実測図 (4)



番号	口径	最大径	高さ	厚	番号	口径	最大径	高さ	厚	番号	口径	最大径	高さ	厚
1	(18.2)				4	(14.3)				7	(24.1)			
2	11.0	4.4			5	(13.4)				8	(22.7)			
3	(13.8)				6	(15.7)				9	(27.8)			

第118図 NSI 3実測図・出土土器実測図

暗灰色粘土からなり、上層には多量の炭化物が混入していた。

出土土器は細片・少量であり器形を復元しえた破片はない。

NS15

3F-d区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSD11の南岸直上に位置し、一部現代の溝により壊されている。

平面円形(径1.05m、深さ0.70~0.80m)をなし、壁は彎曲しながらほぼ垂直に落ちる。壁・底面の境で屈曲し底面には丸みを帯びていた。白色粘土塊・炭化物を含む暗灰色粘土を覆土とする。底面にレンズ状をなす炭化物層(最厚5cm)が堆積していた。こぶし大隙が数個落ち込み、底面から約30cm浮いた高さに机1点(内方へ傾斜する)が埋まっていた。

暗灰色粘土中から出土した墨書土器(須恵器杯蓋A3)1点を除き出土土器は皆無である。NSD11に伴う井戸とも考えたが、底面は灰白色粘土層(Ⅳ層)下の砂礫層にまで達しておらず、粘土層(不透水層)中にあるため一応堅穴状遺構として扱った。

NS16

3F-g区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ(2面)で確認できた。NSB6~10.5棟からなる獨立建物群の北東隣にある。柱穴状の落ち込みと重複していた。

平面隅丸方形様(南北幅1.05~1.20m、東西幅0.85~1.00m、深さ0.05~0.10m)、主軸方位N-33°00'-Wを呈する。浅いが急傾斜で落ちる壁を持ち、底面中央がわずかに高くなっていた。覆土は上下2層(上層=灰白色粘土-Ⅳ層、下層=灰色粘土)に区分される。

出土土器には摩耗した土師器細片が目立つ。

NS17

3E-g区のⅢ層上面(1層)で確認できた。NSD13の西岸から約3m離れ、NSB13の北方に位置している。

両端が尖った平面楕円形様(長径2.10m、短径0.85m、深さ0.10~0.15m)をなす。主軸方位N-42°00'-Eを測る。平坦な底面から壁が急峻に立ちあがり、断面は口字状を呈していた。覆土となる灰色粘土の有機質は底面に近づくに従って漸移的に増える。

器形を復元しえた出土土器はわずか1点(須恵器杯蓋A2)である。

NS18

2D-g区のⅣ層上面近くに至り(3面)検出できた。南西隅をNSD15に底面中央を柱穴状の落ち込みにより壊されている。北端は調査区外におよび全形は明らかでない。

平面形は隅丸方形様(東西幅2.45~2.60m、深さ0.10m)をなすと思われる。東壁は若干丸味を持ち、主軸方位N-11°00'-E前後を測る。緩やかに傾斜する壁が明瞭な屈曲部を介して平坦な底面に移行していた。南西隅に柱痕を思わせる木片を残した柱穴状の丸い落ち込み(径45~50cm)が1箇所ある。

覆土はレンズ状をなす灰白色砂質粘土(Ⅳ層)を主体とし、周縁部および柱穴状の落ち込み内には黒灰色粘土・暗灰色(砂質)粘土が堆積していた。

若干の須恵器細片を除き出土遺物は皆無である。焼土等は一切認められなかった。無支柱形式の小規模な堅穴住居跡の可能性もある。

NS19

3D-d区のⅢ層上面(1面)で確認できた。NSD17の西岸に位置しNSE1を切断している。平面楕円形様(長径1.65m、短径1.10m、深さ0.05m)を呈し、主軸方位N-79°00'-Eを測る。底

面に若干凹凸が見られるが、断面形はすり鉢状に近い。砂質の強い褐色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。

出土遺物は摩耗した土師器細片のみである。奈良時代中葉以前の井戸（NSE1）を切断しており、掘削時期が奈良時代後葉を大きく遡ることはないと考えている。

NS110

3D-d区のⅢ層上面（1面）で、NS19に隣接（西接）して検出された。柱穴状の落ち込み（2箇所）に切断されている。

西端が尖り平面不定形（長径1.85m、短径0.85m、深さ0.05～0.10m）をなす。主軸方位N-77°00'-Wを測る。断面すり鉢状を呈し、砂質の強い褐色粘土（Ⅲ層）を覆土とする。器形を推定しうる出土土器はない。瓦片を1点出土している。

NS111

2C-b・e区に跨がり、Ⅲ層上面（1面）で確認できた。蛇行するNSD21の南岸に形成された土器廃棄跡（土器溜め）である。

平面不定形（東西幅3.60m、南北幅1.20m、深さ0.05～0.10m）をなす浅い凹み（断面すり鉢状）内に、土器片が大きく東西2つのまとまりをつくり集積していた。西側の集積は底面に密着していたが、東側の集積は約5cm浮いていた。かなり離れて出土した破片どうしに接合関係が見られ、土器は廃棄前にすでに破砕されていたと考えられ、多量のこぶし大礫が混入していた。凹み内に堆積した覆土は、NSD21の上層（黄灰色砂質粘土）に類似している。

出土土器の器種組成は須恵器有台杯身A2を主体し、バラエティーに富む（須恵器杯蓋A2・A3一墨書土器一、有台杯身A1・B、無台杯身A1、高盤B、鉢A、土師器壺A・B、甕D1、鍋B1がある）。形成時期は奈良時代前葉～中葉と考えられる。

NS112

3C-h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認された。NS113に東接しNSB26の柱穴を切断している。

南半は調査区外におよび北端がNSD19と重複しているため全形は明らかでない。東壁に丸味を持ち、西壁は直線的にのびている（東西幅3.15m、深さ0.05m）。壁は緩やかに傾斜し、浅いが平坦な底面との境に明瞭な屈曲部を有しており、北西隅が一部外方へ開く。砂質の強い褐色粘土（Ⅲ層）を覆土する。

出土土器には奈良時代の須恵器片が目立つが、きわめて細片であり器形を復元しえた破片はない。大刀・刀子と思われる鉄片を2点出土している。

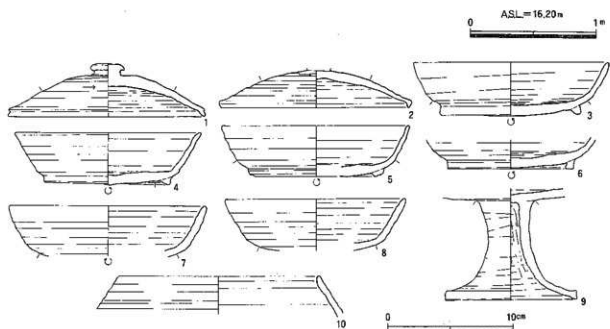
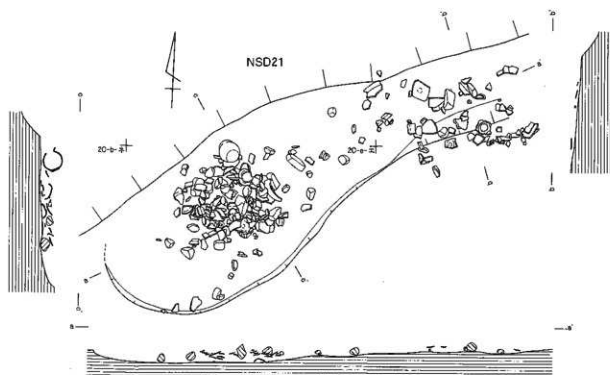
NS113

3C-e・h区に跨がり、Ⅲ層上面（1面）で検出できた。NS112の西側に位置し、NSB39の柱穴を切断している。

南半は調査区外にある。北東壁が一部凹んでいたが輪郭は総じて円弧をなす（東西幅8.85m、深さ0.05～0.10m）。

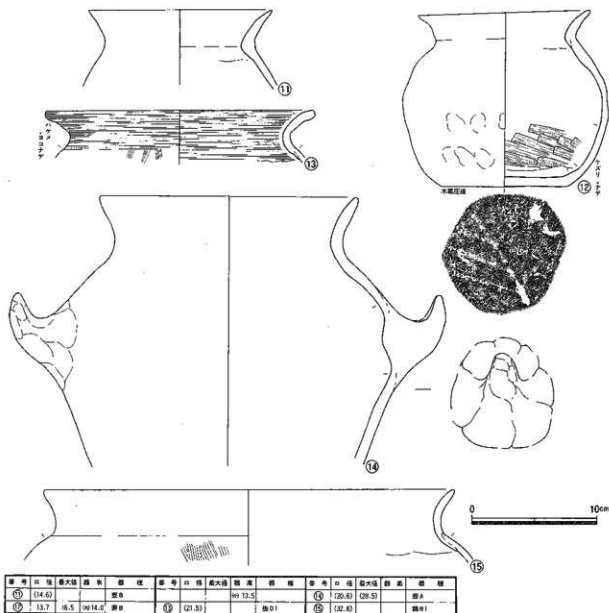
直線的に傾斜する壁から屈曲部を介して底面へ移行していた。底面には若干凹凸が見られる。底面西寄りと竪穴内に2箇所、小規模な土器片の集積が認められた。竪穴内の土器片は大小礫と共に散在的に分布し、底面からわずかに浮いていた。覆土は砂質の強い褐色粘土（Ⅲ層）からなり、多量のこぶし大礫を含んでいた。

竪穴内の土器片の大半は須恵器食器類である（須恵器杯蓋A2・A3、有台杯身A3・B・C1、無台杯身C、高盤B、甕、土師器甕D3がある）。他に土鍬が1点出土している。奈良時代中葉に形



番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種	番号	口径	最大径	器高	器種
1	15.7		4.2	杯蓋 A2	4	14.8		4.2	有台杯身 B	7	(15.7)			有台杯身 A2	10	(16.0)			器 A
2	15.3			杯蓋 A2	5	(15.0)			有台杯身 A2	8	(14.3)			有台杯身 A1					
3	15.5		4.3	有台杯身 A2	6				有台杯身 A1	9				有台杯身 A1					

第119図 NS I11実測図・遺物出土状態・出土土器実測図 (1)



第120図 NS I 11出土土器実測図 (2)

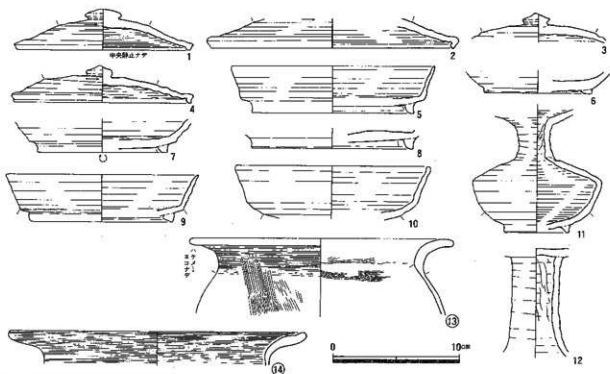
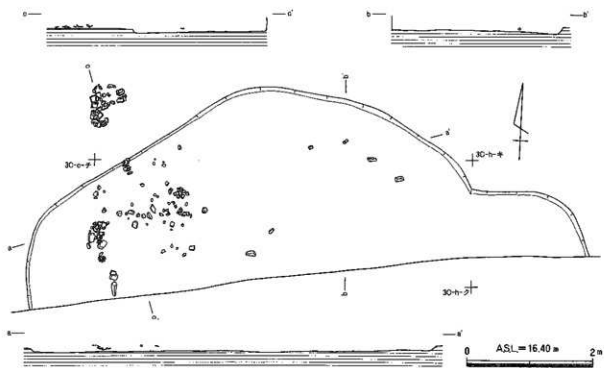
成された土器廃棄跡 (土器溜め) と考えている。

NS I 14

3C-a区のⅢ層上面 (1面) で確認できた。NS B 28と重複し、南側に隣接してNS I 15・16が分布している。

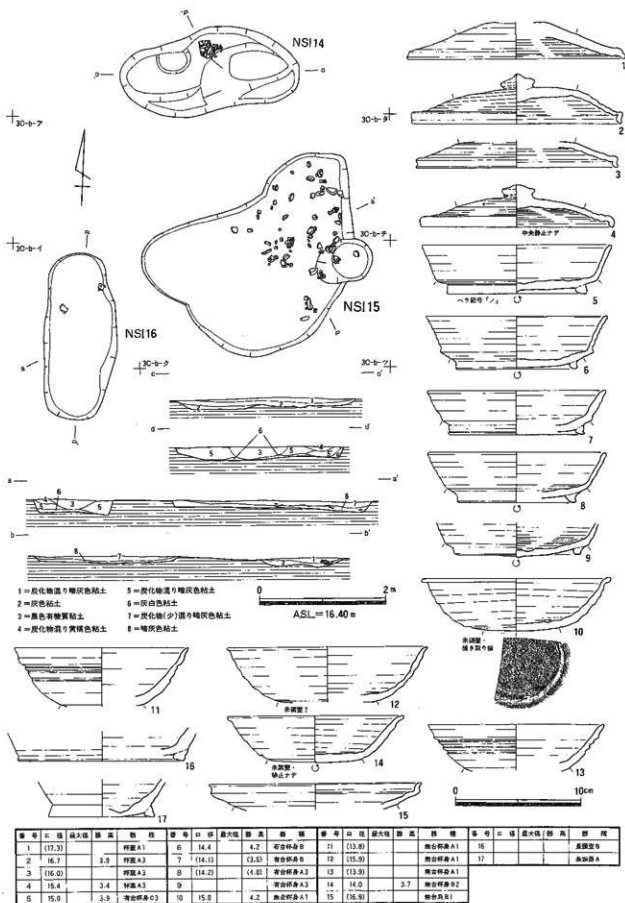
平面楕円形様 (長径2.85m、短径1.30m、深さ0.10~0.15m)、主軸方位N-86°30'-Eを呈する。底面に顕著な凹凸が見られ (断面すり鉢状)、東寄りが高く、北壁に接して丸い凹み (径35~55cm) がある。その東側に土器片の集積が認められた。覆土は灰色粘土を主体とし、上層は多くの炭化物を混入している。

集積していた土器片は摩耗の著しい土師器甕片である。

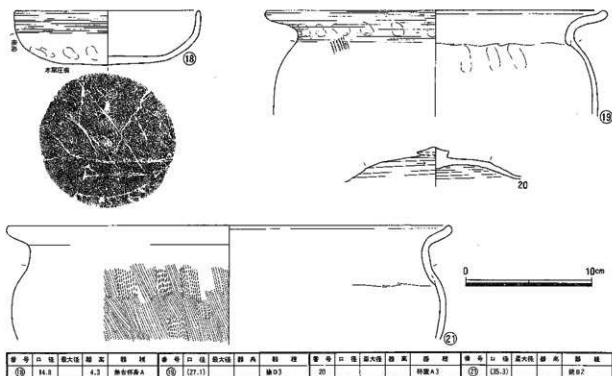


番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
1	14.2	3.2		杯蓋 A2	5	(16.1)		(3.7)	有台杯身 C1	9	(15.3)		(3.8)	有台杯身 C1	13	(20.3)			甕 D3
2	(19.3)			杯蓋 A3	6				有台杯身 B	10	(15.4)			有台杯身 C	14	(22.6)			甕 D3
3				杯蓋 A3	7				有台杯身 B	11		(10.2)		無					
4	14.3	2.9		杯蓋 A3	8				有台杯身 A3	12				無					

第121図 NS I 13実測図・遺物出土状態・出土土器実測図



第122図 NS14・15・16実測図 NS15出土土器実測図(1)



第123図 NS I 15出土土器実測図 (2) NS I 16出土土器実測図

NS I 15

3 C-b区のⅢ層上面 (1面) で確認された。NS B28の南隣りに位置している。柱穴状の落ち込みを1箇所切断する。

平面不定形 (東西幅3.55m、南北幅2.95m、深さ0.05~0.15m) をなし、急峻な壁と底面との境に明瞭な屈曲部を有していた。底面は総じて平坦であるが、東寄りわずかに凹む。覆土 (暗灰色粘土) は含まれる炭化物 (粒) の量の多少により上下2層に区分できた。炭化物を多く含む上層内に大小礫と土器片が混入していた。

出土土器の大半は須恵器食器類である (須恵器杯蓋A1・A3、有台杯身A3・B・C3、無台杯身A1・B2、無台皿B1、土師器無台杯身A、甕D3がある)。奈良時代前葉~中葉に形成された土器廃棄跡 (土器溜め) であろう。

NS I 16

3 C-b区のⅢ層上面 (1面) で確認できた。NS I 15の西隣りに位置している。

平面形は整った楕円形 (長径2.65m、短径1.15m、深さ0.10~0.25m) をなし、主軸方位N-1°00'-Eを測る。壁の傾斜は急峻で底面には凹凸が認められた。覆土断面に炭化物の混じる黄褐色粘土と暗灰色粘土を切断する黒色有機質粘土が観察でき、ほぼ堅穴が埋没した後、再び掘削が行われたことを示している。黒色有機質粘土にはこぶし大礫が混入していた。

出土土器は細片・少量であり、器形を知りえた破片は2点 (須恵器杯蓋A3、土師器鍋B2) しかない。

NS I 17

2 B-g・h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ (2面) で確認できた。NS B29の東側に隣接し

ている。

平面形は隅丸長方形（東西幅1.65～1.85m、南北幅2.00～2.15m、深さ0.05～0.10m）をなし、主軸方位N-0°30'-Wを測る。浅いか明瞭に立ちあがる壁と底面・壁間に屈曲部を有していた。南西隅はほぼ直角に折れ、西壁から外方へ断面口字状の小溝（長さ1.05m、幅0.22m、深さ0.05m）がのびている。平坦な床面の南東隅から2段に掘られた平面楕円形様（長径80cm、短径75cm、深さ25cm）の落ち込みが検出された。北寄りには焼土（50×45cm、厚さ6cm）が分布していた。竪穴外に2箇所、小規模な竪穴状遺構（平面楕円形、長径125cm・80cm、短径82cm・65cm、深さ16cm・18cm）を伴う。覆土は砂質の強い褐灰色粘土（Ⅲ層）を主体とし、小礫がわずかに混入していた。底面の落ち込み内には炭化物（粒）が目立ち鉄滓を含んでいた。断面すり鉢状をなす両側の竪穴状遺構内にも炭化物（粒）が集中していた。

砥石が1点出土している。出土土器には須恵器無台杯身D3、土師器無台杯身C1、無台皿B1、鍋B2がある。NSI3と同様に鉄滓を出土する点示唆的であるが、小鍛冶に関連する遺構と断定するには焼土があまりにも少ないように思う。形成時期は奈良時代後葉と考えられる。

NSI18

2B-h区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）で確認できた。NSI17の南西側に位置している。

平面形は楕円形様（長径1.20m、短径0.85m、深さ0.05m）をなすが、北壁の輪郭は直線的である。主軸方位N-2°00'-Eを測る。断面はすり鉢状を呈し、炭化物（粒）を含む褐灰色砂質粘土（Ⅲ層）を覆土としていた。

数点の摩耗した土師器細片を除き出土遺物は皆無である。NSI17に伴う遺構とも考えられる。

NSI19

2B-b区のⅢ層を約15cm掘り下げたところ（2面）確認できた。NSI20と共にNSH8の西隣りに位置している。

平面楕円形（長径1.80m、短径1.10m、深さ0.15～0.30m）、主軸方位N-65°00'-Eを呈する。壁はほぼ垂直に落ち、平坦な底面にさらに1段深い落ち込みが認められた。灰色粘土からなる覆土は3層に区分できる。最上層には多量の炭化物（粒）が混入していた。

出土土器はきわめて細片・少量である。1点（須恵器杯蓋A3）のみ器形を復元しえた。

NSI20

2B-b区において隣接するNSI19と同一面（2面）で検出された。

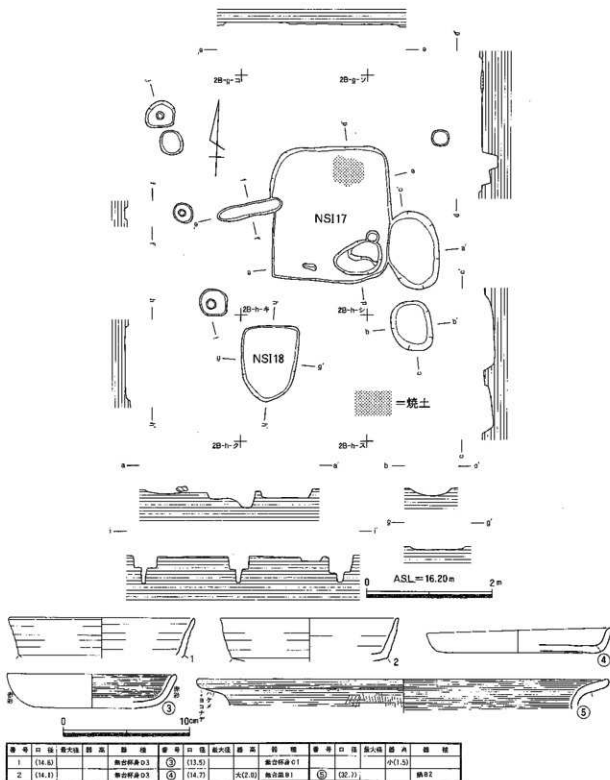
平面楕円形（長径1.65m、短径1.10m、深さ0.10～0.15m）をなし、主軸方位N-38°30'-Eを測る。壁は内彎しつつ傾斜し底面の中央がわずかに深くなっていた。覆土は2層に区分され（上層＝暗灰色粘土、下層＝灰色粘土）、上層には炭化物（粒）が若干含まれていた。

出土土器はすべて奈良時代に属する須恵器であるが、細片のため器形を知ることができない。NSI19と共にNSH8に伴う遺構であろう。

NSI21

3B-h区のⅢ層を約20cm掘り下げたところ（2面）、確認できた。NSI22と隣接しNSH9の東側に位置している。

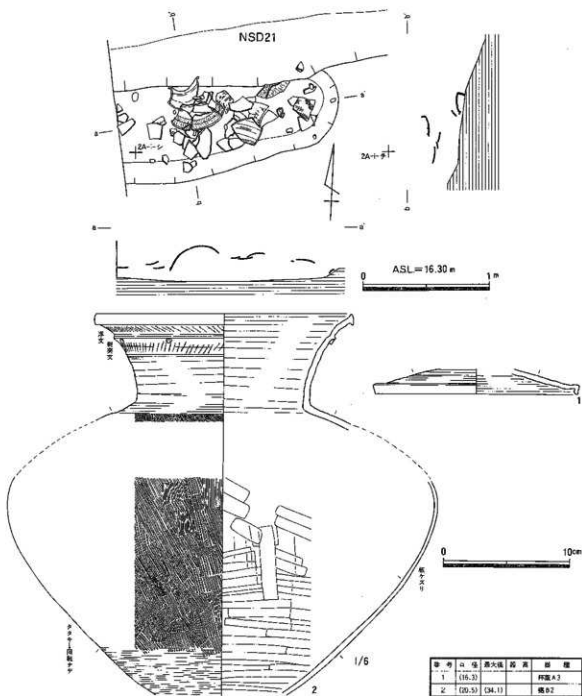
南端がわずかに尖り平面楕円形様（長径2.55m、短径1.20m、深さ0.05～0.15m）をなす。浅いが明瞭な壁を有し、わずかに凹凸のある底面は北に向かい徐々に深くなっていた。主軸方位は南北（N-0°00'-E-W）を指す。砂質の強い灰色粘土・暗灰色粘土・灰褐色粘土が複雑に混じり合い覆土



第124図 NS I 17・18実測図 NS I 17出土土器実測図

を形成していた。

出土土器はすべて破片である。須恵器無台杯身A1が主体をなし、他に須恵器杯蓋A1、有台杯身C3、土師器有台皿A1・A2、無台皿A、甕D3が見られる。奈良時代前葉に位置づけられる土器



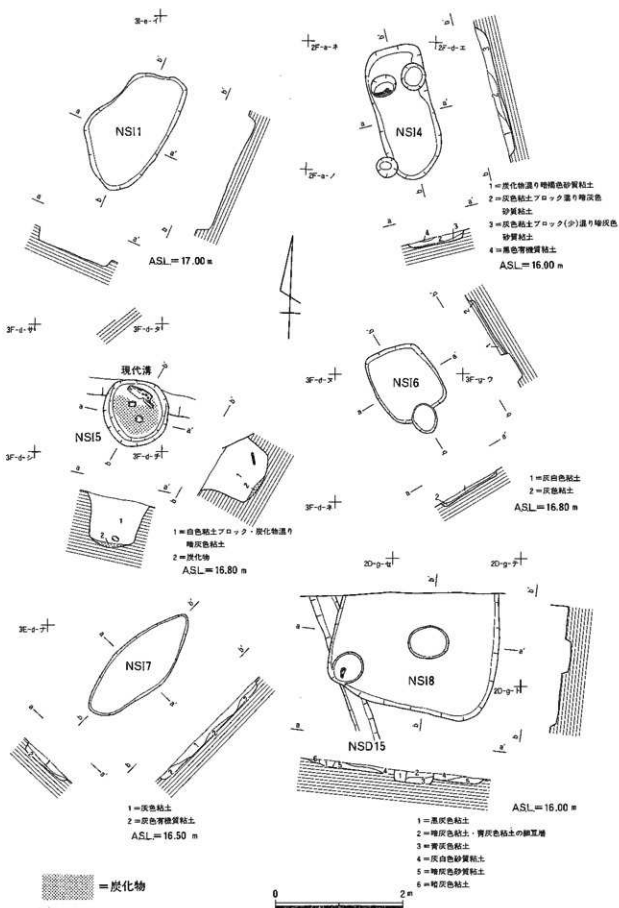
第125図 NS I 23実測図・遺物出土状態・出土土器実測図

廃棄跡（土器溜め）と考えている。

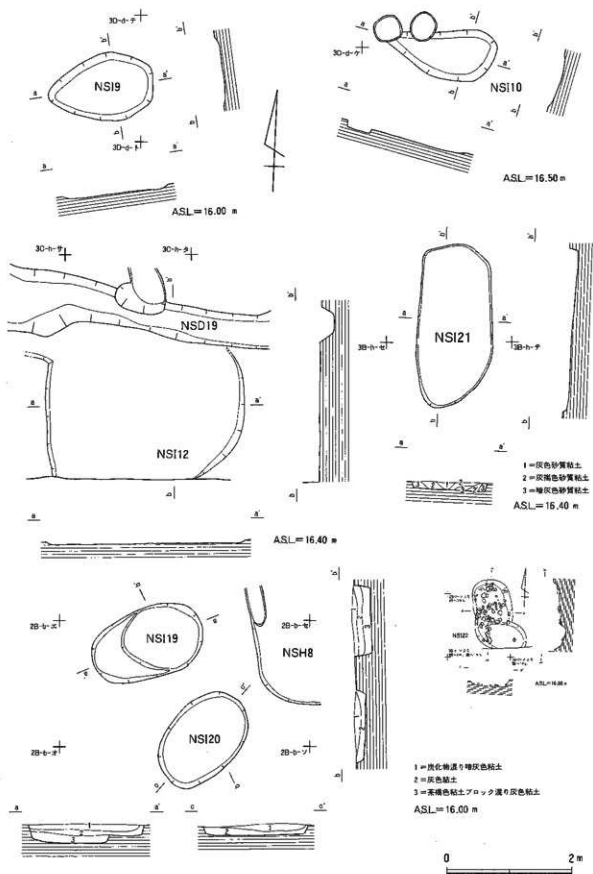
NS I 22

3 B-h区のⅢ層上面（1面）で確認できた。NS I 21の南隣りに位置している。

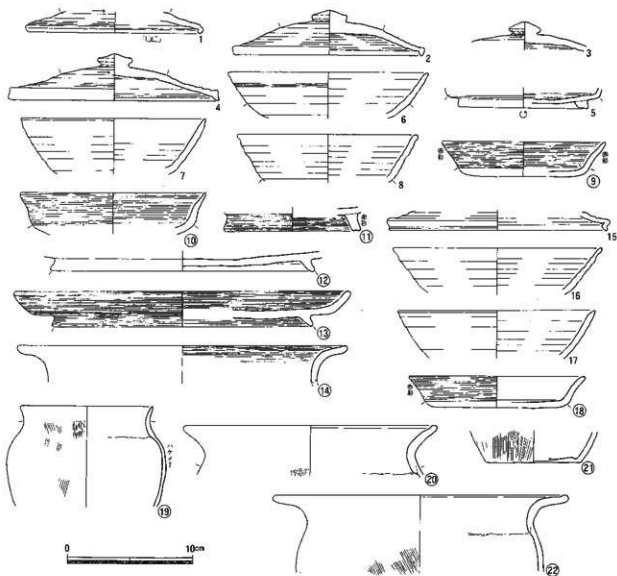
平面槽円形様の竪穴状遺構が、2箇所重複したような平面形を示し（東西幅0.80m、南北幅1.10m、深さ0.05～0.20m）、主軸方位-N-6°00'-W前後を測る。横は直線的に傾斜し底面との境に屈曲部を持つ。南に向かい深くなる底面の南端はすり鉢状に落ち込んでいた。覆土（褐灰色砂質粘土-Ⅲ層-）はレンズ状に堆積せず、比較的短期間に埋没したと考えられる。一段浅い底面から層をなす多



第126圖 NSI1・4・5・6・7・8実測図



第127図 NSI 9・10・12・19・20・21・22実測図



番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種	番号	口径	最大径	高さ	器種
1	(14.1)			杯蓋 A3	7	(14.7)			無台杯身 A1	13	(26.7)		(2.8)	甕身 A7	19	(10.5)	(12.6)		甕 B
2	15.3	3.6		杯蓋 A2	8	(14.4)			無台杯身 A1	14	(26.2)			蓋 D3	20	(20.1)			甕 D1
3				杯蓋 A3	10	(13.8)	(2.8)		無台皿 A	15	(17.7)			杯蓋 A7	21				
4	16.7	3.5		杯蓋 A1	11	(14.7)			無台皿 A	16	(12.6)			無台杯身 A2	22	(22.5)			蓋 D3
5				無台杯身 A3	12				甕身 A1	17	(15.7)			無台杯身 A1					
6	(15.8)			無台杯身 A1	13				甕身 A2	18	(14.8)	(2.5)		無台皿 A					

第128図 NS I 5・7・19・21・22出土土器実測図

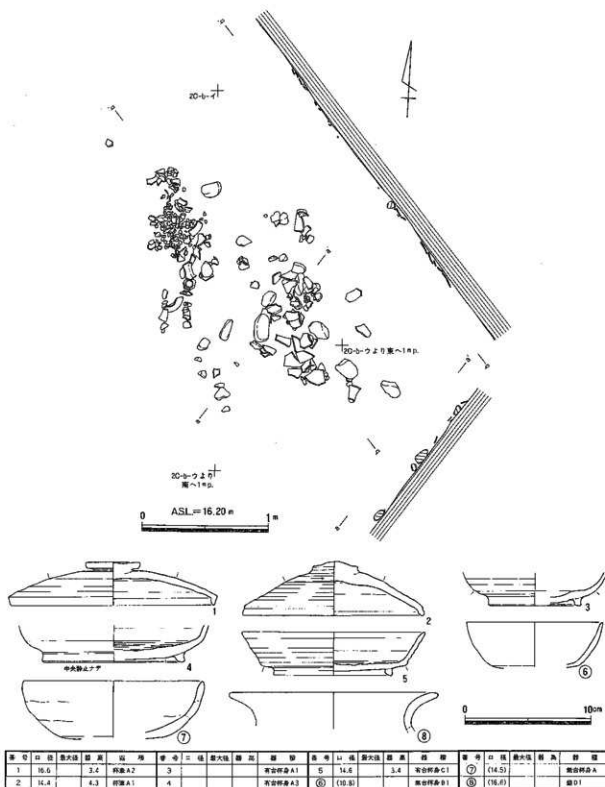
量の土器片とこぶし大礫が検出された。

土器片は土師器を主体とする。器形を復元しえた破片には、須恵器杯蓋 A3、無台杯身 A1・A2 土師器無台皿 A、甕 B・D1・D3 がある。形成時期は奈良時代中葉以前まで遡るものと思われる。土器廃棄跡（土器溜め）であろう。

NS I 23

2A-i 区の耕作土（I 層）除去中に土器群の所在に気づいたが、その分布範囲を明確に捉えたのはⅢ層上面（1 面）においてである。NS D21 の南岸に形成された土器廃棄跡（土器溜め）と考えている。

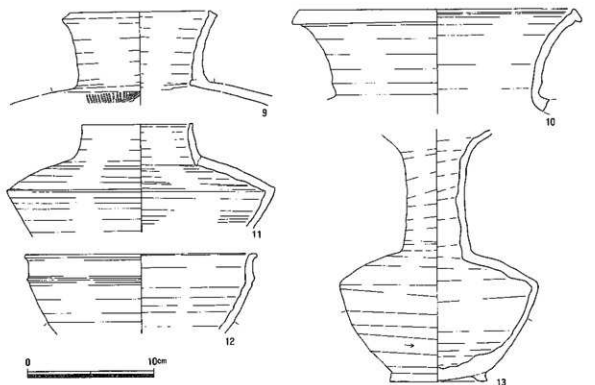
西端が調査区外におよぶため平面形は明らかでない。断面すり鉢状をなす落ち込み（深さ 0.05～



第129図 NSX I 実測図・遺物出土状態・出土土器実測図（1）

0.15m) 内に、1 箇体文の須恵器甕B 2 片が集積していた。口縁部片は西寄りから胴部・底部片は東寄りから出土し、NS D2I 内の最上層と同じ茶灰色粘土を覆土としていた。

形成時期は奈良時代後葉と考えられる。須恵器杯蓋A 3 の破片を 1 点伴出している。



番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
9	(72.3)			縁部1	11	(8.8)	(21.22)		胴部	13			15.5	胴部A2
10	(22.9)			縁部2	12	(16.4)			縁部					

第130図 NSX1出土土器実測図(2)

第7節 その他の遺構 (NSX)

NSX1

2C-b区のⅢ層を約10cm掘り下げたところで(2面)、集中する土器片・大小礫に気づいた。NSB25の東隣りに分布し、NSD21の北岸から約3m離れている。

分布範囲は東西3.10m、南北1.60mにわたり重なりあう破片は少ない(厚さ5~10cm)。東西2つのまとまりに区分でき、東側では大形の須恵器片とこぶし大礫が目立った。西側に密集する土器片は総じて細片化していた。落ち込み等に伴った土器群ではないが、その一括性は高いと考えられる。出土土器のパラエティー(須恵器杯蓋A1・A2、有台杯身A1・A3・C1、鉢B、壺B、長頸壺A2、甕B1・B2、土師器無台杯身A・B1、甕D1)は、奈良時代前葉の器種組成の一端を物語っていると思われる。

第Ⅲ章 遺 物

奈良時代に比定しうる出土遺物には、土器・木簡・土製品・瓦・埴・部材・木製品・金属製品・銭貨・石製品等がある。土器・石製品は包含層（Ⅲ層）中にも密度高く含まれていたが、木製品・金属製品・銭貨等は主に溝状遺構（NSD）内に堆積していた砂質粘土層より出土した。特にNSD3・4・11・13からの出土量が多かった。

以下、遺構に伴った遺物を中心に記述する。

第1節 土 器（第168図～第171図）

出土土器量は44×60×15cmのポリコンテナに約200箱である。内約3分の2は遺構内から出土し、須恵器が約75%、土師器が約25%を占める。明らかに奈良時代にまで遡る施釉陶器は発見されなかった。用途・形態・製作技法・生産地等を基準として、須恵器は21器種76類に、土師器は13器種47類に分類できる。

本節では各器種の分類基準・特徴についてのみ述べ、その伴出関係・編年的位置等の整理は第Ⅴ章にゆずる。

1) 須恵器

須恵器には、杯蓋・有台杯身・無台杯身・小型杯身・皿蓋・有台皿・無台皿・高盤・鉢・陶臼・甕蓋・壺・小型壺・長頸壺・獣足壺・四耳壺・瓶・平瓶・水瓶・甕・甕等がある。

食器類

杯蓋A1 天井部に丸味を持つ。口縁端部は断面三角形様をなして、下方に若干肥厚する程度で、明瞭な身受け部を作らない。天井部の約3分の2を回転ヘラケズリし、断面逆台形ないしは側面に幅の広い稜を持った大型・扁平なつまみを接合する。一般的に右回転のロクロを使い調整を加えるが、回転方向の異なるものも含まれる。

口径14.3～17.3cm、器高2.7～4.3cmを測り、法量の分化は明確でない。

杯蓋A2 天井部は総じて扁平化し、端部近くで外反する。口縁端部は屈曲し、外下方にのびる身受け部を形成する。受け部の形態には明瞭な稜を持ち断面三角形を呈するものと、丸く仕上げたものがある。杯蓋A1に比べ、回転ヘラケズリの範囲は狭く（天井部の約2分の1）、確認しえたロクロの回転方向はすべて右方向を示す。つまみはやや小型化し、中・上位に稜のある擬宝珠型のものが増える。

器高2.1～4.7cmを測り、口径は3大別できそうである（16.0～17.0cm＝Ⅰ、15.0～15.5cm＝Ⅱ、14.0cm前後＝Ⅲ）。口径11.0cmの小型品が含まれる。

杯蓋A3 杯蓋の約70%が本類に属する。天井部の形態は杯蓋A2に類似するが身受け部を内方まで屈曲させ、天井頂部のみを2～3回転、平坦にヘラケズリ（ロクロ右回転）したことが多い。回転ヘラケズリの範囲はさらに狭まる傾向にある。背の高い擬宝珠型つまみの出現等、つまみの形態・規模、身受け部の深さ・形態（断面稜のある三角形・丸味・端部外反等）にはバラエティーが見られる。

口径11.6～20.8cm・器高1.9～5.1cmを測り、口径が大きくなるに従って、器高も高くなる。法量的に4大別でき（口径18.5～19.5cm・器高4.3～5.1cm＝Ⅰ、口径17.0～18.0cm・器高2.7～4.6cm＝Ⅱ、口径16.0～16.5cm・器高3.5～4.3cm＝Ⅲ、口径14.0～15.5cm・器高1.9～4.0cm＝Ⅳ）、小型品（Ⅳ）が主体をなす。

杯蓋B つまみを付さない杯蓋である。天井部の形態・調整手法は杯蓋A3とかわらない。法量を知りえた資料わずか1点であるが(口径14.5cm・器高2.5cm)、天井頂部を欠失した杯蓋A3の一部は杯蓋Bに属する可能性がある。

有台杯身A1 半球形をなす杯部に、断面逆台形様の扁平な高台を接合する。高台両側に幅広く接合時の回転ナデ痕を残し、底部の回転ヘラケズリ調整(ロクロ右回転)は粗雑なものが多い。口縁端部を丸く仕上げる。底部は丸底を呈し、高台より下方に張り出す。

小型品1点(口径12.2cm・器高4.1cm)を除き、法量的に2大別できる(口径15.0~15.6cm・器高3.8~5.0cm=Ⅰ、口径13.8~14.4cm・器高4.1~4.7cm=Ⅱ)。底部にヘラ記号「メ」を記した資料が1点ある。

有台杯身A2 器高に対する口径の比は1:3.5前後を示し、有台杯身A1に比べ扁平な器形となる。口縁部は内彎し、回転ナデ調整により端部をわずかに外反させて内側に内傾面をつくる。底部から体部下半にかけ2回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)を加える。底・体部の境に外に張った小規模な高台を接合する。底部は丸底をなし多くが高台より下方に張り出す。

口径14.4~15.9cm、器高3.6~4.3cmを測る。出土量は少ない。

有台杯身A3 器高対口径の比は有台杯身A2と同様であるが、底・体部間で屈曲し、口縁部は直線的ないしは外反しつつ外上方へのびる。口縁端部は内傾するか丸く仕上げられる。高台は有台杯身A2に比べ高く、内側に接合時の強い回転ナデ痕(凹面)を残す。端部は丸味を持つ。回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)された底部が丸底をなし高台より下方へ張り出すものと、高台下端とほぼ同じ高さにおさまるものがある。

口径11.0~17.2cmを測り、口径は3大別できそうであるが(17.0cm前後=Ⅰ、14.0~14.5cm=Ⅱ、11.0~12.5cm=Ⅲ)、器高はほぼ一定(4.0cm前後)している。

有台杯身B 底・体部間に断面三角形様の凸帯を有し口縁部は外反する。高台の接合箇所は有台杯身Aに比べやや内方にある。高台は総じて扁平(断面逆台形様)で、端部に幅の広い水平・外傾面を持つ。底部中央から凸帯下半にかけて主に右回転のロクロを使いヘラケズリ調整を加えるが、回転方向の異なるものも含まれる。丸底様をなし、約半数が底部を高台下まで突出させる。杯身類のなかできわめて特徴的な胎土(白色粒めだつ)・色調(灰白色)を示す。ヘラ記号(底部=「ノ」)を記したものである。

口径13.4~15.9cm、器高3.5~4.2cmを測る。

有台杯身C1 平底をなす底部から口縁部は屈曲して立ちあがり大きく開く。屈曲部に明瞭な稜を持ち、口縁部のノケが顕著である。口縁端部を丸く仕上げ、底部外縁近くに断面方形ないしは内側に顕著な回転ナデ痕(凹面)のある内彎した高台を接合する。底部は回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)が施される。

口径10.5~16.1cm、器高3.4~3.8cmを測る。

有台杯身C2 調整手法は有台杯身C1に類似するが、底・体部間に稜はなく丸味を帯びる。口縁部は若干内彎する。高台は内彎しつつ外に張り、端部に回転ナデ調整による水平面を持つ。細片が多く法量を知りえた資料は少ない。

口径15.5cm、器高4.0cm前後に集中する。

有台杯身C3 平底をなす底部から口縁部は屈曲し、外上方へ直線的にのびる。口縁端部に丸味を持つ。有台杯身C1・C2に比べ、高台は内方へ移行し断面方形を呈する。端部は外傾する。底部を回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)し、高台接合時の回転ナデ痕を幅広く残す。

口径12.2~15.0cm、器高3.5~4.3cmを測るが、口径14.0cm前後の資料が主体を占める。

有台杯身D 法量を知りえた資料はわずか1点である（口径16.1cm・器高5.5cm）。平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ち、杯部の断面形は箱形（長方形）に近い。底部外周の傾斜面に、背が高く内彎しつつ外に張った高台を接合する。高台端部を水平に仕上げる。

有台杯身E 平底の底部から口縁部へ丸味を持ってなめらかに移行し、端部近くで急激に外反する。いわゆる金属器（佐波理器等）を模倣した有台杯身である。底部外縁から離れて接合された高台は扁平・小規模で断面方形をなす。端部の水平面に沈線状の回転ナデ痕を残す。口縁端部の形態には2種あり（a＝外反率が小さく丸くおさめたもの、b＝屈曲外反した端部をさらに上方へつまみあげ外側に垂直な平坦面を作り出したもの）、後者の回転ヘラケズリ調整範囲（ロクロ右回転）は、底部から体部下半にまでおよび前者に比べ広い。口縁部内外面をノタメが残らないようにいねいに回転ナデ調整する。

法量的に2大別できるが（口径17.0~18.1cm・器高5.6~6.2cm＝Ⅰ、口径15.6~15.9cm・器高5.9~6.9cm＝Ⅱ）、規格外的大型品（口径19.1cm）が1点ある。

無台杯身A1 丸底をなし器形は半球状を呈する。口縁端部は短く外反するか、単純に丸く仕上げられる。口縁部のノタメが顕著で、底部にはヘラで切り離した後何ら調整を加えない。一部または全面に板目状の圧痕・擦痕を残したものがある。

口径11.4~16.3cm、器高3.3~5.2cmを測り、口径が大きくなるに従って器高も高くなる傾向を指摘できるが、法量の分化は明確でない。約75%が口径13.0~15.0cm、器高4.0~5.0cmの範囲内におさまる。底部を粗くヘラケズリし、高台を付せば有台杯身A1とかわるところはない。

無台杯身A2 無台杯身A1に比べ扁平化する。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）され、平底様を呈する。口径に比して底径が大きくなり（底径：口径＝1：2）、口縁部は若干内彎する。口縁端部を先細く丸く仕上げるものと、幅広い1条の回転ナデ調整を施すことにより外反させたものがある。口径12.4cm・16.6cmの小・大型品を除き、法量的に3大別できる（口径15.5cm前後・器高3.6~3.8cm＝Ⅰ、口径14.5~15.0cm・器高3.9~4.0cm＝Ⅱ、口径13.6~13.8cm・器高4.0~4.5cm＝Ⅲ）、口径が大きくなると器高は逆に低くなる。

無台杯身A3 無台杯身A1・A2と同様に器形は半球状を呈する。口縁端部に水平面を持つ。底部に回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）を加える他、静止糸切り痕を残したものがある。

口径12.7~14.0cm、器高3.7~4.0cmを測る。出土量は少ない。

無台杯身B1 丸底をなし口縁部は直線的あるいは外反しつつ外上方へのびる。ノタメは顕著で間隔が広い。口縁端部は肥厚し、さらに外反して先細く仕上げられる。底部はヘラ切り離しの後未調整か、口縁部下半にかけて同心円状の回転ヘラケズリを加える。右回転のロクロが主体をなすが、回転方向の異なるものも含まれる。

口径12.7cmの小型品を除き法量的に2大別できる（口径15.1~15.4cm・器高4.5~5.2cm＝Ⅰ、口径14.1~14.4cm、器高4.6~5.1cm＝Ⅱ）

無台杯身B2 無台杯身B1同様に底部に調整を加えないものが主体をなす。平底に近くなる。口縁部上半は外反し、端部を回転ナデにより外方につまみ出して玉縁状に仕上げる。底部に回転ナデ、不整方向のナデを加えたものがある。

口径12.9~14.4cm、器高3.7~4.5cmを測る。

無台杯身B3 器形は無台杯身B1・B2に類似するが、体部下半で若干屈曲し、底部に静止・回転糸切り痕を残す。法量を測りえた資料はわずか1点しかない（口径13.9cm・器高3.8cm）。

無台杯身C 口径に対する器高の比は1:0.2~0.4を示し、総じて扁平な器形を呈する。平底の底部から丸味を持ってほぼ直立する口縁部へ移行する。口縁端部の形態はバラエティーに富み(凹面屈・内傾・水平・丸味等)、底部の回転ヘラケズリ調整(ロクロ右回転)の範囲にも広狭差が見られる。

口径14.6・16.3cm、器高4.4・3.5cmの大型品を除き、法量は口径12.5~13.0cm、器高3.0~4.5cmの範囲内に集中する。口径の均一性に比べ器高の差が大きい。

無台杯身D1 底部と体部との境に明瞭な稜を有し、口縁部は外上方へ直線的にのびる。底部全面を回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)し、中央部がやや下方へ張り出して丸底様をなす。口縁端部は若干肥厚し、先細く仕上げられるか内傾面を持つ。

大型品(口径14.4~17.2cm・器高5.7~6.3cm=I)と小型品があり、小型品はさらに3大別できる(口径13.1~13.6cm・器高3.5~4.1cm=II、口径12.2~12.4cm・器高3.3cm前後=III、口径10.9~11.3cm・器高3.1~4.3cm=IV)。小型品は口径が大きくなるに従って器高も高くなる。

無台杯身D2 無台杯身D1同様、底・体部間に明瞭な稜(屈曲部)を持つが、底部はラセン状、2~3回転のヘラケズリ(ロクロ右回転)により平底を呈する。口縁端部に内傾面を作り出したものが圧倒的に多い。

大型品と小型品があり、さらに大型品は2大別、小型品は4大別できる(口径18.6~19.2cm・器高5.3~5.6cm=I、口径17.3~17.8cm・器高5.5~5.7cm=II、口径13.9~14.4cm・器高3.2~4.8cm=III、口径12.4~13.4cm・器高3.2~4.1cm=IV、口径10.7~11.2cm・器高3.6~3.7cm=V、口径9.4cm・器高3.6cm=VI)。

無台杯身D3 底・体部間で屈曲し口縁部は外上方へのびる。底部は右回転のロクロを使いラセン状に2回転ヘラケズリされ、平底ないしは上げ底様を呈する。底部にヘラ記号「メ」を記したものがある。底部外周に1条の回転ヘラケズリを加えるか、回転ナデ調整痕を残すことにより傾斜面を作り出す。口縁部は若干内彎するものが多い。ほぼすべての口縁端部に内傾面が見られ、底部・口縁部の調整手法は均一化している。底部の回転ヘラケズリが徹底せず、中央部に丸く静止糸切り痕を残したものがあ

る。大型品(口径14.8~17.0cm・器高3.4~6.2cm=I)と小型品(口径11.5~14.0cm・器高3.1~4.1cm=II)に2大別できるが、口径は13.0cm前後に集中し法量の分化は明確でない。大型品には器高の高いものと低いものがある。(5.0~6.2cm、3.4~4.0cm)。出土した無台杯身の主体をなす。

無台杯身D4 基本的な器形・調整手法は無台杯身D3とかわらない。底部の回転ヘラケズリ調整(ロクロ右回転)の範囲が狭いため、外周に幅の広い水平な回転ナデ痕を残す。この回転ナデ調整痕が傾斜している場合、無台杯身D3との区別は難しい。

大型品は2点(口径15.9・16.7cm・器高5.5・5.8cm)しかなく、小型品(口径10.0~14.2cm・器高3.2~4.0cm)が主体を占める。口径の大小差に関わりなく、小型品の器高(3.5cm前後)はほぼ一定している。

小型杯身A1 平底の底部から丸味を持ってほぼ直立する口縁部へ移行し、深い杯部を形作る。底部外縁に外に張った扁平な高台を接合する。高台端部に水平面を持つ。底部に回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)を加え、口縁端部を丸く仕上げる。出土量は少なく法量を知りえた資料はわずか1点しかない(口径8.1cm・器高4.9cm)。

小型杯身A2 底部全面を回転ヘラケズリし、底・体部の境に明瞭な稜を持つ。小型杯身A1に比べやや内方に、断面方形を呈する高台を接合する。全形を知りえた資料はないが、高台径は小型杯身A1とほぼ同じである。

小型杯身B1 平底の底部から口縁部がほぼ垂直に立ちあがり、コップ状の器形を呈する。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、外縁に明瞭な稜をつくる。口縁端部は肥厚し、回転ナデ調整により中央がくぼんだ水平面をなす。

口径7.8～8.1cm、器高4.8～4.9cmを測る。

小型杯身B2 口縁部の形態は不明である。平底の底部外周に回転ヘラケズリされた傾斜面を持つ。底部内面に明緑色自然釉が付着している。底径は小型杯身B1と差がない。

皿蓋 口径22.0cm以上を測る大型の蓋を皿蓋とした。つまみ・天井部・口縁部の形態・調整手法は坏蓋A3と変わらない。

器高5.5cm前後を測る。出土量は少ない。

有台皿A1 底・体部間で屈曲し口縁部は内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部を丸く仕上げる。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）され平底をなす。外周に幅の広い傾斜面を持ち、そこに外に張った比較的大型の高台を接合する。端部の水平面には凹面をなす回転ナデ痕が見られる。細片が多く法量が計測できた資料は1点しかない（口径22.4cm・器高4.6cm）。

有台皿A2 底部は平底を呈する。有台皿A1同様に底部外周近くに断面丸味を帯びた三角形の高台を接合する。底・体部の境に明瞭な稜を持つ。口縁部の形態は明らかでない。

有台皿A3 底・体部間で屈曲し口縁部は外上方へのびる。口縁端部は外反し先細く仕上げられる。内傾面を持つ。屈曲部の内側・内底面の周縁に、回転ナデ調整痕と思われる沈線が1条めぐる。高台の接合箇所は有台皿A1・A2に比べ内方へ移行し、断面扁平な方形を呈する。端部の平坦面はわずかに凹む。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、平底をなすものと中央が丸底気味にやや下方へ張るものがある。

口径22.6～25.2cm、器高3.2～4.2cmを測る。

有台皿B1 扁平な体部から短い口縁部が稜をなして立ちあがる浅い有台皿である。口縁部は外面の強い回転ナデ調整により外反し、端部に水平面・内傾面を作る。内底面の周縁には断面V状の沈線（接合痕）が見られる。高台は断面方形をなすわずかに内彎する。端部に凹面を持つ。高台の外側1.0～2.0cmまで回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、底部中央がやや下方へ垂れ下がったものが多い。

口径の大小差（16.5～19.3cm）にかかわらず、器高2.0～2.6cmとほぼ一定している。出土した有台皿の主体をなす。

有台皿B2 有台皿B1に比べ口縁部が短く体部はさらに扁平化する。口縁端部に外傾面を持つ。高台は基本的に外に張り内彎するものは少ない。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）範囲は有台皿B1とかわらないが、高台の内側に静止糸切り痕を残すものがある。

口径17.0～18.7cm、器高2.0cm前後を測る。

有台皿C 器形は有台皿Bに類似するが、底・体部間の稜は不明瞭で高台径が大きくなる。口縁部は外に開き端部を丸く仕上げる。内傾気味に接合された高台幅は広く断面扁平な方形を呈する。法量を知りえた資料は2点しかない（口径17.5～19.3cm・器高2.1～2.4cm）。あるいは蓋かもしれない。

無台皿A1 丸味を帯びた底部から口縁部は屈曲して立ちあがり、内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部の外傾面には丸味がある。底部全面を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）する。細片が多く法量を知りえた資料はない。

無台皿A2 底部は平底をなし底部と体部の境に明瞭な稜を持つ。口縁端部は内傾する。底部は回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）により仕上げられるが、外周に幅広く回転ナデ痕を残す。各部の調整手

法は無台杯身D 4と変わらない。

口径16.3～21.9cmを測る。

無台皿B 1 皿部の形態・調整手法は有台皿B 1と変わるところがない。底部の約2分の1を2～3回転、ラセン状にヘラケズリ（ロクロ右回転）し、中央部を平底様に仕上げる。

口径は3大別できそうである。（20.5～21.0cm＝Ⅰ、18.0～20.0cm＝Ⅱ、14.5～17.0cm＝Ⅲ）、器高（1.5～2.7cm）の高低差は著しい。口径22.5cm以上的大型品が2点ある。小型で口縁部が内方まで屈曲し、端部に丸味を持つのは、杯蓋（杯蓋B）として使用された可能性もある。

無台皿B 2 皿部の形態・調整手法は有台皿B 2と変わるところがない。口縁端部の水平面・外傾面は、回転ナデによりわずかにくぼむ。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）の範囲には、広狭差が見られる。

口径16.3～20.5cmを測り、大型品（口径22.9cm）が1点ある。明確な器高を知りえた資料はないが、無台皿B 1に比べ総じて浅いと思われる。

無台皿C 丸底縁をなす底部から短く外反する口縁部が屈曲し立ちあがる。口縁端部は若干肥厚し、丸味を帯びた外傾面を作る。底部の約3分の2に回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加えるが、底部中央の形態は明らかでない。背の高い高台・脚等が接合されていた可能性もある。

口径3大別でき（25.5cm前後＝Ⅰ、22.3～23.9cm＝Ⅱ、19.5cm前後＝Ⅲ）、小型品は見られない。

無台皿D 1 平底をなす底部から口縁部へなめらかに移行する。口縁部は内彎しつつ開く。口縁端部は一般的に丸く仕上げられるが、回転ナデにより内傾面・外傾面を作り出したもの、端部を外方へ先細くつまみ出したもの等、その形態はバラエティーに富む。底部の回転ヘラケズリの範囲・回転数・ヘラの移動の仕方（ラセン状・同心円状）には差があり、調整範囲が広いものほど明確な平底縁を呈するようである。

小型品（口径15.1～15.4cm）・大型品（口径19.7～22.0cm）が5点ある。他はすべて口径16.6～18.9cm、器高1.7～2.9cmの範囲内に集中する。口径と器高との対応関係（規格性）は見い出せない。

無台皿D 2 基本的な器形は無台皿D 1に類似するが、口縁部はさらに大きく開き底部に丸味を帯びる。口縁端部を外反・肥厚させ断面三角形様に仕上げたものが多い。底部の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）範囲は無台皿D 1に比べ総じて狭くなる。

口径25.6～29.5cm、器高1.8～2.9cmを測り、法量分化・規格性は明確でない。大型品（口径25.6cm）が1点ある。

高盤A 盤部の形態は明らかでない。無台皿Bの他、古墳時代後期の高杯に似た碗状の盤部が接合されていた可能性もある。脚基部は太く上半から下半にかけて均一に開く。端部は上下方へ肥厚し回転ナデを施すことにより、外側に垂直な平坦面と稜を作る。断面三角形稜をなし脚内外面はていねいに回転ナデ調整される。

高盤B 無台皿Bに脚を付して高盤である。脚は上半がほぼ垂下し下端近くで急激に開く。接合部の径は高盤Aに比べて細い。脚端部は下方へ屈曲し（断面三角形）明瞭な稜を持つ。口縁端部を外方へつまみ出して外傾面を作り出したものや、丸く仕上げたものがある。また脚部の形態、内面の回転ナデ調整の範囲にも差が見られる。

法量を知りえた資料は少ないが、口径は2大別でき（22.7～24.3cm＝Ⅰ、16.0～16.7cm＝Ⅱ）、器高9.0～12.5cmを測る。

鉢A 口縁部は内傾し端部は回転ナデ調整により先細く丸く仕上げられる。体部・底部の形態は明らかでないが、いわゆる鉄鉢型をなす器であろう。口径16.0cmを測る。

鉢B 頸部は稜をなしてくびれ、短い口縁部が外反しつつ立ちあがる。最大径は11径にあり2大別で
きる(33.1~35.1cm=Ⅰ、28.4~30.9cm=Ⅱ)。大型品は口縁端部を内外方へ突出・肥厚させ、中央
の盛り上がった外傾面を作る。口縁部内外面を回転ナデにより仕上げ、体部にはタタキ整形の後回転
ナデ調整を加える。体部内面の同心円当てで具痕をていねいに回転ナデ消したものと、わずかに残した
ものがある。小型品の口縁端部は外方へつまみ出されたようにさらに短く外反し、その形態はパラエ
ティーに富む(水平・内傾・丸味)。大型品に比べて浅く、口縁部から体部上半にかけて回転ナデ調
整・体部下半・底部に回転ヘラケズリ調整(ロクロ右回転)を施す。平底をなす底部径には大小差が
ある。

鉢C 器形はバケツ状をなし、口縁部が外上方へ直線的にのびる。口縁端部を先細く丸く仕上げる。
平底の底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリを加え、口縁部に刺突文列と2条の横位沈線をめぐ
らしたものがあがる。

Ⅰ径26.6~28.8cm、器高15.9cm前後を測る。

陶臼 わずかに内彎しつつ外上方へのびる体部・口縁部に円盤状の厚い底部を接合する。中央がくぼ
み丸味のある内底面に、顕著な使用痕を残す資料は少ない。口縁端部を内外方へ肥厚させ、水平面
(凹面)を作り出す。底部側面に鋭い稜を持つものと丸くおさめたものがあり、底面は一般的に手持
ちナデ(不整方向)により仕上げられる。口縁部・体部の内外面に回転ナデを加える。底部の側面・
外周近くにタタキメを残し、焼成前の穿孔を有する破片が1点ある。

口径16.5~18.1cmを測り器高を知りえた資料はないが、底部に丸味を持つ器種ほど深くなるよう
である。

貯蔵具類

壺蓋A1 丸味を持つ天井部から受け部が稜をなして直角近く折れ曲がり垂下する。天井部のほぼ全
面を回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)し、扁平な擬宝珠状のつまみを接合する。つまみの基部は細い。
受け端部は外傾するか先細く仕上げられる。法量を知りえたのは1点である(口径12.9cm・器高4.2
cm)。

壺蓋A2 天井部の形態・調整手法は壺蓋A1と変わらない。回転ヘラケズリ(ロクロ右回転)の範
囲が狭いもの、最大径が天井部にあるものを含み、天井部・受け部間の稜は不明瞭となる。端部は一
般的に丸く仕上げられる。つまみの形態は明らかでない。

最大径13.1~15.3cmを測る。

壺蓋A3 平坦な天井部と屈曲し下方へのびる受け部からなる。天井部のほぼ全面を回転ヘラケズリ
(ロクロ右回転)し、つまみは背の高いソロバン玉状を呈する。端部に水平面(凹面)を持つ。法量
を知りえたのは1点である(Ⅰ径14.8cm・器高4.7cm)。最大径は口径にある。

壺蓋Aは壺A・壺Bの蓋と考えている。

壺A 肩が張り丸底様をなす扁平な胴部に、外反・直立する短い口縁部を接合する。いわゆる壺蓋で
ある。口縁部内外面にていねいな回転ナデ調整を加え、端部はヘラケズリにより平坦(内傾)に仕
上げられる。回転ヘラケズリは底部から胴部下半にまでおよぶ。底部外縁に外に張った厚手の高台を
付す。高台端部の水平面も回転ナデにより若く下くぼんでいる。口径に比べ高台径が大きい。底面に不
整方向のナデ痕を残すものがある。細片が多く全形を知りえたのは1点しかない(口径9.5cm・最大
径17.9cm・器高12.1cm)。

壺B 肩部に明瞭な稜を持ち短い口縁部が内傾しつつ立ちあがる。口縁端部は先細くわずかに外反す
る。水平面を作る。完形品がないため断言できないが、壺Bの底部片と思われるものは平底をなし、

底部外縁に断面丸味のある方形様の高台を付す。胴部下半に3段ラセン状の回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、底面中央には不整方向のナデ痕が見られる。

口径8.8～11.6cm、最大径21.0cm前後を測る。器高は明瞭でないが、扁平な器体を呈すると思われる。

壺C1 肩部の傾斜が大きくイチヂク型をなす胴部と外反する口縁部からなる。古墳時代後期以来の伝統的な壺である。口縁端部は回転ナデにより肥厚し幅の広い外傾面を持つ。端部が外下方へ大きく垂れ、複合口縁状を呈するものも含まれる。底部には平底と丸底があり、前者は底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ調整（ロクロ右回転）、内面に回転ナデ調整を施す。後者にも同様の調整手法が見られるが、タタキ整形の後回転ナデを加え、内面を縦斜位方向に板ケズリしたものが多い。胴部下半・底部にタタキメを残す。

口径11.1～19.4cm、最大径16.8～24.2cm、器高14.5～20.5cmを測る。大型品に平底は見られない。

壺C2 壺C1に比べ長胴化し口縁部は直立気味となる。口縁端部を上方へつまみ上げるように回転ナデ調整を加える。すべて平底を呈する。底部調整は粗雑でヘラ切り離しの後、不整方向のナデを施す。胴部内外面を回転ナデ調整し、下半に回転ヘラケズリ痕を残さない。

ほぼ均一な法量（口径9.8～10.6cm、最大径13.2～14.0cm、器高14.5～15.5cm）を示し、最大径20cm以上の大型品はない。

壺D1 基本的な器形は壺C1に類似するが、肩部に明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直立し肥厚した端部に回転ナデにより凹曲した外傾面・水平面を作る。底部形態には外周のみを1条、幅広く回転ヘラケズリし丸底様に仕上げたものと、平底をなすものがある。両者ともヘラで切り離した後底面に何ら調整を加えない。口縁部・胴部内外面を回転ナデ調整する。底部の比較的大きなもの、肩部の稜直下に沈線を1条めぐらしたものがある。完形品は1点しかない（口径8.6～10.8cm、最大径13.5cm、器高13.0cm）前後。

壺D2 壺D1が長胴化した器形をなす。口縁端部は上方へつまみ上げられくの字状に内屈する。外傾面の両端に鋭い稜を持つ。底部の形態は明確でないが、調整の粗雑に平底と思われる。胴部下半を回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）し、胴部に穿孔、ヘラ記号「メ」、肩部に2条の沈線を施したものがある。

口径9.5～12.0cm、最大径13.0～14.4cm、器高14.5～15.8cmを測る。

壺E 器形をある程度復元できる資料は1点しか出土していない。内彎する扁平な胴部と著しく短い直立口縁からなる。口縁端部に丸味を帯びた水平面を持ち、口縁部・胴部の内外面をていねいな回転ナデにより平滑化する。底部には高台が付されていたかもしれない。口径13.6cm、最大径14.2cmを測る。

小型壺A 壺Aを模した小型壺である。1点のみ出土した。口縁端部を丸く仕上げ面取りした断面方形の高台を接合する。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリを加える。肩部に明緑色自然釉が残る。口径3.2cm、最大径7.1cm、器高4.9cmを測る。

小型壺B 平底をなす底部から体部は若干内彎しつつ外上方へ立ちあがる。蓋受け様の幅の狭い肩部と短く直立する口縁部からなる。口縁端部に丸味を持つ。肩部内面に接合痕をそのまま残すものと、ていねいにナデ消した（ロクロ使用）ものがある。底部全面ないしは胴部下端にかけて回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を施し、上げ底様を呈するものも見られる。

口径5.7～7.7cm、最大径6.9～8.4cm、器高5.3～5.8cmを測る。

長頸壺A1 下位から上位へ均一に開く比較的大型の口頸部を持つ。基部は細い。細片が多く胴部・

底部の形態は明確でないが、高台を付さない平底のものも含まれる。口縁端部を先細く丸く仕上げる。接合部（基部）内面の調整は徹底していない。

口径5.9～11.1cmを測り、大型品と小型品がある。

長頸壺A2 肩の張った胴部に細く長い口頸部を接合する。頸部はほぼ垂直にのび口縁部にいたり急激に開く。口縁端部に丸味を持つ。胴部の形態には扁平なものややや背の高いものがあり、肩部に明瞭な稜を作り出したものも見られる。断言できないが長胴化するに従って丸底から平底へ移行するようであり、底部から胴部下半におよぶ回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）の範囲も狭くなる。底部外縁に接合時の回転ナデにより外反した断面方形様の高台を付す。高台端部を水平に仕上げる。最大径15.6cm前後を測る。

長頸壺B1 肩が張り扁平な胴部に太くラッパ状に開く口頸部を接合する。口頸部内外面を回転ナデ調整し、口縁端部は一般的に肥厚・外傾する。肥厚した端部をさらに先細く仕上げ、頸部内面に横位の板ケズリ、外面に刺突文列（櫛状施文）と3条沈線をめぐるものがある。肩部に丸味を持ち底部は中央がやや下方へ垂れて丸底様をなす。底部・胴部下半に回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加え、端部を水平に仕上げた大型の高台（断面方形様）を付す。最大径17.9～23.6cmを測る。

長頸壺B2 長頸壺B1に比べ肩部が直線的になり鋭い稜を持つ。平底の底部外縁にやや小型化し、丸味のある高台を接合する。胴部の調整手法は長頸壺B1とかわらないが、回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を肩部の稜直下まで幅広く加えたものがある。口縁部の形態は明らかでない。最大径13.9～20.6cmを測る。

獣足壺 口縁部の形態は不明であるが、肩の張ったイチヂク型の胴部に獣足を模した脚を3箇所接合する。胴部内外面をていねいに回転ナデ調整し、底部に回転ヘラケズリを加える。壺C1に類似した器形を呈するのであろう。出土した獣足は3個体分（5点）ある。すべてヘラを使って細かく面取りし、縦位の溝を切り入れて4指を表現している。足の裏・踵を平坦に仕上げ、踵にはさらに大小の抉りを入れる。胴部最大径を測りえた資料は1点しかない（28.3cm）。

皿耳壺 肩部に2箇所ないしは4箇所（？）の小型把手を付した短頸壺である。口頸部は肩部から屈曲し、わずかに立ちあがる程度で短い。回転ナデ調整を加え、端部にくぼんだ内傾面を持つ。肩部の傾斜する度合には差がある。把手は側面をヘラケズリし角を面取りして平面長方形を呈する。上面に丸味を持つものと平坦に仕上げるものがあり円孔を穿つ。胴部・底部の形態は明らかでない。小型品（口径9.8cm）の肩部はていねいに回転ナデ調整されるのに対し、大型品にはタタキ目がそのまま残る。

瓶 平底をなす卵形の胴部にほぼ直立する小さな口頸部を接合する。口縁部は外反し端部がさらに直立して断面三角形様を呈する。外傾面の両端には鋭い稜がある。頸基部接合箇所の調整は徹底していない。肩部に1箇所、指頭王・ナデにより形を整えた環状の把手を付す。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加える。高台は内彎しつつ外に張る（断面方形様）。

完形品の法量は口径5.8cm、最大径15.6cm、器高18.0cmを測る。

平瓶 細片が多く全形を把握できる資料はない。口縁端部をつまみあげ丸くおさめたものの他、端部を外方へ折り返し外傾面と稜を持つ（断面三角形様）口縁部片（口径8.0～10.0cm）がある。把手は扁平な逆U字状を呈し、ヘラケズリにより断面台形に仕上げる。

水瓶 平底をなす卵形の胴部と細長い口頸部からなる。口縁端部を上方へつまみ上げ断面三角形様を呈する。器面はていねいに回転ナデ調整（ロクロ右回転）される。肩が張り胴部下端に1条、幅の広い回転ヘラケズリ痕を残すものがある。底部は回転糸切り離し後何ら調整を加えない。

全形を知りえた資料は口径2.4cm、最大径5.3cm、器高8.1cmを測り、胴部最大径が8.1cmを越える大型品は見られない。

甕 肩の很った胴部と細く直立する頸部、ラッパ状に開く口頸部からなる。基本的な器形は古墳時代後葉のものと変わらないが、回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）を加えた丸底椀の底部に、断面逆台形をなす小型・扁平な高台が接合される。口縁部から頸部にかけて刺突文（櫛状施文具）・2条沈線をめぐらしたものがある。胴部最大径10.0cm前後を測り小型品が主体をなす。

甕A1 ほぼ直立気味にたちあがる短い口縁部を持つ。口縁端部は外方に折り返されたように著しく肥厚し、幅の広い外傾面を作る。外傾面は回転ナデ調整され中央がわずかにくぼむ。胴部・底部の形態は明らかでないが、肩が張り胴部内外面を回転ナデにより仕上げていたらしい。基部内面に明瞭な接合痕を残す。

口径14.0～14.4cmを測り、法量は均一である。

甕A2 甕A1同様に短い口縁部からなるが、その開く度合いは大きい。口縁端部を肥厚させ中央が盛り上がった丸味のある外傾面を持つ。胴部は卵型をなす。胴部をタタキ整形した後、口縁部に回転ナデ調整を加える。胴部内面の同心円当て具痕を縦・斜位の板ケズリによりていねいに消去したものと、わずかに残すもの（回転ナデ仕上げ）がある。底部は丸底と思われる。口径17.5～18.7cmを測る。

甕B1 背の高い口縁部があまり外反せず直線的に立ちあがる。口縁端部を折り返しあるいはつまみ上げたように肥厚させ断面三角形様をなす。外傾面（凹面）の傾斜は急である。口縁部・肩部に回転ナデを加える。内面の口縁部接合痕により下位に同心円当て具痕を残すものがある。胴部・底部の形態は明らかでない。口径は2大別できる（15.1～15.9cm＝I、12.1～12.3cm＝II）。

甕B2 肩の張った胴部と外反しつつ大きく開く口縁部からなる。口縁端部は下方へ肥厚し、なかには大きく折り返されて複合口縁状をなすものも含まれる。外傾面に丸味を持つ。口縁部（端部直下）に三角凸帯と沈線により文様帯（沈線・円形浮文・櫛状施文具による刺突文）を区画したものがある。口縁部を回転ナデ調整し、胴部はタタキ整形後下半・内面に回転ナデ調整・板ケズリ（横位）を加える。平底の底部は上げ底様を呈し、あるいは不整方向のナデ（底面）と板ケズリ（内面）により仕上げられる。

大型品2点（口径42.9・50.0cm）を除き、口径18.9～29.5cm、最大径34.1cm以上を測る。法量に幅があり規格は一定していない。

甕C 胴部上半から口縁部にいたる破片が1点出土したのみであるが、扁平な胴部から口縁部がくの字状に屈曲する広口の器量を甕Cとした。口縁端部を回転ナデより先細く仕上げ、胴部にタタキメ（？）を残す。土師器甕D1を模した須恵器と考えている。

口径31.6cm、最大径33.6cmを測る。他に2条の沈線を施し俵型の器体をなすと思われる胴部片、厚手・扁平な脚部片等が出土している。

ii) 土師器

土師器には杯蓋・有台杯身・無台杯身・皿蓋・有台皿・無台皿・高盤・鉢・壺・甕・鍋・甗等がある。

食器類

杯蓋A1 天井部は直線的に傾斜し笠型をなす。口縁端部を先細く丸く仕上げ身受付け部を作らない。ヨコナデされた壁線の厚さは不均一である。中央に基部が太い断面逆台形のつまみを付し赤彩する。

出土量は少ないが、口径17.8cmの大型品を除き法量はほぼ一定している（口径13.4～15.0cm、器高3.1～3.8cm）。

杯蓋A2 杯蓋A1同様直線的にのびる天井部が外周近くで外反する。不明瞭ではあるが外傾面を持つ端部は下方へ肥厚し、見受け部を意識しているように思われる。外周に幅広く強いヨコナデ痕を残す。完形品はなく天井頂部・つまみの形態は明らかでない。口径を知りえた資料はわずか1点である(16.3cm)。

杯蓋B 扁平な天井部に丸味を持つ。つまみを接合しない。口縁端部を下方へ屈曲させ断面三角形像をなす身受け部を作る。身受け部をヨコナデし、天井部には不整方向(横位主体)の指頭ナデを加え器壁は厚い。杯蓋としたが杯類以外の器種に用いられた可能性もある。完形品が1点出土している(口径13.2cm・器高2.2cm)。

有台杯身A1 平底をなす底部からほぼ直立する口縁部へ屈曲・移行する。底・体部間に丸味を持つ。口縁端部は若干外反し丸味のある内傾面を作る。底部外周近くに接合された高台には2形態ある。1つは扁平・小型で断面丸味を帯びた三角形を呈し、他の1つは背が高く端部を肥厚させ丸く仕上げている。器面の保存状態は良くないが、口縁部・高台にヨコナデ調整を加え底部にあらいう指頭ナデ、内底面に不整方向のミガキを施していたらしい。口縁部・高台内面に赤彩の痕跡を残すものがある。法量を知りえた資料は比較的大型品である(口径19.5cm・器高5.5cm)。

有台杯身A2 底(平底)・体部間で屈曲し口縁部は直線的に外上方へのびる。有台杯身A1に比べ総じて深い。口縁端部を先細く丸く仕上げる。高台は底部と体部の境(屈曲部)に接合され、有台杯身A1同様、扁平・小型のものと背の高いものの2形態が見られる。両者とも端部を丸く作るが、前者には外傾面を持つものも含まれる。剥落し底部の調整手法は明確でない。口縁部・高台にはヨコナデを加えている。完形品が1点ある(口径12.9cm・器高5.3cm)。

有台杯身B 平底の底部から丸味を持って体部へ移行し、口縁端部近くで外反する。端部を丸く仕上げる。高台は比較的扁平・小型で若干外に張る。端部に丸味を帯びた外傾面を作る。口縁部下半の調整(ヨコナデ)は徹底せず、粘土紐の輪積み痕を残すが、外反部分には強いヨコナデを加えている。底面に不整方向のナデを施す。器形は須恵器有台杯身Eに類似し、須恵器を模倣した土師器と考えている。多くが口縁部内外面に赤彩する。

口径14.6~16.6cm、器高5.6cm前後を測る。

無台杯身A 器形は扁平な半球状を呈する。古墳時代まで遡る器種と考えたが、比較的多く奈良時代の土器群に混在して出土するため、一応古墳時代後期以降の伝統的な器形をなす器を無台杯身Aとして区分した。口縁部下半(外面)の調整は粗雑で、端部近くに強いヨコナデを加える。口縁端部の形態(外反・丸味・先細等)・器面の調整手法(ヨコナデ・横位ハケメ・放射状暗文・ミガキ等)はバラエティーに富み、底部に木葉痕を残すものがある。

口径11.5~15.3cm、器高3.3~4.7cmを測る。

無台杯身B1 底部は丸底像をなし口縁部が直線的に大きく開く。底・体部間は若干屈曲する。口縁端部を肥厚させ丸くおさめたものと丸味を帯びた内傾面を作るものがある。口縁部内外面に横位・縦位のハケメを加えた後、外面を粗くヨコナデ調整する。口縁端部近くのヨコナデは強くいてないである。屈曲部外面に指頭圧痕を残し、底部は不整方向のナデにより仕上げられる。口径の大小差(10.8~14.9cm)にかかわらず、器高(3.8~4.1cm)はほぼ一定している。

無台杯身B2 丸底をなし基本的な器形は無台杯身B1に類似するが、口径・器高の比は1:0.4前後を示し総じて深くなる。口縁部の立ちあがりは急で底・体部間に丸味を増す。口縁端部を先細く丸く仕上げる。器面調整には無台杯身B1と同様の手法の他、口縁部の内外全面にヨコナデのみを施したものが含まれる。

口径11.0～12.7cm、器高4.0～5.0cmを測り、法量は均一である。

無台杯身B3 底部は小さく平底を呈する。口縁部は内彎し端部を丸くおさめる。口縁部上半に幅広くヨコナデ調整を加え、下半は放射状に縦位の指頭ナデで仕上げる。底部の調整（不整方向ナデ）は粗い。無台杯身B1・2に比べ小型で出土量はきわめて少ない。法量を知りえたのは1点である（口径10.1cm・器高4.2cm）。

無台杯身C1 底部中央はわずかに脹らみ丸底様をなす。底部からなめらかに内彎する口縁部へ移行する。口縁端部に丸味を持つ。口縁部・内底面に縦・横位のハケメとヨコナデ調整を加え、無台杯身B1と同様の器面調整を行うものと、口縁部全面にヨコナデ調整のみを施したものがほぼ等量を占める。後者には内面を赤彩したものが多い。底部は不整方向の指頭ナデにより仕上げられる。

口径16.7cmを測る大型品を除き、法量は3大別できそうであり（口径14.6～15.1cm・器高4.2cm前後＝Ⅰ、口径13.4～13.9cm・器高3.2～3.7cm＝Ⅱ、口径12.4～13.0cm・器高3.2cm前後＝Ⅲ）、口径が大きくなるに従って器高も高くなる。

無台杯身C2 平底様をなす大きな底部から丸味を持って口縁部へ移行する。口縁部は内彎しつつほぼ真上に立ちあがる。多くは端部を先細く仕上げるが、内傾面を作り出したものも見られる。口縁部にヨコナデ調整、底部に不整方向のナデを加える。

法量的に3大別できる（口径15.1～15.6cm・器高3.4cm前後＝Ⅰ、口径12.8～14.0cm・器高2.9～3.5cm＝Ⅱ、口径11.6～12.0cm・器高3.3cm＝Ⅲ）。大型品（口径17.0cm）が1点ある。

無台杯身C3 平底をなす底部とほぼ直立する口縁部からなる。底・体部間でわずかに屈曲するものがあり、口縁部は外反する。端部を先細く丸く仕上げる。口縁部上半・内面にていねいなヨコナデを加えるが、底部・口縁部下半の調整は徹底していない（指頭圧痕・不整方向のナデ）。内面をヘラミガキし黒色化した焼成良好なものが比較的多く見られる。

口縁部が大きく開く大型品（口径19.6～22.2cm・器高5.4cm前後）と小型品（口径11.2～15.6cm・器高2.9～3.8cm）に大別でき、小型品の約80%が口径12.0～14.0cmの範囲内におさまる。無台杯身C類の主体をなす。

無台杯身D 口径と平底をなす底径の比は1:0.5前後を示し、底部の小さな碗状の無台杯身である。底部と体部の境にわずかに稜を作り、口縁部は内彎しつつ大きく開く。端部を丸く仕上げる。口縁部（ヨコナデ・ミガキ）・底部（不整方向ナデ）の調整は比較的ていねいで内外面を赤彩したもの、内面を黒色化したものを含む。総じて小型品が多い。

口径は3大別できるが（13.9～15.2cm＝Ⅰ、11.7～12.8cm＝Ⅱ、8.4～9.1cm＝Ⅲ）、器高はほぼ一定している（3.2～3.8cm）。出土量は少ない。

無台杯身E 平底の底部から若干稜をなして屈曲し、大きく開く口縁部へ移行する。口縁部には内彎するものと上半を外反させるものがあり、両者とも端部を丸く仕上げていく。口径16.5cm、器高3.4cmを測る大型品を除き、多くが無台杯身B1・B2と同様の器面調整（縦・横位のハケメ・ヨコナデ）を施す。大型品の口縁端部直下には1条幅広い強いヨコナデが加えられる。小型品（口径10.2～11.4cm）も2点見られる。

法量は口径12.1～14.0cm、器高3.0～4.0cmの範囲内に集中している。

無台杯身F 完形品はなく出土量も少ない。底部は丸底と思われる。大型（口径14.2～16.3cm）で深い半球状の器形をなす。口縁端部を内彎気味に丸く仕上げる。端部内面に1条ヨコナデを加える他は、口縁部全面に粘土紐の巻き上げ痕・指頭圧痕が残り調整手法はきわめて粗雑である。

無台杯身G 口縁的片がわずかに1点出土した。口縁端部を内方へ丸く屈曲・肥厚させ特徴的な口縁

部を作る。口縁部内外面をていねいにヨコナデ調整し赤彩していたい。口径15.3cmを測る。

無台杯身H 口径：底径の比は1：0.5～0.6を示す。平底の底部と体部との境に明瞭な稜を持ち口縁部は内彎しつつ外上方へのびる。口縁端部はわずかに外反し先細く丸く仕上げられる。口縁部外面・底部に同心円状のヨコナデを加え、内面には放射状暗文が密に施される。

口径10.8～12.6cm、器高3.9～4.3cmを測る。白色粒を多量に含む胎土と色調（茶灰色）は特徴的である。

皿蓋 受け部を作らず天井部・口縁端部の形態（丸味）・調整手法（ヨコナデ）は杯蓋A1と何ら変わらない。口径20.0cm以上（19.9～22.5cm）の大型品を皿蓋とした。口縁端部近くで肥厚し天井部に丸味を持つ扁平な器種が含まれる。つまみは基部の太い擬宝珠状を呈する。内外面を赤彩する。器高を知りえた資料は1点しかない（5.0cm）。

有台皿A1 平底をなす底部から短い口縁部が屈曲し直線的に立ちあがる。口縁端部を丸くおさめる。底部外周に接合された高台は背が高く外に張る。端部をわずかに外反させ比較的幅の広い外傾面を作る。口縁部・高台はヨコナデによりていねいに仕上げられるが、底部内外面の調整（不整方向ナデ）は粗雑で指頭圧痕を残す。内外全面に赤彩を施したものがあつた。細片が多く法量を知りえたのはわずかに1点である（口径17.1cm・器高3.5cm）。

有台皿A2 有台皿A1に比べ皿部は浅くなる。外反する口縁部が見られる。口縁端部は一般的に丸く仕上げられるがつまみ上げられ先細くわずかに内彎するものを含む。高台には2形態（端部に水平面を持つ扁平なもの＝断面逆台形、背が高く外に張るもの＝断面三角形）あり、底部外縁から離れて内方に接合される。口縁部・高台にヨコナデ調整を加え赤彩するものが多い。底部には不整方向のナデが施される。

大型品（口径26.7cm・器高2.8cm）と小型品（口径18.5cm・器高2.5cm）がある。

有台皿B1 皿部は平底の底部と外反する口縁部からなる。口縁端部に丸味を持ち底部のやや内方に背の高い高台（脚）を接合する。高台の上半はほぼ真下に垂下し下半にいたり急激に開く。端部を丸く仕上げる。有台皿Aと同様の器面調整を加え口縁部・高台に赤彩を施す。法量を知りえたのは1点である（口径18.6cm・器高4.4cm）。

有台皿B2 完形品がなく皿部の形態は明確でない。平底をなす底部の外周近くに接合された高台（脚）は有台皿B1と類似するが（上半垂下・下半開く）、背は低く丸味を帯びた端部が若干下方へ肥厚している。高台をヨコナデし、底面に指頭圧痕を残す。内底面・高台に赤彩を施す。底部径から判断して有台皿B1に比べ小型品が主体をなすと思われる。

無台皿A 底部・体部間で屈曲する。平底をなす底部と外反しつつ大きく開く口縁部からなる。口縁部をヨコナデしへう記号「メ」を記したものがあつた。端部を先細く丸く仕上げる。底部には不整方向のナデが加えられる。明確でないが口縁部内面に放射線状暗文（斜位）を思わせる粗い細線列を残す破片が1点あり、器面すべてを赤彩したものがあつた。口径の大小差（13.0～18.4cm）に比べ器高はほぼ一定している（2.3～2.8cm）。

無台皿B1 大きな平底の底部から短い口縁部が立ちあがる。口縁部は内彎し端部に丸味を帯びた内傾面を作る。口縁部にヨコナデ調整を加え、底部は不整方向のナデ・ケズリにより仕上げられる。口縁部上半を幅広くさらに1条ヨコナデし、端部をわずかに外反させたものがあつた。器壁全面に赤彩を施したものがあつた。

無台皿Bの主体をなし口径は6大別である（19.5～19.9cm＝Ⅰ、18.0～18.3cm＝Ⅱ、15.6～16.6cm＝Ⅲ、14.5～15.0cm＝Ⅳ、12.3～12.8cm＝Ⅴ、10.0cm前後＝Ⅵ）。器高（1.7～2.6cm）には口径15.5

cm前後を境にして、若干差（2大別）が見られるようである（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ＝2.3cm前後、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ＝2.0cm前後）。

無台皿B2 基本的な器形は無台皿B1に類似するがわずかに深くなる。口縁部の中段を幅広く強くヨコナデ調整するため、端部はわずかに外反し丸く肥厚したように見える。無台皿B1と同様に底部調整の他、底部と体部との境（屈曲部）に連続する横・斜位の指頭ナデを施したものがあつた。口縁部内外面・内底面に赤彩が見られる。

多くが口径14.0～17.0cm、器高1.9～2.5cmの範囲内におさまる法量の分化は明確でない。大型品（口径19.7cm・器高2.0cm）が1点ある。

無台皿B3 底部中央が若干下方へ垂れ丸底様をなす。口縁部の形態には内彎するものと直線的あるいは外反しつつ立ちあがるものがあり、両者とも端部を丸く仕上げている。一般的に外反する口縁部は幅広い強いヨコナデ痕を残し、器面調整はいいである。底部に不整方向のナデを加える。赤彩されたものが多い。

口径は3大別できるが（18.3～18.8cm＝Ⅰ、15.9～16.8cm＝Ⅱ、14.5～14.9cm＝Ⅲ）、器高はほぼ一定している（2.0～2.5cm）。

高盤A 均一な太さで垂下し裾部近くでラップ状に大きく開く長い脚部を持つ。脚端部を丸く仕上げる。器面は剥落し調整痕は明確でないが、面取りは行われていないようである。盤部の形態は明らかでない。

高盤B ヘラを使い多面体（7角形・12角形以上）に面取りした脚を盤部に接合する。脚部には背の高いものと扁平で裾部を水平近くまで急激に外反させたものがあり、後者はヨコナデを加え端部を丸く仕上げている。外面に赤彩を施す。盤部の形態は明らかでない。

高盤C 基部から下半にかけて徐々に太さを増し、裾部にいたってさらに大きく開く大型・扁平な脚を接合する。ヘラを使い多面体（12角形以上）に整形した後、縦位のハケメ・あるいはヨコナデを施す。脚内面は接合部に指頭圧痕を加え、上半を縦位の指頭ナデにより仕上げている。脚部内外面あるいは外面のみに赤彩が見られる。盤部の形態は明らかでなく他器種の脚の可能性もある。

高盤D 細片であるため明確でないが、面取りした脚をソケット状に盤部に接合するものを高盤Dとした。奈良時代以前に遡る可能性もある。

鉢 器形は半球状をなし平底様の底部から内彎する胴部へなめらかに移行する。最大径は胴部上半にある。短い口縁部は外反気味に立ちあがり端部を先細く仕上げている。胴部・底部外面に縦・斜位のハケメ、内面に板ケズリ（縦位・斜位・不整方向）を加え、さらに口縁部近くをヨコナデ調整する。口縁部の一部を外方へ脹らませ片口としたものを含む。

大型品（口径16.6cm・最大径17.6cm・器高8.9cm）と小型品（口径12.3cm・最大径13.7cm）がある。

貯蔵具類

壺A 若干肩の張る胴部から口縁部がくの字状に屈曲し立ちあがる広口の壺である。口縁部は直線的のび端部を丸くおさめる。肩部に2箇所、扁平・鉤形の把手を付したものがあつた。把手接合部には顕著な不整方向のナデ痕・指頭圧痕が残る。器面の保存状態は悪く細部の調整手法は明らかでない。底部は平底をなすと思われる。胎土に多量の赤色粒を含む。

口径16.2～20.8cm、最大径22.4～28.5cmを測る。古墳時代後期以来の伝統的な器形である。

壺B 底部は平底をなす。球状の胴部から短い口縁部がくの字状に屈曲し立ちあがる。口径と器高がほぼ等しい。口縁部はわずかに外反し端部を丸く仕上げる。底部と胴部下半の内面に板ケズリ（斜位）を加え器面をいいにヨコナデ調整する。胴部下半に2段に指頭圧痕が見られる。底面に木

葉痕を残す。法量を知りえた資料はわずかに2点であるが(口径13.7cm・14.6cm、最大径16.5cm、器高13.7cm)、ほぼ均一な数値を示し、大型品の破片は見られない。

煮炊具類

甕A 頸部でわずかにくびれ、立ちあがり急な短い口縁部と底部に向い直線的にすばむ長い胴部からなる。口縁部は外反し端部に丸味を持つ。一般的な胴部内・外面に横位のケズリ・縦位のハケメを加え、頸部から口縁部にかけてヨコナデを施す。口縁部内面に粗いハケメ(横位)や胴部に顕著な指頭圧痕を残すもの、また器壁全面をていねいにヨコナデ調整するものも含まれる。煤の付着しない未使用品がある。底部は平底をなすと思われ、口径と胴部最大径はほぼ一致する(13.8~15.7cm)。法量は一定しており大型品は見られない。

甕B 器形は甕Aに類似するが、最大径は胴部上半にあり胴部に丸味を増す。口縁端部に内傾面を持つものがある。甕Aと同様の器面調整(口縁部ヨコナデ 胴部縦位ハケメ等)を加えるが、内面に板ケズリは見られず横・斜位のハケメを口縁端部から胴部上半にかけて幅広く施す。底部の形態は明らかでない。小型品には未使用品が含まれる。

口径10.5~14.7cm、最大径12.1~14.9cmを測り、大型品(口径17.8cm)が1点ある。

甕C 直線的で急な傾斜を示す肩部からほぼ直角に屈曲し口縁部は大きく開く。最大径は口径にあると思われる。口縁部は真つすぐのび一般的に端部を丸く作るが、内彎・肥厚させ、わずかにつまみ上げたように仕上げたものも比較的多い。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部から肩部にかけてヨコナデを施す。肩部のハケメをていねいにナデ消すものとそのまま残すものがあり、後者では多くの内面に横位のハケメ(粗い)・口縁部接合時の指頭圧痕が見られる。肩部以下の形態は明らかでないが長胴・平底と考えている。

大型品(口径27.8cm)1点を除き法量は口径19.9~24.2cmの範囲内に集中する。出土量は甕D3に次いで多い。

甕D1 頸部(屈曲部)に丸味を持ち口縁部はわずかに外反しつつ外上方へのびる。口縁端部はつまみ上げたように上方へ肥厚する。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部内外面をヨコナデ調整する。肩部以下の形態は明らかでない。口径16.6~26.7cmを測る。

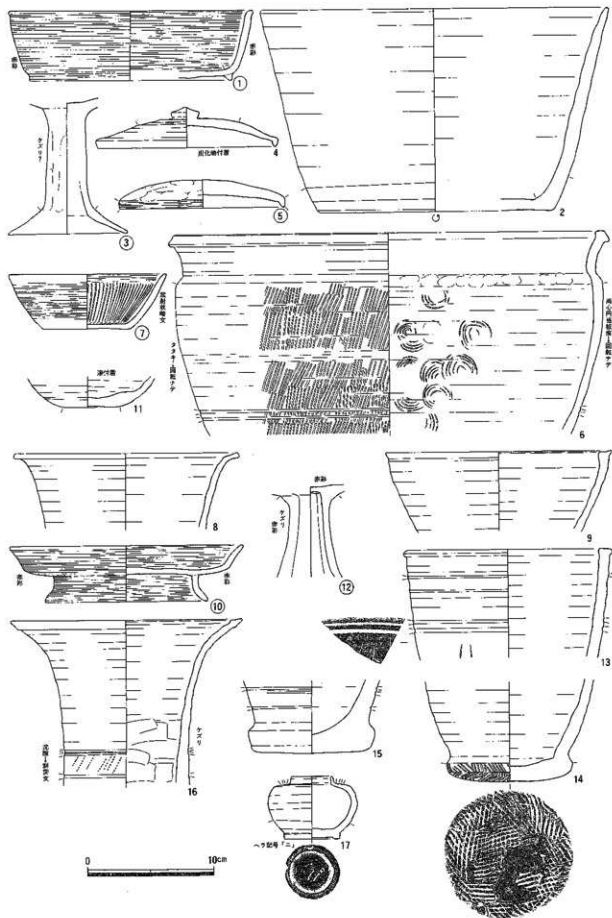
甕D2 甕D1に比べ口縁部はさらに大きく開き端部がほぼ水平となる。口縁端部の肥厚する度合いは小さく単純に丸くおさめたものが多く見られる。器面の調整手法は甕D1と何ら変わらない。

口径は2大別できそうである(22.1~23.4cm=Ⅰ、18.7~19.2cm=Ⅱ)。頸部(屈曲部)に丸味を持つ点は甕Cと異なる。

甕D3 若干肩の張る長胴部と直立・外傾する短い頸部大きく開く口縁部からなる。胴部・頸部・口縁部の境でわずかに屈曲する。口縁部・頸部の傾きには差があり、口縁端部を丸くおさめたものと上方へつまみ上げたように屈曲・肥厚させるものがある。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部にヨコナデ調整・胴部内面に横位のケズリ・ハケメを施す。頸部・胴部上半内面に指頭圧痕を残すものが多い。ハケメが口縁部内面に残ることは稀である。底部は平底を呈し底面から胴部下端にかけて斜位・不整方向のナデ、内底面は横・斜位のハケメ・ケズリ・指頭ナデにより仕上げられる。

甕類の主体をなし中型品(口径22.0~25.0cm)が約50%を占める。法量には大小差(口径18.1~31.6cm)が見られる。全形を知りえた資料は1点しかない(口径24.8cm、器高28.8cm)。最大径は口径にある。

甕D4 直立する頸部から口縁部はコの字状に屈曲し水平に開く。口縁端部は丸味を持ちつまみ上げたように上方へ肥厚する。肩部以下に縦位のハケメを加え口縁部・頸部に幅広くヨコナデを施す。多



番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状	番号	口径	最大径	高さ	形状
①	(19.5)	(5.5)		短台形蓋 A1	6	(32.1)			鉢 B	11				短台形蓋 A1	16	(19.4)			点検蓋 B
2	(17.8)	(15.8)		鉢 C	7	(2.6)	4.3		短台形蓋 H	12	(16.5)			高壁 H	17	3.3	7.1	4.9	中蓋蓋 A
③				高壁 A	8	(17.5)			高壁 B	13				高壁					
4	14.6	3.7		杯蓋 A3	9	(17.3)			陶器	14				陶器					
⑤	13.2	2.2		杯蓋 B	10	18.5	4.4		杯蓋蓋 B1	15				陶器					

第131図 包含層出土土器実測図

くが頸部内面に顕著な粘土接合痕を残す。胴部・底部片を竪口 D 3 と区別するのは難しい。口径 20.2～27.1cm を測る。

甕 E 直立する長い頸部を持つ。口縁部は外上方へのび頸部をわずかに内屈させて丸くおさめている。頸部以下に縦・斜位のハケメ、内面には頸部に横位のハケメ（粗い）、肩部に横位のケズリを施し口縁部にはヨコナデ調整される。胴部・底部の形態は明確でないが、最大径は胴部上半にあると思われる。

口径 20.4～26.8cm を測る。出土量は少ない。

鍋 A 浅く半球状をなす胴部から短く外反する口縁部へなめらかに移行する。胴部上半は垂下し肩部に張りを持たない。口縁端部は上方へ若干肥厚し丸く仕上げられる。器面の保存状態が悪く調整手法は明らかでないが、口縁部にヨコナデを施していたらしい。頸部に縦位の指頭ナデ痕、胴部内面に幅広いケズリ痕（横位）を残すものがある。丸底と思われる。

口径 29.5～31.2cm を測り、小型品（口径 23.6cm）を 1 点含む。

鍋 B 1 頸部がわずかにくびれ短い口縁部が外反する。口縁端部を先細く丸くおさめる。頸部以下に縦位のハケメを加えた後口縁部をヨコナデ調整し、内面には横位のハケメ・ヨコナデを施す。口径と胴部最大径はほぼ等しい。胴部下半・底部の形態は明らかでない。

口径は 2 大別できる（32.1～35.8cm＝Ⅰ、25.0cm前後＝Ⅱ）。

鍋 B 2 器形は鍋 B 1 に類似するが口縁部・頸部・肩部の境に若干屈曲部を持ち、不明瞭ながら垂下する頸部を作る。最大径は口径にある。上方へ肥厚する口縁端部の他、単純に丸く仕上げたものも比較的多い。頸部以下に縦位のハケメを加え口縁部から肩部にかけて幅広くヨコナデを施す。肩が若干張る。胴部・底部の形態は不明である。

口径 30.5cm 以上（～41.9cm）の大型品のみからなる。

甕 円筒状をなす甕の底部片が数点出土している。胴部は外上方へ直線的にのびる。先細く丸味を持つ底端部をさらにすぼめるものと、若干下方へ屈曲させるものがある。縦位（外面）・横位（内面）のハケメを加え端部をヨコナデ調整する。

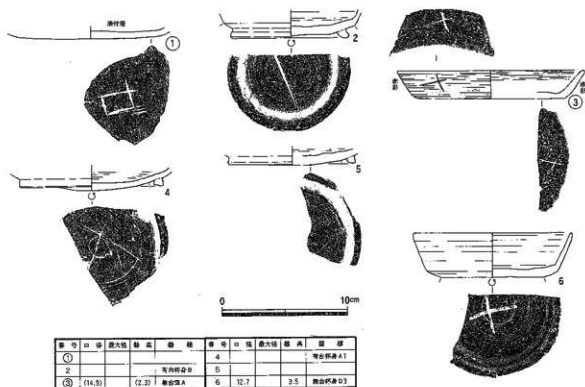
他に端部を内方へ折り曲げて幅広い水平面を作り、縦位のハケメ（外面）・指頭ナデ（内面）を施した台の破片がある。鍋 B の底部に接合されていたものかもしれない。

第 2 節 硯・転用硯（第133図 図版63）

31-g 区Ⅲ a 層中より円面硯片が 1 点、溝状遺構（NSD 3・4・II・17）堅穴住居（NSH 4・5）包含層中から 40 点以上（破片を含む）の転用硯が出土している。

i) 円面硯

陸から園台上端にかけての小破片であり全形を知ることはできない。須恵質のいわゆる園足硯であ



第132図 ヘラ記号のある土器実測図・拓影

る。

ヘラ削りないしはナデを加えた陸の中央がわずかに盛り上がり外周に傾斜面を作る。傾斜面の下端に堤を接合し溝状の海とする。陸と海の境に稜を持つ。圓台上端（堤直下）に1条凸帯めぐらす。この凸帯は幅広の上面に断面V状の切り込みを刻んでいるため、一見、端部に稜を持つ凸帯が2条付されているように見える。透しの有無・形態は明らかでない。内面に回転ナデ調整を施す。

陸に火眼れによる凹凸があり顕著使用痕・墨痕は認められない。硯面径16.7cmを測る。

ii) 転用硯 (第133図 図版63)

須恵器杯蓋A2・A3を用いた転用硯が約85%を占め他に有台杯、高盤がある。

杯蓋A2・A3は天井部内面を使用し、共に背の高いものと扁平なものを含んでいる。使用痕は中央からわずかに一方に偏して残り、背の高いものほどその範囲が狭くなる傾向を示す。つまみの頂部に摩擦痕を残し、なかには人為的つまみを打ち欠いたとさえ考えられるものも見られる。口径8.1cmを測る小型品を1点含む。

有台杯には内底面を広く使用するものと、反転し高台の内側底を硯面とするものがある。高盤は盤部の中央に顕著な使用痕を残す。

第3節 土製品

主に溝状遺構（NSD3・4・11・13・16・21）から須恵質の紡錘車、人形、土馬、土鍾、土師質のミニチュア土器、土馬、土鍾が出土している。彌羽口土製支脚も一応土製品として扱った。

i) 紡錘車 (第134図 図版65)

断面台形様をなす円盤状の陶製紡錘車である。3F-g-ア区、Ⅲ層より出土した。

わずかに盛り上がる上面中央をヘラ切りにより平坦に仕上げ、下面にはケズリ（回転利用）を加え